九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界 ： 中国朝鮮族の日本語教育を事例に

永嶋, 洋一

https://doi.org/10.15017/1654601

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界

－中国朝鮮族の日本語教育を事例に－

永嶋洋一

平成 28（2016）年 1 月

要旨

本論文は、中国朝鮮族の日本語、朝鮮語、中国語という三言語使用による日本語教育方法、及び学習方法を明らかにするものである。

グローバル化の進行が著しい現在、日本語教育においても、学習者一人一人の特性に合った教育のあり方が問われている。朝鮮語、中国語という多言語社会で暮らし、日・朝・中という三言語を使用して学び、教えている現在の中国朝鮮族の日本語教育は、多様な言語能力を持つ学習者、特に中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対する日本語教育のひとつのモデルとなり得るものである。

これまでの研究は朝鮮族の日本語教育について政治的、歴史的観点から分析し、考察しているものが多く、言語教育学的観点から実証的に研究しているものは少ない。さらに、朝鮮族の三言語使用の実態に注目し、その教育方法と学習方法について論じているものは皆無に等しい。ここに研究の余地があると言える。本研究の意義は、日本語、そして日本語との共通点が見られる朝鮮語、及び中国語という東アジア三言語使用による朝鮮族の日本語教育の教育方法と学習方法を明らかにすることで、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び日本語学習方法を提示できる点であると考える。研究方法としては、先行研究を参照しながら、インタビュー調査、アンケート調査、及び授業見学を実施し、その調査結果をもとに分析し、考察を加えた。

本論では、大きく 3 つの研究課題を挙げる。①現在、朝鮮族学校で行われている三言語使用による日本語教育方法は、単一言語使用、及び二言語使用による日本語教育方法とどのような違いがあるのか。②朝鮮族教師は日本語を教える際、どのように三言語を使い分けているのか。③朝鮮族学習者は日本語を学習する際、三言語をどのように使い分けているのか。以上 3 つの研究課題について言語教育学的観点から明らかにする。

本論は大きく 6 つの章で構成されている。第 1 章では序論として、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を示した。さらに、先行研究について概観し、その問題点を指摘した上で、研究課題を提示し、研究方法、本論の構成を紹介した。

第 2 章は、課題①について、朝鮮族教師の教育方法、特に言語使用に注目しながら、時代ごとに比較、検討した。「満洲国」期の「朝鮮族」教師の教育方法は、日本語及び朝鮮語の二言語使用による折衷法であり、改革開放期以降は「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」教師による日本語教育が行われた。2000 年代になると、「漢語化」の影響で、教授用語として中国語が使われるようになり、日・朝の二言語では理解が難しかった表現についても、中国語による理解が可能となり、三言語を使うことで日本語の理解がより深ま

っていることが明らかになった。

第 3 章では、課題②の朝鮮族教師の三言語使用による教育方法について、学校別、教師別に明らかにした。その結果、単一言語だけでは解釈が難しい文法表現については、他の言語を使用することによって解釈し、理解させる「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、ひとつの日本語の単語や文法表現についても、三言語で解釈し説明することで、より理解を深めさせる「相乗的理解」を促す教育方法も見られた。

第 4 章では、課題③について、朝鮮族学習者の言語能力に注目しながら、三言語使用による日本語学習方法を学校別、学習者別に明らかにした。その結果、学習者も日・朝・中三言語を使い分けて日本語を学習しており、「相乗的理解」と「補完的理解」が可能となることから、多くの学習者が教師の三言語による教育方法を望んでいることが明らかになった。

第 5 章では、これからの朝鮮族の日本語教育を展望し、三言語使用による日本語教育の可能性について言及した。今後は日本語教育が「消滅」する学校、日本語教育を「再開」する学校、そして日本語教育を新たに「開始」する学校が出てくると考えられる。

第 6 章では、中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育についてまとめ、東アジアにおける三言語使用の有効性と限界について考察し、結論とした。

中国朝鮮族の日本語教育方法、及び学習方法は、学校、教師、そして学習者ごとに異なり、多様であるものの、日・朝・中三言語使用によって生み出される「相乗的理解」と「補完的理解」は、朝鮮族教師、学習者ともに見られ、それが日本語の「学びやすさ」につながっていることが明らかになった。よって、三言語使用による日本語教育方法、及び学習方法は、「相乗的理解」と「補完的理解」が可能である点で、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な教育方法、及び学習方法となり得ると考える。

目次

第１章　序論 1
１－１．研究背景 1
１－２．用語の定義及び表記 4
１－３．研究目的 6
１－４．先行研究 6
１－４－１．朝鮮族の言語教育に関する先行研究 6
１－４－２．朝鮮族の朝鮮語及び中国語に関する先行研究..... 13
１－４－３．言語習得に関する先行研究 16
１－４－４．日本語教授法に関する先行研究 21
１－４－５．先行研究の問題点 23
１－５．研究課題 24
１－６．研究意義 25
１－７．研究方法 26
１－８．本論の構成 29
第２章　朝鮮族の日本語教育方法の変遷..... 31
２－１．「満洲国」期の「朝鮮族」の日本語教育方法..... 31
２－１－１．「満洲国」期の「朝鮮族」学校について 32
２－１－２．「満洲国」期の日本語教育に関するインタビュー調査について..... 33
２－１－３．日本語及び朝鮮語による「折衷法」と「母語排除」..... 37
２－１－４．学校外の言語学習と言語使用 41
２－１－５．小括 43
２－２．再開された朝鮮族の日本語教育方法..... 44
２－２－１．改革開放期以降の日本語教育に関するインタビュー調査について.... 45

２－２－２．「老一代」と独学で学んだ教師の朝鮮語による教育方法－1970 年代後半から 1980 年代にかけての日本語教育－ 49
２－２－３．大卒教師の日本語及び朝鮮語による教育方法と中国語－1980 年代後半から 1990 年代にかけての日本語教育－ 53
２－２－４．日、朝、中三言語使用による教育方法と学習者の「漢語化」－2000 年代から現在までの日本語教育－ 57
２－２－５．小括 60
２－３．朝鮮族学校の言語に対する意識と三世代の日本語教育..... 61
２－３－１．朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査について..... 61
２－３－２．成績のための日本語と、外国語としての朝鮮語及び中国語..... 62
２－３－３．三世代の日本語教育 64
２－３－４．小括 65
２－４．まとめ 66
第３章　朝鮮族の三言語使用による日本語教育方法..... 69
３－１．梅河口市朝鮮族中学の日本語教育方法..... 70
３－１－１．梅河市朝鮮族中学の教師に対するインタビュー調査..... 71
３－１－２．教師によって異なる三言語使用の割合 73
３－１－３．小括 79
３－２．鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語教育方法..... 79
３－２－１．鉄嶺市朝鮮族高級中学の教師に対するインタビュー調査..... 80
３－２－２．中国語使用による教育方法 83
３－２－３．小括 88
３－３．吉林市朝鮮族中学校の日本語教育方法..... 88
３－３－１．吉林市朝鮮族中学校の教師に対するインタビュー調査..... 89
３－３－２．朝鮮語、中国語の多様な使用方法 91
３－３－３．小活 94

３－４．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語教育方法..... 94
３－４－１．瀋陽市朝鮮族第一中学の教師に対するインタビュー調査..... 95
３－４－２．朝鮮語、中国語選択と日本語、中国語の補助的役割..... 97
３－４－３．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語授業見学 100
３－４－４．三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」..... 101
３－４－５．小括 102
３－５．寧安市朝鮮族中学の日本語教育方法..... 102
３－５－１．寧安市朝鮮族中学の教師に対するインタビュー調査..... 103
３－５－２．日本語使用による教育方法 105
３－５－３．寧安市朝鮮族中学の日本語授業見学 107
３－５－４．オーディオリンガル・メソッドと朝鮮語による翻訳..... 108
３－５－５．小括 110
３－６．日本語指導上の朝鮮語、中国語使用..... 110
３－７．まとめ 113
第４章　朝鮮族の言語能力と三言語使用による日本語学習方法..... 115
４－１．梅河口市朝鮮族中学・学習者の日本語に対する意識..... 115
４－１－１．梅河口市朝鮮族中学の日本語学習者に対するアンケート調査..... 116
４－１－２．日本語の教科書に対する学習者の評価 117
４－１－３．「受験日本語」だけではない日本語の魅力 118
４－１－４．小括 119
４－２．鉄嶺市朝鮮族高級中学・日本語学習者の言語能力と学習方法..... 119
４－２－１．鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語学習者に対するアンケート調査..... 120
４－２－２．「漢語化」が見られる朝鮮族の言語能力 121
４－２－３．小括 129
４－３．吉林市朝鮮族中学校・日本語学習者の言語能力と学習方法..... 129

４－３－１．吉林市朝鮮族中学校の日本語学習者に対するアンケート調査..... 130
４－３－２．教師の教育方法の影響を受ける学習方法 131
４－３－３．小括 138
４－４．瀋陽市朝鮮族第一中学・日本語学習者の言語能力と学習方法..... 139
４－４－１．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するインタビュー調査... 139
４－４－２．多様な日本語理解と朝、中両言語の使い分け..... 144
４－４－３．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するアンケート調査..... 148
４－４－４．三言語にみる「相乗的理解」と「補完的理解」..... 149
４－４－５．小括 157
４－５．寧安市朝鮮族中学・日本語学習者の言語能力と学習方法..... 157
４－５－１．寧安市朝鮮族中学の日本語学習者に対するインタビュー調査..... 158
４－５－２．教師の教育方法と学習者の学習方法に見られる差異..... 159
４－５－３．寧安市朝鮮族中学の日本語学習者に対するアンケート調査..... 161
４－５－４．三言語に対する学習者の意識とその役割 162
４－５－５．小括 167
４－６．まとめ 167
第５章　三言語使用による日本語教育の可能性..... 170
５－１．途絶えた日本語教育　－通化市朝鮮族学校－..... 171
５－１－１．通化市朝鮮族学校の教師に対するインタビュー調査..... 171
５－１－２．英語教育の影響と朝鮮族学生の減少 173
５－１－３．通化市朝鮮族学校で行われた日本語教育 174
５－１－４．小括 176
５－２．再開した日本語教育　－和龍市第三中学校－..... 177
５－２－１．和龍市第三中学校の朝鮮族教師に対するインタビュー調査..... 177
５－２－２．日本語の優位性の再認識による再開 179

５－２－３．朝鮮語環境における三言語使用の有効性 180
５－２－４．和龍市第三中学校の日本語授業見学 182
５－２－５．朝鮮語による日本語教育 182
５－２－６．和龍市第三中学校の日本語及び英語学習者に対するインタビュー調査 184
５－２－７．母語による日本語教育と母国語による英語教育..... 186
５－２－８．和龍市第三中学校の日本語学習者に対するアンケート調査..... 189
５－２－９．朝鮮語による日本語理解 189
５－２－１０．小括 197
５－３．朝鮮族学校における日本語教育の展望と三言語使用による日本語教育の可能性 197
第６章　結論 201
６－１．二言語使用には見られない三言語使用の有効性..... 201
６－２．中国朝鮮族の三言語使用による多様な日本語教育方法..... 202
６－３．中国朝鮮族の三言語使用による多様な日本語学習方法..... 207
６－４．「受験日本語」後の日本語の役割..... 212
６－５．東アジアにおける三言語使用の有効性と限界..... 214
おわりに 216
謝辞 217
参考文献 218
資料 223

第１章

序論

１－１．研究背景

グローバル化の進行が著しい現在、様々な言語や文化を持つ人々が国境を越え、往来している。それにつれ、近年、日本においても「多言語多文化」に対応する必要性が叫ばれている。日本語教育においても、来る多言語多文化社会に向けて、学習者一人一人の特性に合った教育のあり方が問われている。朝鮮語、中国語という多言語社会で暮らし、日・朝・中という三言語を使用して学び、教えている現在の中国朝鮮族の日本語教育は、多様な言語能力を持つ学習者、特に中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対する日本語教育のひとつのモデルとなり得るものである。

2012 年の国際交流基金「日本語教育機関調査」によると、中国の初等・中等教育機関で日本語を学んでいる学習者の数は、約 9 万 2,000 人（中等教育機関における学習者数は約 8 万 9,000 人）であり、2009 年の約 6 万 4,000 人（中等教育機関における学習者数は約 6 万 2,000 人）から増加している。

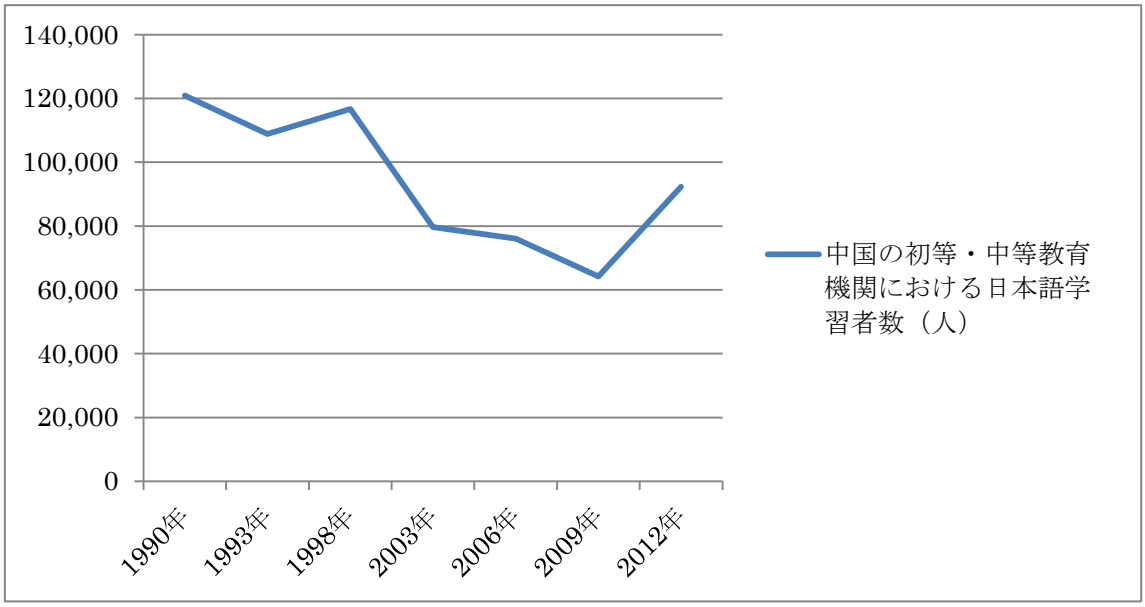


図１：中国の初等・中等教育機関における日本語学習者数の推移

（国際交流基金「日本語教育機関調査」の調査結果をもとに筆者作成）

1998 年以降、日本語学習者が減少し続けてきた中国の中等教育機関に新たな変化が生じているが、この原因として、第二外国語や課外活動の日本語学習者の増加が考えられている[1]。中国の中等教育機関の学習者数の 90%以上が中国東北三省と内モンゴル自治区に集中しており、中でも朝鮮族学校では改革開放期以降、第一外国語としての日本語教育が現在まで行われている。また、1990 年末に国際交流基金日本語国際センターの委託を受けて、中国日語教学研究会が行ったアンケート調査によれば、中等教育機関での学習者数 12 万 2,000 人のうち、半数にあたる 6 万 2,000 人が朝鮮族であった。アンケート回答率が 70%と推定されていることから、本田（2012）は、「1990 年の時点で中等教育機関における朝鮮族の学習者数は 7 万人を大きく越えていたことは確実で、8 万人に達していた可能性が強い[2]」としている。このことから、中国の中等教育においては、朝鮮族学校における日本語教育が盛んに行われてきたことがわかる。

しかし、近年、朝鮮族学校における第一外国語としての日本語教育は、英語教育の勢いに押され、学習者数が減少、もしくは日本語教育自体が行われなくなったという状況も見られる。英語教育に押される日本語教育の状況は、他の東アジアの国々においても共通して見られる。田中（2010）によれば、「非英語圏は多文化・多言語共生の手段として、また国際競争や国際協力、国家の経済発展のために「英語」を公用語、第 2 言語、外国語として受け入れている[3]」とし、「1997 年には韓国が小学校での英語を必修化[4]」し、「中国では 2001 年に施行後、2005 年には完全実施、台湾においても 2001 年より高学年から実施、2005 年には中学年も英語を必修化している[5]」と英語教育の急激な拡大を指摘している。また、日本においても 2011 年の「新学習指導要領」の改訂により、現在小学校第 5,6 学年で年間 35 単位時間の「外国語活動」、つまり英語の授業が行われている[6]。

このように東アジアでは英語教育が拡大を続ける中で、韓国における日本語学習者数は 2012 年度 84 万 187 人であり、これは 2009 年度の 96 万 4,014 人に比べ 12.8%も減少しており、学習者数の国別順位が 1 位から 3 位となった。台湾における日本語学習者数も 2012 年度は 23 万 3,417 人で、2009 年度の 24 万 7,641 人に比べ 5.7%減少している[7]。これらの要因のひとつとして、英語重視の教育が考えられる。つまり、東アジアにおいては日本語教育が英語教育の勢いに押されているという状況であることがわかる。

朝鮮族学校における日本語学習者数の減少は、朝鮮族の人口自体が減少していることも

---

[1] 柳坪他（2015）「『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化　－中国中等教育段階のための教材作成－」『国際交流基金日本語教育紀要』第 11 号　p.21

[2] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p.96

[3] 田中真紀子（2010）「小学校英語教育における「英語支配」と「英語母語話者信仰」」『神田外語大学紀要』第 22 号　p.1

[4] 同上：p.3

[5] 同上：p.3

[6] 文部科学省ホームページ（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm）より

[7] 独立行政法人 国際交流基金編（2013）『海外の日本語教育の現状 2012 年度 日本語教育機関調査より』くろしお出版 p.13

大きな要因のひとつである。2010 年の第六次人口センサスの統計によれば、中国朝鮮族の人口は 183 万 929 人であり、吉林省に約 104 万人、黒龍江省に約 32 万人、遼寧省に約 23 万人が暮らしている。2000 年の 192 万 3,842 人と比べると、10 年の間に約 10 万人近くも減少していることがわかる。

中国の中等教育における「第一外国語としての日本語教育」が窮地に立たされている中で、韓（2012）では、「第二外国語としての日本語教育」を実施している朝鮮族学校を例に挙げ、「朝鮮族の優勢を生かし高校で第 2 外国語としての日本語の地位を確立することで、グローバルな人材育成につながり、朝鮮族の発展につながることになるだろう[8]」と展望している。

中国の中等教育においては、このように「第二外国語としての日本語教育」が注目を集めているが、それは、複数の言語能力を持つ学習者に対する日本語教育を意味する。朝鮮族の場合、これは「第一外国語としての日本語教育」にも当てはまる。なぜなら、朝鮮族は朝鮮語、中国語という多言語社会で生活しており、両言語能力を兼ね備えているからである。「第二外国語としての日本語教育」は、まさに「複数の言語能力を持つ学習者に対する日本語教育」であり、学習者一人一人が持つ言語能力を最大限に活かせる教育方法が必要とされる。その教育方法を実践しているのが中国朝鮮族の日本語教師たちであり、彼ら、彼女らもまた「複数の言語能力を持つ学習者」として日本語を学習した人々なのである。

次に、中国だけではなく、世界全体の日本語学習者数に注目すると、2012 年の国際交流基金「日本語教育機関調査」によれば、海外の日本語学習者は 398 万人に達し、学習者数が多い順に、中国（約 104 万人、26.3%）、インドネシア（約 87 万人、21.9%）、韓国（約 84 万人、21.1%）、オーストラリア（約 29 万人、7.4%）、そして台湾（約 23 万人、5.9%）となっている。ここから、世界の 50%以上の日本語学習者が中国語、または朝鮮語（韓国語）を母国語としていることがわかる。さらに、韓国・教育科学技術部統計調査によれば、中国に留学する韓国人留学生数は 2014 年度は 6 万 3,465 人であり、これはアメリカに次いで 2 番目に多い数であり、全体の 28.9%を占める。また、2015 年度の韓国に留学している中国人留学生数は 5 万 4,214 人であり、これは韓国における留学生数の中で最も多く全体の 59.4%を占めている。また、国際交流基金の調査では、韓国国内の中国語教育の状況について、「韓国において、中国の経済的プレゼンスが年々意識されてきている中で、学習者の持つ実利面での将来性への期待に応えて、中国語を開講する機関が増えた[9]」としており、日本語学習者数が減る一方で、中国語教育は拡大しているという現状を指摘している。以上のことから、朝鮮語（韓国語）を学習している中国人、そして中国語を学習している韓国人が非常に多いという状況がうかがえる。さらに言えば、台湾において、日本語学習者

---

[8] 韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢（三重大学）』第 29 号 三重大学人文学部文化学科 p.183

[9] 独立行政法人 国際交流基金編（2013）『海外の日本語教育の現状 2012 年度 日本語教育機関調査より』くろしお出版 p.29

数が減少している一因として、「韓国語・韓国文化に対する関心の高まり」が挙げられている[10]。世界の日本語学習者数の半数以上は中国語、もしくは朝鮮語（韓国語）を母国語としている人々であり、韓国語を学ぶ中国人留学生、及び中国語を学ぶ韓国人留学生の増加、さらには台湾において韓国語に対する関心が高まっているという状況を考えれば、彼ら、彼女らがさらなるキャリアアップのために日本語を学ぶ可能性は大いにある。朝鮮語、中国語の両言語を使用した朝鮮族の日本語教育方法は、中国語を学んでいる韓国の学習者、そして韓国語を学んでいる中国や台湾の学習者にとって非常に有効な学習方法を提示できるものであると考える。しかし、これまでの研究は朝鮮族の日本語教育について政治的、歴史的観点から分析し、考察しているものが多く、言語教育学的観点から実証的に研究しているものは少ない。さらに、朝鮮族の三言語使用の実態に注目し、その教育方法と学習方法について論じているものは皆無に等しい。ここに研究の余地があると言える。

１－２．用語の定義及び表記

ここでは、本論で使用する用語について定義する。まず「中国朝鮮族」について定義する必要がある。宮下（2005）では、「中国朝鮮族とは本来中国に居住していたのではなく、主に19世紀から20世紀初期にかけて、戦乱、飢餓、日本の朝鮮侵略などを原因として、朝鮮半島と陸続きである中国東北の国境地帯に定住するようになった人々である[11]」と定義している。また、花井（2011）では「中国朝鮮族とは、朝鮮半島から中国に移民して来た中国国籍を持っている朝鮮民族である[12]」と定義している。よって、本論においても、それらの定義に従い、「中国朝鮮族」を「朝鮮半島から中国東北地方に移住し、現在、中国の少数民族として中国に定住し、中国国籍を持っている朝鮮民族である」と定義する。さらに林（2008）には、「中国共産党は民族平等政策を掲げ、1948年8月延辺地区委員会により延辺の朝鮮族人民の中国国内少数民族としての地位を保証し、団結して党の方針を徹底的に実行すべきであると宣言した[13]」とあり、「この決議書の採択によって、少数民族としての中国朝鮮族という政治概念が確立された[14]」とある。つまり、中国朝鮮族が自らを中国の一民族である「朝鮮族」であると認識し始めたのは1948年以降であると考えられる。よって、「中国朝鮮族」の表記については、1948年以前については、朝鮮人、または括弧をつけた形で「中国朝鮮族」もしくは「朝鮮族」とし、1948年以降については括弧をつけず中国朝鮮族、

---

[10] 独立行政法人 国際交流基金編（2013）『海外の日本語教育の現状 2012年度 日本語教育機関調査より』くろしお出版 p.33

[11] 宮下尚子（2005）「中国朝鮮語の規範問題」『社会言語科学』第8巻第1号 社会言語科学会 p.139

[12] 花井みわ（2011）「中国朝鮮族の人口移動と教育－1990年以後の延辺朝鮮族自治州を中心として－」『早稲田社会科学総合研究』第11巻 第3号 早稲田大学社会科学学会 p.61

[13] 林梅（2008）「国家と民族のはざまの歴史－中国東北地域の朝鮮族農民」『関西学院大学社会学部紀要』No.106 関西学院大学社会学部研究会 p.86

[14] 同上： p.86

もしくは朝鮮族と表記することとする。

次に、本論では満洲国期の日本語教育についても考察する。1932年に建国された「満洲国」については、日本では「満洲国」（もしくは「満州国」）、中国では傀儡政権として「偽満洲国」と呼ばれており、それぞれ呼称は異なる。本論では、満洲国についても引用を除き、括弧をつけて「満洲国」として表記することとする。

次に「中国朝鮮語」の定義であるが、孫（2005）では、「中国に住んでいる朝鮮族が使う朝鮮語を指す[15]」と定義している。また、宮下（2005）では、中国朝鮮語の基礎方言の一つが北朝鮮の咸鏡道方言であることと、北朝鮮の言語規範の影響に触れ、「従来それ（中国朝鮮語）は北朝鮮の言語（＝文化語）とほぼ同一のものとして認識されてきた[16]」が、「朝鮮族が朝鮮半島から移住してから概ね一世紀、朝鮮族が中国という国家体制の中に組み込まれてから既に半世紀以上を経ている[17]」とし、北朝鮮のいわゆる「文化語」と呼ばれる朝鮮語とは異なる点を指摘している。さらに、千（2005）にも、「中国において学校教育などで教えられている標準朝鮮語は、その言語規範はおおよそ北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の標準語（文化語）に従っているが，言語環境の違いのため両者は必ずしも一致しているわけではない[18]」とあり、延辺に居住する朝鮮族については、「俗に延辺語と呼ばれる方言を日常生活で使って[19]」おり、「この方言は中国朝鮮語とは異なり，基本的に咸鏡道方言に近く、アクセントや語彙面では咸鏡道方言に基礎を置いており、それに各地方の朝鮮語を吸収し、さらに中国語の語彙を大量に取り入れて成立している[20]」と述べられている。また、辻野（2010）では、朝鮮族が話す朝鮮語について、「日常的な話し言葉については、基層となっている方言が多様であり、朝鮮半島各地の方言が観察され[21]」「朝鮮半島の南の方言が北に、朝鮮半島の北の方言が南に分布している[22]」との記述がある。このように、先行研究においても中国朝鮮族が話す「中国朝鮮語」が地域によって多様であることが指摘されているが、本論では、孫（2005）の定義に従い、「中国朝鮮語」を「現在、中国に居住している朝鮮族が使う朝鮮語」として定義する。しかしながら、中国朝鮮族の「中国朝鮮語」と北朝鮮の「朝鮮語」、そして韓国の「韓国語」は言語規範は異なるものの、言語学的には同じ言語であり、さらに、中国朝鮮族自身が自らの言葉を「조선어（朝鮮語）」と呼んでい

---

[15] 孫蓮花（2005）「中国朝鮮語における呼称の通時的考察－役職名を中心に－」『社会言語科学』社会言語科学会第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 p. 41

[16] 宮下尚子（2005）「中国朝鮮語の規範問題」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号　社会言語科学会　p. 140

[17] 同上：p. 140

[18] 千惠蘭（2005）「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について　－「하오 hao 体」を中心に－」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号　pp. 57-58

[19] 同上：p. 58

[20] 同上：第 8 巻 第 1 号　p. 58

[21] 辻野裕紀（2010）「〈越境〉した言語　－在外コリアンの朝鮮語と言語生活をめぐって－」『朝鮮語教育　－理論と実践－』第 5 号　朝鮮語教育研究会　p. 72

[22] 同上：p. 72

るため、本論では「朝鮮語」と表記し、北朝鮮の「朝鮮語」、韓国の「韓国語」と区別して使用する際は、「中国朝鮮語」として表記する。

次に「中国語」の表記についてであるが、中国では56ある民族のうち、漢族が話す言葉として「漢語」という呼称が使われている。本論では、主に言語教育学的側面から日本語や朝鮮語と比較、検討するため「中国語」として表記する。

さらに、朝鮮族学校において、特に本論が調査対象としている朝鮮族中学には、日本の中学校にあたる「初級中学」と、日本の高校にあたる「高級中学」がある。本論では、先行研究において「中学」「高校」と表記されている場合は、その先行研究の表記に従い、そのまま「中学」「高校」と表記する。しかし、それ以外の場合は、朝鮮族中学については、中国での名称である「初級中学」「高級中学」、または省略した形で「初中」「高中」として表記する。

１－３．研究目的

研究背景でも述べたように、現在、朝鮮語（韓国語）と中国語を母国語とする日本語学習者は世界の日本語学習者数の半数以上を占めており、中国語を学ぶ朝鮮語（韓国語）母語話者と、朝鮮語（韓国語）を学ぶ中国語母語話者は増加傾向にある。よって、彼ら、彼女らが、今後日本語を学ぶ可能性は大きいと考えられる。現在、朝鮮族学校では、日、朝、中三言語を使った日本語教育が行われており、日本語教師、学習者ともに三言語を駆使して日本語を学び、教えている。朝鮮族の日本語教育は、多言語学習者、特に朝鮮語（韓国語）、中国語両言語を学んだ日本語学習者に対して有効な教育方法、及び学習方法を提示できると考える。よって、本研究は、中国朝鮮族の日、朝、中三言語使用による日本語教育方法と学習方法を明らかにすることで、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び学習方法を提示することを目的とする。

１－４．先行研究

ここでは、本論を進めるにあたり、把握すべき先行研究について述べる。まず先行研究を大きく四つに分ける。一つ目は朝鮮族の言語教育に関する研究、二つ目は朝鮮族の朝鮮語及び中国語に関する研究、三つ目は言語習得に関する研究、最後に、日本語教授法に関する研究を挙げる。その後、先行研究の問題点について述べる。

１－４－１．朝鮮族の言語教育に関する先行研究

ここでは、朝鮮族の言語教育について論じられている先行研究について述べる。朝鮮族に関する研究の中でも、朝鮮語、中国語の二言語教育に焦点を当て、概観したのが岡本雅

享である。岡本（1999）によれば、「朝鮮人（族）学校の朝漢二言語教育と実施方式は、十一期三中全会（1978 年）以前は言語学的観点によるのではなく、ほとんど政治のうねりによって決定、変更されてきた[23]」と指摘し、「軽視、廃止、減少の対象とされたのは常に民族語の方であり、漢語教育はその強化という目的において一貫性を持ってきた[24]」と論じている。また、「朝鮮族学校の二言語教育の方式、子ども達の朝鮮語や漢語のレベルは、地域で差が出ている[25]」とし、延辺朝鮮族自治州はその他の地域に比べて朝鮮族教育を維持するために有利な環境であり、その他の地域は朝鮮族児童・生徒の減少、朝鮮語喪失などの問題が広がっていると指摘している。さらに、1980 年代からの改革開放政策以降、朝鮮族が農村から都市へ移住した点に触れ、「朝鮮族地域の民族構成が変わると、言語環境や学校教育は大きな影響を受け、朝鮮語ができない者が増える[26]」とも指摘している。岡本の研究で注目すべき点は、中国の民族教育について、特に朝鮮族の教育について、その言語政策、及び環境によりその言語能力は大きく左右され、その結果、朝鮮語ができない者まで出て来ているという点を指摘したところにある。この傾向は現在も顕著に現れており、朝鮮族の「漢語化」は今なお続いている状況である。

次に、本田弘之の研究について述べる。本田は岡本が指摘した朝鮮族の言語環境について、さらに具体的に論じている。特に文革から改革開放期における朝鮮族の日本語教育に注目しながら考察している。岡本が指摘した 1980 年代からの朝鮮族の都市移住について、「朝鮮族に漢族なみの漢語能力を身につけることの必要性を感じさせることになった[27]」とし、民族教育の「漢語化」につながり、それが朝鮮語が失われていく状態を招いていると指摘している。また、朝鮮族の日本語教育の役割についても言及している。1945 年以前の日本語教育は「侵略者」によって強制された教育であった。しかし、1978 年の外国語教育再開を受け、やむを得ず始められた日本語が、その後、朝鮮族にとって大学受験のための日本語、さらには就職のための日本語という目的のある外国語となる。1978 年の改革開放や日中平和友好条約締結、それ以降の日系企業の中国進出、そして 1992 年の中韓国交成立以降の韓国系企業の進出、朝鮮族自身の韓国への出稼ぎ、これらの影響が朝鮮族コミュニティに大きな変化をもたらしたこと、さらには、彼ら、彼女らの言語にまで影響を与えたことを本田は指摘している。さらに、本田は「漢語化」が朝鮮族学校の授業で使用する言語の変化も招いていると指摘している。本田が行った朝鮮族の日本語教師へのインタビュー調査からは、その傾向が顕著に表れている。日本語授業において、教師が日本語で授業を行っても理解できない学生に対して朝鮮語で話す。すると、学生は朝鮮語すらもわからないという状況であるという。さらには学生が教師と話す際も、学生同士で話す際も朝鮮語は使われておらず、通常は中国語が使われている場合が多いのだという。

---

[23] 岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社　p. 156

[24] 同上： pp. 156-157

[25] 同上： p. 172

[26] 同上： p. 181

[27] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 269

さて、本田は日本語教育が再開された 1978 年以降、朝鮮族学校で日本語教育を担ったのは「満洲国」期に日本語教育を受けた「「老一代[28]」と呼ばれる世代であった[29]」と指摘している。「老一代」について知るためには、「満洲国」期以前の朝鮮族の言語教育がどのようなものであったのか知る必要がある。つまり朝鮮族の教育史を辿らなければならない。

朝鮮族教育史の研究において、パイオニアとされているのが槻木瑞生である。槻木はこれまで「朝鮮族」に関する研究、特に「満洲国」期以前の「朝鮮族」を歴史的観点から捉えた論文を数多く発表している。その中でも「老一代」と呼ばれた人々が受けた教育について触れている部分について述べる。槻木（1998）は、新学制が「満洲国」の教育にもたらした影響について論じているが、「満洲国」の教育は近代教育であるとし「朝鮮族の青年を、国民学校に通った青年も、通わなかった青年も一人残らず『日本人的性格』と日本語を与え、満洲国民にしようとしている[30]」とし、「朝鮮族」の人々が納得できないまま行われた教育であったことを指摘している。つまり、「満洲国」の教育は、五族協和を謳いながらも、その実態は「朝鮮族」を日本人的なものにする教育であったことがわかる。

次に、日本側からの視点だけではなく、「朝鮮族」の視点から朝鮮族教育史を捉えているのが金珽実である。金珽実は著書『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』において、1937 年の「満洲国に於ける治外法権撤廃及び南満洲鉄道附属地行政権の移譲に関する日本国、満洲国間条約」によって、「満鉄附属地の 14 ヶ所の学校を除く在満朝鮮人学校は『満洲国』の教育行政下に移譲され[31]」、学校の運営や教育内容についても「『日本国民』化教育を維持しながら、新たに『満洲国の構成分子』としての意識を強制的に植え付けるための教育を実施することになる[32]」と述べている。このことからも、「老一代」が受けた教育が、強力な政治的権力の下で強制的に行われていたものであったことをうかがい知ることができる。

次に、「朝鮮族」側から見た日本語教育について論じられている先行研究について述べる。金美花は「朝鮮族」という立場から「朝鮮族」の日本語教育を捉えた研究を行っている。その中でも言語教育に触れたものを挙げる。著書『中国東北農村社会と朝鮮人の教育　－吉林省延吉県楊城村の事例を中心として（1930－49 年)』では、1938 年の新学制実施以降の「朝鮮族」の言語教育について、「朝鮮人は満洲国期前には中国語が出来ないため、中国の高等教育機関への進学ができなかった[33]」とし、「満洲国成立後、新学制によって、日本語が主な言語となり、日本語が出来るか否かは高等教育を受けられるかどうかにかかって

---

[28] 「満洲国」期に日本語を学んだ世代。「老一代」が改革開放後、日本語を教える「老教師」となり、朝鮮族による日本語教育の担い手となった。

[29] 本田弘之（2012)『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 136

[30] 槻木瑞生（1998)「満洲国における学校体系の展開－間島省の「新学制」－」『同朋大学論叢』第 77 号 p. 30

[31] 金珽実(2014)『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』比較社会文化叢書　p. 182

[32] 同上：p. 182

[33] 金美花（2007)『中国東北農村社会と朝鮮人の教育－吉林省延吉県楊城村の事例を中心として（1930－49 年）－』　御茶の水書房　p. 222

いた[34]」と指摘している。さらに、「朝鮮語は 1939 年ごろまでは授業内容として少しあったが、1940 年以降には朝鮮語は学校で習うことができなかった[35]」とある。ここで注目すべきは、「朝鮮族」にとって「満洲国」期を境として中国語、日本語という二つの「外国語」の重要性が変わり、その一方で母語である「朝鮮語」教育が行われなくなってしまった点である。これは、岡本の「軽視、廃止、減少の対象とされたのは常に民族語の方であった」という状況が「満洲国」期から見られていたのは、「朝鮮族」の言語を考える上で注目すべき点である。この日・朝・中三言語の中でも、特に日本語教育については、「(国民学校) 1, 2 年生の時から日本語を学んでいた。教科書は日本語のもので、国語〔日本語〕は『イネ、ハナ、ヤマ、ニワトリ、カワ』などから始まった[36]」「学生を運動場に集め、『いち、がっこう、に、せんせい、さん、おはようございます、し、うんどうじょう』と日本語を教えられた[37]」「最初は朝鮮語を混ぜて話すが、二年生からは日本語だけを話す[38]」とあり、実際に「満洲国」期に日本語教育を受けた人々の語りが紹介されている。また、朝鮮語については、「教師はカードを配り、だれかが朝鮮語を話すと記すようにさせ、それを教師がみてその日のトイレの掃除当番を決めていた[39]」とあり、その他にも朝鮮語を話すと、ふだを首にかけられたという事例が紹介されており、学校内での朝鮮語禁止が徹底されていたことがわかる。金美花の研究は、自らが「朝鮮族」であるために「朝鮮族」としての立場から論じている点に特徴があり、また常に「朝鮮族」の生活に重きを置きながら論を展開している。しかしながら、「朝鮮族」の学校の子どもたちがどのような教育を受けたかについては今後の研究課題としており、明らかにされていない。

「満洲国」期の教育に関するオーラルヒストリーの中にも、「朝鮮族」の言語教育について触れられているものもいくつかある。竹中憲一は「満洲国」期に日本語教育を受けた人々に対するインタビュー調査を行い、数多くの「語り」を集めている。その中には「朝鮮族」の人々に対する聞き取り調査も含まれている。著書『大連アカシアの学窓　証言　植民地教育に抗して』の中に「朝鮮族」である金峰氏の語りが紹介されている。「韓国併合」によって「日本臣民」となった金峰氏は大連の日本人の小学校に通っていたため、中国語が話せず、解放後は日本植民地主義者の協力者ということで、いじめられ、仕事につくことができなかったが、語学の才能と努力によりロシア語が話せるようになった。中国語も不自由なく話せるようになった金峰氏はロシア語の通訳として採用された。1970 年に日本と中国の間で民間貿易が再開されると、今度は金峰氏の日本語能力が必要とされたという[40]。この金峰氏の語りからわかることは、「満洲国」期に受けた日本語教育、そこで得た日本語能

34　金美花（2007)『中国東北農村社会と朝鮮人の教育－吉林省延吉県楊城村の事例を中心として（1930－49 年）－』　御茶の水書房 pp. 222-223
35　同上：p. 223
36　同上：p. 238
37　同上：p. 266
38　同上：p. 267
39　同上：p. 266
40　竹中憲一(2003)『大連　アカシアの学窓』 明石書店　pp. 342-345

力が、その後の人生に大きな影響を及ぼしていた点である。それは、日本語に限らず、中国語やロシア語も同様であるだろうが、言葉がしゃべれないために苦労をし、語学ができるため仕事を得ることができ、生きていくことができたという事例を見ると、やはり語学能力の重要さというものがうかがえる。

『大連アカシアの学窓　証言　植民地教育に抗して』の中には金峰氏以外の「朝鮮族」の語りについても紹介されている。その中の一人、金炳福氏の語りの中には、日本語教授法について触れられている箇所がある。牡丹江の北に位置するという勃利小学校では、「一年生には朝鮮人教師が朝鮮語を交えながら『アイウエオ』から基礎的な日本語を教え、高学年になると日本人教師が日本語で教えるという方法であった[41]」という。「朝鮮族」教師による日本語教育は教授法の面から見れば、「直接法[42]」で行われておらず、「間接法[43]」で行われていたことがわかる。もちろん地域や学校によって差はあったであろうが、低学年、高学年に分け、さらに日本人教師は「直接法」で、「朝鮮族」教師は「間接法」で日本語を教えていたという点は非常に興味深い。さらに、金炳福氏は「一般的に朝鮮人が中国人に比べて日本語がよくできるのは、植民地教育の厳しさもあるが、朝鮮語と日本語が文法的に近い言語的関係にあることも理由の一つだ[44]」と話している。「満洲国」期の「朝鮮族」に対する日本語教育は、言語的な近さを重んじたものではなく、侵略のために強制的に行われた教育であったことは間違いないが、教育を受けた人々の語りからも、朝鮮語と日本語との文法的近さが垣間見られる。竹中の著書の中で紹介されている「朝鮮族」のオーラルヒストリーは少ないながらも、興味深いものが多く、「朝鮮族」の言語を考える上で非常に参考となる。しかし、大部分は「漢族」のものであり、「朝鮮族」のものは十分ではないという印象を受ける。

次に、朝鮮半島で日本語教育の養成講座を受けた「朝鮮人」教師の事例を紹介し、彼ら、彼女らが満洲に渡る以前にどのような教育を受けたかについて論じた研究を挙げる。

朝鮮半島における「朝鮮人」教師に関するものとしては、久保田優子の研究がある。久保田は、朝鮮半島において朝鮮人教員養成を受けた「朝鮮人」教師について、韓国併合後、朝鮮では「朝鮮人教員養成においては、各種の教員養成機関が設けられ、数的には着々と進展し[45]」ていたと述べている。久保田によれば「朝鮮人教員の養成において最重要視されたのは、国語学習であった[46]」「内地人教員は朝鮮語が下手だったのに比べ、朝鮮人教員の国語上達は（省略）早かった[47]」という。韓国併合後、朝鮮総督府は内地人教師、つまり日本人教師には日本語教授法よりも朝鮮語学習を最重要課題としていたが、その成果は芳し

41　竹中憲一(2003)『大連　アカシアの学窓』 明石書店 p. 349
42　目標言語で指導する教授法。目標言語が日本語の場合、「日本語を日本語で教える」こととなる。
43　媒介語を用いて指導すること。
44　竹中憲一(2003)『大連　アカシアの学窓』 明石書店 p. 349
45　久保田優子(2005)『植民地朝鮮の日本語教育』九州大学出版会 p. 303
46　同上： p. 298
47　同上： pp. 298-299

くなかった[48]。しかし、日本語の上達が早い「朝鮮人」教師については、日本語を最重要課題としたために、師範科を卒業した「朝鮮人」教師であっても主要教科目の指導能力が不足していたという[49]。

注目すべき点は1915年8月の公立普通学校教員数のデータである。総計1,853人の教員のうち、約7割の1,314人が「朝鮮人」教師であった[50]。ここから、普通学校教員の大部分は「朝鮮人」教師であったことがわかる。朝鮮総督府は、普通学校での教授法については「直接法」で行うよう指示していたが、「直接法」ではうまく伝えきれない部分、例えば「副詞・接続詞・形容詞等は、正確に理解させることが非常に困難であること、さらに、実物や動作によっても国語の内容を十分には理解させがたいという欠点があるため、朝鮮語による訳をしてもやむを得ない[51]」という方針がとられた。完全なる「直接法」による指導がとられていないという状況は、朝鮮において日本語がまだ十分には普及していないということを示している。つまり「直接法」と「間接法」が併存していた教授法が、現実の朝鮮半島での日本語教授法であったことがわかる。それは、普通学校教員の大部分が「朝鮮人」教師であったことも大いに関係しており、久保田は「朝鮮人教員の養成の段階から朝鮮語の使用を認めざるをえなかった[52]」としている。

久保田の研究は、「朝鮮人」教師はたとえ日本語が堪能であっても、日本語教授法に関して言えば、完全な「直接法」をとっていなかったという可能性を示唆している。なぜならば、養成段階から朝鮮語の使用が認められていたわけであり、実際に総督府もそれをやむをえないとしていた状況があったからである。朝鮮半島の教員養成機関で学んだ「朝鮮人」教師たちの中に、「満洲国」の「朝鮮族」の学校で日本語で教えていた教師も数多くいたことは、オーラルヒストリーの中にも見られる。

拙稿「教育雑誌『建国教育』から見る「満洲国」期の「朝鮮族」教師について」では、『在満朝鮮人教育調査票[53]』のデータをもとに、「朝鮮族」学校の教師の数に注目した。その結果、「「満洲国」の「朝鮮族」学校の特徴、つまり教師の数が不足しており、なおかつ「朝鮮族」教師が日本人教師に比べ圧倒的に多かったという状況は、新学制施行後も変わらなかった[54]」ことが明らかになった。また「朝鮮族」児童の日本語使用状況については、拙稿「「満洲国」期の「朝鮮族」学校における日本語教授法と日本語使用状況に関する一考察」において、独自に行ったインタビュー調査から「友人と遊ぶときにも日本語を使っていた」「公共の場所においても日本語を使っていた」「授業以外の時でも必ず日本語を話すよう命

---

48 久保田優子(2005)『植民地朝鮮の日本語教育』九州大学出版会 p.297
49 同上： p.299
50 同上： p.300
51 同上： p.295
52 同上： p.303
53 「満洲国」教育史研究会監修（1993)『「満洲・満洲国」教育資料集成 第12巻 少数民族』エムテイ出版 pp.65-214に収録。
54 永嶋洋一（2012)「教育雑誌『建国教育』から見る「満洲国」期の「朝鮮族」教師について」『東北アジア研究』第33集 東北アジア文化学会 p.361

令されていた[55]」という語りが得られた。ここから、「朝鮮族」学校では、授業外においても日本語が使われていたことが明らかになった。

次に、中国朝鮮族学校における外国語教育について、その教育政策に注目し、朝鮮族の外国語の展開過程を示したのが金紅梅である。金紅梅（2009）では、現在、中国東北地方の「中等教育における日本語教育は教育機関の 7 割を占めており、そのほとんどが朝鮮族学校などの民族学校で実施されている[56]」とあり、朝鮮族学校で日本語教育が盛んに行われていることを示している。1964 年に中国では『外国語教育 7 ヵ年計画綱要』が制定され、「学校における第一外国語を英語にし、ロシア語以外フランス語、日本語、ドイツ語などの学習者を増加すべき[57]」であるという方針が示された。これにより、朝鮮族学校では日本語教育が取り入れられることとなった。しかし、文化大革命の「外国語無用論」により、停止を余儀なくされる。この際、多くの朝鮮族学校は強制解体、強制移動、強制統合させられ、大きな被害を受ける[58]。しかし、1972 年の日中国交正常化により、中国では日本語を始める学校が急増し、朝鮮族学校でも農村地域で日本語が導入されるようになる。文化大革命終了後、1978 年日中平和友好条約締結により、「日本語を導入する朝鮮族学校が急速に増え、ほとんどの朝鮮族学校で外国語科目として日本語教育を導入[59]」し、日本語教育は中国東北部で急速に広まった。「日本語教育導入期」の建国後から文化大革命期までの外国語教育について、金紅梅は「政治の影響を強く受ける外国語教育展開の構造[60]」であったと指摘している。

金紅梅は、朝鮮族学校への日本語教育導入の要因として、①「満洲国」期に日本語教育を受けた「老教師[61]」の役割　②文法的に日本語が朝鮮語に似ているため、朝鮮族学生にとって学びやすい、という点を挙げている[62]。まず、①についてであるが、外国語を教えることのできる教師は、「満洲国」期には日本語教育を受けた人々しかいなかったため、つまり日本語以外の外国語を教えることのできる人材がいなかったために、日本語教育を行うことになった。また、②についてであるが、金紅梅も指摘しているように、朝鮮族の学生にとって日本語が学びやすいということは、大学受験においても、点数が取りやすいということである。つまり、「受験日本語」としての性質を持つこととなる。金紅梅は「日本語受験による有利が、朝鮮族が漢族より高学歴を持つ可能性を広げたのは間違いない[63]」として

---

[55] 永嶋洋一(2013) 「「満洲国」期の「朝鮮族」学校における日本語教授法と日本語使用状況に関する一考察」『日語日文学』第 57 集 大韓日語日文学会 pp. 410-411

[56] 金紅梅 (2009)「中国朝鮮族における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号　立命館大学　p. 51

[57] 同上：p. 51

[58] 同上：p. 54

[59] 同上：p. 55

[60] 同上：p. 61

[61] 「満洲国」期に日本語を学んだ経験のある教師。

[62] 金紅梅 (2009)「中国朝鮮族における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号　立命館大学 p. 58

[63] 同上：p. 58

おり、朝鮮族にとって、日本語教育がいかに重要なものであったかがわかる。しかし、「受験日本語」としての日本語教育の内容が具体的にどのようなものであるかについては触れられていない。

韓秀蘭は中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育について、英語教育と比較検討し、考察している。韓秀蘭（2012）によれば、「1970 年代後半には、延辺の朝鮮族中学校ではほぼ 100%の割合で外国語科目として日本語が選択されていた[64]」という。この時期、1977 年の「全国大学入試の再開」、1978 年「民族教育制度の復活」、1979 年「外国語科目の全国統一入試の正式科目として認定」、1982 年「日本語の中学校の外国語科目として認定」のような制度が次々と出された。このような政策により、日本語教育は急速に普及して行った。しかし、1990 年代に入ると、中等教育機関における日本語学習者数は急激に減少し、延辺での外国語教育は英語を中心に進められるようになる[65]。また、本田（2012）によれば、延辺朝鮮族自治州では、英語教育導入により、2003 年ごろまでには、ほとんどすべての学校で日本語の授業がなくなってしまったという[66]。その一方で、延辺朝鮮族自治州以外の地域、例えば黒龍江省などの民族学校では、現在でも日本語教育が行われている。つまり、現在日本語教育がなくなってきている地域と、まだ継続して行われている地域が存在することがわかる。

韓の研究は、日本語教育と英語教育を比較しながら今後の朝鮮族の外国語教育を展望している点で参考にすべき点が多いが、調査対象が延辺朝鮮族自治州に限られており、他の地域の朝鮮族については言及されていない。

以上、朝鮮族の言語教育に関する先行研究について述べたが、朝鮮族の言語教育については、「満洲国」期と現在の朝鮮族による日本語教育には「老教師」を通したつながりが見られ、日本語と朝鮮語の文法的な近さが今日までの日本語教育を継続させてきた要因のひとつとして挙げられていることがわかった。さらに、近年、これまで日本語教育が行われてきた朝鮮族学校においても英語教育が実施されるようになり、中には延辺朝鮮族自治州のように日本語教育が行われなくなってしまった地域も出ていることが明らかになった。

次に朝鮮族の母語である朝鮮語、そして母国語である中国語に関する先行研究を挙げる。

１－４－２．朝鮮族の朝鮮語及び中国語に関する先行研究

ここでは、朝鮮族の朝鮮語及び中国語に関する先行研究について述べる。権寧俊は朝鮮人の「民族教育」が朝鮮族の「少数民族教育」に転換する過程を明らかにしている。権（2005）

---

[64] 韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢（三重大学）』第 29 号 三重大学人文学部文化学科　p. 175

[65] 同上：p. 176

[66] 本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 p. 27

では、中国建国初期から実施された「少数民族教育」の内容を要約し、朝鮮族の言語については「中国政府の教育部の基本指針にもとづいて、朝鮮語と漢語のバイリンガル教育が行われた[67]」が、「朝鮮語に比べて漢語の学習時間が少なかったために、朝鮮族の中学校卒業生は漢語ができず、大学進学や中国社会への進出に困難が生じた[68]」としている。さらに「その問題を解決するために自治区政府は漢語教育を強化[69]」し、その結果「朝鮮語教育の比重を引き下げる結果となった[70]」と指摘している。ここから、建国初期においては朝鮮族の言語が、中央政府や自治区政府による政策の影響を大きく受けていたことがわかる。

宮下尚子は、中国朝鮮語が漢語との言語接触により、どのような影響を受け、変化したのかを言語学的な観点から分析している。宮下（2007）によれば、「中国語」のひとつとなった「中国朝鮮語」は、新中国建国初期までは「ハングル正書法統一案」によるソウル方言が標準語とされていた。しかし、朝鮮戦争による南北朝鮮分断により、ピョンヤンの言葉を標準とすべきだという声が高まり、1952 年 4 月の延辺自治区初代主席朱徳海の方針表明により、「1954 年 4 月以降、書写規範と文法規範は北朝鮮のものに従うようになった[71]」。その後、1963 年 6 月の周恩来による「中国の朝鮮語は朝鮮人民にもわかるピョンヤンの標準語に従って文字を書き言葉を話さなくてはならない」という指示により、北朝鮮よりの規範を採用することを後押しする形となった[72]。しかし、文化大革命期は「朝鮮語無用論」が展開され、中国朝鮮語の規範化も停滞する。文革後、1977 年 8 月に東北三省朝鮮語文事業第 1 次実務会議が召集され、朝鮮語の『標準発音法』『正書法』『分かち書き』『文章符号法（試用方案』の「四法」（四つの規範）が採択され、統一的な規範が存在することとなった[73]。現在に至るまでの中国朝鮮語の規範化について、宮下は「中国朝鮮族の言語（＝中国朝鮮語）という概念のもとに独自に規範を設けたということは、少数民族の言語政策という点から評価されるべきであろう[74]」と述べている。つまり、現在の中国朝鮮語は、韓国で使われている韓国語とも北朝鮮で使われている朝鮮語とも異なる規範のもとにつくられ、使われている言葉であると言える。さらに、宮下は「延辺朝鮮語」について、「延辺地区において公の場や家庭内といった各場面で用いられる言語の変種の総体[75]」を「延辺朝鮮語」としている。また「歴史的には、朝鮮半島の咸鏡道の方言を基礎とする言語でありながら、朝鮮族の中国移住により、約 1 世紀に渡って朝鮮半島の言語と隔絶され、その他の様々な方言との接触、および漢語との接触という外的な影響を受けて独自の変化を経て成立し、

---

[67]権寧俊（2005）「朝鮮人の「民族教育」から朝鮮族の「少数民族教育」へ」『文教大学国際学部紀要』第 15 巻 2 号　文教大学　p. 201

[68] 同上：p. 201

[69] 同上：p. 201

[70] 同上：p. 201

[71] 宮下尚子（2007）『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会　p. 37

[72] 同上：p. 43

[73] 同上：p. 46

[74] 同上：p. 48

[75] 同上：p. 2

今日延辺地区で通用している言語であると規定できる[76]」としている。その他の地域の朝鮮語については、瀋陽など遼寧省にある丹東、本溪、鞍山、撫順、営口、鉄嶺（開原を除く）、遼陽、錦州などで用いられている朝鮮語は、平安道方言であり、主に遼寧省の東部に分布している。また、主に黒龍江省の西北と西南部で用いられているのは慶尚道方言であり、これは遼寧省鉄嶺地区の開原、吉林省の吉林、長春、四平、黒竜江省の松花江地区および哈爾濱、綏化、伊春等の地域においても見られる[77]。このように、中国朝鮮族が使用している「中国朝鮮語」は、朝鮮半島各地の方言を起源としているものであることがわかる。

孫蓮花は、社会の状況や変化に大きく影響される中国朝鮮語について、その呼称に注目し研究している。孫（2013）では、「中国朝鮮語」は「学校教育などで教えられているいわゆる標準朝鮮語[78]」であり、文革後、再び「平壌の言葉に学び従う」という朝鮮語の基準を回復したが、北朝鮮の固有語化政策の進展と中国の朝鮮語の現状と合わなくなり、中韓国交樹立（1992 年）以降は、中国語に加え、韓国語の影響も受けるようになったという[79]。このことから、「中国朝鮮語」は、もともと朝鮮半島各地で使われていた方言であったが、北朝鮮の「平壌朝鮮語」を規範としながらも、その後、中国語及び韓国語の影響を受けできたものであることがわかる。

次に、朝鮮族の「中国語」に関する先行研究について述べる。岡本（1999）によれば、解放後、中国東北地方において、朝鮮人中学校で中国語の授業が行われ、同時にロシア語や英語も学ばれていた。このとき漢語は「中国語」としてロシア語や英語同様、外国語として捉えられていたのだという[80]。1946 年 6 月、延辺行政督察公署が発布した「吉林省暫定教育方針、暫定学制、及び標準教科課程」により、漢民族中学では朝鮮語の授業を行うこと、また朝鮮民族中学では漢語の授業が設けられ、どちらも週 4～5 時間教えるよう定められた[81]。1947 年 3 月には、中国初の民族出版社である延辺教育出版社が設立され、朝鮮族学校では延辺教育出版社が出版した教科書を使うように吉林省政府から指示が出された。1948 年にはハングルで書かれた朝鮮民族小中学校の教科書と「中国語」の教科書がつくられ始める[82]。1947 年、吉林省政府は朝鮮人中学に対してのみ、朝鮮語と漢語という二つの言語教育を義務付けることとなる。新中国成立後の 1950 年 8 月に、国家教育部が「中学暫定教科課程」（草案）の中で、少数民族の初級中学校においては、「国語と民族語を同時に教える[83]」ように規定した。岡本（1999）では、これが中国における「少数民族二言語教育の公式的な始まりだ[84]」としている。その後、漢語教育が強化され、1984 年の「民族区域自治法」により、中国語を学習しなければならないことが法的に定められる。

---

[76] 宮下尚子（2007）『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会 p. 3
[77] 同上：p. 13
[78] 孫蓮花（2013）『多民族国家における言語生活研究』官帯出版社　p. 21
[79] 同上：p. 21
[80] 岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社　p. 146
[81] 同上：p. 146
[82] 同上：p. 149
[83] 同上：p. 149
[84] 同上：p. 149

孫（2013）では、「少数民族学生を主として受け入れる条件のある学校にあっては、少数民族文字の教科書を採用し、かつ、少数民族の言語で授業を行わなければならない。小学校高学年または中学では、中国語課程を設け、全国的に通用する共通語を普及させる[85]」という「民族区域自治法」の第 37 条を挙げ、朝鮮族が少数民族学校である朝鮮族学校に小学校から通ったとしても、少なくとも高学年からは中国語を学習しなければならない点を指摘している。

また、宮下（2007）によれば、「大多数の非漢民族は幼少時に民族語を母語として習得し、その後に、学校教育で第 2 言語としての漢語を学ぶ[86]」とある。さらに「漢族で教育を行う教育機関に就学した場合は、漢語以外の言語を全く話せない少数民族となることもありうる[87]」としている。つまり、少数民族である朝鮮族にとって、朝鮮族学校に通うのか、または漢族の学校に通うのかによって言語能力に大きな差が出てしまうのである。その大きな原因としては、朝鮮族の人口減少及び、漢族の人口流入により、朝鮮族が多く住む地域においても中国語が使われる言語環境になってしまった点が挙げられる。しかし、その言語環境は朝鮮族の住む地域によって異なるという点に留意しなければならない。

本田（2012）には「中国では、各地の民族大学をはじめとして、大学に進学する少数民族学生のために『預科』が設置されている[88]」とあり、「この預科教育は、本来、漢語と民族語の二科目で受験した少数民族学生の漢語運用力を引きあげるために設置されたものであるが、実際には漢語だけでなく英語の授業も行われている[89]」と述べている。延辺の朝鮮族にとって中国語は母国語ではあるものの、母語である朝鮮語のように使いこなせない人たちも存在しているということがわかる。また、少数民族の漢語、つまり中国語については、国の政策で大学入学前に学習するようなシステムが構築されていることから、高等教育については漢族同様の中国語能力及び英語能力などが求められていることがわかる。

以上、朝鮮族の言語である朝鮮語及び中国語に関する先行研究を挙げた。朝鮮族にとっての中国語は、言語政策や言語環境により、「外国語」から「母国語」さらには「母語」へと変化してきていることがわかる。その一方で、朝鮮語が朝鮮族にとって「母語」から「外国語」に変わってきていることもうかがえる。もちろん、この状況は延辺朝鮮族とそれ以外の地域の朝鮮族とで違いが見られると考えられる。朝鮮族の朝鮮語能力、及び中国語能力については、後の章で詳細に述べる。

１－４－３．言語習得に関する先行研究

ここでは言語習得、特に朝鮮族に関連する言語習得についての先行研究について述べる。

白井（2008）は、英語と日本語の距離について、言語間の距離に触れ、「学習者の母語と

[85] 孫蓮花（2013）『多民族国家における言語生活研究』官帯出版社 p. 24
[86] 宮下尚子（2007）『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会　p. 15
[87] 同上：p. 15
[88] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 72
[89] 同上：p. 72

学習対象となる言語が似ていれば似ているほど、つまり距離が近ければ近いほど、全体としては学習しやすい[90]」と述べている。つまり、英語はインド＝ヨーロッパ語族に属する言語であり、日本語とは言語間の距離が遠いため、英語との言語間が近い母語話者に比べ、日本人は英語の習得が難しいと言える。また、日本語と最も似ている言語は韓国（朝鮮）語であり、文法が非常によく似ていると述べている。さらに、日本語には漢語が多数はいっているので、中国語とは語彙が似ているとも指摘している[91]。さらにカーネギーメロン大学の甲田慶子の研究を紹介し、日本語学習者を韓国語、中国語、英語の三つの母語グループに分けて、その習得状況を調べたところ、英語話者は韓国語話者・中国語話者に差をつけられたという[92]。この結果から、白井は「母語と外国語との距離は、やはり学習難易度に非常に強い影響をあたえる[93]」と述べている。また、母語と第二言語の距離が近いほど、（1）転移がおこりやすく、（2）転移は正の転移となり、全体として学習が容易になるが、（3）母語と第二言語が違っている部分については間違いがなくなりにくい、と指摘している[94]。さらに、「学習者がすでに二つの言語を知っているとしたら、三つ目の言語を学習する時にも当然、既知の第一言語と第二言語からの影響が生じ[95]」るとしている一方で、学問的には、第三言語習得という分野はまだないと述べている[96]。朝鮮族の日本語教育はまさにこの「第三言語習得」にあたり、さらに言えば、日本語と言語間の距離が近いと考えられる朝鮮語と中国語を第一言語、第二言語として有していることから、日本語を学習する際、他の学習者より有利であると言える。さらに、東北大学のジョン・ヒョンジョンらの研究を例に出し、韓国語を母語とし、日本語と英語がある程度できる学習者がそれぞれの言語を処理するときの脳の活動は、日本語と英語の熟達レベルが同じくらいであるにもかかわらず、日本語と韓国語を処理する時の活動が似通っており、英語のときとは大きく異なっていたことがわかったという[97]。これは、白井によれば、「日本語と韓国語が似ていることによって、韓国語母語話者が日本語を使う時は、脳内の知識ネットワークを共有して使えるのかもしれない、という可能性を示して[98]」おり、朝鮮語母語話者である朝鮮族が日本語を学習する際も同様のことが言える。つまり、他の言語の母語話者に比べて意識的学習がそれほど必要ではないということであり、日本語は他の言語に比べて学習しやすい言語であるということがわかる。

言語習得は、生活の中でその国の言葉を使いながら習得する「自然習得」と、学校などで外国語を学習し、習得する「教室習得」に分けられるが、朝鮮族の場合は、程度の差こそあれ、朝鮮語と中国語は「自然習得」であり、日本語は「教室習得」であると言える。

---

90 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学』岩波新書　p. 2
91 同上：p. 5
92 同上：p. 6
93 同上：p. 6
94 同上：p. 11
95 同上：p. 11
96 同上：p. 11
97 同上：pp. 158－159
98 同上：p. 159

しかし、朝鮮族学校においては、「朝鮮語」「中国語」どちらの授業も行われており、尹（2005b）によれば、朝鮮族学校のような民族学校においては、二つのタイプの二言語教育が存在すると指摘している。それを尹は「一つは、漢語を教授言語とし、民族言語を教科として学習するタイプであり（タイプ 1)、もう一つは、民族言語を教授言語とし、共通言語の漢語を教科として学習するタイプ（タイプ 2）[99]」とに分けている。さらに、漢族学校を選ぶ場合をタイプ 3 とし、延辺の朝鮮族はタイプ 2 か 3 を選んでおり、延辺朝鮮族が朝鮮族学校を選択する割合が高いのは、「家庭での使用言語が朝鮮語だけの場合と父親の職業が農民、父親の学歴がない場合である[100]」と指摘している。一方で、漢族学校を選択する要因としては「漢語を強化するために漢族学校を選択している[101]」としている。それは、「高学歴者にとっては、活躍の場が州外になることが多く、その場合、漢語の重要性はますます高まっているためである[102]」という。つまり、朝鮮族は家庭環境や親の考え方により、二つの言語習得に差が生じていると言える。尹は延辺朝鮮族についてのみ言及しているが、延辺以外の地域であれば、タイプ 1 というところも出てくるであろう。また、延辺以外の言語環境は、朝鮮族集落を除いては中国語が使われている環境であると言え、それが朝鮮族の言語習得に大きな影響を与えていると考えられる。同じ中国朝鮮族であるとはいえ、その言語環境が朝鮮語であるのか中国語であるのか、また通っている学校が朝鮮族学校のような民族学校であるのか、教授用語として中国語が使われる漢族学校であるのか、さらにはタイプ 1 であるのかタイプ 2 であるのかによって、朝鮮族の言語習得は大きく異なることがわかる。また、家庭内で両親の第 1 言語が朝鮮語であっても、両親は中国語がわかるため、子供と話す際には朝鮮語で話し、子供は中国語で答えるという家庭環境もあるという[103]。このように、朝鮮族を取り巻く言語環境は家庭によっても、また学校によっても様々であり、その言語習得の過程も異なることがわかる。

言語を習得する際に重要になってくるのは、その動機づけであるが、ガードナーはその動機づけを「統合的動機づけ」と「道具的動機づけ」に分けた。朝鮮族にとって、日本語を学習する際の動機づけは何であろうか。

韓（2012）では、朝鮮族学校において独自に行ったアンケート調査をもとに、興味深い考察を行っている。龍井市内の朝鮮族の初級中学と高級中学を対象にしたアンケートを用い、日本語学習者と英語学習者を比較しながら考察している。その結果、日本語学習者の学習動機については、「日本に留学するため」と「将来の就職のため」という回答が突出して多かったという[104]。「就職や日本への留学など将来的に日本語を活かしていくために日本

---

[99] 尹貞姫（2005b）「現代中学朝鮮族における言語問題と学校選択　－延辺地域の言語使用に関する調査・分析を手がかりとしてー」『ことばの科学』18 号　名古屋大学言語文化研究会　p. 130

[100] 同上：p. 139

[101] 同上：p. 139

[102] 同上：p. 139

[103] 宮下尚子（2007）『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会　p. 14

[104] 韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢（三重大学)』第 29 号 三重大学人文学部文化学科 p. 178

語を学んでいる[105]」という学生が多い現状を示している。一方で、英語学習者については、学習動機として「英語は世界的言語で広く使われているため[106]」という点を挙げている。また、「中学生にも高校生にも『義務的に習っている』という回答が多数見られる[107]」とある。さらに、興味深いこととして「英語学習者の中にも大学の日本語学部に進学したい[108]」と回答した学生が多数存在した点を指摘している。このことから「英語のみを中心に進められてきた教育政策の影の部分といえると同時にこの地域の中等教育段階における日本語の潜在的な需要を意味していると思われる[109]」と考察している。日本語学習者と英語学習者の学習動機を比較し、ただ単に「英語が優勢、日本語が劣勢」と結論付けるのではなく、学習者の声から、日本語教育の新たな可能性を示している点で、非常に興味深い。

次に、小林（2011）のアンケート調査結果について言及する。小林（2011）には、2010年10月11日から10月14日にかけて、延辺大学の日本語専攻学生（218名）を対象に行った調査結果が記されている。このうち、朝鮮族学生は178名であり、全体の63パーセントに上ったという。以下、このアンケート調査の項目中、日本語教育と関連するものを取り出し、朝鮮族学生の日本語能力及び日本語への意識について概観する。まず、「日本語能力についての自己評価」という項目がある。「話す」「読む」「書く」の項目をそれぞれ五段階評価で評価する形式になっており、281名全員の調査結果が記されている。その結果を表1に示す。

表1：日本語能力についての自己評価（小林2011の統計表をもとに筆者作成）

自己評価	非常に良くできる		よくできる		普通		あまりできない		できない		不明		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
話す	7	2%	28	10%	195	69%	36	13%	0	0%	15	5%	281
読む	16	6%	95	34%	139	49%	17	6%	0	0%	14	5%	281
書く	8	3 %	59	21%	174	62%	27	10%	0	0%	13	5%	281

※ 割合は、回答者281名に対する数値(小数点以下は四捨五入)

アンケート調査においては陥りやすいパターンであるが、「自己評価」となると、だいたいどの項目も「普通」を選択しがちになる。この調査においても学生の選択は「普通」に集まってはいるが、「読む」という項目に関しては、「普通」49%、「よくできる」34%と、この差が 15%にすぎない。「話す」で「よくできる」を選んだ学生が 10%しかいなかった

[105] 韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢（三重大学）』第29号 三重大学人文学部文化学科：p. 181
[106] 同上：p. 181
[107] 同上：p. 181
[108] 同上：p. 181
[109] 同上：p. 181

ことを考えると、その差は明らかである。また、「書く」では、「よくできる」を選んだ学生が 21%おり、学生たちができていると感じている日本語能力は、「読む＞書く＞話す」の順であることがわかる。

表 2 は「日本語を学習している感想」というアンケート調査結果のうち、朝鮮族学生のデータのみを取り出し、作成したものである。

表 2：朝鮮族学生の日本語を学習している感想（小林 2011 の統計表をもとに筆者作成）

	回答者数	割合
日本語は朝鮮語と語順が似ているので、勉強が楽だ	83	47%
発音はそれほどむつかしくはない	67	38%
発音が難しい	9	5%
単語を覚えるのが大変	71	40%
漢字は中国語と似ているので勉強しやすい	48	27%
カタカナの外来語が案外にむつかしい	58	33%
文法が複雑なので、勉強が大変	90	51%
専門用語は中国語や朝鮮語と似ているので、覚えやすい	35	20%

※ 割合は、朝鮮族回答者 178 名に対する数値(小数点以下は四捨五入)

最も多かった回答は「文法が複雑なので勉強が大変」(51%) であり、次に「日本語は朝鮮語と語順が似ているので、勉強するのが楽だ」(47%)、「単語を覚えるのが大変」(40%) となっている。興味深いのは、文法に苦手意識を持ちながらも、「語順」という点では容易さを感じているという点である。

それでは、「語順」と同じように難しさを感じていない項目はどれであろうか。それは「発音」である。「発音が難しい」と答えた学生はわずか 5%であり、逆に「それほどむつかしくはない」と答えた学生は 38%に上っている。ここから、朝鮮族の学生は日本語を学習する上で「語順」が似ていることに容易さを感じ、また、「発音」にも難しさを感じていないことがわかる。

それでは、漢族の学生はどうであろうか。表 3 は「日本語を学習している感想」の調査結果のうち、漢族のデータのみを取り出して作成したものである。朝鮮族学生の回答と大きな違いが出たのは、「語順」と「発音」であった。「発音」については、難しさを感じている学生が難しさを感じていない学生を上回っている。

以上、小林が行ったアンケート調査の結果を示したが、朝鮮族の日本語学習者は漢族の学習者に比べて「語順」と「発音」という二つの点で日本語学習に容易さを感じていることがわかった。

表 3：漢族学生の日本語を学習している感想（小林 2011 の統計表をもとに筆者作成）

	回答者数	割合
日本語は朝鮮語と語順が似ているので、勉強が楽だ	6	9%
発音はそれほどむつかしくはない	13	20%
発音が難しい	20	31%
単語を覚えるのが大変	26	40%
漢字は中国語と似ているので勉強しやすい	23	35%
カタカナの外来語が案外にむつかしい	25	38%
文法が複雑なので、勉強が大変	38	58%
専門用語は中国語や朝鮮語と似ているので、覚えやすい	3	5%

※ 割合は、漢族回答者 65 名に対する数値(小数点以下は四捨五入)

次に、日本語教授法に関する先行研究を挙げる。

１－４－４．日本語教授法に関する先行研究

ここでは、日本語教授法に関する研究について述べる。日本語教授法については、特に二人の日本語教育者に注目したい。まず一人目は山口喜一郎[110]である。彼は「直接法」を推進し、彼自身が台湾、朝鮮、満洲と渡り歩き、学校という現場で日本語を教え続けた。そして、もう一人は大出正篤[111]である。彼は山口とは異なり、「速成法[112]」を推進した日本語教育者である。なぜこの二人をとりあげるのか。それは山口と大出が、日本語教育者の中でも「直接法」「速成法」という独自の教授法を開発し、しかも外地において自らそれを実践していた日本語教育者だったからである。

山口喜一郎は前述した通り、台湾、朝鮮、満洲で自ら日本語を教えた日本語教育者である。雑誌『日本語[113]』の「直接法と対訳法（二)」において、山口は「直接法」の優位性を「対訳法[114]」と比較しながら「その形成の過程が全然自国語のそれとその原則を一にしてい

---

[110] 1872-1952　1887 年石川県尋常師範学校卒業、1896 年台湾総督府国語講習員となる。明治 30 年（1897 年）から台湾、朝鮮、満洲などで日本語を教え、日本語教育に「直接法」を取り入れ、実践した日本語教育家。

[111] 1886-1949　外地の日本語教育に携わった日本語教育家。朝鮮、満洲にて日本語を教える。「速成式教授法（速成法)」を開発し、教科書編纂にも携わった。

[112]大出によれば、「速成法」は「理解」と「記憶」の時間を短縮し、「発表」する時間を十分にとるものであるという。また、坂田（2015）では「学習者に予習用として対訳教科書を持たせるが，教室では翻訳に触れさせず，直接法による教室活動を基本とする方法だった」（坂田2015 p.12）としている。

[113] 『日本語』は 1941 年に創刊号が発行された日本語教育雑誌であり、創刊号の「発刊の辞」では「日本語普及・日本語教育のための凡ゆる実践に出発すると共に、その一機関として雑誌『日本語』を発刊することとなつた。」とある。(『日本語』創刊号 1941　p.5)

[114] 対訳法とは、直接法とは異なり、学習言語を学習者の母語に訳して行う教授法である。

て、その言葉の機構と機能とが言葉の本質と一致している[115]」とし、「これが即ち直接法が外国語教習の正則方法である所以である[116]」としている。山口喜一郎の「直接法」で興味深いのは、「直接法における語義理解の過程は直観的理解－心内対訳－直接心会[117]」と図式で表している点である。外国語が教えられる際には、教授者が話す言葉は「心外語」となり、それが「対訳法」では学習者の自国語となり、「直接法」では学習する外国語となる。「心外語」により教えられた外国語は、「心内対訳」、つまり「心外語」を受け取った学習者の中でその外国語が解釈され、理解する過程において、「直接法」では、外国語の内容が複雑になればなるほど、自国語による心内対訳と心内語の範囲が狭まり、外国語で心内対訳をするようになるという。この点が「直接法」の利点であり、「対訳法」では不可能な点であると山口は主張している[118]。

このように山口喜一郎が主張し、自ら実践した「直接法」について、駒込武は「「直接法」は、こうした日本語＝日本精神論に適合的な方法論としての意味をもっていた[119]」とし、山口喜一郎については、日本語が母語ではない台湾人、朝鮮人、中国人に対して、日本語をどのようにして母語同様の「自然」なものに感じさせ、感情的な共同性を確立するのかという問題について実践的な方法論を探求したのが山口であったと評している[120]。

山口がまず台湾において自ら実施した「直接法」による日本語教育は、「1930 年前後には日本語の時間のみならず、学校生活全体から母語を排除しようとする傾向が顕著になった[121]」という駒込の言葉からもわかるように、教育現場において推進されていった。この「母語の排除」という政策は「朝鮮族」の学校にも顕著に見られるものである。「直接法」は、雑誌『日本語』に掲載されている華北教育者による座談会においても「教法の確立でありますが…あくまでも直接法に終始すべきであることは言うまでもありません[122]」というコメントから、1942 年時点において華北地域にまで浸透していたことがうかがえる。このように山口が提唱し、実践した「直接法」は政府の政策レベルでの後押しを受けながら、台湾のみならず、他の外地においても推進され、定着していったように見えるが、「母語の排除」という点においては「朝鮮族」の学校においても厳しく行われてはいたものの、実際に教授法としての「直接法」が実践されていたのかどうかについては疑問である。

一方、大出正篤は朝鮮、満洲において実際に日本語教師として教壇に立ち、また外地における教科書の編纂や教授法研究にも深く携わった人物である。大出が『文学』第 8 巻第 4 号に投稿した「日本語の世界的進出と教授法の研究」を見ると、彼が理想とする満洲における日本語教育がどのようなものであったのかうかがい知ることができる。彼は、はじめ

---

115 山口喜一郎(1942)「直接法と対訳法（二)」『日本語』第 2 巻 第 9 号 日本語教育振興会 p. 24
116 同上：p. 24
117 同上：p. 18
118 同上： pp. 20-23
119 駒込武(1996)『植民地帝国日本の文化統合』p. 334
120 同上：p. 335
121 同上：p. 338
122 座談会「日本語教育に於ける教材論」(1942) 『日本語』第 2 巻 第 9 号 p. 60 篠原利逸（国立北京師範大学教員）の言葉

に日本語の進出について触れている。日本語教育はまず台湾で普及し、その後、朝鮮へ進んで満洲、中国と広がって来ており、特に満洲事変以降の日本語教育の普及は目覚ましいものであると称賛している。しかし、現実問題として新しい学制となったために「国民学校[123]」では1年生から6年生まで日本語を学ぶことになり、そのため日本語を教える教師数が何千と必要になってしまったという。日本語を学習しなければならない者は大勢いるのに、日本語を教える教員が足りていない状況について、大出が「既に舞台は開かれて観客が押し寄せているのに役者の勢揃いが出来たばかりだ[124]」と表現している点は非常に興味深いが、実際は大根役者ばかりで、勢ぞろいもできていない状況であったようだ。

彼が考案し、推進した「速成法」は具体的にどのようなものであったのだろうか。大出によれば、まず、文法を「理解」する時間と、単語を「記憶」する時間、そして習得した日本語を「発表」する時間に分けるとすれば、「速成法」は「理解」と「記憶」の時間を短縮し、「発表」する時間を十分に取るものであるという。「理解」と「記憶」の時間は学習者が青年壮年であり、また、ほとんどが漢族であるため漢字を理解することができるのであるから、総仮名の本などを与えて家で予習をさせればよいとしている。学習者が青年壮年であるため「理解」と「記憶」に要する時間を省き、活用練習発表練習の時間を十分に取ることが可能となる。よって日本語も「話方式教授法」よりも短期間に習得することができるという考え方である。大出はこの「速成法」を実践すべく、その教材として『標準日本語讀本』を著した。注目すべきは、この教材が満族の日本語教師養成に使われ、毎年数千人が養成されたということである。大出によれば、初学者がわずか半年くらいの学習をしただけで、教授をしている者もいるという状況であったという。

１－４－５．先行研究の問題点

これまで朝鮮族の先行研究について述べてきたが、ここでは先行研究の問題点を指摘する。まず、これまでの先行研究は、朝鮮族の日本語教育を歴史的、政治的に捉えたものが多く、それを言語教育としての視点から捉えたものは限られている。さらに、言語教育として捉えた研究であっても、主に朝鮮族の「二言語教育」のみに注目した研究が多く、その二言語と外国語教育との関連性について論じているものは少ない。朝鮮族の中等教育機関である朝鮮族中学では、現在「朝鮮語」「中国語」科目の他に、外国語科目として「日本語」「英語」科目が設けられている。つまり、朝鮮族の学生は最大４ヶ国語もの科目を学習していることになり、語学科目が大きな比重を占めていることがわかる。また、朝鮮族の言語教育の多様さは「外国語科目」、特に、二言語の特徴を最大限に活かした日本語教育にこそ凝縮されていると考える。よって、「朝鮮語」「中国語」の「二言語教育」のみならず、外国語科目である日本語教育にまで広げて研究する必要がある。

次に、先行研究において「満洲国」期の日本語教育と現在の朝鮮族の日本語教育とのつ

[123] 従来初級小学校と呼ばれていたもので、初等教育における学校運営の主要な形式であった。七歳以上の児童を受け入れ、修業年限は四年であった。
[124] 大出正篤(1940)「日本語の世界的進出と教授法の研究」『文学』第８巻 第４号　p. 68

ながりを見出し、論じているものはいくつか見られるが、「満洲国」期、改革開放期、そして現在に至るまで、朝鮮族の日本語教育方法がどのような変化を見せていったのか、その言語使用に焦点を当てて論じているものは見られない。特に、改革開放期以降から現在に至るまでの日本語教育について触れているものは数が限られている。

次に、金紅梅（2009）においても指摘されているように、「朝鮮族に関する研究は、資料が比較的豊富な延辺自治州に焦点を当てた研究がほとんど[125]」である点が挙げられる。つまり、延辺朝鮮族自治州以外の地域の朝鮮族の日本語教育について触れられているものは少ない。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族とその他の地域の朝鮮族では、言語政策や言語環境が大きく異なっているため、学校教育にも違いが見られる。そのため、延辺朝鮮族自治州以外の朝鮮族の教育について研究する必要性は大いにあると言える。

さらに、日本語教育の方法に目を向けると、日本語教授法など、限られた教育方法についてのみ論じられているものが多く、学習者の持つ言語能力に注目し、その特徴を活かす日本語教育の方法について触れているものは見られない。朝鮮族は「漢語化」の影響により、近年朝鮮語よりも中国語ができる学生が増えており、その言語能力は個人によってそれぞれ異なる。朝鮮語と中国語による日本語学習も言語能力により異なってくるだろう。さらに、朝鮮族の朝鮮語は、韓国ドラマなどによる韓国語の影響を大きく受け、さらに日本語学習にはアニメや漫画、ゲームなど様々な学習ツールを活用している。テレビやインターネットなどの媒介を通して、朝鮮族の言語学習や教育方法も多様化しており、今後は教授法など限られた教育方法にとどまらない個々人の言語能力に合わせた多様な教育方法について研究する必要がある。

最後に、これまでの研究は朝鮮族の日本語教育について実証的に研究しているものは少なく、現在の朝鮮族の日本語教育について、多様化する教師と学習者両方の視点から捉えたものはほとんどない。さらに、朝鮮語、中国語の二言語に加え、日本語が使われている三言語使用の実態をもとに朝鮮族の日本語教育を具体的に考察しているものは皆無に等しい。ここに最大の研究余地があると言える。

１－５．研究課題

本論では、以上の先行研究の問題点から、大きく三つのものを研究課題として挙げる。

①現在、朝鮮族学校で行われている三言語使用による日本語教育方法は、単一言語使用、及び二言語使用による日本語教育方法とどのような違いがあるのか。

[125] 金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 53

②朝鮮族教師は日本語を教える際、どのように三言語を使い分けているのか。

③朝鮮族学習者は日本語を学習する際、どのように三言語を使い分けているのか。

まず①を研究課題として挙げた理由であるが、すでに述べたように、「満洲国」期、及び改革開放期以降の日本語教育における言語使用は時代により異なるが、日本語、朝鮮語による単一言語による教育方法、もしくは朝鮮語及び日本語による二言語使用による教育方法しかとられていなかった。現在のように日、朝、中という三言語使用による教育方法とどのような違いがあるのか明らかにするためには、「満洲国」期や、改革開放期以降の教育方法の実態を明らかにする必要がある。課題①については、本論第 2 章において、朝鮮族の日本語の教育方法を時代ごとに比較、検討し、その実態を明らかにする。

次に②を研究課題として挙げたのは、三言語による日本語教育の方法について論じられた先行研究はこれまで見られない。さらに、日本語を教える際に、単一言語、もしくは二言語を使ってもうまく説明できない点を、中国朝鮮族は日、朝、中という三言語を使ってどのようにわかりやすく教えているのか明らかにすることは、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法を示すことにつながると考えるからである。課題②については、本論第 3 章において、学校別、教師別に三言語使用による教育方法に注目しながら具体的に明らかにする。

最後に③を研究課題として挙げた理由であるが、三言語使用による言語学習については、これまでの先行研究には見られない。また、朝鮮族教師の三言語使用による日本語教育を受ける立場である学習者たちがその教育方法をどう受け止め、さらに自ら三言語を使ってどのように学習し、理解しているのか明らかにすることは、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語学習方法を示すことにつながると考えるからである。課題③については、第 4 章において、学校別、学習者別に言語能力、及び学習方法に注目しながら、具体的に明らかにする。

１－６．研究意義

本研究の意義は、中国朝鮮族の日、朝、中三言語使用による日本語教育の教育方法と学習方法を明らかにすることで、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び日本語学習方法を提示できる点であると考える。

三言語使用による日本語教育、特に日本語学習者数の半数以上を占める東アジアの三言語を使用した教育方法、及び学習方法はこれまでの先行研究においては示されておらず、中国朝鮮族の三言語を使用した日本語教育、特に教育方法と学習方法について明らかにす

る本研究は、今後ますます多言語化する社会において求められる研究であり、大きな意義があると考える。さらに、これまで単一言語、もしくは二言語でも理解しにくく、説明することが難しかった日本語について、中国朝鮮族の事例から、三つの言語を使用することで、より理解しやすくなることを示す、つまり三言語使用の有効性を示す本研究は、多言語社会における新たな日本語教育のモデルを構築することにつながる意義深い研究であると考える。

１－７．研究方法

本研究では主に次の三つの方法をとった。一つ目はインタビュー調査、二つ目はアンケート調査、そして三つ目が朝鮮族学校における日本語の授業見学である。インタビュー調査対象者数、及びアンケート回答者数を表 4 に示す。

表 4：本研究のインタビュー調査対象者数、及びアンケート回答者数

インタビュー調査対象者数	計 52 名（男性 11 名、女性 41 名） ・「満洲国」期に本人、または家族が日本語教育を受けた人　9 名（男性 6 名、女性 3 名） ・朝鮮族学校の教師　23 名（男性 1 名、女性 22 名） ・朝鮮族学校の卒業生 5 名（男性 2 名、女性 3 名） ・朝鮮族学校の学生　15 名（男性 2 名、女性 13 名）
アンケート回答者数	計 604 名（男性 245 名、女性 355 名、不明 4 名） ・朝鮮族学校の卒業生　112 名（男性 26 名、女性 85 名、不明 1 名） ・朝鮮族学校の日本語学習者 492 名（男性 219 名、女性 270 名、不明 3 名）

まずインタビュー調査を行った理由についてであるが、これまでの先行研究が主に資料やアンケート調査から朝鮮族の日本語教育について考察しているという点が挙げられる。資料やアンケート調査に基づき分析、考察することも重要であるが、本論では、より具体的な朝鮮族の日本語教育方法と学習方法について明らかにするためには、インタビュー調査が最も適していると考え、実施した。まず、「満洲国」期の日本語教育方法の実態を明らかにするため、7 名の朝鮮族に対して直接インタビュー調査を実施した。さらに筆者の友人の祖父母 2 名についても、電話及びメールで友人に調査を依頼し、後日回答メールを得る形式で調査を行った。調査対象者 7 名に対して直接インタビューを行った際は、ある程度質問内容を決めて実施したため、半構造化インタビューの形式をとった。インタビューの際に使用した言語については、7 名のうち 4 名については、基本的に日本語で行ったが、対象者が聞き取れなかった場合は韓国語を使用したり、または朝鮮族の友人が通訳する形で実施した。また、残りの 3 名のうち、2 名については日本語で実施し、1 名については韓国

語で行った。インタビューの記録をとる際は、最初の対象者に対して、録音してもよいか尋ねたところ、断られたため、フィールドノートにより記録した。また、他の対象者についても基本的にフィールドノートにより記録をとった。その結果、9 名の朝鮮族から話を聞くことができ、11 名のオーラルヒストリーを得ることができた。インタビューの詳細については 2－1－2 において述べる。

次に、改革開放期から現在にかけての日本語教育の実態について明らかにするために、実際に朝鮮族学校で日本語教育を受けた 16 名の朝鮮族に対してインタビュー調査を実施した。16 名のうち、10 名は現在、朝鮮族学校において日本語を教えている教師であり、1 名は元日本語教師、4 名は卒業生、1 名は在校生である。16 名のうち、元日本語教師 1 名についてはメールに質問紙を添付し、それに回答して返信してもらう形式とし、その他の 15 名については、直接インタビュー調査を行った。インタビューの際、使用した言語は主に日本語で行い、対象者が理解できない場合は韓国語で質問する形式で行った。詳細については 2－2－1 で述べる。

次に、現在の朝鮮族学校で行われている日本語教育、特に朝鮮族教師の日本語教育方法について明らかにするために、教師に対してインタビュー調査を実施した。調査は吉林省梅河口市にある梅河口市朝鮮族中学の教師 5 名、遼寧省鉄嶺市にある鉄嶺市朝鮮族高級中学の教師 4 名、吉林省吉林市にある吉林市朝鮮族中学校の教師 3 名、遼寧省瀋陽市にある瀋陽市朝鮮族第一中学の教師 3 名、黒龍江省寧安市にある寧安市朝鮮族中学の教師 3 名、吉林省通化市にある通化市朝鮮族学校の教師 3 名、吉林省延辺朝鮮族自治州和龍市にある和龍市第三中学校の教師 2 名に対して行った。また、通化市朝鮮族学校については、すでに日本語の授業は行われていないため、直接インタビューできたのは日本語教師ではない教師 2 名（1 名は朝鮮語教師、1 名は事務主任）であった。しかし、元日本語教師 1 名の連絡先を教えてもらい、後日メール回答形式でインタビュー調査を実施することができた。インタビュー調査は半構造化インタビューであり、主に日本語を使用して質問し、日本語がわからない教師に対しては韓国語で実施した。詳細については、本論の第 3 章、及び第 5 章で述べる。

さらに、朝鮮族の日本語学習者の言語学習の状況を把握するために、3 校の朝鮮族学校において日本語を学んでいる学生に対してもインタビュー調査を行った。瀋陽市朝鮮族第一中学において 8 名の学生（1 名は漢族の学生）、寧安市朝鮮族中学では 4 名の学生、そして和龍市第三中学校では 3 名の学生（1 名は英語選択者）に対してインタビュー調査を実施した。インタビューは日本語と朝鮮語で行い、基本的にはフィールドノートにより記録をとったが、瀋陽市朝鮮族第一中学の学生 8 名へのインタビューの際は、許可を得た上で録音できたため、後日録音したものを文字化し、記録した。

二つ目はアンケート調査である。アンケート調査を行った理由は、まず、朝鮮族の日本語教育に対する意識を数値化し明らかにするため、さらに朝鮮族学校において日本語学習者、つまり日本語を選択し、学習している学生がどのような言語能力を持ち、そして、そ

れをどのように活用して日本語を学習しているのか、学校別の傾向を図式化し明らかにするために実施した。まず、朝鮮族学校の卒業生 112 名に対してアンケート調査を行った。このアンケート調査結果から、朝鮮族の言語に対する意識と、三世代の日本語学習経験の有無について明らかにし、考察した。アンケートの回収方式は、アンケート用紙を直接配布、またはメールにアンケート用紙を添付し、記入した後、回収する方式をとった。アンケート用紙の言語は日本語、朝鮮語、中国語のものを用意し、対象者が読みやすい言語で書かれたアンケートを選び、記入する形をとった。詳細については、2－3－1 で述べる。

次に、各朝鮮族学校の日本語選択者である学生に対してアンケート調査を行った。アンケート回答者数は合計 492 名である。梅河市朝鮮族中学では、高級中学 2 年生の日本語選択者 26 名に対してアンケート調査を実施した。アンケート用紙はすべて朝鮮語で書かれており、調査項目は全 11 項目である。詳細は 4－1－1 で述べる。

続いて、鉄嶺市朝鮮族高級中学、吉林市朝鮮族中学校及び和龍市第三中学校においてもアンケート調査を行った。このアンケート調査は、主に朝鮮語と中国語をどのように使用して日本語を学んでいるかについての質問項目を入れており、梅河口市朝鮮族中学で行ったものとは内容が異なる。調査項目は初級中学 17 項目、高級中学 21 項目となっている。アンケート対象者はすべて日本語選択者であり、鉄嶺市朝鮮族高級中学が 55 名、吉林市朝鮮族中学校が 120 名、和龍市第三中学校が 41 名である。アンケート用紙は朝鮮語で書かれたもの、中国語で書かれたもの二つのものを用意したが、和龍市第三中学校については、中国語より朝鮮語の方が得意な学生が多いということを教師から事前に聞いていたため、朝鮮語で書かれたアンケート用紙のみで調査を行った。詳細は 4－2－1、4－3－1 及び 5－2－1 において述べる。

最後に、瀋陽市朝鮮族第一中学、及び寧安市朝鮮族中学においてもアンケート調査を行った。アンケート用紙は、学生の朝鮮語、中国語能力をより詳細に把握するため、朝鮮語、中国語能力について四技能別に自己評価する項目を設けたもので、全 9 項目ある。アンケート対象者は瀋陽市朝鮮族第一中学が 131 名、寧安市朝鮮族中学の学生が 119 名である。学生は朝鮮語、中国語どちらもできるが、中国語の方ができる学生が多いということを事前に教師から聞いていたため、中国語で書かれたアンケート用紙のみを用い、調査を実施した。詳細は 4－4－3、4－5－3 で述べる。

三つ目は朝鮮族学校における日本語の授業見学である。授業見学を行った理由は、日本語、朝鮮語、中国語という三言語が実際の日本語授業でどのように使われているのか確認するためである。見学したのは、瀋陽市朝鮮族第一中学の高級中学 2 年生 1 クラス（14 名）、寧安市朝鮮族中学の初級中学 3 年生 1 クラス（27 名）、和龍市第三中学校の初級中学 3 年生 1 クラス（24 名）の日本語授業である。各学校の日本語授業を見学することで、実際に日本語、朝鮮語、中国語をどのように日本語授業で使っているのか確認することができた。授業内容についてはフィールドノートを用いて記録したが、寧安市朝鮮族中学においては写真撮影の許可が得られたため、フィールドノートに記録しながら写真撮影も行った。

以上、本研究では研究方法としてインタビュー調査、アンケート調査、及び授業見学の三つの方法をとった。本論は主にこの三つの調査結果から考察を行うが、その他にも、各朝鮮族学校で入手した学校紹介のパンフレット、時間割、試験用紙、教科書、教材などの資料も適宜活用する。また、調査結果については先行研究も活用しながら考察を加える。

１－８．本論の構成

本論は大きく6つの章で構成されている。

第 1 章では序論として、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を示した。さらに、先行研究について概観し、その問題点を指摘した上で、研究課題を提示し、研究方法、本論の構成を紹介した。

第 2 章は、課題①について、朝鮮族教師の教育方法、特に言語使用に注目しながら、時代ごとに比較、検討した。「満洲国」期の「朝鮮族」教師の教育方法は、日本語及び朝鮮語の二言語使用による折衷法であり、徹底した「母語排除」の結果、学校外においても「朝鮮族」の子どもたちの日本語学習及び日本語使用が見られた。また、改革開放期以降は「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」教師による日本語教育が行われた。それは「満洲国」期の教育方法の影響を受けた暗唱型教育であり、教授用語としては主に朝鮮語が使われた。2000 年代になると、「漢語化」の影響で、朝鮮族の言語能力に変化が生じたため、教授用語として中国語が使われるようになり、現在は日・朝・中の三言語使用による日本語教育が行われていることがわかった。中国語が使われるようになったことで、日本語と朝鮮語では理解することが難しかった文法表現についても中国語で理解することが可能となり、さらに朝鮮語だけでなく、中国語でも解釈することで、より理解が深まっていることが明らかになった。

第 3 章では、課題②の朝鮮族教師の三言語使用による教育方法について、学校別、教師別に明らかにした。教師が授業で使用する言語は、日本語の文法については共通点の多い朝鮮語を使用するものの、朝鮮語では説明しづらい文法表現については中国語で説明し、さらに朝鮮語、中国語でも説明が難しいものについては、日本語の例文を多く出し、理解させていることがわかった。つまり、単一言語だけでは解釈が難しい文法表現については、他の言語を使用することによって解釈し、理解させる「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、ひとつの日本語の単語や文法表現についても、三言語で解釈し説明することで、より理解を深めさせる「相乗的理解」を促す教育方法も見られた。その一方で、教師の中国語能力が十分でないため、中国語の使用が限定されている事例も見られた。

第 4 章では、課題③について、朝鮮族学習者の言語能力に注目しながら、三言語使用による日本語学習方法を学校別、学習者別に明らかにした。学習者はたとえ朝鮮語より中国語が得意であっても、すべての文法を中国語で理解するのではなく、ある文法表現については朝鮮語で解釈し、理解していることがわかった。また、教師が日本語と朝鮮語で文法

解釈を行っているにもかかわらず、学習者自身は日本語の文法表現に合わせて朝鮮語と中国語を使い分けている事例も見られた。これは朝鮮族の言語理解の多様さを示している。また、三言語使用によって「相乗的理解」と「補完的理解」が可能になることから、多くの学習者が教師の三言語による教育方法を望んでいることが明らかになった。その一方で、学習者の朝鮮語能力が十分でないため、朝鮮語使用による日本語理解ができない事例も見られた。

第 5 章では、今後の朝鮮族学校における日本語教育について展望し、三言語使用による日本語教育の可能性について言及した。英語教育の影響や朝鮮族学生の減少により日本語教育が途絶えた朝鮮族学校がある一方で、一度日本語教育がなくなったことで、改めて日本語の優位性を認識し、再開する学校も出てきていることがわかった。また「第二外国語としての日本語教育」も注目されていることから、今後は日本語教育が「消滅」する学校、日本語教育を「再開」する学校、そして日本語教育を新たに「開始」する学校が出てくると考えられる。

最後に、第 6 章では、中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育についてまとめ、東アジアにおける三言語使用の有効性と限界について考察し、結論とした。

本論が研究対象として取り上げるのは主に東北三省の朝鮮族学校であり、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族学校については比較対象とした。さらに、東北三省の各朝鮮族学校をそれぞれ比較、検討し、考察を行った。

第２章

朝鮮族の日本語教育方法の変遷

本章では、課題①について、各時代に日本語教育を受けた朝鮮族に対するインタビュー調査により、「満洲国」期、そして改革開放期以降行われていた単一言語、または二言語使用による日本語教育方法を明らかにし、現在行われている三言語使用による日本語教育方法とどのような違いがあるのか比較、検討する。

現在も朝鮮族学校では日本語教育が続けられているが、改革開放期に日本語教育が再開された際に、その担い手となったのは「満洲国」期に日本語教育を受けた人々であった。彼らは「老一代」と呼ばれる「老教師」であった。「老一代」という日本語を教えることができる人材がいたからこそ、外国語教育としての日本語教育が始められ、現在まで続けられてきたと言える。本田（2005）は、「はるか「満洲国」時代から続く「朝鮮族は、中国人（漢族）より日本語教育のレベルが高い。日本語では負けない」という記憶と、そこからくる自信[126]」が、朝鮮族学校での日本語採用の理由の一つであると述べている。「老一代」が日本語を教えた学生たちは、やがて朝鮮族学校において日本語を教える教師となり、新たな朝鮮族の日本語教育の担い手となっている。つまり、「老一代」を介在として、「満洲国」期の日本語教育と現在の朝鮮族の日本語教育につながりを見ることができる。

しかし、「老一代」たちが受けた日本語教育は、日本語の単一言語、もしくは日本語と朝鮮語という二言語による日本語教育方法がとられ、また「老一代」たちが改革開放期以降、教師となった際も、主に朝鮮語という単一言語による教育方法が行われていることがわかった。現在のように中国語を加えた三言語使用による日本語教育が行われるのは、朝鮮族の「漢語化」が顕著に表れるようになった 2000 年以降のことである。

中国語が使われるようになったことで、日本語と朝鮮語では理解することが難しかった文法表現についても中国語で理解することが可能となり、さらに朝鮮語だけでなく、中国語でも解釈することで、より理解が深まっていることが明らかになった。

２－１．「満洲国」期の「朝鮮族」の日本語教育方法

本節では「満洲国」期にどのような日本語教育が行われていたのか、その教育方法に注目し、「朝鮮族」の言語使用という観点から分析し、考察する。

「満洲国」期の「朝鮮族」に対する教育政策としては、1937 年「新学制」、そして 1938

[126]本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会　p. 26

年には「朝鮮教育令」の公布により、朝鮮人学校においては朝鮮語の授業が禁止され、日本語の授業が増えることとなった。また、岡本（1999）によれば、「日本語が朝鮮の国語であるとし、授業の内外を問わず朝鮮語を加えた者に処罰を加えた[127]」とある。さらに「日本語は唯一の言語科目として小学校一年生から始められ、週 6～10 時間の授業[128]」が実施され、「国語」としての日本語教育が「朝鮮族」児童に対して行われていた。

ここでは、まず「満洲国」期の「朝鮮族」学校について「満洲国」の資料により概観した上で、「満洲国」期に日本語教育を受けた、または家族が受けた朝鮮族に対して行ったインタビュー調査結果をもとに「満洲国」期の朝鮮族の日本語教育の実態を明らかにする。まず「満洲国」期の「朝鮮族」学校について概観する。

２－１－１.「満洲国」期の「朝鮮族」学校について

ここではまず「満洲国」期の「朝鮮族」学校について概観する。

満洲帝国国務院文教部の『在満朝鮮人教育調査表[129]』（康徳 2 年[130]12 月末現在）には、「満洲国」の「朝鮮族」学校についてのデータが示されている。それをまとめたものを表 5 に示す。

表 5：「満洲国」における「朝鮮族」の学校の状況表

（上記調査表をもとに筆者作成）：数字は人数

教育機関	教員数					児童数		
	日本内地人		日本朝鮮人[131]		合計	男	女	合計
	男	女	男	女				
普通学校	45	7	536	46	634	20,925	7,424	28,349
その他学校	1	1	544	49	595	22,602	5,651	28,253
書堂	―	―	84	1	85	2,437	595	3,032
幼稚園	―	―	―	35	35	646	410	1,056
中等学校	8	5	47	3	63	1,038	310	1,348

表 5 からわかることは、「朝鮮族」の学校のどの教育機関においても「朝鮮人」教師が圧倒的に多かったという状況である。つまり日本人教師だけでは学校を運営できない状況であったことが一目瞭然である。たとえ日本側から補助を受けた学校であったにせよ、その実態は「朝鮮族」教師による教育であったことがわかる。

---

[127] 岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社 pp. 145-146

[128] 同上：p. 146

[129] 「満洲国」教育史研究会監修（1993）『「満洲・満洲国」教育資料集成 第 12 巻 少数民族教育』エムテイ出版 pp. 64-214 に収録。

[130] 1935 年

[131] 調査表にあるまま表記。「朝鮮人教員」を「日本朝鮮人」と表記したと考えられる。

次に、教員一人当たりの児童数を見ると、「普通学校[132]」で 44.7 人、「その他学校[133]」で 47.4 人となっている。「書堂[134]」が教員一人当たり 35.6 人であることを考えると、教員不足であったという状況がうかがえる。また、女子児童の比率であるが、それぞれ「普通学校」26.1%、「その他学校」20%、「書堂」19.6%、「幼稚園[135]」38.8%、「中等学校[136]」22.9%となっている。幼稚園から普通学校、中等学校と高学歴になるに従って、女性の比率が下がっていることがわかる。

また、普通学校に比べ、その他学校や書堂の女性の比率が低いことも明らかである。この原因のひとつとしては、「朝鮮族」の中に、「女性は学校で学習をする必要はない」という考え方がまだ根強かったという点が挙げられる。金美花（2005）では、間島の「朝鮮人」を例に挙げ、「女子学齢児童の数が男子より少ない理由は明らかでないが、朝鮮人の生活の貧しさと女子の早婚が原因であると考えられる[137]」としている。また、各地の日本領事館の調査によれば、間島「朝鮮人」の就学率は 39%であり、これは朝鮮内の 25%より高く、「満人」の 19%の 2 倍であったという[138]。ここから、「満洲国」の「朝鮮族」がいかに教育に熱心であったかをうかがい知ることができる。表 3 の統計は、康徳 2 年（1935 年）のものであり、新学制が交付された康徳 5 年（1938 年）以降は普通学校も「国民学校」と「国民優級学校[139]」に名称が変わり、再編されることとなるが、「満洲国」の「朝鮮族」学校の特徴、つまり教師の数が不足しており、なおかつ「朝鮮族」教師が日本人教師に比べ圧倒的に多かったという状況は、新学制施行後も変わらなかったことから、「満洲国」期の「朝鮮族」学校の状況がわかる貴重なデータのひとつであると言える。

では、「朝鮮族」教師による日本語教育とは具体的にどのようなものであったのだろうか。筆者は「満洲国」期に日本語教育を受けた人々、そして家族が教育を受けた人々に対してインタビュー調査を行い、その語りから「朝鮮族」教師による日本語教育の実態を、特にその教育方法について明らかにした。また、「朝鮮族」児童たちの言語使用についても考察を行った。

２－１－２.「満洲国」期の日本語教育に関するインタビュー調査について

筆者は「満洲国」期の「朝鮮族」の日本語教育の実態を明らかにするため、2011 年の 7 月から 8 月にかけて、中国東北地方、主に延辺朝鮮族自治州においてインタビュー調査を

---

132 「朝鮮人」向け初等教育機関。経営者の内訳は満鉄、咸鏡北道、民会、学校組合、村、農務楔、天主教会、基督教会、私人となっている。

133 経営者の内訳は民会、文廟、基督教会、天主教会、曹洞宗、侍天教会、区会、農務楔、学父兄会となっている。

134 「朝鮮人」による私塾。経営者の内訳は民会、村、農務楔、私人となっている。

135 経営者の内訳は民会、基督教会、婦人会、後援会、協助農場、天主教会、私人となっている。

136 経営者の内訳は光明学園、加奈陀宣教部、私人となっている。

137 金美花(2005)「満洲国期間島における朝鮮人の社会と教育の展開－延吉県楊城村の事例を中心に（1932-1936）－」『東アジア研究』第 41 号 大阪経済法科大学アジア研究所 p.75

138 同上：p.75

139 新学制施行前は、高級小学校であった。修業年限は二年。

行った。インタビュー調査の実施概要を表 6 に示す。

表 6：「満洲国」期の日本語教育に関するインタビュー調査の実施概要

対象者（性別）	日本語教育を受けた人	実施場所	実施日	インタビュー方式	使用言語
ＭＡ（男性）	本人	長春市	7 月　8 日	直接インタビュー	日本語
ＭＢ（男性）	本人	図們市	7 月 26 日	直接インタビュー（通訳有り）	日本語 韓国語（朝鮮語）
ＭＣ（男性）	本人	図們市	7 月 26 日	直接インタビュー（通訳有り）	日本語 韓国語（朝鮮語）
ＭＤ（女性）	本人	延吉市	7 月 28 日	直接インタビュー（通訳有り）	韓国語（朝鮮語）
ＭＥ（女性）	実際は受けていない	龍井市	7 月 29 日	直接インタビュー（通訳有り）	韓国語（朝鮮語）
ＭＦ（男性）	父親	図們市	7 月 26 日	直接インタビュー	日本語
ＭＧ（男性）	父親	舒蘭市	8 月　5 日	直接インタビュー	韓国語
ＭＨ（男性）	本人	通化市	10 月 5 日（回答メールが送付された日）	電話及びメール（MHの孫に依頼）	日本語（孫に送付したメールの言語）
ＭＩ（女性）	本人	通化市	10 月 5 日（回答メールが送付された日）	メール（ＭＩの孫に依頼）	日本語（孫に送付したメールの言語）

調査対象者のうち、7 名の朝鮮族に対しては直接インタビュー調査を行い、さらに筆者の友人の祖父母 2 名についても、友人に依頼し、後日回答メールを得る形で調査を実施した。調査対象者 7 名に対して直接インタビューを行った際は、半構造化インタビューの方式をとった。インタビューの際に使用した言語については、7 名のうち 4 名は、基本的に日本語で行ったが、対象者が聞き取れなかった場合は韓国語を使用し、または朝鮮族の友人が通訳する形で実施した。また、残りの 3 名のうち、2 名については日本語で実施し、1 名については韓国語で行った。インタビューの記録をとる際は、最初の対象者に録音してもよいか尋ねたところ、断られたため、フィールドノートにより記録した。また、他の対象者に

ついても基本的にフィールドノートにより記録をとった。その結果、9 名の朝鮮族から話を聞くことができ、11 名のオーラルヒストリーを得ることができた。インタビューの時間は対象者によりそれぞれ異なるが、短くて 1 時間、長くて 2 時間以上になることもあった。インタビューを行った際の質問事項については、資料 1 として本論末尾に附す。

今回のインタビュー調査結果から、「満洲国」期の「朝鮮族」の言語使用、及び教育方法の実態が浮かび上がってきた。表 7 は「満洲国」期に日本語教育を受けた人々の属性を示したものである。

ＭＡ氏は、2011 年にインタビュー調査した時点で、中国の大学に勤務していた。吉林省にあった朝陽川国民初級学校（1～4 年生）朝陽川国民優級学校[140]（5, 6 年生）に通い、そこで日本語教育を受けた。現在も日本語を流暢に話すことができ、インタビューはすべて日本語で行った。

次に、ＭＢ氏は筆者の友人の祖父である。石建坪公立国民優級学校[141]（1～6 年生）で 6 年間、日本語教育を受けた。インタビュー実施時点で老人ホームで暮らしており、インタビュー調査も老人ホームで行った。また、ＭＢ氏の妻、つまり友人の祖母もＭＢ氏同様、日本語教育を受けており、ＭＢ氏の妻についての話も聞かせてもらった。インタビューは日本語で行ったが、ＭＢ氏がよく聞き取れない場合は、友人に朝鮮語で通訳してもらう形で行った。ＭＣ氏もＭＢ氏と同じ老人ホームで暮らしており、「満洲国」期に日本語教育を受けたことがあるとのことで、インタビュー調査を実施した。ＭＣ氏は、杰満洞国民優級学校で日本語教育を受け、1943 年に卒業した。インタビューはＭＢ氏同様、ＭＣ氏が日本語を聞き取れない場合は、友人に朝鮮語で通訳してもらった。

ＭＤ氏も筆者の友人の祖母であり、現在は延吉市内で暮らしている。インタビュー調査はＭＤ氏の自宅で行った。ＭＤ氏の出身は黒龍江省であるが、小学校 1 年生～4 年生まで敦化県馬号小学校に通った。馬号は当時の敦化県の県庁所在地であったが、5, 6 年生になると町の学校に行ったという。現在は日本語をほとんど忘れてしまったということで、筆者が韓国語でインタビュー調査を行った。また、すでに亡くなっているＭＤ氏の夫、つまり友人の祖父も日本語教育を受けていたことから、夫の話も聞かせてもらった。

---

[140]満洲帝国国務院文教部(1935)『在満朝鮮人教育調査表』「一般状況表（間島省）」には、「朝陽川学校」という学校の記載があり、設立は昭和 7 年（1932 年）12 月、5 学年 5 学級であり、使用教科書は総督府編纂のもの、経費は総督府から 100 円、民会から 60 円、その他から 3000 円出ている。「其他ハ授業料ナリ」とある。また、「児童状況表（間島）」には、全校児童 465 名であり、うち男子児童 428 人、女子児童 37 人であったことが記載されている。さらに「職員状況表（間島省）」には、「朝陽川学校」で働いていた 5 人の教師のことが記載されている。校長以下すべて「朝鮮人」教師であるが、そのうち校長の略歴は、大学卒業後、京都府培才高普教員となっており、「林義男」という教員は大阪齋英商業学校卒業後、大阪高木商会事務員となっている。その他の 3 人の教師のうち 2 人は朝鮮の学校を卒業、または修業し、1 人は龍井の光明師範学校を卒業している。

[141]満洲帝国国務院文教部(1935)『在満朝鮮人教育調査表』「一般状況表（間島省）」の中に「石建学校」という学校があり、所在地は石建坪とある。一般状況表によれば、学校の設立年月日は昭和 7 年(1932 年)5 月であり、6 学年 5 学級あり、使用教科書は総督府編集のものとある。経費は朝鮮総督府から 934 円、その他は 1660 円であり、これは住民負担であったと記載されている。また「児童状況表（間島省）」には、学校の児童数は男子児童のみ記載があり、302 人となっている。

表７:「満洲国」期に日本語教育を受けた人々の属性

名前（仮名）	生年月日（旧暦）	出身地	出身学校	その他
ＭＡ （男性）	1936 年 4 月 19 日	吉林省朝陽川平村 （後の合成村） 現在の龍井県 朝陽郷合成村	朝陽川国民初級学校 （1～4 年生） 朝陽川国民優級学校 （5, 6 年生）	解放後、 義勇軍がつけた名前は 光新小学校
ＭＢ （男性）	1927 年 4 月 30 日	間島省延吉県 月晴村石建坪	石建坪公立国民優級学校 （1～6 年生） 1939 年 12 月 23 日同校卒業。解放後は南陽市（現北朝鮮）にある中学校に通った。	6 年間 日本語教育を受けた。
ＭＢの妻	1928 年 9 月 29 日	延吉県月晴村 杰満洞	不明	
ＭＣ （男性）	1928 年 6 月 18 日	延吉県月晴村	杰満洞国民優級学校 1943 年卒業	
ＭＤ （女性）	1933 年 5 月 30 日	黒龍江省	敦化県馬号小学校 （1～4 年生まで在学） 5, 6 年生になると町の学校に通った。	
ＭＤの夫	1930 年 6 月 9 日	不明	五常県公立常堡正義国民小学校　1943 年卒業	すでに亡くなっている
ＭＥ （女性）	1942 年 4 月 15 日	龍井市開山鎮 光昭村	学校には通っていない。	
ＭＦの父	1926 年 3 月 28 日	龍井出身	凉水中心小学校 龍井中学校	現在入院中
ＭＧの父	不明	延吉八道	学校には通っていない。	すでに亡くなっている
ＭＨ （男性）	1936 年 2 月 6 日	朝鮮	桓仁県国民優級学校	
ＭＩ （女性）	1938 年 2 月 3 日	朝鮮	朝鮮の学校	

ＭＥ氏も筆者の友人の祖母であり、現在は龍井市内で暮らしている。インタビュー調査はＭＥ氏の自宅で行った。ＭＥ氏は学校に通っていなかったが、龍井には日本人が住んでおり、その日本人たちと話しながら自然と日本語を覚えたのだという。ＭＥ氏もＭＤ氏同様、日本語はほとんど忘れてしまったということで、筆者の友人に通訳してもらう形で行った。

ＭＦ氏は、筆者の友人が朝鮮族学校に通っていたときの日本語教師であり、現在は退職している。ＭＦ氏の父親が「満洲国」期に日本語教育を受けたが、当時、日本人の建築現場で建築の工程を教えてもらったことがきっかけとなり、解放後は大学で「土木工程」を学び、卒業後は設計の仕事をしたという。インタビュー調査はＭＦ氏の父親の話を中心に行った。インタビューはすべて日本語で実施した。

ＭＧ氏は、筆者の友人の父親であり、現在、舒蘭市朝鮮族学校に勤めている。ＭＧ氏の父親は「満洲国」期に学校には通っていなかったが、学校に通っていた「朝鮮族」児童と遊ながら、日本語を覚えたのだという。インタビュー調査は父親の話を中心に行った。また、インタビューはすべて韓国語で行った。

ＭＨ氏とＭＩ氏は夫婦であり、筆者の友人の祖父母である。二人ともに朝鮮で生まれたが、ＭＨ氏は「満洲国」の桓仁県国民優級学校[142]に通い、ＭＩ氏は朝鮮の学校に通ったという。ＭＨ氏とＭＩ氏については、直接インタビュー調査を実施することが困難であったため、友人に依頼し、後日、回答メールを得る形で調査を実施した。インタビュー対象者の語りについては資料２として本論末尾に附す。

２－１－３．日本語及び朝鮮語による「折衷法」と「母語排除」

ここでは、インタビュー調査結果から、「満洲国」期の「朝鮮族」教師がどのような教育方法により日本語を教えていたのかについて考察する。まず教授用語についての語りを以下に挙げる。

授業はすべて日本語で行われ、もし児童が朝鮮語を話せば、罰金をとられた。（ＭＢ氏）

教師は日本語で教えていたが、低学年に対してはすべて日本語で教えるのは無理であったために、学年が上がるにつれて、少しずつ日本語で教えるようにしていた。（ＭＨ氏）

[142]満洲帝国国務院文教部『在満朝鮮人教育調査表』（1935）「一般状況表（安東省）」には、「桓仁普通学校」という学校の記載があり、設立は昭和８年（1933 年）４月、２学年２学級であり、使用教科書は総督府編纂のもの、経費は総督府から 300 円、民会から 3000 円出ている。また、「児童状況表（安東省）」には、全校児童 121 名であり、うち男子児童 107 人、女子児童 14 人であったことが記載されている。さらに「職員状況表（安東省）」には、「桓仁普通学校」で働いていた３人の教師のことが記載されている。校長は「金鳳振」で年齢は 39 歳、略歴には「平壌高普校及同校師範科卒業、公立普校訓導」とある。もう１人は「鄭錫恒」で年齢は 29 歳、「昌城普通学校高等科卒業」、最後の１人は「李貞植」で年齢は 21 歳、「龍川公立普通学校卒業当校教員」とある。

ＭＢ氏が通った学校では、どの科目においても日本語で授業が行われていた。つまり、日本語による「直接法」がとられていたことがわかる。一方、ＭＨ氏の学校では、学年が上がるにつれて日本語で教えるようにしていたことから、教師は低学年に対しては、すべて日本語というわけではなく、一部は朝鮮語を介して教えていたことがわかる。つまり、日本語を日本語のみで教える「直接法」と、日本語を朝鮮語で教える「間接法」を組み合わせた「折衷法」がとられていたことがうかがえる。低学年から高学年になるにつれて徐々に日本語の割合を増やしていくという方法は教育現場に合わせたものであり、これは竹中によるオーラルヒストリー研究の中にも見られる事例である。ＭＢ氏の学校のように、すべての授業を日本語で行う「直接法」がとられた学校もあったのかもしれないが、教師も日本人ではなく「朝鮮族」であったことを考えると、完全な「直接法」で日本語を教えていた学校は少なかったのではないだろうか。また、先行研究のところでも述べたが、久保田（2005）によれば、植民地期の朝鮮半島の普通学校教員の大部分が「朝鮮人」教師であったことから、「朝鮮人教員の養成の段階から朝鮮語の使用を認めざるをえなかった[143]」としている。また、2－1－1 において、「満洲国」の「朝鮮族」学校では「朝鮮族」教師が日本人教師に比べ圧倒的に多かったという状況を示した。このことから、「満洲国」の「朝鮮族」学校においても、完全な「直接法」がとられていたとは考えにくく、日本語と朝鮮語の二つの言語で教える「折衷法」による教育が行われていたことがうかがえる。

次に、授業形式に関する語りを以下に挙げる。

私が通った敦化県馬号小学校では、教師はまず、授業の前半は 1 年生に授業をし、その後、自習をさせた。1 年生が授業を受けている間、4 年生は自習をし、後半は教師が 4 年生に授業をするという形式であった。それは教師が一人しかいなかったため、そのような形式になったのだと思う。（ＭＤ氏）

ＭＤ氏の語りから、ひとつの教室で二つの学年に対して同時に授業を行っていたことがわかる。『日本の植民地教育・中国からの視点[144]』では、国民学舎、国民義塾といった僻地の学校の教育制度として「単級複式編制」という制度が存在したことが記されている。この制度は「児童を年齢、学力によって、修業年数一年の第一班、修学年数二年の第二班、修学年数三年の第三班にそれぞれ振り分ける[145]」という制度であったという。この制度については「単級複式教育では、レベルの異なる複数の児童が一つの教室で授業を受けることさえあったので、教育の質はまったく保証されるものではなかった[146]」とし、「これらの制度が施行され始めた頃、一校につき基本的に最低一人教員がいたが、のちにはそれさえも

[143] 久保田優子(2005)『植民地朝鮮の日本語教育』九州大学出版会 p. 303
[144] 王智新編著(2000)『日本の植民地教育・中国からの視点』社会評論社
[145] 同上：p. 154
[146] 同上：p. 154

定かではなくなった[147]」と書かれている。ここで紹介されているのは、あくまで国民学舎や国民義塾といった国民学校を補完する学校の学校制度であるが、MD氏が通っていた馬号は敦化県の県庁所在地であり、田舎から通ってくる児童もいたという。僻地ではない学校においても、このような「単級複式編制」による授業が行われていたということは、「満洲国」の教師不足が深刻であったことを顕著に示した事例であると同時に、これまでの「朝鮮族」学校の日本語教育に関するオーラルヒストリーには見られない新たな事例であると言える。次に、教え方に関する語りを以下に挙げる。

「国語」の授業は暗唱形式で日本語を覚えさせられ、教師が教科書を読んだ後に、児童がそれを読むという形式であった。または、教師が黒板に文字を書き、それを児童が声に出して読んでいた。日本語の文法事項は「名詞」「動詞」「代名詞」「形容詞」「形容動詞」「副詞」など、品詞別に分けて習っていた。宿題もあり、教師が読んだ教科書の文を次の日までに覚えてくるというものだった。（MB氏）

MB氏の語りから、「日本語」の授業にあたる「国語」の授業においては、暗唱方式がとられ、また読むことが重要視されていたことがわかる。ただ単に教師が教科書を読み、それを児童が声に出して読むという「読方式教授法」が行われており、従来の「朝鮮族」の教育機関である書堂で行われていた授業形式とさほど変わりはなく、変わったのは漢文が日本語になっただけであったのかもしれない。さらに、現在の小学校の「国語」の授業でも見られるように、品詞別に分けて日本語を教えていたことがうかがえる。まさに「日本語」ではなく、「国語」としての教育方法であったと言え、児童の母語である朝鮮語の特徴を活かした方法とは異なっていたことがわかる。最後に「母語排除」について言及する。「母語排除」に関する語りは以下のとおりである。

朝鮮語をしゃべったら、罰金をとられるか、もしくはトイレ掃除を１週間させられた。（MA氏）

もし児童が朝鮮語を話せば、罰金をとられた。罰金の金額は１回につき１銭であった。（MB氏）

教師に敬礼をしなければ殴られ、朝鮮語を話しても殴られた。学校では、朝鮮語を話すごとに１枚ずつカードが配られ、そのカードが 10 枚になると掃除をさせられた。（MC氏）

学校では、朝鮮語を話すと「ケペ」（朝鮮語で「名札」という意味）というものを付けさせられ、罰金を科せられた。罰金を払えない人は便所掃除をさせられた。そのために家に

[147] 王智新編著(2000)『日本の植民地教育・中国からの視点』社会評論社 p. 154

遅く帰ったこともあった。（MD氏）

学校では、日本語を使うと罰則としてトイレ掃除をさせられた。これは、「トイレ掃除は恥である」とみなされていたためであった。どの児童も貧しかったために罰金はなかった。学校では、授業以外の時でも必ず日本語を話すよう命令されていた。（MH氏）

ＭＢ氏の学校では、もし児童が朝鮮語を話せば、罰金をとられ、金額は 1 回につき 1 銭であった。ＭＣ氏の語りにはカードが出てくるが、このカードについては、先行研究の語りの中にも出てくる。それは、「学校は生徒に朝鮮語を話させないようにするため、一つの方法をあみだした。それは各生徒にカードを 10 枚ずつ渡し、朝鮮語を話すたびに一枚取り上げ、ほかの生徒が朝鮮語を話したのに気づいた時はカードを一枚獲得できるとした[148]」というものであった。このカードについてはＭＣ氏以外の人の語りの中にも出てきており、カードの使い方に差はあれ、朝鮮語を話すことを厳しく禁止するために使われていた点に関しては同じである。一方、この「母語排除」の徹底も、重要な教育方法のひとつと見ることができ、「満洲国」期の教育方法の特徴のひとつであると言える。

では、なぜ教育方法として「母語排除」がとられたのであろうか。『延辺朝鮮族自治州志』には、「1938 年、日偽当局（満洲国政府）は新学制を実行し、漢語及び日本語を国語とし、朝鮮族学校では朝鮮語が廃除され、すべての科目は日本語で授業が行われ、民族の言葉は厳しく禁止され、違反があれば厳しい罰を与えた[149]」とある。1937 年に「満洲国」政府により公布され、1938 年に実施された「新学制」の特徴について、斉（2004）は「日本語を「国語」とし、各級各種の学校においてすべて日本語教育を強化し、日本化教育を大幅に推進した[150]」としている。つまり、「満洲国」期の日本語教育は、言語としての「日本語教育」ではなく、日本の精神を叩き込み、「皇民化」する道具としての日本語教育であったことがわかる。「満洲国」政府により公布された「新学制」による規定を「朝鮮族」教師たちは忠実に実行していたことになる。

以上、インタビュー調査結果をもとに、「満洲国」期の教育方法について考察した。教授法については、完全な「直接法」はとられておらず、朝鮮語と日本語による「折衷法」が見られ、暗唱型の授業や「母語排除」による教育方法がとられていたことがわかった。ここでは教師の教育方法に焦点を当てて述べてきたが、次項では日本語教育を受けた「朝鮮族」児童たちの言語学習と言語使用について考察する。

---

[148] 斉紅深著、竹中憲一訳(2004)『「満洲」オーラルヒストリー＜奴隷化教育＞に抗して』 皓星社 p.75

[149] 『延辺朝鮮族自治州志（下巻)』中華書局　1996　p.1414 筆者翻訳

[150] 斉紅深編著　竹中憲一訳（2004)『「満洲」オーラルヒストリー＜奴隷化教育＞に抗して』
皓星社　前言 p.Ⅲ

２－１－４．学校外の言語学習と言語使用

「朝鮮族」教師の教育方法については、すでに前項で述べた。ここでは日本語を教えられた「朝鮮族」児童の立場から、主に彼ら、彼女らの言語学習及び言語使用について考察する。言語学習及び言語使用に関する語りを以下に挙げる。

学校で教えられた日本語は学校外でも使うことがあった。それは、放課後、友人と一緒に遊んでいるときであった。私の母語は朝鮮語であり、日本語よりも朝鮮語レベルの方が上であったが、学校では日本語だけで話していたために、学校外で友人といるときも日本語を使っていた。しかし、その日本語を使って日本人と話す機会はなかった。知っている日本人と言えば教師だけで、道を歩いているときに日本人の軍人を見るぐらいだった。両親と話すときは朝鮮語を使った。なぜなら両親は日本語も中国語もわからなかったからだ。母親は文字も読めなかった。（ＭＡ氏）

日本語は学校内だけではなく、友人と遊ぶときにも使っていた。また公共の場所においても日本語を使っていた。家では朝鮮語で話した。（ＭＤ氏）

私は幼かったため、学校に通っていなかったが、龍井には 1909 年以来、日本総領事館[151]があったため、そこで働く日本人たちと接する機会があり、自然に日本語ができるようになった。（ＭＥ氏）

父親は学校には通っていなかったが、朝鮮人の子どもたちと遊びながら日本語を学習したと話していた。（ＭＧ氏）

学校では、授業以外の時でも必ず日本語を話すよう命令されていた。家では朝鮮語で話した。（ＭＨ氏）

まず、ＭＡ氏の日本語を使う場所は学校だけではなく、その外にもあった。これは、現在、学校での日本語授業のときだけ日本語を使っている朝鮮族の学生より日本語を使う範囲が広かったことを示している。つまり、前項でも触れたが、学校において徹底的に日本語の使用が強要されていたために、友人と日本語で話すことが普通となり、それは学校外においても自然なものとして続けられていたのである。学校内で友人と会うときは必ず日本語で話さなければならず、学校での生活が一日の大半であることを考えれば、学校外においても友人と日本語で話していたこともうなずける。しかも日本語を話す対象は日本人ではなく、ほとんどが同じ民族である「朝鮮族」であったことに注目したい。同じ民族で

151　1909 年に建てられた「旧間島日本領事館」。

あるにもかかわらず、また日本語よりも朝鮮語を使った方が楽であるにもかかわらず、それができなかった、もしくはそれをしなかった。植民地教育における徹底した「母語排除」の影響力の大きさがうかがえる。

次に日本語の使用が及ばなかった事例であるが、ＭＡ氏は両親と話すときは朝鮮語を使っていた。なぜなら両親は日本語も中国語もわからなかったからである。ＭＤ氏も家では朝鮮語を使い、ＭＨ氏も家に帰れば朝鮮語を使っていたという。ここで興味深い点は、日本語と朝鮮語が切り替わる境界というものが、学校の内外ではなく、家の内外に存在していたという点である。現代の感覚からすれば、例えば言語学校に通う場合は、学校の内外に母語と学習言語が切り替わる境界線があるが、「満洲国」期の「朝鮮族」学校においては、学習言語の使用範囲が家の外にまで達していたのである。現在の朝鮮族の日本語使用に比べれば、「満洲国」期の日本語の使用範囲が広範囲であったことがうかがえる。

ＭＥ氏やＭＧ氏の父親のように、学校に通っていなくても日本語が話せるようになっていた人々が存在したことは特筆すべきであり、これまでのオーラルヒストリーにも見られない新たな事例である。ＭＥ氏の場合は、住んでいた場所が、日本総領事館があった龍井だったということが大きかったであろう。つまりＭＥ氏にとっては、学校が日本語教育の場ではなく、普段暮らしている場所が日本語と触れることのできる学習の場であったことがわかる。

日本人と接する機会があったＭＥ氏とは対照的に、ＭＧ氏の父親は、学校に通っていた「朝鮮族」児童と一緒に遊びながら日本語を学習した。インタビューを実施した人々の多くは学校で日本語を習っており、放課後も日本語を使いながら遊んでいたことがわかった。しかし、一緒に遊んでいたのは、なにも学校に通っていた児童だけではなく、貧しくて学校に行けない子どもたちもいたはずである。ＭＧ氏の父親の話から明らかになったことは、学校に通っていなかった子どもたちも、学校に通っていた児童との遊びを通して日本語を学習していたということである。日本語は、学校だけではなく、日本人との会話を通して、また、放課後の「遊び」を通して、学校に通えない子どもたちにまで伝わっていたという点は非常に興味深い。

ＭＥ氏とＭＧ氏の父親の事例からわかることは、日本語を学習し使用する場所は決して学校だけで行われていたものではなく、学校外にも存在したという点である。大出正篤の言う「発表」する場[152]がわざわざ設けられなくても、日本語を学習し使用する機会というのは学校外にもあった。それは友人と遊ぶとき、そして日本人と会話するときである。インタビュー調査結果の中には、学校外でも日本語を使うよう命令されたという語りもあったが、友人と共に過ごす時間が最も長いのはやはり学校にいるときであり、そこでは日本語を使用することを強制されているのだから、放課後、友人と遊ぶときも学校で遊ぶのと同じように日本語で話したというのは想像に難くない。皮肉にも「朝鮮族」児童にとって日本語の発表の場は学校外にあり、同時に学校に通っていない子どもたちに日本語を伝える

[152] 大出は「速成法」において、日本語で発表する時間の重要性を唱えている。

場にもなっていたのである。

２－１－５．小括

2－1 では、筆者が行ったインタビュー調査をもとに、「満洲国」期の「朝鮮族」教師による日本語教育の方法、及び「朝鮮族」児童たちの言語学習と言語使用について考察した。

まず、「満洲国」期の日本語教育方法の特徴としては、「母語排除」が挙げられる。インタビューの中にも、この「母語排除」の事例は数多く出てきた。日本語は学校においても、そして学校によっては学校外においても使うことが強要された。もし朝鮮語を使ってしまえば、殴られたり、トイレ掃除などの罰が与えられるなど厳しい教育方法がとられた。日本語使用を無理矢理に強制するこの教育方法は、家以外の場所では日本語環境に置かれたために、日本語学習という点から見れば、大きな効果があったのではないだろうか。

一方、「朝鮮族」の母語である朝鮮語を活かした日本語教育の方法は、インタビューの中からはあまりうかがうことができなかったが、MH氏のように、低学年に対しては朝鮮語も交えた「折衷法」による教育方法がとられていたことから、朝鮮語の文法などを活用して、日本語を教えていた可能性も考えられる。しかし、地域や学校問わず「母語排除」が徹底されていたこと、そして暗唱、暗記形式の授業であったことを考えれば、朝鮮語を活かした日本語教育方法を積極的に行っていたとは考えにくい。「朝鮮族」教師たちは「朝鮮族」児童に対し「母語排除」による教育方法で日本語を教え、そして日本語使用を強制していた。それが「満洲国」期の日本語教育方法の最大の特徴であり、その教育方法により日本語を覚えた「老一代」たちが解放後、日本語教育の担い手となっていくのである。

次に「満洲国」期の「朝鮮族」児童の言語学習についてであるが、「母語排除」の教育方法の下、日本語を学習した人々の語りからは、具体的な日本語学習の方法は聞かれなかった。とにかく、朝鮮語を使えば罰が与えられるため、日本語を使っていたという。インタビューを通じて、朝鮮語を活かしながら日本語を学習するというよりは、罰を受けないために日本語を覚え、使っていたという印象を受けた。学校に通っていた児童の言語学習とは対照的に、学校に通っていなかった子どもたちの言語学習に注目すると、ME氏のように周りに日本人がいたために、日本人と会話することで自然と日本語を学び、使っていたことがわかる。つまり、ネイティブスピーカーとの会話練習により日本語を学習していたのである。「満洲国」期の日本人は、「侵略者」としての日本人に間違いはないが、現代に置き換えれば、中国で働いている、もしくは留学している日本人と話しながら日本語を学ぶことと共通する点が多いのではないだろうか。

また、MG氏の父親のように、日本人ではなく日本語が話せる「朝鮮族」児童と遊ぶことにより、日本語を学習した人もいた。これは、現代で言えば、中国において日本語塾に通っている友人から日本語を教えてもらい、日本語で話すという学習方法と共通する部分があると考える。

「満洲国」期の日本語教育は、植民地政策の一環として、日本語教育を望まない人々に

対して強制的に行われたことは間違いない。しかし、言語教育学的な視点から、その教育方法と言語学習、そして言語使用を見ると、現在の教育とも共通する部分を垣間見ることができる。

次節では、まず「満洲国」期の日本語教育を受けた「朝鮮族」の子どもたちが、改革開放期に「老一代」として日本語教育を行った時代の日本語教育について、その教育方法に注目しながらインタビュー調査をもとに考察する。次に、改革開放期から現在に至るまでの朝鮮族の日本語教育についても各時代ごとに比較検討し、考察する。

２－２．再開された朝鮮族の日本語教育方法

前節では、「満洲国」期に行われた教育について、日本語教育の方法と言語学習、及び言語使用に注目し、考察した。本節では「満洲国」期に日本語教育を受けた「朝鮮族」児童が、日本語を教える立場となった改革開放期以降の日本語教育、つまり朝鮮族によって再開された日本語教育の方法について、インタビュー調査をもとに明らかにし、考察を加える。

解放後、中国東北地方に日本語教育が復活したのは、1972 年の日中国交正常化後であった。金紅梅（2009）によれば、「70 年代末から朝鮮族学校では日本語教育が急速に普及し、90 年代前半まで、朝鮮族学校の外国語は日本語一色という局面を迎えていた[153]」とある。1978 年に全国科学大会と全国教育工作会議が開かれ、会議において『外国語教育強化についての意見』がまとめられ、その内容は「小学校、中学校、大学ともに成人に対する外国語教育に力を入れること」「英語教育に大いに力を入れると同時に日本語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の教育も発展させるべきである」というものであった[154]。1978 年の日中平和友好条約締結の年には、外国語科目として日本語を導入する朝鮮族学校が増え、80 年代には「教学大綱[155]」、教材も次々と決定され、日本語も大学入試科目として設定された[156]。さらに、1982 年に教育部から出された意見により、「教師の条件が整っている学校では需要に応じて日本語を適宜に設置する」ことが示された[157]。つまり、この教師の条件が整っている学校が朝鮮族学校であった。

本田（2005）は、1970 年代に日本語の教員となった人々を三つに分けている。それは①「満洲国」時代に日本語教育をうけた人　②中国に残留した日本人（そのほとんどは、中国人と結婚した婦人）③文化大革命時代に、独学で、あるいは周囲の日本語話者について

---

[153] 金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 51

[154] 同上：p. 55

[155] 中国の学習指導要領。教育機関の種類別に作成される。

[156] 金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 55

[157] 同上：p. 55

日本語を学んだ人であった[158]。改革開放期、朝鮮族学校においても外国語教育が復活し、日本語教育が行われるようになったのだが、そこでは、①のように「満洲国」時代に日本語教育を受けた人や、③のように、独学で日本語を学習した日本語教師が登場する。さらに、時代が下ると、大学で専門的に日本語を学んだり、日本に滞在経験のある教師が登場する。

改革開放期から 90 年代半ばにかけての中国の外国語政策について、金紅梅（2009）は「中国政府は外国語強化政策を打ち出すと同時に、民族自治区域に教育の自治権を与えることによって、朝鮮族は日本語教育の発展を加速化させた[159]」と指摘している。つまり、中央の政策はあるものの、朝鮮族の実情に合わせた外国語教育を行うことができた時期であったと言える。しかし、90 年代半ばになり、民族自治区域や地方政府に教育自主権を与えたことで、朝鮮族にも英語教育と日本語教育を選択できる体制となった。「国際化」に対応するための英語教育として、地域により、英語教育に力を入れる朝鮮族学校も現れ、延辺朝鮮族自治州の琿春市と安図県では、「州教育委員会の決定で 2001 年から地域内の初級中学で日本語クラスの生徒募集を中止する[160]」ことになり、教育部の「2001 年から小学校にも英語を導入する」という方針により、さらに英語教育へと傾斜することとなる。このことから、改革開放期以降の外国語政策は、国家の政策から徐々に地方による政策が影響力を増していることがうかがえる。さらに、金紅梅によれば、どの外国語科目を設置するかについての決定は、現在、地方によっては「学校の現場に大きく委ねられる[161]」という状況であるという。では、改革開放期以降、現場である朝鮮族学校ではどのような日本語教育が行われていたのであろうか。2－2－1 では、まずインタビュー調査の概要を示す。

２－２－１．改革開放期以降の日本語教育に関するインタビュー調査について

ここでは、改革開放期以降、朝鮮族学校において日本語教育を受けた人々へのインタビュー調査の概要を示す。筆者は 2014 年 8 月から 2015 年 8 月にかけて、計 16 名の朝鮮族に対してインタビュー調査を実施した。16 名のうち、10 名は現在、朝鮮族学校において日本語を教えている教師であり、1 名は元日本語教師、4 名は卒業生、1 名は在校生である。16 名のうち、元日本語教師についてはメールに質問紙を添付し、それに回答して返信してもらう形式とし、その他の 15 名については、半構造化インタビューを実施した。インタビューの際、使用した言語は主に日本語であり、対象者が理解できない場合は韓国語で質問する形式で行った。インタビューの内容はフィールドノートにより記録した。インタビュー

---

[158] 本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会　p. 26

[159] 金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 61

[160] 同上：p. 56

[161] 同上：p. 59

の時間は対象者によりそれぞれ異なるが、短くて 30 分、長くて 1 時間以上であった。表 8 はインタビュー調査の実施概要である。

表 8 : 改革開放期以降、朝鮮族学校で日本語教育を受けた人々に対するインタビュー調査の実施概要

対象者 （年齢、性別）	調査時の 職業	実施 場所	実施 年月日	インタビュー方式	使用言語
ＪＡ （50 代前半、女性）	日本語教師	吉林市	2015 年 5 月 21 日	直接インタビュー	日本語
ＬＣ （50 代前半、女性）	日本語教師	鉄嶺市	2015 年 5 月 19 日	直接インタビュー	日本語
ＪＢ （50 代前半、女性）	日本語教師	吉林市	2015 年 5 月 21 日	直接インタビュー	日本語
ＫＡ （40 代後半、女性）	日本語教師	梅河口市	2014 年 8 月 12 日	直接インタビュー	日本語
ＫＥ （40 代前半、女性）	日本語教師	梅河口市	2014 年 8 月 12 日	直接インタビュー	日本語
ＫＢ （40 代前半、女性）	日本語教師	梅河口市	2014 年 8 月 12 日	直接インタビュー	日本語
ＬＢ （40 代前半、女性）	日本語教師	鉄嶺市	2015 年 5 月 19 日	直接インタビュー	日本語
ＱＡ （30 代後半、女性）	大学院生	福岡市	2015 年 4 月 27 日	直接インタビュー	日本語
ＫＣ （30 代半ば、女性）	日本語教師	梅河口市	2014 年 8 月 12 日	直接インタビュー	日本語

ＹＡ （30 代半ば、女性）	会社員	延吉市	2014 年 8 月 16 日	直接インタビュー	日本語
ＴＣ （30 代前半、女性）	学校職員 （元日本語教師）	メールで回答	2015 年 8 月 25 日 （回答メールが送付された日）	メールに質問紙を添付して送り、回答してもらう形式	日本語 （メールに添付した質問紙の言語）
ＱＢ （20 代後半、女性）	大学院生	福岡市	2015 年 5 月 12 日	直接インタビュー	日本語
ＪＣ （20 代前半、女性）	日本語教師	吉林市	2015 年 5 月 21 日	直接インタビュー	日本語
ＬＡ （20 代前半、女性）	日本語教師	鉄嶺市	2015 年 5 月 18 日	直接インタビュー	日本語
ＫＦ （20 代前半、男性）	大学生	梅河口市	2014 年 8 月 12 日	直接インタビュー	日本語
ＹＢ （10 代半ば、男性）	高級中学の学生	延吉市	2014 年 8 月 16 日	直接インタビュー	日本語 韓国語

※ インタビュー対象者は朝鮮族学校に入学した年がはやい順に並べた。

また、インタビュー対象者と、日本語教育を受けた教師についての情報を表 9 に示す。インタビュー対象者のうち、ＪＡ氏、ＪＢ氏、ＪＣ氏は吉林市朝鮮族中学校で、ＬＡ氏、ＬＢ氏、ＬＣ氏は鉄嶺市朝鮮族高級中学で、ＫＡ氏、ＫＢ氏、ＫＣ氏、ＫＥ氏は梅河口市朝鮮族中学で現在日本語を教えている。インタビューはそれぞれ勤めている学校において行った。また、ＴＣ氏は通化市朝鮮族学校において 2004 年から 2013 年まで日本語を教えていたが、2014 年から日本語の授業が行われなくなったため、現在は学校職員として財務・会計の仕事を行っている。ＫＦ氏は梅河口市朝鮮族中学の卒業生であり、筆者の友人の紹介で知り合った。中国の大学を卒業し、現在は日本の会社で働いている。ＱＡ氏とＱＢ氏は中国の大学を卒業し、現在は日本の大学院に通っている。ＱＡ氏、ＱＢ氏、ともに筆者の友人に紹介してもらい、インタビュー調査を実施することができた。

表 9：インタビュー対象者と、日本語教育を受けた教師についての情報

名前 （仮名）	日本語教育を受けた年、及び学校の所在地	日本語教師についての情報
ＪＡ （女性）	1977～1979 年 吉林省吉林市	おじいさん教師 「満洲国」で日本語教育を受けた人
ＬＣ （女性）	1978～1982 年〔5 年制〕 遼寧省鉄嶺市	当時 50 代の男性教師 「満洲国」で日本語教育を受けた人
ＪＢ （女性）	1978 ～1984 年 延辺朝鮮族自治州 和龍市	当時 50 歳くらいのおじさん教師 「満洲国」で日本語教育を受けた人 他二人は若い男性教師
ＫＡ （女性）	1980 年高級中学入学 吉林省梅河口市	高級中学の日本語教師は 3 人いて、3 人とも男性教師であった。教えてもらっていた教師は「満洲国」時代に日本語を学習した人で、専門は物理だった。
ＫＥ （女性）	1984～1989 年 吉林省梅河口市	当時 28 歳の男性教師
ＫＢ （女性）	1984～1990 年 吉林省輝南県	当時 50 代の男性教師 おそらく「満洲国」時代に日本語を学習した人
ＬＢ （女性）	1985～1991 年 遼寧省鉄嶺市 （開原市）	初級中学には二人の日本語教師がいた。 一人は大学を卒業したばかりの女性教師 もう一人は、当時 50 代の男性教師。「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。 高級中学には 3 人の日本語教師がいた。
ＱＡ （女性）	1988～1994 年 黒龍江省七台河市	中学のとき、日本語教師は 6～7 人いた。
ＫＣ （女性）	1990～1996 年 不明	初級中学のときは、他の科目担当の教師が日本語を教えていた。高級中学のときは、校長が日本語を教えていた。
ＹＡ （女性）	1993～1999 年 延辺朝鮮族自治州 延吉市	初級中学の日本語教師は 4, 5 人おり、教えてもらっていた教師は当時 35、6 歳くらいだった。高級中学の日本語教師は 10 人以上おり、日本人教師も 1 人いた。
ＴＣ （女性）	1994～2000 年 吉林省通化市	初級中学、高級中学合わせて日本語教師は 7 人。そのうち、朝鮮族教師は 6 人、漢族教師は 1 人。 教えてもらっていたのは、初級中学のときは 30 代の女性教師。高級中学のときも 30 代の女性教師。
ＱＢ （女性）	1999～2005 年 黒龍江省七台河市	日本語教師は 3, 4 人いた。初級中学のときは男性教師に教えてもらい、高級中学のときは女性教師に教えてもらった。女性教師は当時 42, 3 歳くらい。

ＪＣ （女性）	2000～2006 年 吉林省吉林市	20 代くらいの女性教師 現在も学校で日本語を教えている。
ＬＡ （女性）	2001～2007 年 遼寧省瀋陽市	初級中学の教師は当時 40 歳くらいの男性教師で、日本に研修に行ったことがある人だった。
ＫＦ （男性）	2004～2010 年 吉林省梅河口市	初級中学は、日本語教師は 1 人しかいなかった。 当時 32 歳くらいの女性教師 高級中学のときの日本語教師は女性。 今も学校で日本語を教えている。
ＹＢ （男性）	2011～2014 年現在 延辺朝鮮族自治州 延吉市	初級中学の日本語教師は 1 人しかいなかった。 当時 55 歳の女性教師 高級中学のとき（2014 年現在）の日本語教師は 1 人だけおり、女性で 24 歳くらい。

ＹＢ氏は、現在延吉市内の朝鮮族中学に通っており、外国語科目として日本語を学んでいる。ＹＢ氏も筆者の友人の紹介によりインタビュー調査を実施することができた。ＹＡ氏は、延吉市内の食堂でＹＢ氏に対してインタビュー調査を行っていたところ、偶然知り合い、朝鮮族学校で日本語を学んだということで、インタビュー調査を行った。ＹＡ氏は大学を卒業した後、日本と韓国に留学する留学仲介会社でアルバイトをしていたが、現在は会社で翻訳する仕事をしている。

次に、インタビュー対象者の語りについては、資料 3 として本論末尾に附す。語りから改革開放期以降、朝鮮族学校において日本語教育を行っていた教師は、1970 年代後半から 1980 年代にかけては「満洲国」時代に日本語教育を受けた世代（「老一代」）と、独学で日本語を学んだ世代が混在していることがわかった。また 1980 年代後半から 1990 年代にかけては大学で日本語を専門的に学習した教師が現れている。そして 2000 年代から現代にかけては日本に滞在経験のある教師が登場している。さらに、教師によって多様な教育方法がとられていることがうかがえる。よって、以上三つの時期に分け、それぞれの時期の日本語教師の教育方法について考察する。

２－２－２．「老一代」と独学で学んだ教師の朝鮮語による教育方法
－1970 年代後半から 1980 年代にかけての日本語教育－

本項では、1970 年代後半から 1980 年代にかけて、朝鮮族学校において日本語教育を受けた 6 名（ＪＡ，ＬＣ，ＪＢ，ＫＡ，ＫＥ，ＫＢ各氏）の語りの中から主に教育方法についての語りを取り出し、この時期の日本語教育の方法について明らかにし、考察する。

まず、注目したいのは「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」が朝鮮族学校で日本語を教えていた点である。「老一代」教師についての語りは以下の通りである。

高中の日本語教師は、おじいさん教師で、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。その人の日本語のアクセントは下手で、文法の説明などはなく、教材もあまりなかった。
（ＪＡ氏）

初中のときの日本語教師は 50 代の男性教師であり、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。その教師は日本語で会話するのは上手だったが、文法の説明はできなかった。彼は朝鮮語で日本語を教えていたが、授業のやり方としては、教科書をただひたすら読むだけであり、教師が本文を読んだ後に、学生たちに読ませるという形式のものであった。
（ＬＣ氏）

私の初中、高中時代の日本語教師は、当時 50 歳くらいのおじさん教師で、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。朝鮮族の小説家としても有名な人で、背が高くてかっこよかった。彼はオルガンを弾きながら、日本の歌「春が来た」や「さくら」などを歌っていた。日本語の発音とアクセントはあまり上手ではなかった。（ＪＢ氏）

私に日本語を教えていた教師は、「満洲国」時代に日本語教育を受けた人で、専門は物理だった。授業では、中国語で書かれている日本語の教科書を使い、すべて暗記形式であった。宿題は教科書に出てくる単語を覚えさせるというものであったが、次の授業の際、教師が学生たちに直接、その単語の意味を答えさせる形式であった。また、教師は授業中、中国語は使わず、日本語と朝鮮語を半々の割合で使っていた。教師が日本語で教えたとき、理解できる学生もいれば、理解できない学生もいた。（ＫＡ氏）

初級中学の日本語教師は 50 代の人で、おそらく「満洲国」時代に日本語を学習した人ではなかったかと思う。彼は朝鮮語のみを使って日本語を教えていた。また、日本語の発音やアクセントは気にせず、自分勝手に発音していた。日本語教師の宿題は、教科書の本文を暗記させたり、単語を三回ずつ書かせたりするものだった。また、とても厳しい人で、宿題をやってこなければ学生を叩いていた。（ＫＢ氏）

まず、これらの語りから、「老一代」教師の特徴のひとつとして、「文法の説明ができない」という点が挙げられる。本田（2012）では、「老一代」の日本語教師は、「国語」として日本語を学んだため、「外国語」としての日本語教育を受けたことがない点を指摘し、「「外国語教授法」という意識がなかったといってもよいのではないか[162]」と考察している。筆者が行った「満洲国」期に日本語教育を受けた朝鮮族の語りからも、「外国語教授法」という

[162]本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 pp. 136-137

よりは、品詞別に説明され、文を暗唱させられる「国語」としての日本語教育が行われていたことがうかがえた。また、ＫＢ氏の語りにも見られるように、宿題をやってこなければ叩かれていたことから、「老一代」教師は自らが「満洲国」期に受けた教育をそのまま行っていたことがわかる。

次に「老一代」教師の日本語能力に注目する。各氏の語りに共通しているのは「日本語の発音とアクセントは上手ではなかった」という点である。本田は、「老一代」教師の日本語能力について、「母語話者に近い日本語運用能力を持っていた[163]」としているが、発音やアクセントに関しては、母語話者とは異なっていたようである。「満洲国」期の日本語教育についてはすでに触れたが、「朝鮮族」児童であった「老一代」に日本語を教えたのは、日本人教師ではなく、大部分は「朝鮮族」教師たちであった。「朝鮮族」教師にとっても日本語は母語ではなく、習得すべき「外国語」であった。日本人教師と「朝鮮族」教師の日本語の最も大きな違いはおそらく発音とアクセントであろう。「満洲国」期の「朝鮮族」児童は、「朝鮮族」の学校において、ネイティブの発音とアクセントで日本語を学んだわけではないのである。さらに言えば、「満洲国」崩壊後、日本語教育が再開されるまで、30 年ものときが流れている。このブランクは、かつての「朝鮮族」児童の日本語レベルに大きな影響を与えたであろう。

最後に、「老一代」教師の教授用語であるが、朝鮮語、もしくは朝鮮語と日本語の二言語で教えていたという語りが見られる。本田（2012）のインタビュー調査によれば、「すべて日本語で、すなわち直接法によっておこなわれ、教科書の中にある朝鮮語を日本語に、日本語を朝鮮語に翻訳する練習のとき以外、教員が朝鮮語を使うことがほとんどなかった」という語りが紹介されているが、先行研究とは異なる語りが見られる。これは、日本語で教えたとしても、学生たちが理解できなかったためではないだろうか。ＫＡ氏の語りにもあるように、「教師が日本語で教えたとき、理解できる学生もいれば、理解できない学生もいた」という状況であったために、朝鮮語も使いながら教えていたと考えられる。

もうひとつ注目したいのは、ＫＡ氏の語りに見られるように、日本語の教科書は中国語で書かれていたものであったにもかかわらず、教師は中国語を使わず、朝鮮語と日本語を使って日本語を教えていた点である。後述するが、現在の朝鮮族学校では、朝鮮語で書かれた教科書を使いながら、教師は日、朝、中の三言語を使用して日本語の授業を行っている。つまり、教授用語と教科書で使われている言語がどちらも異なっていることがわかる。教科書に書かれている言語と、授業中に教師が使う言語が一致しない点は、朝鮮族学校の日本語教育のひとつの大きな特徴であると言える。

以上、「老一代」教師の日本語教育方法について、特に言語に注目しながら考察を加えた。一方、この時期には独学で日本語を学んだ教師の姿も見られる。

---

[163] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房　p. 141

もう一人の教師は、若い男性教師だった。字をきれいに書く人だった。その教師は独学で日本語を学習した人だった。彼はラジオ放送で日本語を学習したようで、そのラジオのテキストは中国語で書かれたものであった。（ＬＣ氏）

初中のときの日本語教師は当時 28 歳の男性教師で、優しくておもしろい人だった。教科書は朝鮮語で書かれたものを使用していた。授業では、日本の文化、例えば「桜」の絵などを使いながら日本語を教えていた。桜の絵は残念ながら白黒のものであり、学生たちは実際に桜を見たことがなかったが、非常に印象に残っている。授業は文法中心であり、教科書の内容を覚えさせるという暗記形式であった。（ＫＥ氏）

まず、ＬＣ氏の日本語教師がラジオ放送で日本語を学んだ点に注目したい。このラジオ放送についてであるが、1973 年末に上海外国語大学が中心となって、中国初のラジオ日本語講座がはじまり、第三期（3 刷）の発行部数は 230 万部にも達していた[164]。このように「満洲国」期に日本語教育を受けた教師の他に、ラジオ放送などで独学で日本語を学んだ教師が一緒に日本語を教えていた点は非常に興味深い。

次に独学で日本語を学んだ教師の教育方法についてであるが、ＫＥ氏の日本語教師は今で言う「絵カード」を使って日本語を教えていたことがわかる。「絵カード」は現在の日本語教育においても、初級の段階でよく活用されるものであるが、ＫＥ氏の日本語教師自身は当時 28 歳であり、「満洲国」期の日本語教育は受けてない世代である。この日本の文化を紹介する絵を使った教え方は、戦前の外地における日本語教育でも見られた教え方である。この時期には「満洲国」期に日本語教育を受け、高い日本語運用力をそなえた人々が朝鮮族集落におり、本田は「1978 年以降に日本語を学びはじめた若い人たちに、実際にコミュニケーションに使えるような日本語を学びたい、あるいは、学校で学んだ日本語を試してみたい、という意識を持たせることになったと思われる[165]」と述べている。このことから、独学で日本語を学んだ若い教師たちが、「満洲国」期の日本語教育を受けた人々との交流から、「満洲国」期に行われた日本語教育の教育方法についても聞き、それを実践していたという可能性も考えられる。

また、「文法中心の授業」を行っていたというＫＥ氏の語りがあるが、これは「老一代」教師の授業とは対照的である。ＫＥ氏は朝鮮語で書かれた教科書で日本語を教えられたと話していたが、日本語の文法と似ている朝鮮語で書かれた教科書であったために、文法の説明も可能であったのではないだろうか。また、ラジオ放送では中国語のテキストで日本語を学習していたことから、この時期、日本語を学んでいた若い朝鮮族教師は日本語の文法を中国語で学習し、それを朝鮮語に解釈して学生たちに教えていたとも考えられる。つまり、この時期にも多言語環境による日本語学習が行われていたことがうかがえる。

---

[164] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房　p. 117
[165] 同上：p. 143

以上、1970 年代後半から 1980 年代にかけての「老一代」教師と独学で学んだ教師による日本語教育方法について考察を行った。この時期に朝鮮族学校で行われていた日本語教育は、朝鮮語による単一言語による教育方法、もしくは朝鮮語と日本語による二言語による教育方法がとられていたことがうかがえた。しかし、「満洲国」期の教育方法と同様、暗唱型の教育方法であり、文法的な教え方はあまり見られず、また朝鮮語の利点を積極的に活かすような方法はとられていない。

では、1980 年代後半から 1990 年代にかけての朝鮮族学校における日本語教育の方法はどのようなものであったのだろうか。次項では、この時期に日本語教育を受けた朝鮮族に対するインタビュー調査をもとに明らかにする。

２－２－３．大卒教師の日本語及び朝鮮語による教育方法と中国語
－1980 年代後半から 1990 年代にかけての日本語教育－

本項では、1980 年代後半から 1990 年代にかけて、朝鮮族学校において日本語教育を受けた 5 名（ＬＢ、ＱＡ、ＫＣ、ＹＡ、ＴＣ各氏）の語りの中から主に教育方法についての語りを取り出し、この時期の日本語教育の方法について明らかにし、考察する。

この時期から、大学で日本語を専攻した教師が朝鮮族学校で日本語を教え始める。大卒教師についての語りは以下の通りである。

一人は女性教師で、大学を卒業したばかりのとても優秀な人だった。授業はすべて朝鮮語で行われた。彼女は日本語の活用を教えるために、黒板に動詞の活用表を書いて、学生たちに無理矢理覚えさせていたが、おかげで日本語の動詞の活用を覚えることができた。しかし、彼女は結局学校を辞めてしまい、出家してしまった。高中の日本語教師は、大学を卒業したばかりの若い人だった。大学での専攻も日本語であった。（ＬＢ氏）

教師たちは日本への留学経験はないが、中国の大学で日本語を専攻しており、日本語は上手だった。日本語の授業は毎日 1 コマ（45 分）行われ、教科書は黒龍江省の民族出版社が出していたものを使っていた。授業は、教科書を使った暗唱型の授業で、文法中心の授業だった。教科書の文章を次の授業のときまでに覚えて来なければならず、それを授業中、学生に一人ずつ立たせて言わせる形式であった。学生は文章を覚えることができれば、早く終わることができた。また、1 ヶ月に 1 度は単語の小テストがあった。朝鮮語の単語が書かれてあり、それを日本語で書く形式であった。教師は朝鮮語のみを使って日本語の授業を行い、中国語が使われることはなかった。当時の学生たちにとって、中国語も日本語と同様、外国語という感覚であった。（ＱＡ氏）

高中のときの日本語教師は、30 代の女性の教師で、使用していた言語は主に日本語であった。その教師は初中、高中で日本語を学習し、さらに大学の専攻も日本語であった。日

本語会話能力はかなり高く、発音も正確であり、アクセントも比較的正確で、字もきれいに書いていた。また、授業は１．単語を覚えさせ、書き取りをさせる　２．主に日本語を使って文法の説明を行い、必要なときはときどき朝鮮語を使って説明する　３．よく教科書の本文を朗読させ、日本語、あるいは朝鮮語を使って本文の質問について解説する　４．よく会話練習をさせるが、聞き取りの練習は少なく、授業で使う言葉は基本的に日本語であるという特徴があった。（ＴＣ氏）

まず、これらの語りから、大卒教師たちは暗記、暗唱型の教育方法が見られるものの日本語の文法を意識した授業を行っていたことがわかる。それはＬＢ氏の動詞の活用表を用いた教え方にも表れている。「満洲国」期の「老一代」教師の語りの中にも一部動詞の活用表が用いられていた話があったが、この時期は「老一代」たちが教えていた時期よりも、より文法が意識された教育方法がとられていたと考える。

本田（2012）では、「教師の手作りのプリントを教科書として使う時代は（中略）1984 年までつづくが、その後は、他の教科と同様に人民教育出版社が教科書を刊行し、すべての学校がこの教科書を使用することになる[166]」とある。この時期は統一された教科書が普及し始める時期であり、教師はより文法的な授業が可能になっていたのではないかと考えられる。本田も述べているように、日本語が「国語」としてではなく、「外国語」として教えられていた時期であることがうかがえる。

次に大卒教師の日本語能力であるが、「老一代」教師とは対照的に、発音もアクセントも良く、日本語も上手だったという語りが目立つ。これは、初級中学、高級中学で日本語を学んだ後も、大学において 4 年間専門的に日本語を学習した経験が大きいのではないかと考える。大学によっては日本人教師が在籍しているところもあり、ネイティブスピーカーの正確な発音やアクセントを身に付ける機会も多かったであろう。また、中学によっては、ＹＡ氏の語りの中にも出てくるが、日本人教師も在籍しており、日本語の発音やアクセントをチェックしてもらう機会は多かったと考えられる。「朝鮮族」教師から教わった「老一代」教師や、独学で日本語を学んだ教師に比べ、大卒の教師は日本語の正確な発音やアクセントを身に付けることのできる学習環境であったことは間違いないだろう。

この日本語の発音に関して、ＴＣ氏の初級中学の教師の事例を紹介したい。

初中時代に日本語を教えてもらったのは 30 代の女性教師で、朝鮮族学校で日本語の学習をした教師だった。授業では、朝鮮語と日本語を使って日本語を教えていた。日本語会話能力は普通のレベルであり、発音は「ふ」や「す」の発音以外はまあまあであった。日本語の教え方は１．単語を覚えさせ、単語の書き取りをさせる　２．文法は主に朝鮮語で説明し、例文なども朝鮮語で翻訳する　３．教科書の本文を朝鮮語で翻訳し、本文を覚えさ

166　本田弘之 (2012)『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 211

せるが、朗読は少ない　４．会話練習は少なく、聞き取り練習はより少ないというものだった。（ＴＣ氏）

この「ふ」や「す」が上手に発音できなかったのは、朝鮮語には日本語の「う〔u〕」のように聞こえる母音が二つあるためであると考えられる。円唇後舌狭母音と呼ばれる「우〔u〕」と非円唇後舌狭母音と呼ばれる「으〔ɯ〕」という二つの音であるが、日本語の「う」は、朝鮮語の「우〔u〕」よりは口をすぼめず、「으〔ɯ〕」よりは口を広げないため、日本語の「う」の発音とズレが生じる。このためＴＣ氏には教師の「ふ」と「す」などの音が不自然に聞こえたのではないだろうか。

教師のアクセントもやはり朝鮮語の影響があったのだという。これは朝鮮語の場合、日本語のようにアクセントの違いで単語の意味が変わることがないため、日本語を発音する際にもアクセントをあまり気にせず発音しているためではないかと考えられる。つまり、ＴＣ氏の日本語教師の日本語には中国語の影響ではなく、朝鮮語の影響が出ていたことがわかる。

高級中学卒の教師の教育方法と大卒教師の教育方法にも大きな違いが見られる。ＴＣ氏が日本語を教わった教師二人は、ともに 30 代の女性教師であり、初中、高中と日本語を学習したという点で変わりはないが、ひとつだけ大学で日本語を学んだかどうかという点だけが異なる。二人の女性教師の日本語能力、さらには教育方法を比べると、ＴＣ氏が初中の学生だったときに授業で使われた言葉は朝鮮語である。しかし、高中になると日本語で授業が行われた。これは、学校でそのように決められているのかどうか定かではないが、少なくとも高中の教師の日本語レベルは非常に高く、日本語で日本語を説明する能力を持ち合わせていたことは確かであろう。ＹＡ氏が高級中学時代に受けた日本語教育の方法とも共通する点が見られる。

朝鮮族教師たちは日本に留学経験があり、発音もアクセントも良かった。授業は教科書によって進められたが、朝鮮族の教師たちも日本語で授業していた。（ＹＡ氏）

ＴＣ氏とＹＡ氏はともに 90 年代半ばから後半にかけて朝鮮族学校で日本語教育を受けた世代であるが、80 年代後半から 90 年代前半に朝鮮族学校で日本語教育を受けたＬＢ氏、ＱＡ氏の日本語教師は朝鮮語のみを使用していたことがわかる。ＱＡ氏とＴＣ氏の学校は異なるので、一概には言えないが、ＱＡ氏が高級中学を卒業した 1994 年にＴＣ氏は初級中学に入学している。この 90 年代半ばがちょうど教授用語として朝鮮語から日本語へと変わっていく時期なのではないだろうか。

さらに、ＬＢ氏の高級中学には中国語を使用する教師もいたことがうかがえる。

もう一人の教師は、半年間くらい教えてもらったが、授業は中国語と日本語で行い、たまに朝鮮語も混ぜていた。単語を覚えさせるときは、黒板に単語をたくさん書いて、その単語の意味を詳しく説明した。彼はその後、上海で他の仕事をすることになった。（ＬＢ氏）

この教師は現在の朝鮮族学校に見られるような三言語使用による授業を行っていることがわかる。また、主に使っていた言語が、日本語と文法的に近い朝鮮語ではなく、中国語と日本語であったことから、この教師自身の言語能力が朝鮮語よりも中国語能力の方が高かったのではないかと考えられる。ＬＢ氏自身も話していたが、この時期は、教師の言語能力によって、日本語の教え方も異なってきた時期にあたるのではないだろうか。つまり、それまでは朝鮮語、もしくは日本語を混ぜながら授業を行っていたのが、この時期になると、朝鮮語よりも中国語の方が得意な教師が現れ始めたため、日本語の授業で使用する言葉として中国語が使われるようになったと思われる。また、ＬＢ氏の学校があった鉄嶺市にある朝鮮族学校は現在、漢族の学生が７割も在籍していることから考えると、中国語の影響が大きな地域であると考えられる。よって、朝鮮語よりも中国語能力が高い教師が在籍していたのではないだろうか。

その一方で、ＱＡ氏の学校のように、中国語環境ではなく、中国語も日本語同様、外国語感覚であったというところもあったことがわかる。ここから、朝鮮族学校の言語環境は地域によって異なっており、教授用語にも違いが出てくる時期であったと考えられる。

以上、インタビュー調査をもとに 1980 年代後半から 1990 年代にかけての朝鮮族学校における日本語教育について述べたが、朝鮮語使用中心の教育方法から、1990 年代半ばになると、日本語使用を中心とした教育方法への以降が見られる。また、教科書が普及したこともあり、暗記、暗唱型の教育方法から、文法説明による教育方法へと転換し、さらに会話練習を取り入れている授業も見られるようになる。また、中国語で教える教師も見られるが、地域によっては「中国語は外国語のようなもの」であったことから、中国語環境である一部の地域で使用されていたと考えられる。この時期になると、「満洲国」期に日本語教育を受けた老教師の姿は見られなくなっていることがわかる。本田（2012）は、これら老教師について「1980 年代中ごろには退職年齢に達し、現役を退きはじめた[167]」と述べている。また「1978 年以降に日本語を学んだ学生たちが、大学・師範学校を卒業して中学校に戻ってきた[168]」と言及している。つまり、教師の世代交代が進んだ時期であったということがわかる。

では、2000 年代から現在にかけての朝鮮族学校における日本語教育の方法はどのようなものであったのだろうか。次項では、この時期に日本語教育を受けた朝鮮族に対するインタビュー調査をもとに、その教育方法について明らかにする。

---

[167] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 169

[168] 同上：p. 169

２－２－４．日、朝、中三言語使用による教育方法と学習者の「漢語化」
－2000 年代から現在までの日本語教育－

ここでは 2000 年代から現在に至るまでの日本語教育方法について、三つの言語使用に注目しながら考察を加える。この時期は朝鮮族の言語能力に変化が見られる時期である。それは彼ら、彼女らの母語であった朝鮮語の能力よりも母国語である中国語能力が高くなる、いわゆる「漢語化」が進む時期である。それに伴い、日本語の授業で使われる言語にも変化が生じる。これまでは、主に日本語、朝鮮語による授業が行われてきたが、中国語を活用した三言語による教育方法も取り入れられる。

また、この時期は留学、研修、旅行など日本に滞在経験のある教師も現れる。ここでは、2000 年代から現在にかけて朝鮮族学校で日本語を学習した 5 氏（ＱＢ、ＪＣ、ＬＡ、ＫＦ、ＹＢ各氏）の語りから、主に三言語を使用した教育方法について考察する。

まず、三言語を使用した教育方法の語りを以下に記す。

高中の日本語教師は 42,3 歳くらいで、10 年ほど日本に滞在した経験のある教師だった。彼女は夫の仕事の関係で、日本にいた。日本に滞在経験があったため、日本語の発音はとてもきれいで、アクセントもよかった。その教師のおかげで私は日本語が好きになった。

授業は教科書に沿って行われ、文法中心であった。教え方はとても上手で、中国語と朝鮮語を半々、混ぜながら教えていた。しかし、日本語は使っていなかった。教科書は朝鮮語で書かれたものであったが、その教科書を見ながら中国語で説明することもあった。日本語教師たちが中国語と朝鮮語を混ぜて授業を行っていた理由として、日本語教師たちが普段から中国語、朝鮮語両言語を混ぜて話していたからだと思う。（ＱＢ氏）

日本語の教師は一人おり、24 歳くらいの女性教師で、延辺大学で日本語を専攻し、修士課程を卒業している。日本語能力が高く、きれいな日本語をしゃべる。授業中に使用する言葉は、80％が日本語であり、10％は朝鮮語、10％は中国語である。授業のときは、基本的に日本語で説明し、板書するときも日本語で書く。また、朝鮮語は私が理解できなかったとき、中国語はもう一人の学生が聞き取れなかったときにそれぞれ使用する。（ＹＢ氏）

ＱＢ氏の語りから、教師が中国語と朝鮮語をそれぞれ半分の割合で使っていたことがわかる。また教科書は朝鮮語でありながら、中国語でも教えていたという点は、これまで見られた教科書は中国語でありながら、教授用語は朝鮮語であるこれまでの形式とは逆のパターンとなっている。さらに、ＹＢ氏の語りでは、学生の言語能力に合わせて、教師が朝鮮語と中国語を使い分けていることがわかる。ＹＢ氏は中国語よりも朝鮮語が得意であり、もう一人の学生は朝鮮語よりも中国語が得意であることから、日本語で説明する際の補助となる言語が学生によって異なっていることがわかる。中国語が教授用語として使われ、また日本語で説明する際の補助的な役割を果たしているところに、この時期の朝鮮族によ

る日本語教育の大きな特徴が現れている。

本田（2012）でのインタビュー調査の中にも、中国語を使用した日本語学習の事例が紹介されている。

D：「そろそろ時間です」朝鮮語でいえば、「이제 곧 시간입니다」「바야후로 시간입니다」…理解できないんですね。朝鮮語のなかでは、そういう意味がないですから。中国語で「快到什么什么时候了」。あ、すぐわかりますね[169]。

このように中国語使用によって日本語を学習したという事例は、筆者が行ったインタビュー調査の語りの中にも出てくる。

日本語は高中 1 年生、2 年生までは大丈夫だったが、N2 レベルになると、朝鮮語に対応しない日本語が出てきた。レベルの高い日本語になると、朝鮮語では表せない表現が出てくる。そんなときは中国語の説明を見ると理解できたりする。例えば、「～にしろ、～にしろ」は中国語で「选这个、选这个」となるが、このような表現は、朝鮮語よりも中国語を使った方がぴったりくる。また、使役、受身、使役受身など朝鮮語では理解するのが難しい文法事項については、教師から個別に中国語と日本語を交えて教えてもらっていた。例えば、「食べさせられた」という日本語は、嫌な気持ちも含まれた表現だが、これは中国語の「让」とはまた違う。このように中国語でも朝鮮語でも理解が難しい場合は、他の日本語の表現で説明してもらっていた。例えば「しかたなく」「むりやり」などの表現を入れて理解していた。このように、朝鮮語の限界を補うために、中国語や日本語を利用したりしていた。（ＫＦ氏）

ＫＦ氏の語りからは、朝鮮語を活用しても難しい日本語表現については、中国語を活用することで理解している状況がうかがえる。また、朝鮮語でも中国語でも理解しにくい文法表現については、別の日本語の表現を使うことで理解していることがわかる。つまり、2000 年代に入ると、教師は中国語を日本語を教える際に取り入れ、学習者の能力に合わせてうまく活用し、学習者も中国語を活用することで日本語をより深く理解している状況であることがうかがえる。さらに言えば「漢語化」により、朝鮮族の中国語能力が向上したからこそ可能になった教育方法、学習方法であると言える。この時期の言語環境についての語りも下記に記す。

学生たちも普段中国語と朝鮮語を混ぜて会話をしていた。その割合は、朝鮮語 60%、中国語 40%くらいだった。日本語以外の科目も、例えば「地理」の授業の場合は、日本語の

169　本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 195

授業同様、中国語と朝鮮語を混ぜて教えていたが、「数学」の場合はほぼすべて中国語で教えていた。

学校では中国語と朝鮮語、学校外では中国語、家では朝鮮語、たまに中国語というように場面によって両言語を使い分けていた。学校外で中国語をしゃべるのは、私が住んでいた地域が漢民族が多く暮らしていたところであったためだ。家でたまに中国語を話すのは、主に妹と話すときで、妹は私としゃべるとき、すべて中国語で話し、私は中国語と朝鮮語を混ぜてしゃべる。（ＱＢ氏）

私にとって朝鮮語は母語であり、中国語は小学校から学習しているため、中学に入るまでには二つの言語を使いこなせるようになった。また、日本語は初中から学習しているため、高中になると三言語を駆使して日本語を理解することが可能になった。私が学生だったころは、言語レベルとしては、「朝鮮語＞中国語＞日本語」であったので、朝鮮語が中国語に比べて日本語の学習に与える影響は大きいと思う。しかし、今の多くの学生たちの言語レベルは「中国語＞朝鮮語＞日本語」のように、中国語が朝鮮語を逆転してしまっている。しかし、やはり日本語は文法的には朝鮮語と共通点が多く、文字的には中国語と共通点が多いので、朝鮮族にとって日本語は最も学びやすい言語であることに変わりはないと思う。私は大学でも日本語が専攻であったが、初中、高中と日本語を学習していたため、大学では日本語で日本語を理解できるようになっていた。（ＫＦ氏）

以上の語りから、2000 年代から現在にかけては「漢語化」の影響が顕著に見られる。この「漢語化」については、朝鮮族の中国の都市部への移動、つまり中国語という言語環境への移動が大きな原因のひとつと考えられる。また、朝鮮語環境ではない都市部に移動し、また仕事をするために、そこでは必ず中国語が必要となる。本田も「2000 年ごろから、中国朝鮮族は「民族」としての大きな岐路をむかえている[170]」と指摘しているように、この時期は「漢語化」による言語面での変化とともに朝鮮族のコミュニティ自体が消失の危機を迎えていることがわかる。

それでは、日本語、朝鮮語、中国語を活用した教育方法以外に、どのような特徴があるだろうか。ＬＡ氏の語りを以下に記す。

初級中学の日本語教師は 40 歳くらいの男性教師で、日本に研修経験のある人だった。日本語の作文もたくさん書かせ、また会話もさせるようにしていた。また、文法を教える際、選択問題を 40 問用意し、その中から学生同士ペアで問題を出し合って答えさせていた。私が学生だったころは、日本語の練習問題が少なかったので、学生たちが以前やったことのある練習問題から選んで出題したり、内容によっては学生たちに問題をつくらせたりもし

170　本田弘之 (2012)『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 268

ていた。その問題の中から、よくできた問題をコピーして練習させたりしていた。この方法はとても印象深く、おもしろいと感じた。ロールプレイなどもさせたりしていた。
（ＬＡ氏）

この教師の教育方法には独自の工夫が見られ、現在の日本語教育でもよく行われている方法も取り入れられている。特に注目したいのは、教材不足というマイナス面を、学生たちに問題をつくらせることで、むしろ学生たちに主体性を持たせるというプラスの面に変えているところである。問題をただつくらせるだけではなく、良いものは実際に練習問題として取り入れることで学生たちのやる気を引き出すことにもつながっていると考えられる。現にＬＡ氏にとって印象深いやり方であったのだから、効果的な方法であったのではないだろうか。さらにペアワークやロールプレイまでさせているのは、これまでの朝鮮族学校の日本語教育には見られない特徴であると言える。

以上、2000 年代から現在に至るまでの日本語教育の教育方法について考察を加えた。2000 年代から現在に至るまでの朝鮮族学校における日本語教育の最大の特徴は、三言語による教育方法である。これまでの日本語、朝鮮語に、新たに中国語が加えられ、日本語の文法表現に合わせて使い分けることで、教師が学習者に対して日本語をよりわかりやすく教えることを可能にしていることがわかる。また、学習者が日本語で理解できない場合は、朝鮮語が得意な学生に対しては朝鮮語で、中国語が得意な学生に対しては中国語で説明するという学習者の言語能力に合わせた方法がとられている。さらに、学習者自身も、朝鮮語で理解できないところは中国語で、中国語で理解できないところは日本語を使用して理解するという三言語による学習方法も見られる。

２－２－５．小括

これまで、改革開放期以降の朝鮮族の日本語教育について、主に教育方法に注目しながら考察した。1970 年代後半から 1980 年代にかけて朝鮮族学校において日本語教育を担ったのは「老一代」と呼ばれた「満洲国」期に日本語教育を受けた教師たちであり、彼らは朝鮮語、もしくは日本語と朝鮮語による暗唱型の教育方法をとっており、多くは文法の説明を行っていないことがわかった。これは「満洲国」期の「国語」としての日本語教育の影響を強く受けた教育方法であると考えられる。また、その一方で、ラジオ放送の日本語講座などを活用し独学で日本語を学んだ教師たちもいたことがわかった。彼らは、「老一代」教師の教育方法の影響を受けながらも、文法の説明も行っていたという点で「老一代」教師とは異なる教育方法も垣間見られた。この時期には日本語の授業で中国語は活用されておらず、朝鮮語による日本語教育が行われていたことがわかった。

次に、1980 年代後半から 1990 年代にかけての日本語教育について、主に教育方法に焦点を当て、考察した。この時期になると、大学で日本語教育を専門的に学んだ教師が現れ、その日本語能力は高く、「老一代」教師とは発音やアクセントの面で大きな違いが見られた。

また、教育方法の特徴としては、暗記・暗唱型の教育方法が依然としてとられているものの、文法説明を行う教師が多くなっていることがわかる。これは、統一された教科書が普及した結果、「老一代」に見られた「国語」としての日本語ではなく、「外国語」としての日本語教育方法が可能になったためであると考えられる。また、授業中の使用言語としては、日本語で教え、わからない場合は朝鮮語で教えるという日本語中心の授業も見られ、さらに、中国語で日本語を教える教師も現れている。日本語中心の授業が可能となった要因としては、大学まで日本語を学んだこと、そして、学校に日本人教師がいたことで、教師自身の日本語能力が向上したことが考えられる。また、中国語を使った授業を行った教師については、教師自身の言語能力が朝鮮語より中国語の方が高かったということが考えられる。しかし、「中国語は外国語のような感覚であった」という語りからもわかるように、地域によって差があり、中国語環境である一部の地域のみで中国語が使われていたと考えられる。

最後に、2000 年代から現在にかけての日本語教育について、教育方法、そして三言語使用に注目しながら考察した。2000 年代に入り、「漢語化」によって朝鮮族の言語能力に変化が生まれ、それに伴い、朝鮮族学校における日本語教育にも中国語が活用されることとなる。それは朝鮮族教師、学習者ともに普段から朝鮮語と中国語を混ぜて話していたというコードスイッチングの影響も大きいが、学習者が日本語をより深く理解できるために、朝鮮語では難しい日本語の文法表現については中国語を活用し、朝鮮語と中国語でも理解しにくい表現については、他の日本語の表現を使って教えるという三言語を使用した日本語教育方法が見られた。また、日本語を使って授業をするものの、日本語で理解できない場合は、朝鮮語が得意な学習者に対しては朝鮮語で、中国語が得意な学習者に対しては中国語で説明していることがわかった。日本語の文法表現、そして学習者の言語能力に合わせた三言語使用の日本語教育方法が 2000 年代から見られるようになり、この独自の教育方法は現在も朝鮮族学校で行われている。

２－３．朝鮮族学校の言語に対する意識と三世代の日本語教育

ここでは、日本語教育を受けたことのある朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査をもとに、朝鮮族学生の言語に対する意識、及び朝鮮族の日本語教育のつながりについて明らかにし、考察を加える。

２－３－１．朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査について

ここでは、まず朝鮮族学校の卒業生に対しておこなったアンケート調査概要について述べる。表 10 はアンケート調査の実施概要である。アンケート用紙については、資料 4 として、そして、アンケート調査結果については資料 5 として本論末尾に附す。

表 10：朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査の実施概要

アンケート実施期間	2011 年 6 月 15 日（水）　～　2011 年 6 月 30 日（木）
アンケート調査対象者	朝鮮族学校の卒業生 112 名（男性 26 名、女性 85 名、不明 1 名）
アンケート回収方法	アンケート用紙を直接配布、及びメールにアンケート用紙を添付し、記入後回収。（メールでの回収 86 枚　直接回収 26 枚）
アンケート用紙の言語	日本語、朝鮮語、中国語 （対象者が読みやすい言語で書かれたアンケートを選ぶ形式）

アンケート調査は 2011 年の 6 月 15 日から 30 日まで約 2 週間に渡り実施した。アンケートの調査対象者は朝鮮族学校の卒業生であり、現在大学に通っている学生に対して実施した。アンケートの回収方法は、筆者、または筆者の友人がアンケート用紙を直接配布、またはメールにアンケート用紙を添付し、回答者が記入した後、記入したものをメールに添付し送ってもらう形にした。その結果、メールでの回収で 86 枚、直接回収で 26 枚のアンケートを集めることができた。アンケート用紙の言語は日本語、朝鮮語、中国語の三言語を用意し、対象者が読みやすい言語を選び回答してもらう形にした。

まず、対象者の男女比は、「男：女＝23：77」となった。この比率は、延辺大学の日本語専攻の学生に対してアンケート調査を行った小林（2011）の男女比率（男：女＝22：78）とほぼ同じである[171]。次に出生年についてであるが、1986 年から 1991 年生まれの学生は、それぞれ 10 名以上 20 名以下おり、これは対象者全体の 83%を占める。人数にそれほどばらつきはなく、バランスよく回収できた。続いて、対象者の出身地であるが、吉林省出身者が 79.4%で、全体の 8 割を占めた。また、東北地方出身者（吉林省、遼寧省、黒龍江省）は 96.4%に上った。

次に対象者の大学の学年を見ると、1～3 年生まで、各学年それぞれ 18%前後となっており、バランスよく回収できた。また、出身大学は長春市にある大学を中心に、それぞれ 10%前後の割合になっている。これは、アンケート調査に協力してくれた友人の所属大学が長春市内にあったという面が大きいが、ひとつの大学には偏っていない。

２－３－２．成績のための日本語と、外国語としての朝鮮語及び中国語

ここでは、朝鮮族学生の言語に対する意識について考察する。まず、調査項目 2－4「初級中学で日本語を選択した理由」についての調査結果を見ると、「学校で決められていたから」（55.7%）という回答が最も多く、次いで「日本語は他の言語に比べて学習しやすいから」（25.7%）「日本語に興味があったから」（15.7%）という順になった。また、調査項目 3－4「高級中学で日本語を選択した理由」の調査結果を見ると「初級中学で学習したから」

[171] 小林路義（2011）「圧倒的高評価とちょっぴり抗日イデオロギー　－延辺大学日本語専攻者の対日意識調査－」『鈴鹿国際大学紀要』No.18　鈴鹿国際大学 p.41

（39.2%）、「学校で決められていたから」（34.5%）となり、この二つを合わせると、その割合は 73.8%に上った。ここから、日本語が好きで日本語を選んだという積極的選択がされているのではなく、学校で決められていたため学習することになったという状況が浮かび上がってくる。

山本（2011）によれば、「例えば、延辺では、英語クラスと日本語クラスを併設する学校が多くあり、そのクラス分けは本人の希望ではなく、成績によって振り分けられた時代があったという[172]」とある。また、「成績上位者は英語クラスに、成績下位者は日本語クラスに機械的に分けられ[173]」、その後、自由選択制に変わっても日本語クラスは徐々に減少していったとある。この振り分け方は「あまり成績の良くない学生は、英語よりも学習しやすい日本語を学ばせた方がよい」という成績重視の考え方からとられた方式であると考えられる。よって、日本語を希望していないのに日本語を学習している学生が存在していることがうかがえる。しかし、一方で初級中学でのアンケートでは「日本語は他の言語に比べて学習しやすいから」という回答が 4 分の 1 を占めている点に注目したい。これは、朝鮮族の学生が日本語に対し、「学習しやすい」という意識を持っていることを表している。

山本（2011）には、「1978 年ごろから 90 年代の前半まで、日本語教育は朝鮮族の第一外国語として定着[174]」しており、「漢族は英語、朝鮮族は日本語が第一外国語という明確な区別があった[175]」とある。これは、言語的側面から、特に「語順」という点から見れば、それぞれの母語の利点を活かせる選択であるように思われる。この「語順」が同じだから学びやすいという朝鮮族の意識は、小林（2011）の調査結果にも表れていた。つまり、英語は、SVO という語順で中国語とほぼ一致しており、その点から見れば、漢族にとって日本語よりも学習しやすい言語ということになりうる。一方、朝鮮族にとって、日本語は「語順」の一致のメリットを最大限活かせる言語であり、それがアンケート調査の結果にも表れていると考えられる。

最後に調査項目 2－10、及び 3－10 の調査結果から朝鮮語と中国語に対する朝鮮族の意識を見ることができる。質問は「日本語以外に学習した言語」であるが、これは選択式ではなく、自由記述式であったのだが、それぞれ「朝鮮語」と「中国語」と回答している学生がいることに注目したい。つまり、「朝鮮語」と記入した学生は、「中国語」が使われる環境で育ち、その言語能力も「中国語＞朝鮮語」であると考えられる。逆に、「中国語」と答えた学生は、「朝鮮語」が使われる環境で育ち、「朝鮮語＞中国語」という言語能力になると考えられる。さらに言えば、初級中学、高級中学ともに「朝鮮語」より「中国語」の割合が高くなっている。ここから、「中国語」よりも「朝鮮語」を「外国語」として捉えている学生の意識をうかがうことができ、朝鮮族の「漢語化」が意識の上でも進んでいること

---

172 山本忠士（2011）「延辺朝鮮族自治州の日本語教育」『アジア研究所・アジア研究シリーズ』No.77 亜細亜大学アジア研究所　p.95

173 同上：p.95

174 同上：p.95

175 同上：p.95

がわかる。アンケート調査結果から、同じ「朝鮮族」であっても、育ってきた環境により、言語に対する意識も異なり、また、当然その能力にも違いが出ていると考えられる。ここに、他の民族とは異なる朝鮮族の言語の特殊性が表れていると言える。

２－３－３．三世代の日本語教育

ここでは、アンケート調査対象者の父母、及び祖父母が日本語教育を受けていたかどうかについての結果を示し、三世代の日本語教育について考察する。まずは父母世代についてであるが、最も多かったのは「両親ともに受けなかった」（53.5%、60 名）で、半数以上を占めた。次に「両親とも受けた」（18.7%、21 名）が多く、これに「母のみ受けた」（13.3%、15 名）、「父のみ受けた」（10.7%、12 名）を合わせても 42.8%（48 名）と、「両親とも受けなかった」割合を下回った。今回アンケート調査を行った卒業生たちのうち、1990 年前後に生まれた学生が多かったことを考えると、彼らの親は「1960 年代」生まれが多いと考えられる。つまり、彼らの親が、朝鮮族学校で学んだ時期は、「1970 年代後半～1980 年代前半」であると推測できる。この時期は、ちょうど中国の日本語教育が再開された時期であった。

崔学松（2005）には、「1980 年度から日本語は大学入試科目のなかに組み込まれ、朝鮮族の大学入試においては、日本語の平均点数が英語より約 20～30 点ほど高い傾向を示した[176]」と指摘している。すでに述べたように、このころ日本語を教えていたのは、「満洲国」期に日本語教育を受けた「老教師」と呼ばれる教師たちであった。また、本田（2005）では、独自の聞き取り調査から「すでに 1970 年代はじめから中学校で日本語教育が開始され、1977 年の大学入試試験は「日本語」で受験することができた[177]」という証言を紹介している。このことから、アンケート対象者の親世代は、ちょうど朝鮮族学校での日本語教育が始まったときに日本語教育を受けた世代であり、日本語を教えたのは、「満洲国」期に日本語教育を受けた世代であったと考えられる。ここに「満洲国」期の日本語教育とのつながりを見ることができる。

次に祖父母についての調査結果であるが、最も多かったのは「祖父母ともに受けなかった」で、41%（46 名）であったが、「祖父母とも受けた」（21.4%、24 名）「祖母のみ受けた」（16.9%、19 名）、「祖父のみ受けた」（16.0%、18 名）の割合を合わせる、つまり、「祖父母どちらかが日本語教育を受けたことがある」という割合は 54.4%（61 名）に上り、「祖父母ともに受けなかった」割合を上回った。対象者の祖父母が生まれた年は「1930 年代～1940 年代」と考えられ、ちょうど「満洲国」期の日本語教育が行われていた時期と重なる。おそらく、「日本語教育を受けていない」と答えた世代は、解放後に学校教育を受けた世代であり、「日本語教育を受けた」と答えた世代は「満洲国」期に学校教育を受けた世代であ

---

176 崔学松（2005）「中国東北地域における近代化改革と「日本語ブーム」－朝鮮族にとっての日本語教育－」『一橋論叢』第 134 巻　第 3 号　一橋大学　p. 423

177 本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語学』第 8 巻 第 1 号　社会言語科学会　p. 25

ると考えられる。

崔学松（2005）は、「1945 年から 32 年間、中等教育機関における日本語教育は空白期にあった[178]」とし、それは「日本語で受けた『皇民化教育』という負の遺産を清算するためには、意識的に日本語との関係を空白にしなければならなかった[179]」からであると論じている。しかしながら、本田（2005）では、この時期にも日本語を学習していた人がいたことを指摘している。それは、「満洲国」期に日本語教育を受けた人が家族の中に、そして近所にいたからだという。さらに付け加えるならば、この「学校以外での日本語の伝承」は解放後のみならず、「満洲国」期にもすでに行われていた。第 2 章では「満洲国」期に日本語教育を受けた人々のインタビュー調査結果をもとに論じたが、そのインタビュー調査からは「学校の内外に日本語使用の境界線があるのではなく、家の内外に存在している事例が多く見られた[180]」。より具体的に言えば、「満洲国」期においては、学校以外の場所で友人と遊ぶときや、日本人と会話するときにも日本語が使われていた。また、学校に行けなかった子どもたちも、日本語を学習している「朝鮮族」児童や日本人と接しながら、日本語を身につけていった。その「学校以外での日本語の伝承」という形式は、「満洲国」期にすでに存在し、それが解放後も続けられたという点は特筆すべきことであり、「朝鮮族学校での教育が行われなかった＝日本語教育の断絶」と見るのはあまりにも短絡的ではないだろうか。第 2 章でのインタビュー調査結果からも明らかであるように、現に日本語教育が再び行われるようになった際、その担い手は「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」であった。その点を考えれば、「満洲国」期から現在の朝鮮族学校に至る日本語教育の連続性は明らかであるとも言える。

以上、二つの項目のアンケート調査から、現在、朝鮮族学校において日本語教育を受けている世代の父親、母親世代、そして祖父母世代は、朝鮮族の日本語教育の分岐点にあたる時期、つまり、祖父母であれば「満洲国」期の教育、父母であるなら改革開放期に再開された日本語教育を受けていた、もしくは受けることができなかった世代である可能性があることがわかった。実際にアンケートの回答の中にも、三世代にわたって日本語を学習したというものもあり、「満洲国」期から改革開放期、そして現在という朝鮮族の日本語教育のつながりを見ることができる。

２－３－４．小括

2－3 では、まず、朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査から、朝鮮族の言語に対する意識について明らかにし、考察した。朝鮮族学校で日本語を選択した理由としては、「学校で決められていたから」という回答が多く、日本語を選択する余地のなかった学生が数

178　崔学松（2005）「中国東北地域における近代化改革と「日本語ブーム」－朝鮮族にとっての日本語教育－」『一橋論叢』第 134 巻　第 3 号　一橋大学　p. 424

179　同上：pp. 424-425

180　永嶋洋一(2013)「「満洲国」期の「朝鮮族」学校における日本語教授法と日本語使用状況に関する一考察」『日語日文学』第 57 集　大韓日語日文学会　p. 412

多くいたことが明らかになった。その理由としては、「あまり成績の良くない学生は、英語よりも学習しやすい日本語を学ばせた方がよい」という学校側の成績重視の姿勢が大きいことがわかった。それは、朝鮮族にとって「日本語が学びやすい外国語である」という考え方があることを示しており、初級中学のときに日本語を選択した理由として、2 番目に多かったのが「日本語は他の言語に比べて学習しやすいから」であったことからもわかる。

また、「日本語以外に学習した言語」について質問したところ、「朝鮮語」と「中国語」という回答が見られたことから、朝鮮語と中国語を「外国語」として捉えている学生も存在していることがわかった。さらに、「中国語」よりも「朝鮮語」という回答の割合が高かったことから、「漢語化」による影響が見られた。

次に、祖父母、または両親が日本語教育を受けたかどうか質問したところ、「両親ともに受けなかった」という割合が半数以上を占めた一方で、「祖父母どちらかが日本語教育を受けたことがある」という割合が半数以上に上った。祖父母であれば「満洲国」期の教育、両親であるなら改革開放期に再開された日本語教育を受けていた、もしくは受けることができなかった世代である可能性があることが考えられる。ここから、「満洲国」期から改革開放期、そして現在に至るまでの日本語教育のつながりが見られ、家庭によっては、三世代に渡っての日本語教育を受けたという家庭が存在していることがわかった。つまり、家族の中においても日本語、朝鮮語、中国語という三言語使用が可能であり、これは朝鮮族社会が多言語社会であることを示している。

２－４．まとめ

本章では、インタビュー調査結果をもとに、「満洲国」期から改革開放期、そして現在にいたるまでの朝鮮族の日本語教育について、特に教育方法という観点から考察を行った。

「満洲国」期は日本語の使用が強要されたこともあり、学校内だけでなく、学校外においても日本語が使用され、それによって学校に通っていない「朝鮮族」の子どもたちも日本語を学習し、また日本人のいる地域で暮らしていた「朝鮮族」の子どもたちは日本語のネイティブスピーカーと話すことで自然と日本語を学習した。そこには植民地政策による日本語環境が存在していたが、両親と話すときは朝鮮語が使われるという朝鮮語環境も存在していた。そのため、学校の日本語授業でも低学年に対しては朝鮮語と日本語の「折衷法」がとられていた。

改革開放期に日本語教育が再開された際は、朝鮮族学校では主に朝鮮語による日本語教育が行われたが、教科書は中国語で書かれたものであり、またラジオの日本語講座も中国語であったことから、朝鮮語と中国語という二言語で日本語を学んでいたことがうかがえた。1980 年代後半から 1990 年代になると、朝鮮族学校では中国語で日本語を教える教師も現れたことから、朝鮮族の言語能力に変化が見られ、2000 年代になると、「漢語化」により、朝鮮族学校においても朝鮮語、中国語が混在する環境となる。その結果、日本語教育の教

育方法として日、朝、中の三言語使用による教育方法が行われるようになる。朝鮮族の多言語社会は常に変化し、それは日本語教育の方法にも影響を与え、変化させていることがわかった。言語環境は地域によって異なるものの、朝鮮族の時代別言語環境、及び日本語授業の教授用語の変化を表 11 に示す。

表 11：朝鮮族の時代別言語環境、及び日本語授業の教授用語

		「満洲国」期	1970 年代後半～1980 年代	1980 年代後半～1990 年代	2000 年代～現在
言語環境	家庭内	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語、中国語
	学校内	日本語	朝鮮語	朝鮮語、中国語	中国語、朝鮮語
	学校外	日本語	朝鮮語、中国語	朝鮮語、中国語	中国語
日本語授業の教授用語		①日本語 ②日本語と朝鮮語	①朝鮮語 ②朝鮮語と日本語	①朝鮮語 ②朝鮮語と日本語 ③日本語と朝鮮語と中国語	日本語と朝鮮語と中国語

表 11 から、朝鮮族の言語環境が「漢語化」するにつれて、日本語の授業で使用される教授用語にも「漢語化」が見られることがわかる。さらに、時代が下るにつれて、使用される言語が単一言語もしくは二言語によるものから、三言語に変化していることもうかがえる。最大で日本語、朝鮮語という二言語使用による教育方法がとられていた朝鮮族の日本語教育は、「漢語化」によって中国語という新たな使用言語を獲得し、中国語による日本語理解が可能となった。インタビューの語りからは、これまでは日本語と朝鮮語では理解が難しかった日本語の文法表現について、新たに中国語で解釈することで、その限界を克服していることがうかがえた。また、朝鮮語だけでなく中国語でも解釈することで日本語への理解が深まっていることもわかった。

この三言語に対する朝鮮族の意識は、朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査からもうかがうことができた。まず日本語に対しては、学校側、そして学生ともに他の言語に比べて「学びやすい」という意識があり、実際に試験の際も高得点がとれていたため、学生の希望にかかわらず、成績の良くない学生は日本語クラスに入れられるという状況が存在したことが明らかになった。また、朝鮮語、中国語に対しては「外国語」であるという意識を持った学生がいることもうかがえた。さらに、中国語よりも朝鮮語を「外国語」として捉えていた学生の割合が高かったことから、学生の意識の上でも「漢語化」が進んでいることがわかった。また、祖父母のどちらか、または両方とも日本語教育を学んだことがあると答えた学生が半数以上に上り、両親も学んだことがあると答えた学生もいたことから、朝鮮族の家庭では「満洲国」期、改革開放期、そして現在と、各時代の日本語教育

を受けた三世代が暮らしていることが明らかになった。

第 3 章においては、現在朝鮮族学校で行われている日本語教育について、日、朝、中三言語を使用した教育方法に注目し、考察する。

第３章

朝鮮族の三言語使用による日本語教育方法

本章では、現在の朝鮮族の日本語教育について、特に朝鮮族教師の三言語使用による教育方法についてインタビュー調査及び授業見学により明らかにし、考察する。

2 章でのインタビュー調査結果からも明らかであるように、朝鮮族教師が日本語を教える際に使用する言語、すなわち教授用語はその時代により様々であった。「満洲国」期の日本語教育は、低学年では日本語と朝鮮語で行われ、学年が上がるにつれて日本語で行う点に特徴があった。また、改革開放期に再開された日本語教育は、「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」と呼ばれる老教師たちが、その担い手として活躍したが、彼らは主に朝鮮語を教授用語として使い、日本語を教えた。時代が下るにつれ、朝鮮族社会に「漢語化」の影響が顕著になり、教師も朝鮮語に加え中国語で日本語を教え、学習者も中国語を使用しながら日本語を学習するようになってくる。

朝鮮族の朝鮮語、中国語に対する教育政策について、花井（2011）では、吉林省教育委員会民族教育処において 1995 年に吉林省の朝鮮族教育課程が調整された結果、「従来の教育課程より漢語時数が増えるようになった[181]」とし、さらに朝鮮語環境が残る延辺朝鮮族自治州においても、自治州教育局によって 2002 年に制定された「新教育課程」により、漢語課の時数が大幅に増え、「漢語学習を強化する方向である[182]」という。朝鮮語と中国語という二つの言語に焦点を当てるならば、教育政策として朝鮮語より中国語の方が強化される傾向にあり、実際に朝鮮族学校の学生にも「漢語化」の影響が見られる。この「漢語化」について、本田（2012）には「とくに 2000 年以降急速に進み、現在は民族学校に在籍していても朝鮮語ができない子どもたちがめずらしい存在ではなくなっている[183]」とある。

また、近年の朝鮮族学校における外国語教育の現状として、金紅梅（2009）では、「日本語から英語へ移行していく学校、日本語教育をそのまま維持している学校、日本語と英語の二つの外国語教育を実施する学校[184]」という三つのパターンを挙げている。

本章では、朝鮮族教師の三言語使用による教育方法について、学校別、教師別に明らかにした。教師が授業で使用する言語は、日本語の文法については共通点の多い朝鮮語を使用するものの、朝鮮語では説明しづらい文法表現については中国語で説明し、さらに朝鮮語、中国語でも説明が難しいものについては、日本語の例文を多く出し、理解させている

---

[181]花井みわ（2011）「中国朝鮮族の人口移動と教育－1990 年以後の延辺朝鮮族自治州を中心として－」『早稲田社会科学総合研究』第 11 巻 第 3 号 早稲田大学社会科学学会 p. 76

[182] 同上：p. 77

[183]本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 77

[184]金紅梅(2009)「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 51

ことがわかった。つまり、単一言語だけでは解釈が難しい文法表現については、他の言語を使用することによって解釈し、理解させる「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、ひとつの日本語の単語や文法表現についても、三言語で解釈し説明することで、より理解を深めさせる「相乗的理解」を促す教育方法がとられる一方で、教師の中国語能力が十分でないため、中国語の使用が限定されている事例も見られた。

３－１．梅河口市朝鮮族中学の日本語教育方法

筆者は 2014 年 8 月 12 日、梅河口市にある朝鮮族学校である梅河口市朝鮮族中学を訪れた。まずは梅河口市朝鮮族中学について、調査の際にもらった学校誌をもとに紹介したい。

梅河口市朝鮮族中学は 1947 年 11 月に創立された。2010 年現在、156 名の教師のうち高級中学の教師が 45 名、初級中学の教師が 76 名おり、外国人教師が 2 名在籍している。クラス数は合計 35 クラスあり、全校生徒は 1235 名である。

次に、日本語を教えている朝鮮族の教師に話を聞くと、現在日本語の教師は 7 名おり、3 名は初級中学の授業を、4 名は高級中学の授業を担当している。そのうち、2 名は大学で日本語を専攻した教師であった。また、青年海外協力隊から派遣された日本人教師も 1 名いる。外国語科目の人数は、各学年（初中 1～高中 3）合計で日本語クラスは学生 40 名、英語クラスは 60 名ほどである。日本語の授業は月曜日から金曜日まで、毎日 1 コマ（40 分）ずつ行われている。

写真 1：梅河口市朝鮮族中学（筆者撮影）

３－１－１．梅河市朝鮮族中学の教師に対するインタビュー調査

ここでは梅河口市朝鮮族中学で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 12 に示す。

表 12：梅河口市朝鮮族中学・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2014 年 8 月 12 日（火）
対象者	朝鮮族の日本語教師 5 名（すべて女性）
使用言語	日本語（伝わらないときは韓国語及び中国語）
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	梅河口市朝鮮族中学
インタビューの時間	1 人あたり 1 時間から 1 時間半

調査は、筆者の友人の友人であるＫＦ氏（第 2 章のインタビュー対象者）が梅河口市朝鮮族中学の卒業生であったため、同氏の紹介で実施が可能となった。インタビューの際はＫＦ氏にも付き添ってもらった。対象者は日本語を教えている 5 名の朝鮮族教師であり、すべて女性であった。使用言語は日本語であり、伝わらないときは韓国語及び中国語を使用した。また半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 1 時間から 1 時間半であった。次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 13 に示す。

ＫＡ、ＫＢ、ＫＣ、ＫＥ各氏は第 2 章において、各氏が日本語教育を受けた教師に関するインタビュー調査結果を示したが、ここでは各氏自身の教育方法についてのものを示す。

ＫＡ氏はインタビュー対象者の中で最もベテランの教師であり、1987 年から梅河口市朝鮮族中学で日本語を教えいる。ＫＦ氏が高級中学の学生だったとき、日本語を教えたのはＫＡ氏である。現在は高級中学 2 年生の授業を担当している。ＫＢ氏は初級中学、高級中学で日本語を 6 年間学んだが、大学では歴史を専攻した。大学卒業後、1992 年から吉林省通化市の輝南県にある朝鮮族中学で日本語を教え始めた。2003 年から梅河口市朝鮮族中学で日本語を教えている。現在高級中学 2 年生の授業を担当している。ＫＣ氏は初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学んだ後、大学でも日本語を専攻した。その後、6 年間日本に留学し、2009 年から現在の学校で日本語を教えている。高級中学 1 年生から 3 年生までの日本語授業を担当している。ＫＤ氏は初級中学 3 年生の日本語授業を担当している。ＫＥ氏は初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。大学での専攻は中国語で、日本語を教える前は、故郷の梅河口市山城鎮にある朝鮮族中学で 10 年間、中国語を教えていた。2003 年から現在の学校で日本語を教えることになった。

属性を見ればわかるように、梅河口市朝鮮族中学では世代も経歴もそれぞれ異なる教師が日本語授業を担当していることがわかる。

表 13：梅河口市朝鮮族中学・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＫＡ （40 代後半、女性）	高級中学 2 年生の日本語授業を担当。 1987 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学で日本語を学習した。（高中入学は 1980 年）
ＫＢ （40 代前半、女性）	高級中学 2 年生の日本語授業を担当。 2003 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1984～1990 年） 大学での専攻は歴史。
ＫＣ （30 代半ば、女性）	高級中学 1～3 年生の日本語授業を担当。 2009 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。 大学卒業後、6 年間日本へ留学。
ＫＤ （女性）	初級中学 3 年生の日本語授業を担当。
ＫＥ （40 代前半、女性）	初級中学 2 年生の日本語授業を担当。 2003 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。 大学での専攻は中国語で、日本語を教える前は、故郷の朝鮮族中学で 10 年間、中国語を教えていた。

次にインタビューした教師が授業中に使う教授用語についてまとめたものを表 14 に示す。

表 14：梅河口市朝鮮族中学・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＫＡ	使用割合：60％ 会話練習の際、使用。練習の説明は朝鮮語。 本文の内容を教える際も日本語を使っている。	使用割合：30％ 文法説明、解釈　日本語と対応している朝鮮語。最近は朝鮮語で説明しても、それがどんな意味か理解できない学生が増えているので、中国語で説明する割合が増えている。	使用割合：10％ 朝鮮語では訳しづらいもの。テストを行う際も、中国語で書き取りテストを行っている。教師が中国語で言った単語を学生たちが日本語で書くというやり方。

	日本語	朝鮮語	中国語
ＫＢ	使用割合：40% 聞き取り、単語の説明、教科書の「話し合いましょう」という項目から、いろいろな例文を選んで、学生の聞き取り能力を確かめる。	使用割合：50% 文法項目の説明	使用割合：10% 一部分、難しい単語を説明するとき。単語を説明するときは朝鮮語より中国語を使った方がよい。
ＫＣ	使用割合：最も高い。 会話練習、聞き取りでは、簡単な日本語を使う。授業中は、なるべく日本語を使うようにしている。	使用割合：日本語の次に高い。 文法解説や練習問題	使用割合：最も低い。 朝鮮語で説明しても学生が理解できないとき。中国語の利点は、短く相手に伝えることができる点。中国語は朝鮮語で説明するときの補助的な役割。
ＫＤ	使用割合：15% 会話練習	使用割合：85% 文法解釈	使用割合：0% ほとんど使わない。
ＫＥ	使用割合：10% 会話、コミュニケーション	使用割合：70% 文法解釈	使用割合：20% 朝鮮語でわからないとき。単語を教えるとき中国語を使うと学生が理解しやすい。

また、5 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 6 として附す。

３－１－２．教師によって異なる三言語使用の割合

ここでは、梅河口市朝鮮族中学の教師が日本語の授業において、どのように三言語を使用しているのかについて明らかにし、考察する。まず日本語使用に関する語りを以下に示す。

授業では、日本語を使う割合が一番高い。主に会話練習の際、日本語を使っているが、この会話練習では、学生に教科書の本文をそのまま暗記させるのではなく、あらすじだけ頭の中に入れさせ、自由に会話させている。これは読解能力を身に付けるという点でも良い方法であると思う。また、文を作る力を付けることもでき、同時に自分で考える力も付く。さらに、一人ずつ本文の内容を自分の言葉でまとめさせたりもしている。このやり方で、日本語ができる学生はこれまで学習してきた文法も活かしながら、自分自身の言葉で

上手に話すことができるようになった。自分自身で日本語を話す方法を考える良いトレーニングになると思う。この教え方は、私自身が学生のとき受けた日本語の授業が暗記形式でつまらなかったということが一つの要因だ。（ＫＡ氏）

日本語は教科書の「話し合いましょう」という項目から、いろいろな例文を選んで、学生の聞き取り能力を確かめている。（ＫＢ氏）

授業中はなるべく日本語を使うようにしている。日本語の使用割合は最も高く、主に会話練習や聞き取り練習のとき、簡単な日本語を使っている。（ＫＣ氏）

日本語は会話練習で使用している。（ＫＤ氏）

日本語は主に会話、コミュニケーションの際に使用している。（ＫＥ氏）

日本語の使用割合は教師によって異なっている。ＫＡ、ＫＢ、ＫＣ各氏は日本語を使用する割合が高いが、ＫＤ氏、ＫＥ氏は 10%台である。これは、ＫＡ、ＫＢ、ＫＣ各氏が高級中学で日本語を教えているのに対し、ＫＤ氏、ＫＥ氏はまだ日本語能力が伴っていない初級中学の学生に教えている点が最も大きいと考えられる。また、ＫＡ氏、ＫＢ氏はともに日本人の教師が指導する研修会に参加した経験があり、ＫＣ氏は日本に 6 年間留学した経験があることから、これらの経験が日本語使用の割合を引き上げているのではないかと思われる。

各氏の語りから、日本語は主に会話練習、そして聞き取り練習の際に使われていることがわかる。「聞くこと」「話すこと」を意識した授業について、本田（2012）では「表現する内容は教科書の内容に固定されており、自分自身のことを表現するために言語を運用しているとはいえず、真のコミュニケーション力が身につく練習といえるかどうかは疑問が多い[185]」と指摘している。

しかし、ＫＡ氏は、日本語による会話練習が読解力や文を作る力を伸ばすことにもつながり、さらに言語運用能力にもつながっていると分析している。「日本語ができる学生はこれまで学習してきた文法も活かしながら、自分自身の言葉で上手に話すことができるようになった」ということから、言語運用能力を身に付けさせ、コミュニケーション能力を伸ばすというコミュニカティブ・アプローチの方法がとられていることがわかる。ＫＡ氏から日本語を教わったＫＦ氏も「授業は、自分の言葉で表現させる授業だったため、日本語の授業は私にとって、自己表現ができる場だった。自分自身の日本語レベルが上がると、同じ意味ではあるが、あえて別の表現を使ったりすることができるようになり、それがで

185　本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房　p. 199

きると達成感を感じることができた」と話しているように、授業の中でコミュニケーション能力を身に付けさせることで、学習者の自信にもつながっていることがわかる。
　続いて、朝鮮語使用に関する語りを以下に挙げる。

　朝鮮語は文法説明やその解釈、日本語と対応している朝鮮語がある場合に使用しているが、最近は朝鮮語で説明しても、それがどんな意味か理解できない学生が増えており、中国語で説明する割合が増えている。（ＫＡ氏）

　朝鮮語は文法を説明するときに使用している。（ＫＢ氏）

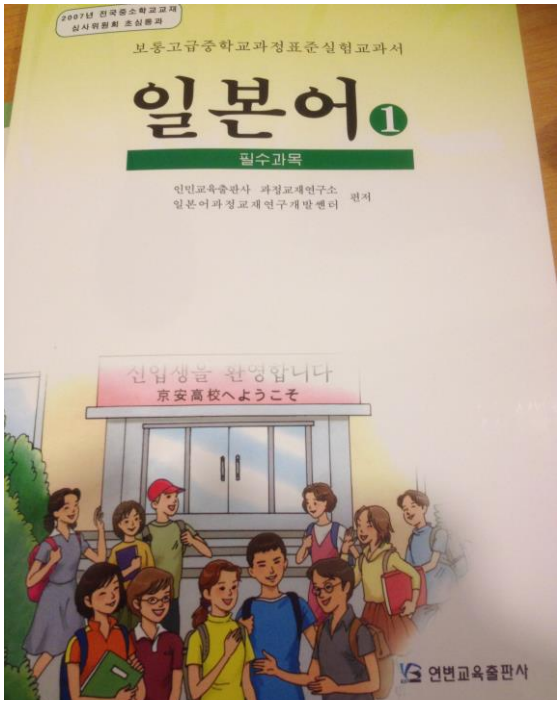
　朝鮮語は日本語の次に使用しており、主に文法解説や練習問題のときに使っている。（ＫＣ氏）

　授業で使う言葉は、85％が朝鮮語であり、主に文法解釈の際に使っている。（ＫＤ氏）

　朝鮮語は文法解釈のとき使っている。（ＫＥ氏）

　まず、朝鮮語の使用割合について見てみると、5 名中、3 名の教師が 50％を超えている。特に、初級中学の学生に対しては、まだ日本語で説明しても理解できないという点で、朝鮮語が多く使われていると考えられる。朝鮮語を使用しているのは、5 名の教師とも文法解釈をするときであり、ここから、日本語と朝鮮語の文法の近さを活用した教育方法がうかがえる。また、使用している教科書が朝鮮語のものである点も考慮しなければならない。教科書は『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語１』（人民教育出版社　課程教材研究所　日語課程教材研究開発センター編著）であり、それを延辺教育出版社が朝鮮語に翻訳したものである（写真 2 参照）。教師たちは現在の教科書について、以下のように評価している。

　教科書は、内容が改定されたことで、以前のものより良いものになっていると感じる。以前の教科書は主に文法、読解のみであったが、ここ数年の教育改革で日本語の教科書も新しいものに変わった。日本語は話す力、聞く力など、これまでになかったものが取り入れられている。以前はモデル教科書はあったが、正式なものとしては使われておらず、現在は新しいものを使用している。もちろん、何冊まで終わらせなければならないという規定はあるものの、学生たちに役立つ内容となっている。例えば、聞き取りや発音、そして作文なども今の教科書には含まれており、大学入試の問題（聴解 30 点分）にも対応したものとなっている。（ＫＡ氏）



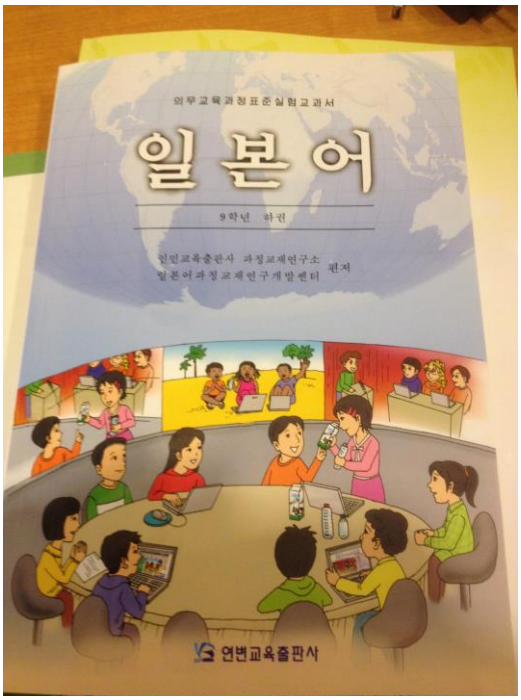


写真２：ＫＡ氏が高級中学で使用している教科書（左）。右は初級中学で使われている教科書（左右ともに筆者撮影）

以前の教科書に比べ、「聞く」「話す」能力を伸ばすことが意識された教科書となっていることがわかる。さらに、以下のような語りもあった。

日本人の教師は「作文」や「会話」授業を担当している。「会話」授業では、教科書の「言葉の広場」「こんな時あんな時どう言う？」の項目を担当する。（ＫＡ氏）

「話し合いましょう」という項目から、いろいろな例文を選んで、学生の聞き取り能力を確かめている。今の教科書は応用問題がたくさんある。（ＫＢ氏）

ここから、教科書の項目別に日本人教師と役割を分担していることもわかり、応用問題も豊富であることがうかがえる。

本田（2012）では、中国の教科書が「その時代の教育政策、言語政策の「目的」の変更によって、学習されなければならないとされる内容が大きく変化してきた[186]」と指摘し、「2000 年代以降になると新たに公布された各種の教学大綱において「文化」項目を取り扱い、異文化を理解することが外国語教育の目的の一つであると規定され、それを意識した

186 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房　p. 227

本文や会話文が増え[187]」たとしている。よって、国の政策が教科書の改訂につながり、教師の教育方法にも変化を与えていると考えられる。朝鮮族教師は朝鮮語により文法解釈がなされている教科書を使い日本語の授業を行っているわけだが、ＫＢ氏は朝鮮語でも文法解釈が難しい点を挙げている。

日本語の文法には難しさを感じている。例えば、「こと」や「もの」の違い（朝鮮語ではどちらも「것」）など、朝鮮語とズレがある日本語表現はやはり難しい。さらに副詞、例えば「ちっとも」と「少しも」の違いなどは分かりにくい。他には「ひらく」と「あける」の違いも難しい。（ＫＢ氏）

日本語と朝鮮語は文法的に近いとは言え、すべて解釈できるとは限らず、説明が難しい文法事項が存在してることがわかる。それに加え、ＫＡ氏の「最近は朝鮮語で説明しても、それがどんな意味か理解できない学生が増えており、中国語で説明する割合が増えている」という語りから、学習者である学生の朝鮮語能力の低下により、朝鮮語だけではうまく日本語を教えることができない状況であることがうかがえる。次に各教師の中国語使用についての語りを以下に挙げる。

中国語は、朝鮮語では訳しづらい日本語を訳すときに使ったり、書き取りテストを行う際に中国語を使用している。これは、私が中国語で言った単語を学生たちが日本語で書くという形式で行っている。（ＫＡ氏）

中国語は、一部分、難しい単語を説明するときに使っている。単語を説明するときは朝鮮語より中国語を使った方がよい。朝鮮族にとって日本語の漢字は難しくない。なぜなら、中国語の漢字は幼稚園のころから学んでいるからだ。（ＫＢ氏）

中国語を使用する割合は最も低いが、朝鮮語で説明しても学生たちがわからなかったときに朝鮮語の補助的なものとして使用している。中国語の利点は、短く相手に伝えることができる点である。例えば、「テレビ」や「冷蔵庫」などの単語は中国語の方が短いので、朝鮮語で話していても、それらの単語については中国語で言ったりする。また、学生たちに「끼치다, 신세주다」（お世話になる）という言葉を使っても、通じない場合がある。そのときは中国語で「添麻烦」と言えば、通じる。（ＫＣ氏）

中国語はほとんど使っていない。日本語の文法を教える際、学生たちは朝鮮語の文法自体ができないから時間がかかってしまう。（ＫＤ氏）

---

[187]本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 227

中国語は学生たちが朝鮮語でわからないときに使用している。私が中国語を教えていたときは、漢字中心なので、教科書の内容を理解させるため、たくさん読ませていた。声に出して読ませたり、黙読させたり、作文を書かせたりしていた。中国語を教えていた経験は、日本語の授業において、特に日本語の単語を教えるときに活かされている。中国語がわかる学生たちは中国語で日本語の単語の説明を受けると理解しやすい。（ＫＥ氏）

以上の語りから、中国語活用は三つあると考えられる。一つ目は、朝鮮語では説明しづらい文法表現を解釈するとき、二つ目は、漢字のある単語を説明するとき、そして三つ目は朝鮮語で説明しても学生がわからないときである。中国語の活用は「漢字」という日本語との共通点を最大限に活かしながら、文法解釈の面では、朝鮮語活用を補助する役割を持ち、さらに、学習者の朝鮮語能力を補助する役割も果たしていることがわかる。

以上、梅河口市朝鮮族中学の日本語教育方法について、教師の三言語使用について述べたが、梅河口市朝鮮族中学の各教師の三言語を使用する割合がそれぞれ異なることに注目したい。日本語使用の割合が最も高いのはＫＡ氏、そしてＫＣ氏である。またＫＢ氏も 40%と朝鮮語とほとんど変わらない割合で使用していることがわかる。これはすでに述べたとおり、3 名の教師とも高級中学の学生に対して日本語を教えているという点が挙げられる。初級中学の段階で日本語の基礎を学んだ学生たちに対しては、できるだけ日本語環境に身をおかせ、会話し、聴く機会をたくさん与えることで、日本語でコミュニケーションがとれるということを念頭においた教育方法がとられていることがわかる。

さらに付け加えるならば、ＫＡ氏、ＫＢ氏はともに日本人教師が指導する日本語教育の研修会に参加しており、そこで日本語による教育方法を学んでおり、ＫＣ氏は 6 年間も日本に留学していた経験があることから。これらの経験が日本語中心の授業を行っている要因とも考えられる。

一方、朝鮮語使用の割合であるが、最も高いのはＫＤ氏で 85%、次に多いのは 70%のＫＥ氏である。二人の教師に共通するのは、初級中学の学生に対して日本語を教えている点である。つまり、日本語の基礎がまだできていない初級中学の学生に対しては、朝鮮語中心で教えていることがわかる。

次に、中国語使用の割合であるが、最も高いのはＫＥ氏であり日本語使用の割合を上回っている。これは、ＫＥ氏が元中国語教師であることが大きいと考えられる。ＫＥ氏の語りの中にも「中国語を教えていた経験は、日本語の授業において、特に日本語の単語を教えるときに活かされている。中国語がわかる学生たちは中国語で日本語の単語の説明を受けると理解しやすい」とあり、中国語の教授経験が日本語を教える際にも活かされていることがわかる。

以上のように、梅河口市朝鮮族中学の日本語教育の特徴としては、教師によって三言語を使用する割合が異なるという点が挙げられる。

３－１－３．小括

3－1 では、梅河口市朝鮮族中学の教師へのインタビューをもとに、その教育方法について、主に三言語使用に注目しながら考察を行った。インタビューを行った 5 名の教師はすべて日本語、朝鮮語、中国語という三つの言語を使用し、日本語は会話練習や聞き取り練習の際に使われ、朝鮮語は主に文法解釈、そして中国語は漢字のある単語を説明する際に活用され、さらに朝鮮語の補助的な役割を果たしていることが明らかになった。つまり、三言語によってそれぞれ役割が異なっており、その役割は文法は朝鮮語、漢字は中国語のように日本語の特性によって分担がなされていると同時に、学生が朝鮮語で聞き取れないときは、中国語を使用するという補助的な役割も見られる。ここに朝鮮族の三言語使用による特徴が表れていると言える。

また、梅河口市朝鮮族中学の教師の特徴としては、使用言語の割合が異なることが挙げられる。その要因としては、ＫＡ氏、ＫＢ氏のように日本人教師による日本語教育研修を受けたことで、これまでの教育方法に日本語による教育方法を加えることができたこと、そしてＫＣ氏のように日本への留学経験が日本語による教育方法を可能にしていることが考えられる。また、中国語についてはＫＥ氏のようにもともと中国語教師であったことで、中国語を活用した日本語教育を可能にしており、それは他の教師よりも中国語使用の割合が高いことに表れている。

梅河口市朝鮮族中学では、学生の日本語能力に加え、教師自身の研修経験や留学経験、そして教授経験などが三言語使用の割合に大きな影響を与えていると考えられる。

３－２．鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語教育方法

鉄嶺市朝鮮族高級中学は、1949 年に創立された朝鮮族学校であり、全校生徒は約 1000 名、教師は 133 名いる。朝鮮族学校であるにもかかわらず、全校生徒の 7 割は漢族であり、残りの 3 割が朝鮮族である。クラスは 30 クラスあり、そのうち 9 クラスは漢族普通クラス、6 クラスは中韓クラス、5 クラスは韓国留学生クラスである。韓国人留学生は現在 50 名ほどいる。日本語教師は 5 名在籍しており、すべて朝鮮族教師である。また青年海外協力隊から派遣されている日本人教師が 1 名いる。このうち、4 名の朝鮮族教師に直接インタビュー調査することができた。学生は第一外国語として日本語か英語を選択することができ、日本語を選択している学生は初級中学の学生が 24 名、高級中学の学生が 75 名、計 99 名いる。外国語科目は週に 7 時間行われている。

写真 3：鉄嶺市朝鮮族高級中学（筆者撮影）

３－２－１．鉄嶺市朝鮮族高級中学の教師に対するインタビュー調査

ここでは鉄嶺市朝鮮族高級中学で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 15 に示す。

表 15：鉄嶺市朝鮮族高級中学・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 5 月 18 日（月）、19 日（火）
対象者	朝鮮族の日本語教師 4 名（すべて女性）
使用言語	日本語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	鉄嶺市朝鮮族高級中学
インタビューの時間	1 人あたり 1 時間から 1 時間半

調査は、筆者の大学で日本語を教えている朝鮮族教師の紹介で可能となった。対象者は日本語を教えている 4 名の朝鮮族教師であり、すべて女性であった。インタビューは日本語で行った。また半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 1 時間から 1 時間半であった。次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 16 に示す。

表 16：鉄嶺市朝鮮族高級中学・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＬＡ （20 代後半、女性）	高級中学 2 年生の日本語授業を担当。 2011 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学で日本語を学習した。（2001～2007 年） 大学でも日本語を専攻。 JLPT 1 級、J. TEST B 級、中国専門日本語 8 級、4 級取得。
ＬＢ （40 代前半、女性）	初級中学 3 年生の日本語授業を担当。 1996 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1985～1991 年） 大学でも日本語を専攻。 日本語の資格なし。
ＬＣ （50 代前半、女性）	初級中学 2 年生の日本語授業を担当。 1985 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1978～1982 年） 大学でも日本語を専攻。 日本語の資格なし。
ＬＤ （20 代半ば、女性）	高級中学 1 年生の日本語授業を担当。 2015 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学ともに漢族の学校に通ったため英語を学習。 大学の専攻は日本語。大学から日本語を学習する。 日本語の資格なし。

ＬＡ、ＬＢ、ＬＣ各氏は、第 2 章において、インタビュー調査結果を示したが、ここでは各教師自身の教育方法についてのものを示す。ＬＡ氏は 2001 年から 2007 年までの 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、2011 年から鉄嶺市朝鮮族高級中学で日本語を教えている。現在は高級中学 2 年生の授業を担当している。ＬＢ氏は 1985 年から 1991 年まで 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1996 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は初級中学 3 年生の日本語授業を担当している。ＬＣ氏は 1978 年から 1982 年までの 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1985 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は初級中学 2 年生の日本語授業を担当している。ＬＤ氏は初級中学、高級中学ともに漢族の学校に通ったため、朝鮮語は話せず、外国語も日本語ではなく英語を学習した。大学の専攻は日本語であり、大学から日本語学習を始めた。2015 年から現在の学校で日本語を教えており、高級中学 1 年の日本語授業を担当している。次に、インタビューした教師の教授用語についてまとめたものを表 17 に示す。

表 17：鉄嶺市朝鮮族高級中学・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＬＡ（20 代後半） 中国語・朝鮮語 両方できる	高中 1 年生のときは60%使用 高中2,3年生のときは10%使用 あいさつなど。新しい課に入る際などに使う。高中2年生になると、受験対策で文法、読解の説明が中心になるため、10%ぐらいしか使わなくなる。	高中 1 年生のときは20%使用 高中2,3年生のときは45%使用 日本語を翻訳するときなど。擬音語・擬態語の説明。	高中 1 年生のときは20%使用 高中2,3年生のときは45%使用 漢字を見るだけで意味がわかるような単語は中国語で説明する。単語も中国語で覚えやすい場合は、中国語で覚えさせるようにしている。
ＬＢ（40 代前半） 中国語・朝鮮語 両方できるが､朝鮮語の方が得意	問題があって、その問題について説明するときは、日本語と朝鮮語両方使う。	使用割合：60%以上 主に文法を説明するときに使っている。朝鮮語で説明してわからなければ中国語で説明している。	朝鮮語で説明しても学生たちがわからない場合は中国語で説明している。
ＬＣ（50 代前半） 中国語・朝鮮語 両方できる	使用割合：10%	使用割合：20% 文法、特に助詞の説明など。本文の内容は朝鮮語で翻訳している。昔の学生は朝鮮語ができたが、今の学生にとって朝鮮語は外国語みたいな感じ。朝鮮語もよくわかっていない。	使用割合：70% 単語は朝鮮語、中国語の順で翻訳。 日本語とともに朝鮮語も一緒に覚えさせるようにしている。中国語の漢字と日本語の漢字で違うところは、その違いを強調して教えるようにしている。
ＬＤ（20 代半ば） 中国語のみ できる。	使用割合：5% 単語を説明したりするとき。日本語で言ってもわからないときは、中国語で説明。	使用割合：0% 朝鮮語は自分自身が話せないので、使っていない。	使用割合：95% 受身は「被」、使役は「让」で教えている。しかし、助詞を教えるのは難しい。

また、4 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 7 として附す。

３－２－２．中国語使用による教育方法

ここでは、鉄嶺市朝鮮族高級中学の教師が日本語の授業において、どのように三言語を使用しているのかについて明らかにし、考察する。まず日本語使用に関する語りを以下に示す。

授業中、使用する言語の割合は、高中 1 年生のときは、60%は日本語を使い、朝鮮語と中国語はそれぞれ 20%ずつ使っている。しかし、高中 2 年生になると、受験対策をしなければならないため、それまでの会話中心の授業から文法、読解中心の授業になってしまうので、日本語の文法事項を説明する時間が増え、朝鮮語、中国語を使用する割合が高くなる。そのため日本語の使用割合は 10%にまで下がり、逆に朝鮮語、中国語は合わせて 90%ほど（それぞれ 45%くらい）使うようになる。日本語はあいさつや、新しい課に入るときに使う。（ＬＡ氏）

授業中、ある問題があって、その問題について説明するときは日本語と朝鮮語を交えて使っている。（ＬＢ氏）

単語を説明したりするときは日本語を使ったりするが、学生たちに日本語で言ってもわからないときは、やはり中国語で説明する。（ＬＤ氏）

この中で注目したいのはＬＡ氏の語りである。高級中学 1 年生のときは日本語を使う割合が 60%であるのに、高級中学 2 年生になると受験対策のため、朝鮮語、中国語を使用する割合が 90%に上っている。同じ高級中学の学生であっても、学年によって使用言語の割合が異なっているのである。学年が上がることで生じる日本語の「受験日本語化」が、使用する言語に大きな影響を与えていることは、朝鮮族学校の日本語科目が受験を念頭に置いているということを浮き彫りにしている。

しかし、ＬＡ氏以外の教師は学年にかかわらず、日本語を使用する割合は低くなっており、日本語中心の授業は行われていないことがわかる。

続いて朝鮮語使用に関する語りは以下のとおりである。

朝鮮語を使うときは、主に日本語を翻訳するときである。例えば、日本語で「～まま」という表現を説明する場合、朝鮮語では「ㅋ 대로」または「～채로」という表現を用い、例えば、「靴を履いたまま寝てしまった」という文は、朝鮮語では「신발을 신은 채로 자버렸다」となるが、中国語では「着」を用い、「穿着鞋睡着了」となる。この場合、中国語よりも朝鮮語で説明した方がしっくりくるので、学生には朝鮮語で説明している。

また、擬音語・擬態語などは、中国語よりも朝鮮語の方がいろいろな表現があるので、活用したりしている。例えば、日本語で「ぐるぐる」は朝鮮語では「빙글빙글」、「きらき

ら」は「반짝반짝」、「べたべた」は「끈적끈적」となる。中国語を例に出すと、日本語で「ゆらゆら」は「晃动貌」という表現があるが、この表現はあまり使われておらず、やはり朝鮮語の「흔들흔들」や「한들한들」といった表現の方がぴったりくる。

自動詞・他動詞は、例えば日本語の「始まる」（自動詞）は「시작되다」、「始める」（他動詞）は「시작하다」と、日本語同様、朝鮮語では自動詞と他動詞の区別がある。一方、中国語ではどちらも「开始」になるため、日本語の自動詞・他動詞の説明は朝鮮語を使っている。（ＬＡ氏）

授業で使う言語は、全体の 60%以上は朝鮮語を使っている。主に文法を説明するときに使っている。使役表現は、朝鮮語の「～를/을 시키다」「～게 하다」を使っている。受身表現は、基本的に中国語の「被」を用いている。しかし、「運動会が開かれる」のような場合は、朝鮮語の「개최되다」や「열리다」の方が説明しやすいが、例えば「子供に泣かれる」など迷惑の受身表現などは朝鮮語でも中国語でも説明するのが難しい。自動詞・他動詞は、区別のある朝鮮語で教えており、願望表現も朝鮮語を使う。例えば、「～たい」＝「～고 싶다」、「～したがる」＝「～고 싶어하다」というように、日本語に対応する朝鮮語があるので説明しやすい。

学生たちは朝鮮語を読めることは読めるものの、聞き取れないことが多い。その場合は、中国語で説明したりする。学生たちの朝鮮語レベルが落ちていることは、日本語の助詞の問題をよく間違えることからもわかる。学生たちの朝鮮語能力の低下は、学生たちの言語環境が大きな原因のひとつだと思う。（ＬＢ氏）

今の学生たちにとって朝鮮語は外国語と同じだ。それほど朝鮮語が話せない学生が多い。朝鮮語は、全体の 20%ほどしか使っていない。朝鮮語は文法、特に助詞の説明の際には活用している。また、本文の内容を朝鮮語で翻訳するときなどに使っている。「大変だ」という形容詞を説明する場合は、朝鮮語の「힘들다」を使う方が良い。中国語で「大変だ」にぴったり合う言葉がないからだ。しかし、あまりに朝鮮語に頼りすぎると、日本語のレベルが高くなるにつれて、反対に邪魔になってしまう恐れもある。例えば、「具合が悪い」は朝鮮語では「몸이 아프다」となるが、これを日本語で直訳すると「体が痛い」となり、違う意味になってしまう。（ＬＣ氏）

私は朝鮮語がしゃべれないために、授業で使う言葉はほとんどが中国語である。（ＬＤ氏）

語りの中には、詳しい朝鮮語の使用方法が見られるが、擬音語・擬態語、自動詞・他動詞、助詞など、中国語にはあまり見られないもの、区別できないものについては朝鮮語を使用して教えていることがわかる。また、ＬＣ氏の語りの中に出てくる「大変だ」のように、ひとつの単語レベルでも、中国語では当てはまる表現がない場合、朝鮮語を使用して

いることがわかる

さらに、ＬＢ氏の語りにもあるように、受身表現は基本的に中国語の「被」を使いながらも、「運動会が開かれる」のような場合は朝鮮語を使用している。つまり、同じ文法表現の中でも朝鮮語、中国語の使い分けが行われていることがわかる。

このように、朝鮮語だけではなく中国語ができることで日本語を教える際にはプラスの面が大きいと思われるが、その一方で、ＬＢ氏が話しているように、学生の朝鮮語レベルの低下が、日本語の助詞の問題を間違える点に表れている。これは、朝鮮語能力低下というマイナスの面を表している。つまり、朝鮮語ができるのであれば、朝鮮語と日本語に共通する助詞を最大限に活かすことができるのであるが、それができていないということは、学生の朝鮮語能力が十分に備わっていないことを示している。

それでは、中国語はどのように使用されているのだろうか。以下に示す。

中国語は主に練習問題の説明をするとき、文法の説明をするとき、そして、漢字を見るだけで意味がわかるような単語は中国語で説明する。中国語で覚えやすい場合は、中国語で覚えさせるようにしている。例えば、「見聞」「故障」「意思」などの単語は、学生たちにとっては単語を見るだけで、その意味がわかる。

日本語の使役表現「させる」は朝鮮語の「시키다」、中国語の「让」どちらも使っている。受身表現は中国語の「被」を使って説明している。使役受身表現については、例えば、「私は嫌いな野菜を食べらせられた」という文の場合、朝鮮語では説明しにくいので、中国語の「我不得不吃不喜欢的蔬菜」のように「～せざるを得ない」を表す「不得不～」を用いる。可能表現は朝鮮語の「할 수 있다、할 줄 알다」、中国語の「能、会」どちらも使っている。「もうすぐ授業が始まります」という表現については、中国語の「快上课了」、朝鮮語の「이제 곧 수업이 시작됩니다」どちらも使っている。（ＬＡ氏）

中国語は、学生に対して朝鮮語で説明してもわからないときに使っている。また、例えば「間に合う」という表現の場合、中国語では「来得及」「赶趟」を使うが、朝鮮語では「제 시간（제 때）에 대이다（가닿다）」（韓国語では「대다」）という。この場合は、中国語の方が説明しやすい。受身表現は、基本的に中国語の「被」を用いている。（ＬＢ氏）

授業の進め方は、基本的に中国語で説明し、その後、「これは朝鮮語では～という」というように朝鮮語も日本語と一緒に覚えさせるようにしている。中国語を使う割合は 70%ほどである。例えば、「アメリカ」という単語が出てきた場合、まずは朝鮮語の「미국」に変換し、最終的に中国語の「美国」に訳す。また漢字に関して言えば、中国語の漢字と日本語の漢字で違うところは、その違いを強調して教えるようにしている。（ＬＣ氏）

受身表現は「被」、使役表現は「让」、推量表現の「好像（～ようだ）」「应该（～だろう）」のように日本語に対応する中国語があるため教えやすいが、助詞など中国語にはないものを教える際は難しさを感じている。また、単語を説明したりするときは日本語を使ったりするが、学生たちに日本語で言ってもわからないときは、やはり中国語で説明する。
（ＬＤ氏）

以上の語りから、中国語を使用しているものとしては、まず漢字が挙げられる。漢字のある単語の中で、中国語と日本語で漢字も意味も一致する場合は、そのまま教えているが、中国語の漢字は簡体字であり、日本語に見られる繁体字の漢字とは一致しない漢字も多いため、ＬＣ氏のように中国語の漢字と日本語の漢字で異なる場合は、その違いを強調して教えていることがわかる。また、中国語を単独で使うのではなく、ＬＡ氏のように、使役表現や可能表現などを説明するときに中国語と朝鮮語両方を使っていることがわかる。これは、まず一つ目の効果として、朝鮮語では理解できない学生、または中国語では理解できない学生どちらも理解できるようにする点が挙げられる。もうひとつは、朝鮮語と中国語、どちらの文法解釈でも可能である表現であっても、あえて両方の言語で翻訳し説明することで、学生の理解をより深めるという効果が考えられる。日本語は朝鮮語及び中国語によって解釈が可能であるため、日本語を理解させるだけではなく、朝鮮語の理解にもつながっているのがＬＣ氏の事例である。日本語の単語について、まず朝鮮語に翻訳し、最後に中国語に翻訳することで、朝鮮語が苦手な学生にとっては朝鮮語の理解にもつながっている。つまり、日本語の授業が朝鮮語の授業にもなっていることがわかる。学生たちにとって最もわかりやすい中国語によって、日本語と朝鮮語という二つの言語を学ぶ場所となっているのである。

以上、鉄嶺市朝鮮族高級中学における三言語使用による教育方法について述べたが、同校の教育方法の特徴としては、中国語を使用する割合が高いことが挙げられる。その要因としては、日本語学習者である学生たちの中国語能力が朝鮮語能力より高いという点が挙げられる。この点については第 4 章においても検討する。また中国語による日本語教育の方法を可能にするためには、教師の中国語能力が伴っていなければならない。ＬＤ氏は漢族の学校に通っていたため、中国語は最も堪能である。ＬＡ氏とＬＣ氏も朝鮮語と同じくらい中国語ができるのだという。しかし、ＬＢ氏は中国語ができるものの、朝鮮語ほどはできないために、それが朝鮮語使用の割合が最も高いことの要因であると考えられる。また、教科書の言語にも特徴が表れている。教科書についての語りは以下のとおりである。

朝鮮語の教科書を使うのか中国語の教科書を使うのかは、学生たちの言語能力を考慮して教師たちで決めている。しかし、初中から高中に上がる際の試験問題は、日本語を朝鮮語に翻訳させる問題が出るので、現在は初級中学では朝鮮語の教科書を、高級中学では中国語の教科書を使用している。高中に上がると、教科書が朝鮮語のものから中国語のもの

に変わるため、学生たちは高中１年のときには少々混乱したりもするが、初中のころから中国語で日本語の文法を説明したりもするので、それほど大きな混乱はない。（ＬＡ氏）

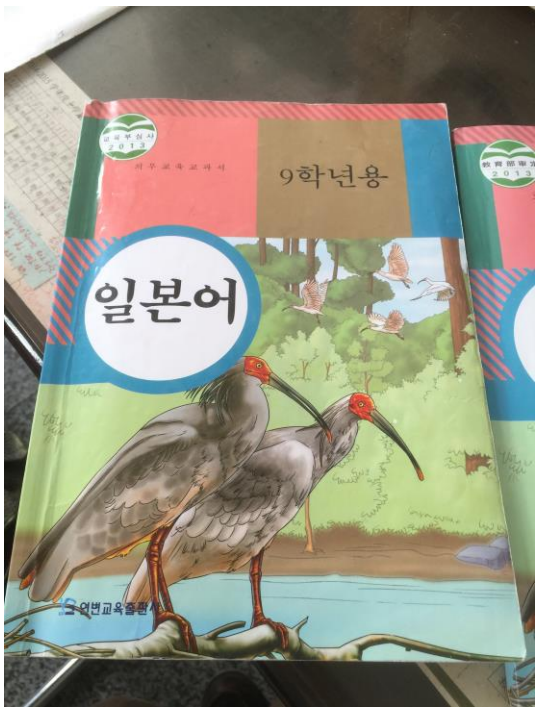


写真４：鉄嶺市朝鮮族高級中学で使用されている日本語の教科書
左が中国語版、右が朝鮮語版（筆者撮影）

ＬＡ氏の話から、鉄嶺市朝鮮族高級中学では、高級中学の入学試験問題が朝鮮語で出題されるために、教科書は朝鮮語のものを使い、高級中学に上がってからは中国語のものに変えていることがわかる。つまり、学生たちは教科書の面では、初級中学の段階では朝鮮語で日本語を学び、高級中学になって中国語で日本語を学んでいることがわかる。教科書の言語と教師の教授用語が異なる点は、改革開放期の朝鮮族の日本語教育においても見られたが、それは朝鮮語の教科書がまだ普及していないことが大きな原因であった。しかし、鉄嶺市朝鮮族高級中学では、朝鮮語、中国語どちらの教科書を使うかは教師たちの話し合いという現場レベルで決定され、それは学生の言語能力ではなく、試験問題の言語に合わせているというところに特徴がある。さらに、注目すべきは、初級中学において教師は教科書が朝鮮語であるにもかかわらず中国語でも日本語の文法解釈をしている点である。ＬＣ氏は初級中学で日本語を教えているが、中国語を使用する割合が 70%であることからもわかる。教科書では朝鮮語、教授用語としては主に中国語が使われるため、学生たちは初級中学の段階で、両言語による日本語理解が可能となるため、高級中学になって教科書が中国語のものに変わっても対応できるのである。

３－２－３．小括

3－2 では、鉄嶺市朝鮮族高級中学で行われている日本語教育の方法について、教師の三言語使用に注目しながら考察した。鉄嶺市朝鮮族高級中学の特徴としては、中国語による日本語教育が挙げられる。「漢語化」により、朝鮮族学生にとって、朝鮮語が日本語同様に「外国語」になっており、そのため日本語の授業においても教師が朝鮮語だけで説明しても理解できないため、中国語を使用する割合が高くなっていることがわかった。その結果、日本語をまず朝鮮語で翻訳し、最後に中国語で解釈することで、日本語の授業が朝鮮語の授業にもなっている状況がうかがえた。しかし、この授業は日本語教師に十分な中国語能力、さらには朝鮮語能力が備わってこそ可能となる。特に教師が、文法的に日本語との共通点が多い朝鮮語を使えない場合は、助詞など中国語にはあまり見られない文法項目を説明することが困難である状況が見られた。

学生、そして教師ともに中国語を使用しているものの、日本語の文法表現の性質に合わせて朝鮮語と中国語を使い分けており、例えば、同じ受身表現であったとしても中国語の「被」を基本としながらも、その中で朝鮮語による説明の方が容易に解釈できる場合は朝鮮語で説明していることがわかった。日本語の文法表現について、朝鮮語または中国語で翻訳してみて、どちらを使って説明する方が良いのか、選択していることがうかがえ、両言語で解釈が可能な場合は、両言語で説明し、学生の理解を深めていることがわかった。

鉄嶺市朝鮮族高級中学の授業においては中国語を使用する割合が高くなっているものの、朝鮮語と中国語をどちらも使用することで、日本語の理解を深め、さらには朝鮮語の理解も深めるという教育方法がとられていることがわかった。

３－３．吉林市朝鮮族中学校の日本語教育方法

吉林市朝鮮族中学校は 1949 年に創立、現在全校生徒 1400 名、教師数は 155 名、30 クラスを有している。日本語学習者は 317 名おり、教師は 6 名、クラスは 11 クラスある。外国語科目は選択制であり、初中 1 年のとき（全 3 クラス）に英語と日本語両方を学習する。初中 2 年生に上がるときに、英語か日本語かを選ぶ方式である。現在、日本語クラスは初中 2 年、3 年は 1 クラスずつ、高中 1 年、2 年、3 年に 2 クラスずつ、計 11 クラスある。日本語の授業は月曜日から金曜日まで毎日 1 コマ（40 分）行われている。

実際に朝鮮族の日本語教師に学校の話を聞いたところ、かつては青年海外協力隊の隊員も学校に来てくれていたが、今はお金がなく、募集することもできていない状況だという。学校は隊員の寮費や生活費を出すことも難しい状況である。

また、学校には漢族の学生もいる。その割合は全体の 10%ほどであり、漢族の学生たちは朝鮮語もできる。

写真 5：吉林市朝鮮族中学校（筆者撮影）

３－３－１．吉林市朝鮮族中学校の教師に対するインタビュー調査

ここでは吉林市朝鮮族中学校で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 18 に示す。

表 18：吉林市朝鮮族中学校・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 5 月 21 日（木）
対象者	朝鮮族の日本語教師 3 名（すべて女性）
使用言語	日本語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	吉林市朝鮮族中学校
インタビューの時間	1 人あたり 1 時間から 1 時間半

筆者の朝鮮族の友人が吉林市朝鮮族中学校の卒業生であり、その友人の日本語教師がＪＡ氏であったため、ＪＡ氏を紹介してもらい、調査を実施するにいたった。対象者は日本語を教えている 3 名の朝鮮族教師であり、すべて女性であった。インタビューは日本語で行った。また半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 1 時間から 1 時間半であった。次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 19 に示す。

表 19：吉林市朝鮮族中学校・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＪＡ （50 代前半、女性）	高級中学 1 年生の日本語授業を担当。 1983 年から朝鮮族学校で日本語を教え始め、 1988 年から現在の学校で日本語を教えている。 高中のとき日本語の学習を 2 年弱くらいした。（1977～1979 年） 大学でも日本語を専攻。 日本語の資格なし。
ＪＢ （50 代前半、女性）	高級中学 3 年生の日本語授業を担当。 1996 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1984 年卒業） 大学では朝鮮語を専攻。 日本語の資格なし。
ＪＣ （20 代後半、女性）	初級中学 1 年生、2 年生の日本語授業を担当。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（2000～2006 年） 大学でも日本語を専攻。 JLPT 1 級取得。

ＪＡ、ＪＢ、ＪＣ、各氏は第 2 章において、インタビュー調査結果を示したが、ここでは各教師自身の教育方法についてのものを示す。

ＪＡ氏は高級中学に通った 2 年半の間、日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1983 年から 5 年間、永吉県第二十八中学で日本語を教え、1988 年から吉林市朝鮮族中学校で教えている。現在は高級中学 1 年生の授業を担当している。

ＪＢ氏は 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学では朝鮮語を専攻し、1989 年から吉林市永吉県口前鎮の朝鮮族学校で日本語を教え始め、1996 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は高級中学 3 年生の日本語授業を担当している。

ＪＣ氏は 2000 年から 2006 年までの 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、2009 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は初級中学 1，2 年生の日本語授業を担当している。インタビューした教師の教授用語についてまとめたものを表 20 に示す。また、3 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 8 として附す。

表 20：吉林市朝鮮族中学校・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＪＡ（50 代前半） 中・朝両方できるが、朝鮮語の方が得意		使用割合：99% 朝鮮語の単語もあまりわからないという学生がほとんどなので、その場合は、朝鮮語も同時に教えるようにしている。	使用割合：1%
ＪＢ（50 代前半） 中・朝両方できるが、朝鮮語の方が得意	会話など。「本を貸してください」など簡単な日本語。簡単な教室用語。 高中1,2年生のときは日本語でもしゃべったりするが、高中 3 年生になると受験のために日本語を使わなくなってしまう。	使用割合：90% 文法の説明など。しかし、学生たちは朝鮮語より中国語の方ができる。	簡単な単語の意味を中国語で書いたりする。
ＪＣ（20 代後半） 中・朝両方できる。		使用割合：90% わからないときは中国語で説明	使用割合：10% 他のクラスの教師は中国語で教えている。

３－３－２．朝鮮語、中国語の多様な使用方法

ここでは、吉林市朝鮮族中学校の教師が日本語の授業において、どのように三言語を使用しているのかについて明らかにし考察する。まず日本語の使用に関する語りを以下に示す。

授業では作文に力を入れている。作文は、語句を翻訳したり、暗記したりするのに役立つ。例えば、日本語は「気」に関する熟語が多い。その場合は、「気」のつく他の熟語、例えば、「気にする、気になる、気にかかる」などもセットで覚えさせたりしている。
（ＪＡ氏）

日本語を使うのは、会話練習のときである。例えば、「本を貸してください」など簡単なものは、日本語を使っている。さらに簡単な教室用語などは日本語で行っている。しかし、

高中 1,2 年生のときは日本語で会話する機会が比較的多いが、高中 3 年生になると、受験対策のために授業中、日本語を使う割合が減ってしまう。（ＪＢ氏）

まだ初中で習い始めたばかりの学生が多いため、日本語では教えていない。（ＪＣ氏）

ＪＡ氏のように、日本語でよく使われる表現をセットにし、その後で覚えさせていることから、日本語が言葉を覚える際に、まず整理する役割を担っていることがわかる。しかしながら、それはある程度日本語ができる高級中学の学生に対して可能な方法であると考えられる。ＪＣ氏が担当している初級中学の学生の場合は、日本語を習い始めた学生が多いことから、日本語は使われていないことがわかる。また、ＪＢ氏の語りからは、日本語が教室用語の役割を担っている一方で、鉄嶺市朝鮮族高級中学でも見られたように、学生の受験が迫ると使用される割合が低くなってしまう状況がうかがえる。つまり、初級中学において 3 年間日本語の学習をし、基礎ができると、日本語も活用しながら単語を覚えることもできるようになるが、受験が迫る高級中学 3 年になると文法中心の授業になり、日本語による会話が減っていることがわかる。学年が上がるにつれて、日本語を使用する割合が増え続けるのではなく、受験のために最後は使用割合が下がるという点に「受験日本語」の影響が顕著に表れていると言える。

次に朝鮮語使用についての語りは以下のとおりである。

授業は基本的に朝鮮語を使って行っているが、朝鮮語の単語もあまりわからないという学生がほとんどなので、その場合は、「日本語 → 朝鮮語 → 中国語」のように、朝鮮語も同時に教える形にしている。日本語の使役表現は朝鮮語の「～를/을 시키다」「～게 하다」を使用している。受身表現については、例えば「教師に言われます」は、朝鮮語で「선생님한테 말을 듣습니다」と翻訳して教えている。また、朝鮮語には日本語同様、自動詞・他動詞の区別があるため、日本語と同じように朝鮮語の自動詞・他動詞も一緒に教えている。また、自動詞・他動詞それ自体だけで教えるのではなく、主語や目的語を伴った形、例えば「授業をはじめる（수업을 시작하다）」〔他動詞〕、「授業がはじまる（수업이 시작되다）」〔自動詞〕の形で教えている。また、初級中学１年生の学生の例であるが、日本語の「です」を学生たちは、ハングルで「데스」と書いて覚えている。（ＪＡ氏）

授業での使用言語で最も多いのは、やはり朝鮮語であり、その割合は全体の 90%ほどである。朝鮮語を使用するのは主に文法の説明などである。授業では、日本語を教える際に、朝鮮語も教えるようにしている。日本語を翻訳するときは、「日本語 → 中国語」ではなく、「日本語 → 朝鮮語 → 中国語」の順で行っている。（ＪＢ氏）

私は朝鮮語で授業を行い、また、使用している教科書も朝鮮語のものであるが、他の 2 クラスで教えている教師は中国語しかできない教師であるため、中国語で授業を行い、しかも教科書も朝鮮語ではなく、中国語のものを使用している。日本語と朝鮮語は文法的に似ているので、私自身は朝鮮語で教える方が良いと考えている。私は授業中、朝鮮語を 90%、中国語を 10%ほど使っている。学生に対し、まず朝鮮語で説明するが、それでも分からない場合は中国語で説明している。（ＪＣ氏）

以上の語りから、3 名の教師ともに基本的に朝鮮語による日本語授業を行っていることがわかる。興味深いのは、ＪＣ氏の語りの中で、同じ日本語教師であっても朝鮮語ができない教師のクラスでは、中国語による授業が行われ、さらに教科書も中国語のものになっている点である。鉄嶺市朝鮮族高級中学では、初級中学、高級中学で使用する教科書の言語が異なっていたが、吉林市朝鮮族中学校では、同じ学年であっても、教師の言語能力によって教科書の言語が決められていることがわかる。

一方、ＪＡ氏は高級中学 1 年のクラスを担当しているが、初級中学で中国語によって日本語を学んで来た学生に対して、朝鮮語も同時に教えていることがわかる。また、高級中学 3 年の授業を担当しているＪＢ氏も同様の方法で朝鮮語も教えている。つまり、吉林市朝鮮族中学校においては、鉄嶺市朝鮮族高級中学のように日本語の授業が朝鮮語の授業の役割も担っており、さらに、初級中学では中国語による日本語の解釈を身に付けた後で、高級中学において、朝鮮語も一緒に学びながら、同時に朝鮮語による日本語解釈ができるような教育方法がとられていることがわかる。

これは学生たちの「漢語化」に合わせた教育方法とも言えるが、初級中学の段階で学生たちはすべて中国語のみで日本語を解釈しているのではなく、例えば、ＪＡ氏の「日本語の「です」を学生たちは、ハングルで「데스」と書いて覚えている」という語りから、学生たちが日本語の読みについては、朝鮮語の文字のハングルを使用していることがわかる。つまり、日本語の音を表音文字であるハングルを使って書き表し、読んでいるのである。文法だけではなく、日本語を読む際にも活用されている朝鮮語の幅広い使用方法がうかがえる。

それでは、中国語は朝鮮語の補助的な役割以外にはどのように使われているのだろうか。

受身表現は中国語の「被」、使役表現も中国語の「让」を使用している。例えば、「～させていただけませんか」という依頼表現も、中国語の「请让我做～？」で説明している。使役表現、受身表現、ともに朝鮮語よりも中国語を活用した方が説明しやすい。中国語は、簡単な単語の意味を話して教えるのではなく、中国語で黒板に書いて説明している。

（ＪＢ氏）

ＪＢ氏は授業では、90％以上朝鮮語を使用しており、自身の言語能力も中国語より朝鮮語の方が得意であるが、受身表現、使役表現、依頼表現など朝鮮語よりも中国語を活用した方が説明しやすいと判断すれば、授業中に中国語で説明している。教師自身の言語能力が教授用語に影響を与えていることがうかがえるものの、日本語の文法表現ひとつひとつに朝鮮語と中国語の表現を当てはめて判断した上で選択していることがわかる。

また中国語を使う際は、中国語で黒板に書いて説明している点にも注目したい。ＪＢ氏は中国語を話すのが苦手で恥ずかしいため、話すのではなく、書くことで伝えようとしている。すでに述べたように、学生も日本語の単語を読む際にハングルで書き表し、読むことで日本語を学習していた。日本語を教える際、そして学習する際には、「聞く」「話す」の他に「読む」そして「書く」ことが活かされていることがわかる。朝鮮語、中国語両言語の四技能を活かした日本語教育の教育方法、そして学習方法がうかがえる。

３－３－３．小活

吉林市朝鮮族中学校の日本語教育方法には朝鮮語、中国語による多様な使用方法が見られた。インタビューした 3 名の教師は、いずれも朝鮮語を中心とした教育方法をとっているが、その影響としては教師自身の言語能力によるものと考えられる。また、教師の言語能力により、教授用語だけではなく、教科書の言語も決定されていることがわかった。これは朝鮮族教師の言語能力の多様性を表していると言える。

また、日本語学習者である学生の「漢語化」の影響により、日本語の授業が朝鮮語の授業の役割も果たしていることがうかがえた。日本語の授業において、教師が用いる朝鮮語は、日本語を教える役割以外に朝鮮語を教えるという役割も果たしていた。

しかし、その一方で、学生が日本語の読みを覚える際は、表音文字である朝鮮語のハングルを用いており、表音文字であるという特性を活かして、日本語の文法のみならず、日本語を読み、書く際にも朝鮮語を使っていることがうかがえた。さらに、教師も中国語による説明を口頭で行うのではなく、黒板に書くことで説明していることから、中国語を書くことも日本語の教育方法のひとつとして使用されていることがわかった。

吉林市朝鮮族中学校では、日本語を教える際の教授用語は教師の言語能力に左右されるものの、朝鮮語、中国語がそれぞれ異なる役割を持ち、また「四技能」に渡って活用されていることが明らかになった。

３－４．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語教育方法

瀋陽市は遼寧省の省都であり、人口 700 万人を超える大都市である。瀋陽市朝鮮族第一中学は 1948 年に設立された朝鮮族中学であり、現在、全校生徒は 750 名、教師は 100 名ほど在籍している。クラスは高級中学１年から 3 年まで各学年 6 クラスずつある。第一中学は高級中学部のみあり、第二中学、第三中学、第四中学、第五中学、第六中学を卒業した

学生たちが入学する学校である。第一中学に入れなかった学生は、第二中学（高級中学部もあり）に入学する場合が多い。出身中学によって学生の言語能力も様々であり、例えば、第三中学は朝鮮族が多く暮らす農村にあるため、朝鮮語が得意な学生が多いが、第六中学は市内（瀋陽市西塔地域）にあるため、中国語を話す学生が多い。

日本語選択者は 140 名ほどおり、日本語クラスは高中 1 年生と高中 2 年生にそれぞれ 3 クラス、高中 3 年生は 2 クラスあり、日本語選択者を除いた各学年 6 クラスが英語クラスになっている。日本語教師は現在 3 名在籍しており、すべて朝鮮族教師である。現在は英語が苦手な学生が日本語を選択している。学生は入学後、最初の 1 ヶ月、2 ヶ月の間、英語の授業を受けるが、その後、英語科目にするか日本語科目にするか学生自身が決める。日本語を選択する漢族の学生は、高中 3 年には在籍していないが、高中 2 年に 1 名、高中 1 年に 2 名いる。学校全体でも漢族の学生はほとんどおらず、毎年入学してくる学生は 1、2 名ほどである。数年前は日本に留学するためのクラス（高中を卒業してすぐ日本に留学する）をつくり、漢族の学生も募集していたが、学校が求めるレベルに達していない学生が多かったために、現在募集は行っていない。

写真 6：瀋陽市朝鮮族第一中学（筆者撮影）

３－４－１．瀋陽市朝鮮族第一中学の教師に対するインタビュー調査

ここでは瀋陽市朝鮮族第一中学で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 21 に示す。

表 21：瀋陽市朝鮮族第一中学・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 10 月 10 日（土）、12 日（月）
対象者	朝鮮族の日本語教師 3 名（すべて女性）
使用言語	日本語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	瀋陽市朝鮮族第一中学
インタビューの時間	1 人あたり 40 分から 1 時間

瀋陽市朝鮮族第一中学は、筆者の知り合いの朝鮮族教師の母校であったため、同校で日本語教師をしているＳＡ氏を紹介してもらい、調査を実施するにいたった。対象者は日本語を教えている 3 名の朝鮮族教師であり、すべて女性であった。インタビューは日本語で行った。また、半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 40 分から 1 時間であった。次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 22 に示す。

表 22：瀋陽市朝鮮族第一中学・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＳＡ （40 代後半、女性）	高級中学 2 年生 3 クラスの日本語授業を担当。 1988 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学で日本語を学習した。（1978～1981 年） 大学でも日本語を専攻。日本語の資格なし。
ＳＢ （40 代後半、女性）	高級中学 1 年生 3 クラスの日本語授業を担当。 1989 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1979～1985 年） 大学でも日本語を専攻。日本語の資格なし。
ＳＣ （40 代前半、女性）	高級中学 3 年生 2 クラスの日本語授業を担当。 1998 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1988～1994 年） 大学でも日本語を専攻。JLPT 1 級取得。

ＳＡ氏は 1978 年から 1981 年まで朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1988 年から瀋陽市朝鮮族第一中学で教えている。現在は高級中学 2 年生 3 クラスの日本語授業を担当している。

ＳＢ氏は 1979 年から 1985 年まで 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1989 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は高級中学 1 年生 3 ク

ラスの日本語授業を担当している。

ＳＣ氏は 1988 年から 1994 年までの 6 年間、朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1998 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は高級中学 3 年生 2 クラスの日本語授業を担当している。

次に、インタビューした教師の教授用語についてまとめたものを表 23 に示す。

表 23：瀋陽市朝鮮族第一中学・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＳＡ（40 代後半） 中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意	使用割合：15% 教室用語など。学生が日本語で聞き取れなかったときは、朝鮮語で説明している。	使用割合：80% 文法や外来語など。自分自身の言語レベルが中国語より朝鮮語の方が上なので。	使用割合：5% 受身の「被」、使役の「让」など。 漢字のある単語。 授業中は自信のある中国語だけ使っている。
ＳＢ（40 代後半） 中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意	使用割合：20% 例文を挙げたり、学生に質問したりするとき。	使用割合：70% 文法の説明、解釈。助動詞、助詞、敬語などの説明。	使用割合：10% 朝鮮語の説明より中国語で説明した方がぴったり合うとき。朝鮮語では説明しにくいとき中国語を使う。
ＳＣ（40 代前半） 中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意。	使用割合：20% 本文を読んだり、読ませたりするとき。朝鮮語を日本語に訳す練習のとき。朝鮮語でも区別しにくいものは、日本語の例文をたくさん挙げて覚えさせている。	使用割合：70～80% 文法、翻訳。特に助詞の説明など。	ほとんど使わない。 しかし、副詞や形容詞の説明をするときにときどき使っている。また単語を教えるときも活用している。

また、3 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 9 として附す。

３－４－２．朝鮮語、中国語選択と日本語、中国語の補助的役割

ここでは、瀋陽市朝鮮族第一中学で行ったインタビュー調査をもとに、教師がどのように三言語を使用して日本語を教えているのか明らかにし、考察する。

まず日本語使用についての 3 名の教師の語りは以下のとおりである。

日本語は授業中 15%程度の割合で使用している。例えば、主に教室用語（「立って」「答えて」「静かにして」「何ページ開いて」）として使っており、学生が日本語で聞き取れなかった場合は朝鮮語で説明している。（ＳＡ氏）

日本語は例文を挙げたり、学生に質問したりするときに使う。（ＳＢ氏）

日本語は本文を読んだり、読ませたりするときや、朝鮮語を日本語に訳す練習のときに使用している。また、朝鮮語でも区別しにくいもの、説明しづらいものについては、日本語の例文をたくさん挙げて覚えさせたり、中国語で解釈したりしている。（ＳＣ氏）

以上の語りから、日本語は教室用語や本文を読ませたりする際に使われているが、ＳＢ氏とＳＣ氏が日本語で例文を挙げている点に注目したい。ＳＣ氏は朝鮮語で説明しづらいものについては、日本語の例文を多く出すことで補完しており、さらに中国語でも補完していることがわかる。中国語だけではなく、日本語も朝鮮語の補完的役割を果たしている点は三言語ができるからこそ可能な教育方法であると言える。
次に、朝鮮語使用についての語りを以下に挙げる。

授業では朝鮮語を 80%使っている。その理由は、私自身の朝鮮語能力が中国語能力よりも高いからである。朝鮮語は文法や外来語のときに使っている。（ＳＡ氏）

授業では 70%ほど朝鮮語を使っている。朝鮮語は文法の説明、解釈、そして助動詞、助詞、敬語などを説明するときに活用している。（ＳＢ氏）

朝鮮語は文法の説明や翻訳の際に使用している。特に助詞を説明するときに活用している。（ＳＣ氏）

3 名とも朝鮮語の使用割合が一番高く、朝鮮語中心の日本語授業を行っているが、文法の説明以外に助詞や敬語など中国語では説明しづらいものについて使用していることがわかる。また、ＳＡ氏は日本語の外来語を説明する際にも朝鮮語を使用している。この外来語について、宮下（2005）では、文化大革命期までは中国語の単語をそのまま朝鮮漢字音や直接借用し、朝鮮語に取り入れていたが、1978 年の《朝鮮語新語および専門用語規範化の具体的方案》により、「新語および専門用語を制定する際は、朝鮮語の既存単語に基づいて創ることが原則とされ[188]」たとある。その結果として「文化大革命終了後、直接借用から翻

[188]宮下尚子（2005）「中国朝鮮語の規範問題」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 p. 145

訳借用に改められた語」の中に「면보【面包】（直接借用）→ 빵［パン］（翻訳借用）[189]」が挙げられている。そのため、現在は中国語の影響を受けていない外来語が中国朝鮮語の中に取り入れられている。つまり、日本語の外来語を説明する際は、中国語に比べ外来語が多い朝鮮語を利用していることがわかる。また、現在の中国朝鮮語は、外来語をより多く取り入れている韓国語の影響も受けているため、日本語と対応する外来語も増えているのではないかと考えられる。次に、中国語使用の語りを以下に記す。

中国語は受身表現や使役表現、漢字のある単語を説明するときに使っているが、朝鮮語で説明するか中国語で説明するかは、そのとき、そのときで楽な方を選んで使っている。これは普段から朝鮮語と中国語を合わせて使用しているためである。また、授業中は自信のある中国語のみ使っている。（ＳＡ氏）

中国語は、朝鮮語の説明より中国語で説明した方がぴったり合うときに使う。朝鮮語で説明しにくいものについては中国語の説明を加えている。例えば、「間に合う」は中国語の「赶趟」の方がぴったりくる。また、中国語の「反対」と日本語の「反対」は意味が異なる。中国語の「反対」は、「ある意見などに対して反対する」という意味しかないが、日本語の「反対」は「逆の関係」を表す場合も含まれている。「逆の関係」の意味を表す中国語は「相反」となる。このように、同じ漢字でも意味が違う場合に、中国語を例に出し、その違いを強調して日本語を説明したりする。受身表現、使役表現、可能表現については、中国語、朝鮮語両方使ったり、またはどちらか楽な方を選んで使っている。普段から中国語と朝鮮語を混ぜて話しているので、そのとき、そのときで選んで使っている。（ＳＢ氏）

中国語については、日本語の副詞や形容詞を説明するときにときどき使用している。例えば、「わざわざ」（特意）、「わざと」（故意）のように中国語では区別できるが、朝鮮語ではどれも「일부러」でしか表せない。また、受身表現や使役表現についても中国語で教えている。（ＳＣ氏）

中国語使用で注目したいのは、まず、日本語と中国語で同じ漢字であっても意味が異なる場合、中国語を例に出すことで、その違いを強調して教えている点である。中国語の漢字の意味をそのまま日本語の漢字の意味に当てはめることで起こる誤用を防ぐ方法がとられていることがわかる。

次に、朝鮮語で区別できないものについては、中国語で区別している点である。朝鮮語で区別できない場合は、中国語を使って教えるという補完関係が見られる。

最後に、ＳＡ氏とＳＢ氏の語りに見られるように、日本語を解釈する際、朝鮮語と中国

189 宮下尚子（2005）「中国朝鮮語の規範問題」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 p. 146

語両方で解釈が可能な場合は、どちらか楽な方を選択し使っているという点である。これはコードスイッチングであるが、普段から朝鮮語と中国語を混ぜて使っているために自然に切り替えができるのだと両氏は話していた。普段から朝鮮語、中国語という多言語環境で暮らしている朝鮮族の言語使用が、日本語の教育方法にも影響を及ぼしていることがわかる。

以上、瀋陽市朝鮮族第一中学の 3 名の教師に対するインタビュー調査から、日本語の教育方法について考察した。瀋陽市朝鮮族第一中学の教育方法の特徴としては、朝鮮語を中心としながらも、朝鮮語で説明しづらいものについては中国語だけではなく日本語の例文を多く出すことで説明しており、日本語と中国語が朝鮮語の補助的役割を果たしていることがわかった。また、日本語の説明をする際に、朝鮮語か中国語かどちらで説明するかは、普段からコードスイッチングを行っているために、その選択が自然にできていることがうかがえた。多言語社会で暮らす朝鮮族の言語使用の方法が、日本語教育の方法にも影響を与えていると言える。

３－４－３．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語授業見学

瀋陽市朝鮮族第一中学では、高級中学 2 年生 1 クラスの授業見学を行うことができた。授業見学は、実際に朝鮮族の日本語教師が三言語を使用してどのように授業を行っているのか確認するために実施した。表 24 は授業見学の実施概要である。

表 24：瀋陽市朝鮮族第一中学・授業見学の実施概要

実施日	2015 年 10 月 12 日（月）
見学クラス	高級中学 2 年生の日本語クラス
クラスの学生数	14 名（男子学生 6 名、女子学生 8 名）
授業時間	14：05～14：40
授業形態	講義形式
使用教材	『日本語同期訓練』（延辺教育出版社、朝鮮語版）
記録方法	フィールドノート

授業見学を行ったクラスの学生数は 14 名で、男子学生が 6 名、女子学生が 8 名であった。授業時間は 14：05 から 14：40 まで 35 分間行われた。授業形態は講義形式であり、使用教材は『日本語同期訓練』（延辺教育出版社、朝鮮語版）であった。これは教科書ではなく日本語の問題集である。授業内容はフィールドノートにより記録した。

授業見学の記録は、本論末尾に資料 10 として附す。

３－４－４．三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」

ここでは、授業見学をもとに、瀋陽市朝鮮族第一中学の三言語使用による日本語授業について、実際に三言語がどのように使われているのか明らかにする。

授業では、三言語による「相乗的理解」と「補完的理解」を促す教育方法が見られる。例えば、使役表現を説明する際、以下のように教えている。

笑う　→　笑わせる　…　让笑，웃게 하다
楽しませる　…　즐겁게 합니다，让我们开心

まず、「笑う」の使役形である「笑わせる」を日本語で書くことで使役形の活用を示し、中国語の「让笑」と朝鮮語の「웃게 하다」両方で翻訳し、説明している。このように、朝鮮語か中国語、どちらかひとつで翻訳し、説明するのではなく、両方で翻訳し説明することで、学習者である学生の理解をより深める「相乗的理解」を促す教え方であることがうかがえる。「楽しませる」についても同様の教え方が見られる。

また、「ますます」も、中国語の「越来越」と朝鮮語の「더욱더」両方を用いて、説明していることがわかる。これも、「相乗的理解」を促す教え方である。

次に「補完的理解」であるが（15）の問題を解説する際に見られた。

（15）この靴は_____わたしの足に合っていますね。
A．まったく　B．全然　C．すっかり　D．ちょうど

すっかり　…　완전히 다
ぜんぜん　…　전혀

「すっかり」と「ぜんぜん」を朝鮮語でしっかり区別して教えているが、中国語ではどちらも「完全」になる。よって、ここでは区別のない中国語を補完する形で朝鮮語が使われていることがわかる。

さらに、「横に」の説明においては、まず漢字である「横」の部分を中国語の「横排」で説明し、助詞の「に」については、朝鮮語の助詞である「로」で説明している。ひとつの言葉であっても、漢字の部分は中国語、助詞の部分は朝鮮語という役割分担がなされていることがわかる。つまり、ひとつの言葉を朝鮮語、中国語それぞれで翻訳して説明するだけではなく、言葉の要素を分けて、その分けられたものをそれぞれ朝鮮語、中国語で説明しているのである。これもまた「補完的理解」を可能にする教え方である。

また、教師は日本語をまず朝鮮語で翻訳し、学習者の様子をうかがいながら中国語でも翻訳をしていた。つまり、朝鮮語で意味がわからない学習者がいるかどうか、その反応を見ながら授業を進行していることがわかった。朝鮮語、中国語両方で理解できる学習者は

「相乗的理解」が進み、どちらかわからない場合であっても「補完的理解」により日本語を理解することができるのである。この「相乗的理解」と「補完的理解」こそ、朝鮮族の日本語教育方法に見られる三言語使用の有効性であると言える。

最後に問題（10）の解説を以下に挙げる。

（10）今年から兄も働くようになったので、生活_____問題は無くなりました。

Ａ．上から　　Ｂ．上の　　Ｃ．上に　　Ｄ．上を

生活上の問題　…　생활상의 문제

Ｔ「中国語でどういう意味？」

Ｓ「生活方面的问题」

まず、答えを朝鮮語で翻訳した後、日本語で質問し、学生たちに中国語で答えさせている。ここでは朝鮮族の三言語使用による教育方法が凝縮されていることがわかる。

３－４－５．小括

瀋陽市朝鮮族第一中学の朝鮮族教師による日本語教育方法は、朝鮮語を中心としながらも、日本語と中国語が朝鮮語の補助的役割を果たしていることがインタビュー調査からうかがえた。また、日本語の説明をする際に、朝鮮語か中国語かどちらで説明するかの選択が自然にできるのは、多言語社会において普段から朝鮮語と中国語を混ぜて使うコードスイッチングができる朝鮮族だからこそ可能であることがわかった。さらに、授業見学からは、三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」を促す教育方法が見られ、日本語の文法表現を理解する上でも、また学習者である学生が聞き取る際にも、有効であることがうかがえた。

３－５．寧安市朝鮮族中学の日本語教育方法

寧安市朝鮮族中学は黒龍江省寧安市にある朝鮮族中学である。2010 年までの学校紹介が掲載されているパンフレットを見ると、寧安市朝鮮族中学は 1945 年 10 月に設立され、2010 年時点で学生は 500 名余り、99 名の教師が在籍している。しかし、日本語の教師の話によれば、2005，2006 年ごろは高級中学 3 年生だけで 100 名もの学生がおり、全学生数も現在の 3 倍はいたが、現在の学生数は 300 名ほどにまで減っており、学生の数は減り続ける一方であるという。寧安市朝鮮族中学の日本語教育は 1978 年に始まり、当初は英語の授業は行っておらず、日本語教育のみが行われていた。現在、日本語を選択している学生は 6 学年合わせて 100 名余りおり、日本語教師は 7 名在籍している。黒龍江省の朝鮮族中学は全部で 17 校あるが、かつてはすべての学校で日本語教育のみ行われており、中でも特に日本

語教育に力を入れていた学校が寧安市朝鮮族中学であった。しかし、近年は黒龍江省においても日本語教育をやめ、英語教育に移行する学校が増えてきている。

写真 7：寧安市朝鮮族中学（筆者撮影）

学生は初級中学 1 年から高級中学 3 年まで 6 年間、外国語科目として日本語または英語を学習する。寧安市朝鮮族中学においても現在、英語教育が行われている。英語教育は 8 年前から始まり、2 年前の高中 3 年生がはじめて英語科目で大学受験を受けた。8 年前は英語選択者が全学生の 3 分の 1 程度であったが、現在、高級中学では英語選択者より日本語選択者の方が多いものの、初級中学では同じ割合であり、その数は将来、逆転するだろうと日本語教師は話していた。

３－５－１．寧安市朝鮮族中学の教師に対するインタビュー調査

ここでは寧安市朝鮮族中学で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 25 に示す。

表 25：寧安市朝鮮族中学・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 10 月 14 日（水）
対象者	朝鮮族の日本語教師 3 名（男性 1 名、女性 2 名）
使用言語	日本語または韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	寧安市朝鮮族中学
インタビューの時間	1 人あたり 40 分から 1 時間

筆者の知り合いの朝鮮族教師が寧安市朝鮮族中学の卒業生であったため、同校を紹介してもらい、調査を実施するにいたった。対象者は日本語を教えている 3 名の朝鮮族教師であり、男性 1 名、女性 2 名であった。インタビューは日本語で行った。また半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 40 分から 1 時間であった。次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 26 に示す。

表 26：寧安市朝鮮族中学・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＮＡ （50 代前半、男性）	高級中学 3 年生の日本語クラス（20 名）を担当。 1987 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学で日本語を学習した。（1978～1983 年） 大学でも日本語を専攻。
ＮＢ （30 代後半、女性）	初級中学 3 年生の日本語クラス（27 名）を担当。 1999 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1992～1998 年） 現在の学校で日本語を教えながら、夏休みと冬休みに大学に通う。 大学でも日本語を専攻。
ＮＣ （40 代後半、女性）	高級中学 2 年生の日本語クラス（21 名）を担当。 1989 年から 1995 年までは地理を教えていたが、1995 年から日本語を教えることになった。 2002 年から現在の学校で日本語を教えている。 初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。（1979～1986 年） 大学の専攻は日本語ではなく、歴史であった。

ＮＡ氏は 1978 年から 1983 年まで朝鮮族中学で日本語を学習した。大学でも日本語を専攻し、1987 年から寧安市朝鮮族中学で日本語を教えている。現在は高級中学 3 年生の日本語クラス（20 名）を担当している。ＮＢ氏は 1992 年から 1998 年まで朝鮮族中学で日本語を学習した。中学卒業後、1999 年から現在の学校で日本語を教えているが、日本語を教えながら、夏休みと冬休みを利用し大学に通い、卒業した。現在は初級中学 3 年生の日本語クラス（27 名）を担当している。ＮＣ氏は 1979 年から 1986 年まで朝鮮族中学で日本語を学習した。大学の専攻は日本語ではなく、歴史であった。1989 年から 1995 年までは東京城鎮朝鮮族中学で地理を教えていたが、日本語教師が足りなかったため、再び独学で日本語を学び、1995 年から日本語を教えることになった。東京城鎮朝鮮族中学が廃校となったため、2002 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は高級中学 2 年生の日本語クラス（21 名）を担当している。

次に、インタビューした教師の教授用語についてまとめたものを表 27 に示す。

表 27：寧安市朝鮮族中学・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＮＡ（50 代前半）中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意	初中 2,3 年生は 80%使用、高中 1,2 年生は 90%使用。 教室用語や、会話など。高中 3 年生は受験のため、40%くらいになってしまう。	初中 2,3 年生は 20%使用、高中 1,2 年生は 10%使用、高中 3 年生は 60%くらい。 文法の説明中心。	自分自身がそれほど中国語が上手じゃないので、あまり使わない。 漢字のある単語など。 朝鮮語では理解できない部分を説明。
ＮＢ（30 代後半）中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意	使用割合：80%	使用割合：20% 文法、単語の解釈、翻訳しやすいから。 教師と学生が話す時は朝鮮語。	自分自身があまりできないから、ほとんど使わない。 学生が単語の意味がわからないときは中国語で説明したりする。 朝鮮語がよくわからない学生には中国語で説明することもある。
ＮＣ（40 代後半）中･朝両方できるが､朝鮮語の方が得意	使用割合：80% 教室用語など	使用割合：20% 文法解釈など	あまり使っていない

また、3 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 11 として附す。

３－５－２．日本語使用による教育方法

ここでは、寧安市朝鮮族中学で行ったインタビュー調査をもとに、どのように三言語を使って日本語を教えているのか明らかにし、考察する。

まず日本語使用についての 3 名の教師の語りは以下のとおりである。

初級中学 2,3 年生の場合は、日本語の割合が 80%、高級中学 1,2 年生になると 90%ほどになる。しかし、高中 3 年生になると、その割合は 40%にまで低下する。その理由は、大学受験が近づくため、受験問題対策の授業、つまり文法の説明中心の授業になってしまうからだ。日本語の使用割合が高い教育方法は、寧安市朝鮮族中学において代々行われてい

るやり方である。規則などはないが、先輩教師が日本語で教えている授業を見て、後輩教師たちも自然と日本語による教育方法を継承して行った。（ＮＡ氏）

授業では 80%ほど日本語を使い、20%ほど朝鮮語を使う。授業はまず最初に単語テストを行い、ひとつ間違えたら、その単語を１回ずつ書かせるようにしている。会話練習ではロールプレイも行い、学生たちは楽しそうにやっている。また聴解は教科書に沿って行い、読解は教科書とは別に練習帳を使って練習させたりしている。授業の最後にグループごとにゲームを行い、ひとつ間違えれば宿題として単語を 1 回ずつ書かせ、二つ間違えれば 2 回ずつ書かせるようにしている。（ＮＢ氏）

授業では、80%は日本語を使い、20%は朝鮮語を使っている。日本語は教室用語として使い、朝鮮語は文法解釈のとき使っている。（ＮＣ氏）

3 名の教師に共通しているのは、日本語を使用する割合が 8 割を占めている点である。ここから、日本語による日本語教育の方法がとられていることがわかる。これは、ＮＡ氏によれば、先輩教師から代々継承されてきた教育方法なのだという。教師によって言語使用の割合が異なっていた朝鮮族学校とは対照的に、「学校の教育方法」がとられていることがわかる。また、ＮＢ氏のように、ロールプレイなどが行われ、コミュニカティブ・アプローチがとられていることがうかがえる。また、授業の最後にゲームを取り入れていることから、学習者の集中力を最後まで持続させる方法がとられていることがわかる。

次に朝鮮語使用についての語りを以下に挙げる。

朝鮮語の使用は、初級中学 2, 3 年生は 20%であり、高級中学 1, 2 年生になると 10%にまで低下するが、高中 3 年生になると 60%ほどになる。受身や使役といった文法も中国語ではなく朝鮮語で教えている。（ＮＡ氏）

朝鮮語は主に文法、単語を解釈するときに使っている。（ＮＢ氏）

朝鮮語は文法解釈のとき使っている。（ＮＣ氏）

朝鮮語は文法解釈で使われていることがわかる。また、ＮＡ氏の語りから、日本語使用の割合が高くなれば、朝鮮語使用の割合が下がり、日本語使用の割合が低くなれば、朝鮮語使用の割合が高くなっていることがわかる。鉄嶺市朝鮮族高級中学のＬＡ氏の場合は、朝鮮語と中国語がセットになる形で使用する割合に上げ下げが見られたが、ＮＡ氏の場合は朝鮮語と日本語の間だけで割合が変化しており、中国語使用は見られない。

では、中国語はどのように使われているのだろうか。以下に挙げる。

授業では日本語、朝鮮語以外に中国語も活用しているが、使用割合は非常に低い。日本語の漢字がある単語や、朝鮮語では理解できない部分を説明する際に中国語を使用しているが、私自身がそれほど中国語が得意ではないため、ほとんど使っていない。（ＮＡ氏）

中国語は私自身があまり得意ではないために、ほとんど使っていない。しかし、学生たちが朝鮮語で理解できないときは、中国語で説明したりしている。（ＮＢ氏）

中国語はあまり使っていない。（ＮＣ氏）

3 名の教師の語りから、日本語の授業では中国語が限定的な形でしか使われていないことがわかる。朝鮮語の語りにも見られたが、受身表現や使役表現といった朝鮮語、中国語ともに説明が可能な文法についても、あくまで朝鮮語で説明している。その理由としては、教師自身が中国語が苦手である点が挙げられている。

以上、3 名の日本語教師に対するインタビュー調査から、寧安市朝鮮族中学では「教師の教育方法」ではなく、「学校の教育方法」である日本語を中心とした教育方法がとられていることがわかり、文法解釈の際は朝鮮語が使われていることがわかった。また、中国語は限定的な形でしか使用されていなかった。では、実際の日本語授業では三言語はどのように活用されているのだろうか。授業見学をもとに寧安市朝鮮族中学の日本語教育方法の実態を明らかにする。

３－５－３．寧安市朝鮮族中学の日本語授業見学

寧安市朝鮮族中学では、初級中学 3 年生 1 クラスの授業見学を行うことができた。授業見学は、実際に朝鮮族の日本語教師が三言語を使用してどのように授業を行っているのか確認するために実施した。表 28 は授業見学の実施概要である。

表 28：寧安市朝鮮族中学・授業見学の実施概要

実施日	2015 年 10 月 14 日（水）
見学クラス	初級中学 3 年生の日本語クラス
クラスの学生数	27 名（男子学生 8 名、女子学生 19 名）
授業時間	9：20～10：00
授業形態	講義形式
使用教材	『義務教育教科書　日語 9 学年用』 （延辺教育出版社、朝鮮語版）
記録方法	フィールドノート

授業見学を行ったクラスの学生数は 27 名で、男子学生が 8 名、女子学生が 19 名であった。授業時間は 9：20 から 10：00 まで 40 分間行われた。授業形態は講義形式であり、使用教材は教材は『義務教育教科書 日語 9 学年用』（延辺教育出版社、朝鮮語版）であった。授業内容はフィールドノートにより記録した。授業見学の記録は、本論末尾に資料 12 として附す。

３－５－４．オーディオリンガル・メソッドと朝鮮語による翻訳

ここでは、授業見学をもとに、寧安市朝鮮族中学の日本語授業について、実際にどのような言語使用が行われているのか明らかにする。

寧安市朝鮮族中学の日本語授業の大きな特徴は、教授用語として日本語を使い授業を行っていることである。学習者の誤用に対しては、次のようにフィードバックしている。

Ｓ「10 月 15 円…」
Ｔ「15 円ですか？」
Ｓ「15 日」

Ｔ「（主人公について）“しゅうじんこう”ですか？“しゅじんこう”ですか？」
Ｓ「しゅじんこう」

Ｔ「生活する日（にち）ですか？」
Ｓ「生活する日（ひ）です」

まず「15 日」を「15 円」と見間違えたミステイクに対して、また、「主人公」、「日」の読み方を間違えたエラーに対して、教師は誤用訂正を学習者本人に促す明示的フィードバックを行っている。

また、以下のように文型練習を行っていた。

信じる　→　믿다　　信じて　→　信じた　→　信じない
（動詞のときは、取り出して活用練習）

ここでは、変形練習が行われているが、まず変形練習をさせる前に、朝鮮語で翻訳している点に注目したい。単語がどういう意味なのか、まず朝鮮語で確認させた上で変形練習を行っている。機械的練習の中に見られるこの朝鮮語による意識付けは、単語のテストにおいて朝鮮語から日本語に翻訳させ、口頭練習において日本語から朝鮮語に翻訳させていることからもうかがえる。

教科書の本文を読ませる際は、まずテープのモデル発音によって音を提示し、学習者に

リピートさせている。

授業中、中国語はまったく使われていなかった。教授用語の面から見ると、朝鮮語を主体として授業を行っていた瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語授業とは大きく異なっていることがわかる。

授業の締めくくりでは、学生のやる気を引き出すためにゲーム形式で単語を覚えさせている。その際はグループごとに分け、代表者が問題に答える。その様子を写真 8 に示す。

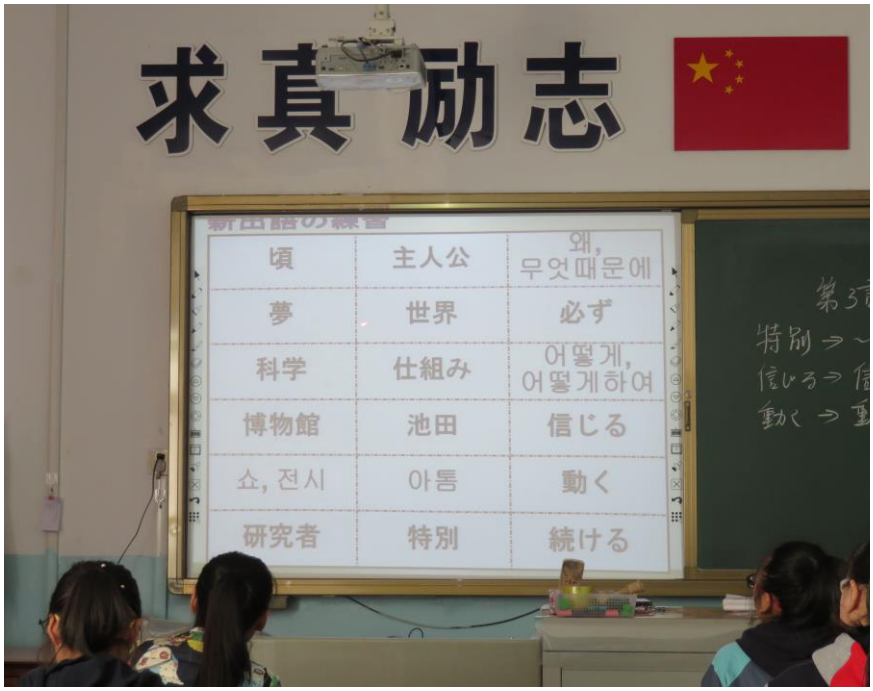


写真 8：寧安市朝鮮族中学、単語ゲームの様子（筆者撮影）

教師は各グループで一人ずつ学生を指名し、指名された学生は写真 8 に示された日本語の単語を読み、朝鮮語に翻訳する。朝鮮語で示された部分は逆に日本語に翻訳する。ひとつ間違えるごとにグループ全員が単語をさらに 1 回ずつ書いてこなければならなくなるため、緊張感もあるが、このときは学生たちにも笑いがこぼれ、クラス全体がリラックスした雰囲気となった。

授業ではコミュニカティブな方法は見られず、オーディオリンガル・メソッドによる文型練習中心のものであったが、それは、まだ日本語学習経験が十分ではない初級中学 3 年生のクラスであったためと考えられる。また、日本語の使用割合が 9 割ほどに達したのは、「学校の教育方法」によるものであろうが、まだ本格的に日本語の文法説明に入っていないため、朝鮮語による解釈がそれほど必要ではないという点も大きいのではないだろうか。単語を覚えさせたり、文型練習を繰り返したりする中で、締めくくりにはゲームを取り入れることで学生が楽しみながら復習できる教師独自の工夫も見られた。

３－５－５．小括

寧安市朝鮮族中学では、これまでの朝鮮族中学では見られない日本語使用の割合が高い授業が行われており、また中国語は限定的にしか使用されていないことがうかがえた。初級中学の日本語授業では、文法説明が少ないということもあり、日本語が授業の 9 割ほど使用され、それは教室用語、あいさつ、質問、訂正など多岐に渡っており、日本語環境の中で授業を行うことが徹底されていた。授業は文型練習中心のオーディオリンガル・メソッドがとられていたが、変形練習の際には朝鮮語で翻訳した後で変形させており、朝鮮語と日本語の間で翻訳を繰り返す練習も多く取り入れられていたことから、日本語による授業を行いながらも、朝鮮語でしっかり意味を理解させるという意図もうかがえた。しかし、中国語は使われていなかったことから、主に日本語と朝鮮語の二言語による日本語授業が行われていることがわかった。

３－６．日本語指導上の朝鮮語、中国語使用

ここでは、朝鮮族の日本語教師へのインタビュー調査から明らかになった日本語、朝鮮語、中国語という三言語による日本語授業について、特に朝鮮語と中国語に注目し、その使用例を日本語の文法表現別にまとめた。表 29 に日本語の文法表現別に見た朝鮮語、中国語の使用例を示す。まずは受身形から見ていきたい。受身形については、多くの教師たちが中国語の「被」を使っていると答えた。さらに、一人の教師は、使役受身表現について、例えば、「私は嫌いな野菜を食べらせられた」という文の場合、朝鮮語では説明しにくいので、中国語の「我不得不吃不喜欢的蔬菜」のように「～せざるを得ない」を表す「不得不～」を用いていた。次に使役形であるが、これは中国語の「让」を使う教師もいれば、朝鮮語の「～를/을 시키다」「～게 하다」で説明する教師もいた。例えば、「～させていただけませんか」という表現も中国語の「请让我做～？」で説明している。この場合は、中国語の方が朝鮮語よりもわかりやすいのだそうだ。

続いて、可能形であるが、日本語では「できる」で表すところだが、朝鮮語と中国語は、二つの「できる」があり、それぞれ対応している。中国語の「能」は能力や条件が備わった際に「できる」ことを表す助動詞であるが、これは朝鮮語では「할 수 있다」にあたる。一方、中国語の「会」は習慣的、または練習して得られた技能（例えば言語など）があって「できる」ことを指す。これは朝鮮語で「할 줄 알다」となる。つまり、朝鮮族にとっては中国語と朝鮮語で使い分けがある「できる」が、日本語ではどちらも「できる」ひとつで表すことができるため、比較的理解しやすい文法項目であると考えられる。

自動詞・他動詞はどうであろうか。例えば日本語の「始まる」（自動詞）は「시작되다」、「始める」（他動詞）は「시작하다」と、朝鮮語では日本語同様、自動詞と他動詞の区別がある。

表 29：日本語の文法表現別に見た朝鮮語・中国語両言語の使用例

	朝鮮語	中国語
受身形	例）「教師に言われます」 →「선생님한테 말을 듣습니다」 「運動会が開かれる」 →「운동회가 열리다, 개최되다」	中国語の「被」 例）「私は嫌いな野菜を食べさせられた」 → 「我不得不吃不喜欢的蔬菜」 朝鮮語では説明しにくい
使役形	朝鮮語の「～를/을 시키다」 「～게 하다」	中国語の「让」 例）「～させていただけませんか」 →「请让我做～？」 中国語の方が説明しやすい
可能形	「할 수 있다」 「할 줄 알다」	「能」 「会」
自動詞・他動詞	始まる（自動詞）＝ 「시작되다」 始める（他動詞）＝ 「시작하다」 中国語ではどちらも「开始」。区別のできる朝鮮語で説明する方がよい	始まる ＝ 「开始」 始める ＝ 「开始」 区別がないため説明が難しい
擬音語・擬態語	ぐるぐる（빙글빙글） ゆらゆら（○ 흔들흔들, 한들한들） きらきら（반짝반짝） べたべた（끈적끈적） 日本語同様、表現が多い	ゆらゆら（△ 晃动貌） 擬音語・擬態語にあたるものは少なく、あまり使われていない
推量表現	「～ㄹ 것 같다」	「～ようだ」＝「好像」 「～だろう」＝「应该」
願望表現	「～たい」＝「～고 싶다」 「～したがる」＝「～고 싶어하다」	「想」
助詞	例）「は」 ＝ 「는/은」 「が」 ＝ 「가/이」 日本語の助詞に対応するものが多い	日本語の助詞に対応するものが少ない
敬語	日本語の敬語（尊敬語・謙譲語・丁寧語）に対応するものが多い	例）「请～」＝～してください 「您」＝「あなた」の丁寧な言い方 敬語自体が少ない

	朝鮮語	中国語
その他	例）靴を穿いたまま寝てしまった。 朝鮮語:신발을 신은 채로 자 버렸다. 中国語：穿着鞋睡着了。 →　朝鮮語の方が説明しやすい 例）もうすぐ授業が始まります。 朝鮮語：이제 곧 수업이 시작됩니다. 中国語：快上课了。 →　両方とも使う 例）大変だ 朝鮮語：힘들다 中国語：対応する表現がない。 →　朝鮮語の方が説明しやすい	例）　間に合う 朝鮮語：제 시간（제 때）에 대이다. （가닿다） 中国語：来得及、赶趟 →　中国語の方が説明しやすい 例）にぎやかだ 朝鮮語：흥성거리다 中国語：热闹 →　中国語の意味の方が近い 例）　理解する 朝鮮語：리해하다 中国語：理解 →　中国語の方がよい 例）「～することができない」 朝鮮語：「～할 수는 없다」 中国語：「不能做～，不会做～」 「～するわけにはいかない」 朝鮮語：「～할 수는 없다」 中国語：「不可以那么做～，能力无关～」 →　区別できる中国語を使う

一方、中国語ではどちらも「开始」になるため、日本語の自動詞・他動詞の説明は朝鮮語を使っているという。この自動詞・他動詞に関しては、漢族に比べ、朝鮮語ができる朝鮮族の方が理解しやすいと考えられる。

また、擬音語・擬態語などは、中国語よりも朝鮮語の方がいろいろな表現があるため、よく使用したりしているという。例えば、日本語で「ぐるぐる」は朝鮮語では「빙글빙글」、「きらきら」は「반짝반짝」、「べたべた」は「끈적끈적」となる。中国語を例に出すと、「ゆらゆら」は「晃动貌」という表現があるが、あまり使われておらず、やはり朝鮮語の「흔들흔들」や「한들한들」といった表現の方がぴったりくるのだそうだ。この点について、漢族の学生に聞いてみると、やはり中国語の中には擬音語・擬態語に当たるものは少ないという。

中国語の表現にはあまり見られない擬音語・擬態語を、朝鮮族は自らの母語である朝鮮語を使って教え、またそれを理解している。自動詞・他動詞と同様に、擬音語・擬態語は、漢族に比べ、朝鮮族の方が理解しやすい表現であると言える。

推量表現の場合は、「好像（～ようだ)」「应该（～だろう)」のように中国語で使い分けているという教師がおり、願望表現の方は、「～たい」＝「～고 싶다」、「～したがる」＝「～고 싶어하다」のように、日本語に対応する朝鮮語を使っているという教師がいた。推量表現の場合は、中国語での区別があるため、朝鮮族の学生、漢族の学生ともに中国語のみで理解できるが、願望表現の使い分けに関しては中国語ではどちらも「想」という表現しかないため、使い分けのある朝鮮語を理解できる朝鮮族にとっては難しくはないであろう。

また、助詞については、日本語に対応する助詞が多くある朝鮮語を使って説明する教師がほとんどであったが、一人の教師は中国語しかできないために、日本語の助詞の説明をするのは難しいと話していた。また、敬語についても、日本語同様、尊敬語、謙譲語、丁寧語がある朝鮮語で説明しているという教師が多くいた。このように中国語の中にはあまり見られない助詞や敬語表現に関しては、朝鮮語ができない教師が実際に難しいと答えていたように、漢族にとっては非常に難しく、逆に朝鮮族にとっては朝鮮語を有効に使える表現であると言える。

３－７．まとめ

本章では、各地域の朝鮮族学校におけるインタビュー調査及び授業見学をもとに、日本語教育の方法について、主に三言語使用に注目しながら考察した。

梅河口市朝鮮族中学では、教師によって日本語、朝鮮語、中国語を使用する割合が異なっていた。学生の日本語能力に加え、教師自身の研修経験や留学経験、そして教授経験などが三言語使用の割合に大きな影響を与えていることがうかがえた。鉄嶺市朝鮮族高級中学の授業においては、学生の「漢語化」の影響により、中国語の使用割合が高い授業が行われていることがわかった。しかし、日本語の授業において、朝鮮語と中国語両言語を使用することで、日本語の理解を深め、さらには朝鮮語の理解も深めるという教育方法がとられていることがわかった。吉林市朝鮮族中学校では、日本語授業の教授用語は教師の言語能力に左右されるものの、朝鮮語、中国語がそれぞれ異なる役割を持ち、また「聴く、話す」だけではなく「読む、書く」際にも使用されていることが明らかになった。瀋陽市朝鮮族第一中学では、授業見学から、三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」を促す教育方法がとられていることがわかった。三言語使用による教育方法が、日本語の文法表現を理解する上でも、また学習者である学生が聞き取る際にも、有効であることがうかがえた。寧安市朝鮮族中学の授業は文型練習中心のオーディオリンガル・メソッドがとられていたが、日本語による授業を行いながらも、意味理解に朝鮮語が使用されている

ことがわかり、主に日本語、朝鮮語の二言語による教育方法がとられていることがうかがえた。

朝鮮族学校の日本語授業は、学校によって多様な三言語使用が行われ、また日本語、朝鮮語、中国語が持つ役割もそれぞれ異っていた。しかし、朝鮮族の三言語使用による日本語教育方法の最大の特徴は、同じ日本語の単語あるいは文法であっても、三つの言語で解釈し説明することで、より理解が深まるという「相乗的理解」と、一つの言語、あるいは二つの言語で解釈できない場合に、さらにもう一つの言語を使用し理解するという「補完的理解」を可能にしている点にあると考える。では、この「相乗的理解」と「補完的理解」について学習者はどのように捉え、どのように三言語を使って日本語を学習しているのだろうか。第 4 章では、学習者の立場から三言語使用による言語学習について明らかにし、考察する。

第４章
朝鮮族の言語能力と三言語使用による日本語学習方法

本章では、朝鮮族学習者の言語能力に注目しながら、三言語使用による日本語学習方法を学校別、学習者別に明らかにする。

朝鮮族学習者の外国語選択について、金紅梅（2009）では、延辺の朝鮮族学校と黒龍江省の外国語選択の事例を紹介しており、「延辺の朝鮮族学校では学生の意思と関係なく成績で英語、日本語クラスが振り分けられた結果、日本語を学ぶ学生が激減した[190]」と指摘している。その一方、黒龍江省の朝鮮族学校では、日本語と英語科目がどちらも設置されている場合、学生の意思で選べるようにした結果、「学生の意思を尊重したことで、日本語教育の完全消滅にはつながらなかった[191]」としている。筆者が調査を行った朝鮮族学校では、英語科目、日本語科目どちらも設置されており、学生たちが自由に選べる方式がとられていた。学生たちが英語、日本語に対してどのような意識を持ち、将来どのように使おうとしているのかが、現在の朝鮮族学校における外国語教育に大きな影響を与えていると言える。

前章では朝鮮族教師の三言語使用による日本語教育方法について考察したが、本章では日本語学習者である朝鮮族学生の視点からインタビュー調査及びアンケート調査をもとに考察する。そこからは教師側からは見えてこない朝鮮族学習者の学習方法の実態が浮かび上がってきた。学習者はたとえ朝鮮語より中国語が得意であっても、すべての文法を中国語で理解するのではなく、ある文法表現については朝鮮語で解釈し、理解していることがわかった。また、教師が日本語と朝鮮語で文法解釈を行っているにもかかわらず、学習者自身は日本語の文法表現に合わせて朝鮮語と中国語を使い分けている事例も見られた。これは朝鮮族の言語理解の多様さを示している。また、三言語使用によって「相乗的理解」と「補完的理解」が可能になることから、多くの学習者が教師の三言語による教育方法を望んでいることが明らかになった。その一方で、学習者の朝鮮語能力が十分でないため、朝鮮語使用による日本語理解ができない事例も見られた。

４－１．梅河口市朝鮮族中学・学習者の日本語に対する意識

筆者は梅河口市朝鮮族中学において、朝鮮族の日本語教師に対するインタビュー調査を実施するとともに、日本語の授業を受けている学生に対してもアンケート調査を行った。

[190]金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号　立命館大学 p. 57

[191] 同上：p. 57

それは教師、学習者双方の立場から、日本語教育の実態を明らかにしたかったためである。

教師に対して行ったインタビュー調査によれば、現在日本語授業で使われている教科書については、以前のものに比べて良くなったという評価がなされていた。では、学習者である学生たちはどのように評価しているのだろうか。4－1－2 において明らかにする。また、調査した朝鮮族学校の中には、受験対策のために高級中学 2 年、3 年になると、授業における日本語の使用割合が減っている状況がうかがえた。では、学習者である学生たちにとって「受験日本語」以外の魅力はないのだろうか。4－1－3 において明らかにする。

４－１－１．梅河口市朝鮮族中学の日本語学習者に対するアンケート調査

ここでは梅河口市朝鮮族中学で行ったアンケート調査について述べる。アンケート調査は、予備調査の意味合いもあり、他の学校で行った調査内容とは多少異なる。表 30 は、アンケート調査の実施概要である。

表 30：梅河口市朝鮮族中学の日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2014 年 8 月 12 日（火）
実施場所	梅河口市朝鮮族中学
実施クラス	高級中学 2 年　日本語クラス 26 名（男性 11 名、女性 12 名、不明 3 名）
調査方法	集合調査法を用いた。 クラスの日本語授業担当教師とともに教室に行き、授業の最初の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	日本語の授業や教科書、日本語に対する意識などについてのもの。 全 11 項目のうち、9 項目が選択回答、2 項目が自由回答。 また、9 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 9 項目の選択回答のうち、6 項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	すべて朝鮮語で書かれたものを使用。

アンケート調査は集合調査法を用い、高級中学 2 年 1 クラスで実施し、26 名（男性 11 名、女性 12 名、不明 3 名）分のアンケート用紙を回収することができた。アンケートの調査項目は全 11 項目であり、内容は日本語の授業や教科書、日本語に対する意識などについてのものである。全 11 項目のうち、9 項目が選択回答、2 項目が自由回答となっている。また、9 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。アンケート用紙については、資料 13 として本論末尾に附す。

４－１－２．日本語の教科書に対する学習者の評価

梅河口市朝鮮族中学において使用されている教科書は『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語１』(人民教育出版社　課程教材研究所　日語課程教材研究開発センター編著)』の朝鮮語版である。この教科書について、日本語教師のＫＡ氏はインタビューの中で、「内容が改定されたことで、以前のものより良いものになっていると感じる」と評価していた。では、その教科書を使って日本語を学習している学生たちはどのような評価をしているのだろうか。アンケート調査項目 7 の「今、授業で使っている教科書はどうですか」という質問に対する回答を集計し、グラフ化した。図 2 に示す。

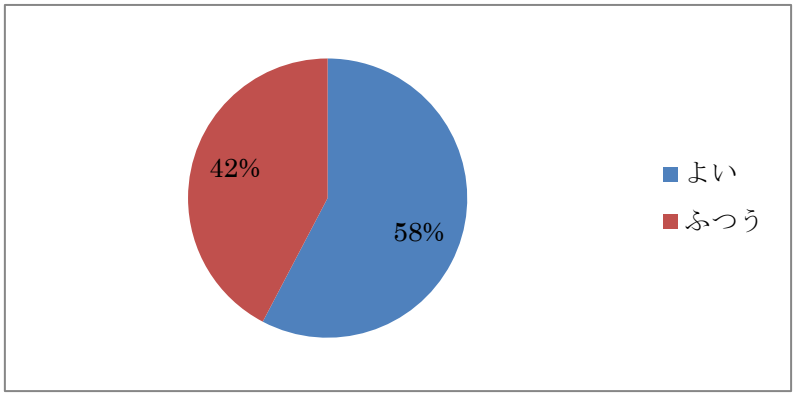


図 2：梅河口市朝鮮族中学・日本語学習者の教科書に対する満足度（回答者数 26 名）

教科書への満足度は、「よい」が 58%、「ふつう」が 42%という結果となった。調査項目 8 において、その理由を質問したところ、以下のような結果が得られた。図 3 に示す。

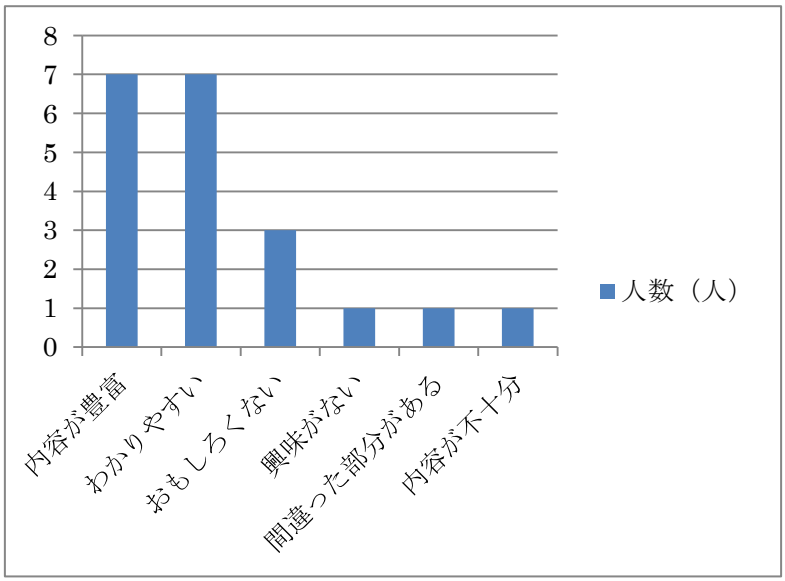


図 3：梅河口市朝鮮族中学・日本語学習者の教科書に対する評価の理由（回答者数 20 名）

「よい」と答えた理由としては、「わかりやすい」「内容が豊富」との意見が多く見られた。一方で「ふつう」と答えた学生の意見としては、「おもしろくない」という意見が最も多かった。教師だけでなく、学習者である学生たちも教科書の「内容が豊富である」と感じており、「あまり良くない」「良くない」と答えた学生がいなかったことを考えれば、現在使用されている教科書は学生にとって概ね好評であると言えるのではないだろうか。

４－１－３．「受験日本語」だけではない日本語の魅力

ここでは、学生たちが日本語を学習する上で、どのような点に魅力を感じているのかについてアンケート調査をもとに明らかにする。調査項目 9 の「日本語の学習をする上で、良い点はなんですか」という質問に対する回答を集計し、グラフ化した。図 4 に示す。

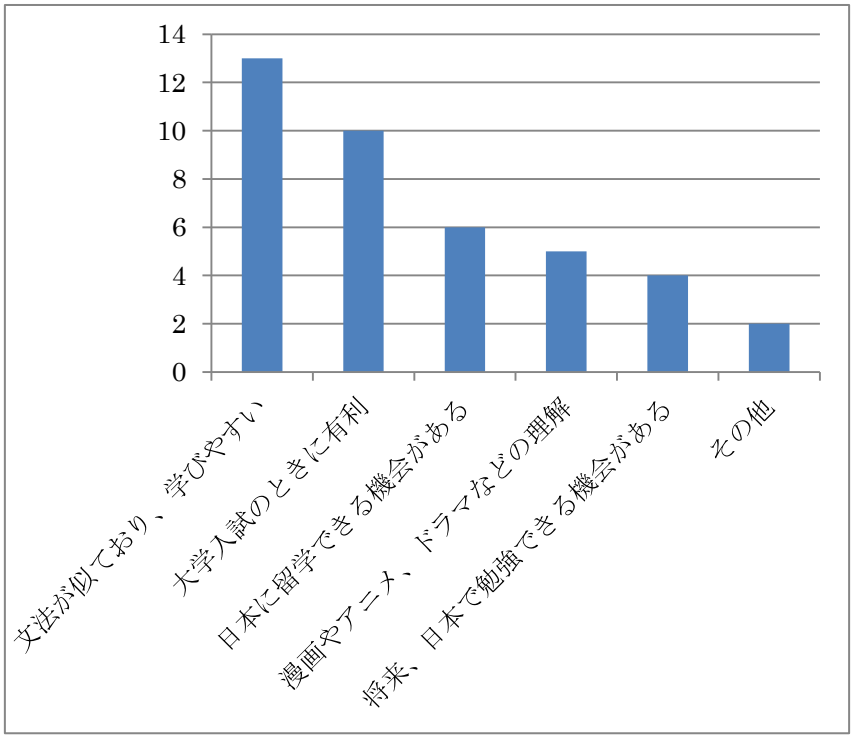


図 4：梅河口市朝鮮族中学・学習者が日本語を学習する上で良い点
（回答者数 26 名、回答数 40）

最も多かったのは「朝鮮語と文法が似ており学びやすい」、続いて「大学入試のときに有利である」となった。やはり、日本語と朝鮮語は文法が似ていて学びやすいと感じている学生が多いようである。それが大学入試に有利であるということに結びついている。また「日本で勉強できる機会がある」「日本に留学できる機会がある」と答えた学生の割合も合わせて 4 分の 1 に達した。これは多くの朝鮮族が韓国や日本に出稼ぎに行っていることも大きく影響していると考えられる。「移動する朝鮮族」を垣間見ることができる結果となっ

た。その他の意見としては二つあり、どちらも「もうひとつ他の言語が学習できるから」という意見であった。ここから、朝鮮語、中国語を話す朝鮮族の言語に対する意識の高さをうかがうことができる。英語は小学校から習っている学生がほとんどであると考えられるため、朝鮮語、中国語、英語に続く「第 4 の言語」として意識されている日本語が浮かび上がってくる。

４－１－４．小括

4−1 では、梅河口市朝鮮族中学の学生たちの日本語の教科書に対する評価、及び日本語を学習する上で良い点について、アンケート調査をもとに明らかにした。学生たちは、教師同様、現在使用している教科書について概ね良い評価をしており、その理由として内容が豊富である点、そしてわかりやすい点を挙げていた。また、日本語を学習する上で良い点として、「朝鮮語と文法が似ており学びやすい」という「学びやすさ」と「大学入試のときに有利である」という「受験日本語」を意識した回答が多かったものの、「日本で学習できる機会がある」「日本に留学できる機会がある」と答えた学生の割合も合わせて 4 分の 1 を占めたことから、将来、日本に行くことを念頭において学習している学生も多いことがわかった。さらに「もうひとつ他の言語が学習できるから」という意見も見られ、日本語が、朝鮮族にとって朝鮮語、中国語、英語に続く「第 4 の言語」として意識されていることがうかがえた。

梅河口市朝鮮族中学で行ったアンケート調査は予備調査として実施したこともあり、対象者が少なかったが、他の学校ではさらに対象者を増やし、特に学生たちの言語能力と三言語による日本語教育の学習方法に関する調査を行った。

４－２．鉄嶺市朝鮮族高級中学・日本語学習者の言語能力と学習方法

第 3 章では、鉄嶺市朝鮮族高級中学の教師に対するインタビュー調査から、朝鮮族教師の中国語使用が高いことがうかがえた。また、日本語の授業が朝鮮語の授業の役割を果たしているほど、日本語学習者である朝鮮族学生の朝鮮語能力が低下していることが指摘されていた。では、実際に学生たちの言語能力には「漢語化」の影響が見られるのだろうか。ここではアンケート調査をもとに、鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語学習者の言語能力を明らかにした上で、朝鮮語と中国語をどのように活用して日本語を学んでいるのかについて考察する。

４－２－１．鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語学習者に対する アンケート調査

ここでは、鉄嶺市朝鮮族高級中学において実施したアンケート調査について述べる。表31はアンケート調査の実施概要である。

表31：鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2015年5月18日（月）
実施場所	鉄嶺市朝鮮族高級中学
実施クラス	・初級中学2年　日本語クラス　8名（男性　3名、女性　5名） ・初級中学3年　日本語クラス　8名（男性　5名、女性　3名） ・高級中学1年　日本語クラス　17名（男性　6名、女性 11名） ・高級中学2年　日本語クラス　22名（男性　9名、女性 13名） 合計　55名（男性23名、女性 32名）
調査方法	集合調査法を用いた。 クラスの日本語授業担当教師とともに教室に行き、授業の最初の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問。 初級中学：全17項目のうち、15項目が選択回答、2項目が自由回答。また、15項目の選択回答のうち、2項目については、選択した後、自由回答方式とした。 15項目の選択回答のうち11項目は複数回答可とした。 高級中学：全21項目のうち、19項目が選択回答、2項目が自由回答。また、19項目の選択回答のうち、2項目については、選択した後、自由回答方式とした。 19項目の選択回答のうち、15項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	朝鮮語、中国語で書かれたアンケート用紙のうち、回答者が回答しやすい言語で書かれた用紙を選び記入。

アンケート調査は集合調査法を用い、初級中学2年、3年の日本語クラス、及び高級中学1年、2年の日本語クラスにおいて、それぞれ調査を行い、計55名（男性23名、女性32名）分のアンケート用紙を回収することができた。アンケートの調査項目は初級中学が全17項目、高級中学が全21項目に回答する形になっている。主に日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問である。アンケート用紙の言語は朝鮮語版と中国語版二つを用意し、回答者が回答しやすい言語で書かれた用紙を選んでもらう形にした。アンケート用紙については本論末尾に資料14として附す。

４－２－２．「漢語化」が見られる朝鮮族の言語能力

ここでは、まず鉄嶺市朝鮮族高級中学の学習者の日本語能力についてアンケート調査結果をもとに考察する。質問項目 7 において、学習者の日本語能力について質問した。その結果を学年別に表したものが図 5 である。また四技能別に表したものが図 6 である。

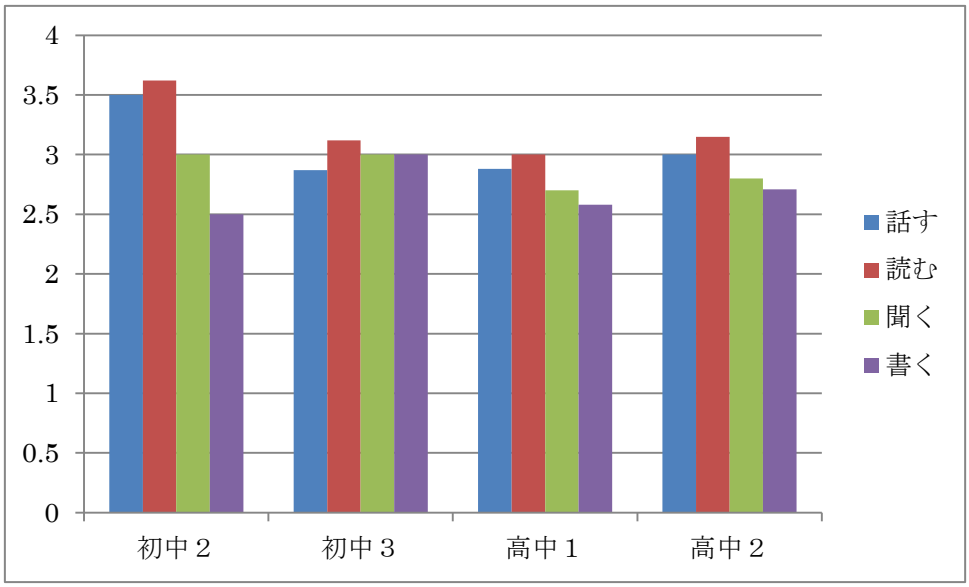


図 5：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語の四技能についての学年別自己評価

（回答者数 54 名、残りの 1 名は「ＪＬＰＴ3 級取得とだけ記入」）

まず、各学年別にみたものを見ると、どの学年も読む能力の自己評価が最も高くなっている。また初中 3 年生を除いては、いずれの学年も「読む」「話す」「聞く」「書く」の順に自己評価が高く、4 学年を合わせたものを見ても同様である。

この原因としては、二つ考えられる。まず一つ目は、授業中に読む練習を多くさせている点、二つ目は、朝鮮族の学生が有する朝鮮語、及び中国語能力をどちらも活かせるのが「読む」項目である点である。つまり、朝鮮族は中国語がわかるため、日本語の文章を読む際に漢字を苦にしない。さらに、文章中に表れる文法表現については、朝鮮語が最大限活かせる。「書く」能力については、例えば、漢字の場合、読むには問題ないが、実際に書くとなれば、日本語の漢字と中国語の漢字に違いが見られるため、細かい間違いも出てくるだろう。さらに漢字だけでなく、カタカナやひらがななど朝鮮語、中国語の文字とは異なる文字を覚え、書く際に、ひらがなの場合は送り仮名、カタカナの場合は外来語などで間違いが生じると考えられる。

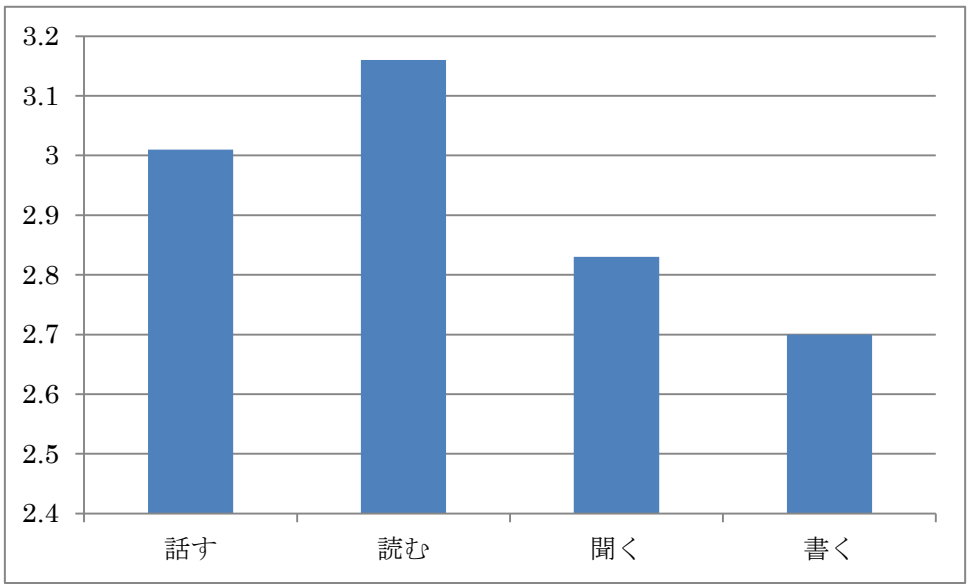


図 6　：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語の四技能についての自己評価

（回答者数 54 名、残りの 1 名は「ＪＬＰＴ3 級取得とだけ記入」）

鉄嶺市朝鮮族高級中学では「書く」能力が最も求められる「作文」授業に関しては、日本人の教師が担当しているということであるが、どんなに日本語が上手な学生でも間違ってしまうのが作文である。「書く」能力も朝鮮族にとっては朝鮮語の文法と中国語の漢字を活かせるものではあるが、やはり「読む」能力に比べれば、劣ると感じてしまう学生が多いのではないだろうか。

では、学生たちの朝鮮語能力、中国語能力については、どのような結果が得られただろうか。質問項目 8－1 において、朝鮮族学生が自らの朝鮮族能力及び中国語能力について自己評価した調査結果を図 7 に示す。

実に半数以上が朝鮮語より中国語の方ができると答えている。一方、朝鮮語の方ができると答えた学生はわずか 1 割程度しかいないことがわかった。つまり「同じくらいできる」と答えた学生を合わせると、9 割の学生は中国語で話す方がよい、もしくは中国語で話しても問題ないということがわかる。これは朝鮮族学校自体がすでに朝鮮語を話せる場所ではないということを示している。このように実際に数値化すると、朝鮮族学校の学生たちの「漢語化」が浮き彫りになる。

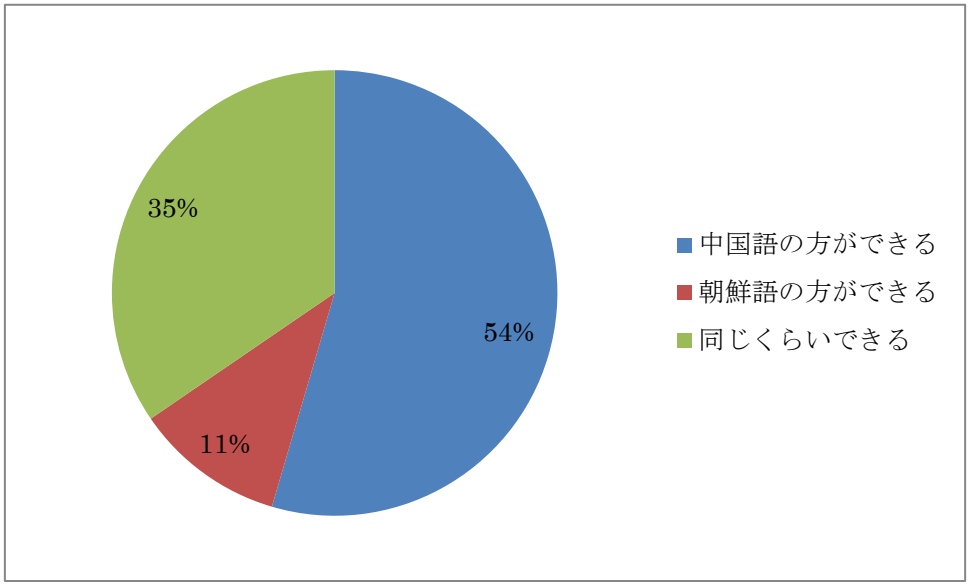


図 7：鉄嶺市朝鮮族高級中学、朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価
（回答者数 55 名）

では、「中国語の方が話せる」と答えた学生はどの程度朝鮮語を話すことができるのだろうか。それを示したのが図 8 である。

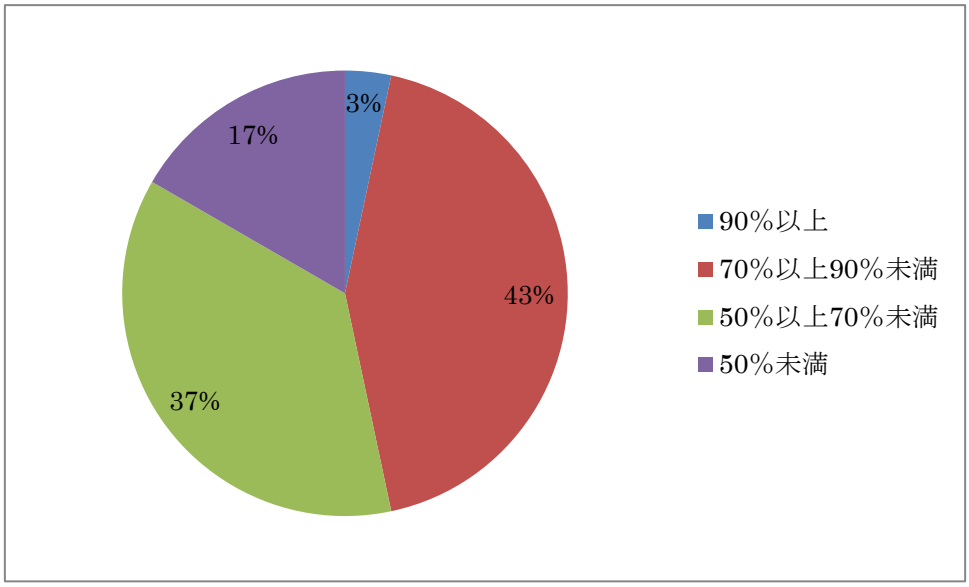


図 8：鉄嶺市朝鮮族高級中学、中国語の方ができる学習者の朝鮮語能力
（回答者数 30 名）〔中国語能力を 100%としたときの朝鮮語能力〕

最も多いのが「70%以上 90%未満」であり、70%以上朝鮮語ができる学生は全体の半数近くに上った。一方、50%にも満たない学生が 2 割近くいることもわかる。全体の学生の平均値は 59.6%となり、およそ 60%の朝鮮語能力となる。もちろん学生によって朝鮮語能力の差はあると言えるが、平均して中国語能力の 6 割程度しか朝鮮語ができない学生にとって、朝鮮語のみでの授業、または難しい内容を朝鮮語で説明された際の負担は大きいと考えられる。

一方、朝鮮語の方ができると答えた学生の中国語能力はどの程度であるのか答えてもらったところ、85%が 1 人、80%が 3 人、60%が 2 人という結果になり、これを平均すると、74.1%という数字となった。人数が少ないために、より多くの対象者が必要ではあるが、平均で 7 割を超える中国語能力を有しているということは、中国語の方が話せる朝鮮族学生の朝鮮語レベルよりは、高い中国語レベルであることがうかがえる。

では、鉄嶺市朝鮮族高級中学の朝鮮族の学生たちは、普段どのような場面で朝鮮語、及び中国語を使っているのだろうか。質問項目 8－2、8－3 の調査結果を示したものが図 9 である。結果を見れば一目瞭然であるが、どの項目でも中国語が朝鮮語より多く使われていることがわかる。さらに朝鮮語の「その他」の項目の中にも「基本的に使わない」「ほとんど使わない」「使わない」などのコメントが多く見られた。また、「中学の教師と友人と話すとき」、「あまり中国語が上手ではない教師と話すとき」、「朝鮮語が上手な人と話をするとき」など、相手の言語能力に合わせて朝鮮語を使っていることがわかった。

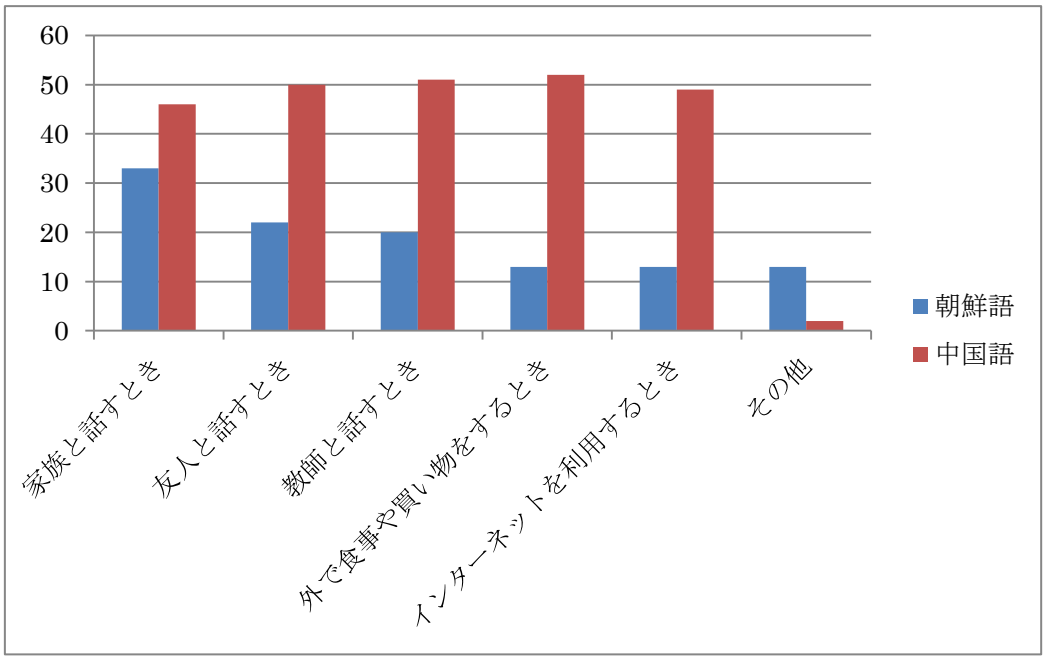


図 9：鉄嶺市朝鮮族高級中学、朝鮮語及び中国語をどんなとき使っているか

（回答者数 55 名、回答数「朝鮮語」114、「中国語」250）

さらには「朝鮮語の授業のとき」「中国にいるときは使わない」「韓国に遊びに行くとき使う」など、自分がいる環境に合わせて言語を使い分けていることがわかった。一方、中国語の「その他」を見ると、「いつでも中国語を使う」「基本的にすべて中国語を使う」など、朝鮮語とは対照的にいつでも使っているという意見が見られた。

各項目中、朝鮮語使用と中国語使用のうち、その差が大きく開いているのが「外で食事や買い物をするとき」で、中国語を使うと答えた学生は 52 名にも上る。これは全体の 94.5%を占める。このことから、鉄嶺市朝鮮族高級中学に通っている学生は、外ではほとんど中国語を使用していることがわかる。一方、外で朝鮮語を使うと答えた学生は 13 名であり、全体の 23.6%にしかならない。家や学校外での中国語使用と朝鮮語の差は歴然である。

では、学校においてはどうであろうか。「友人と話すとき」と「教師と話すとき」の割合を比べてみると、ほぼ同じ割合で中国語使用が高いことが分かり、その数はそれぞれ朝鮮語使用の倍以上になっている。朝鮮族学校でありながら、朝鮮語よりも中国語が使われており、それは友人だけではなく、教師と話すときも同様であることがわかる。また、インターネットを利用するときの言語使用の割合も中国語の割合が高い。これは中国語で書かれたサイトを利用することが圧倒的に多いということもあるが、例えば、友人とＳＮＳを使って会話するときも朝鮮語より中国語の方が短くて便利だという側面もあるように感じられる。チャットする際は、すばやく返事することが求められ、なおかつ周りの友人も朝鮮語より中国語ができる友人が多いのであれば、なおさらであろう。

一方で、朝鮮語と中国語使用で最も差が小さいのは、「家族と話すとき」である。このとき、朝鮮語を使っていると答えた学生は、朝鮮語使用の項目中、唯一全体の半数を超えている。つまり朝鮮語の使用頻度が最も高いのが家族と話すときなのだ。しかし、それでも中国語を使っている学生の方が多いということは、朝鮮族の「漢語化」が朝鮮族学校内だけでなく、家庭内にも浸透しているということがうかがえる。「家庭」「学校」「それ以外の場所」ともに朝鮮語より中国語が使われている言語環境であるならば、今後も鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生の「漢語化」は進んで行くと考えられ、近い将来、朝鮮語がまったく話せないという学生が増える可能性もあるだろう。

では、朝鮮族の学生たちは、日本語を学習する際に、朝鮮語と中国語をどのように活用しているのだろうか。質問項目 8－4 の結果から、まず、朝鮮語をどのように活用しているのか示したものが図 10 である。最も多いのは「翻訳」である。実に半数の学生が「翻訳」する際に朝鮮語を使っている。これは、初級中学の学生の場合、高級中学入試の日本語の問題が朝鮮語で出題されるため、朝鮮語で翻訳するような練習をしていることも要因のひとつと考えられるが、次に多い「文法理解」も合わせて考えると、やはり朝鮮語と日本語の文法的な近さから、翻訳する際に朝鮮語を活用していると考えられる。詳細に書いてくれた学生の回答の中には、「自動詞・他動詞」や「助詞」、「ハングルを使った読み」や「発音」、「語順」や「敬語」、「動詞の活用」など、中国語では活用できない要素が多く見られた。

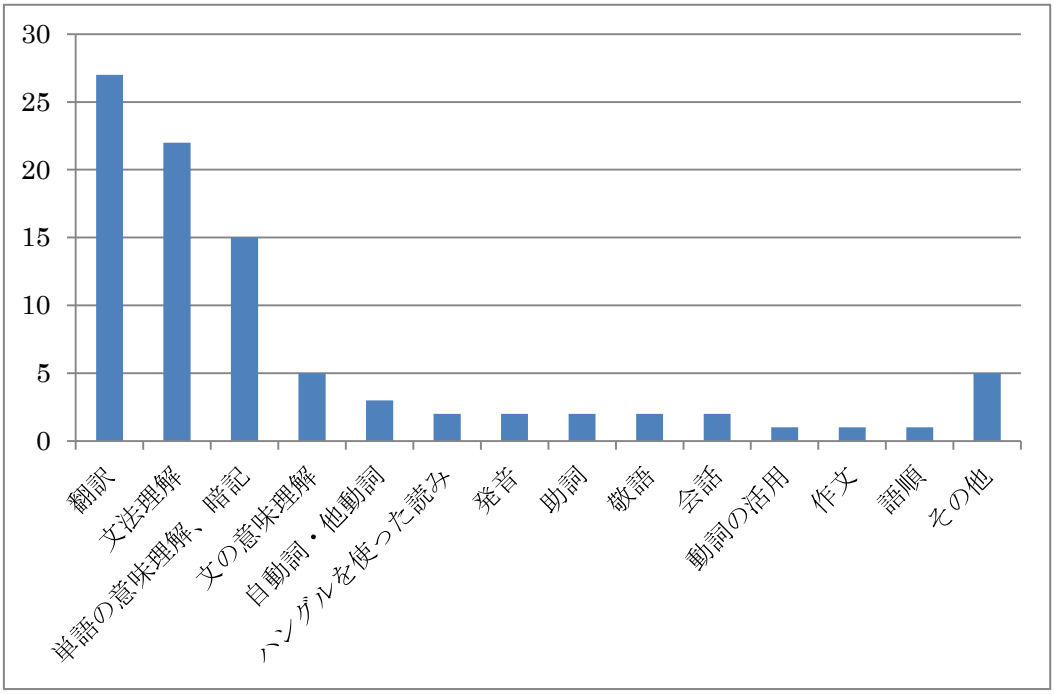


図 10：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語を学習する際の朝鮮語の活用方法
（回答者数 54 名、回答数 90）

さらに、「その他」の中には、「授業のときに朝鮮語を使う」と答えた学生が 3 名いた。つまり、授業の際は、初級中学の学生の場合、教科書は朝鮮語であり、朝鮮族の教師は中国語だけでなく、朝鮮語でも説明するため、授業中は朝鮮語で日本語を理解していると考えられる。学生たちは朝鮮語より中国語が得意という学生がほとんどであったが、日本語の学習をする際には、朝鮮語の長所をうまく活用して日本語理解に役立てていることがわかった。

では、中国語はどのように活用しているのであろうか。それを表したのが図 11 である。中国語が最も活用されているのは「単語の意味理解、暗記」であり、「漢字」と合わせると半数以上になる。つまり、朝鮮族の学生たちは中国語と日本語で共通する漢字を活用して、単語の意味を理解し、暗記していることがわかる。一方で、朝鮮語を最も活用していた「翻訳」で中国語を活用しているのはわずか 3 名であり、「文法理解」も 6 名しかいないことがわかる。これは、中国語の文法が朝鮮語の文法と比べ、日本語の文法と異なることが原因と考えられる。しかし、学生たちの回答を細かく見ていくと、例えば「具体的に用法を区別する」「細かく文法を区別する」など、日本語の文法をより深く理解するときに中国語を活用していることがわかる。また、朝鮮語活用の項目にはなかった「読解」が見られる。これもやはり共通する「漢字」の利点が大きいと思われる。朝鮮語と中国語、二つの言葉をうまく活用している学生がいる一方で、中国語を「ほとんど使わない」「ほとんどすべて使う」と答えた学生がそれぞれ 3 名いることに注目したい。

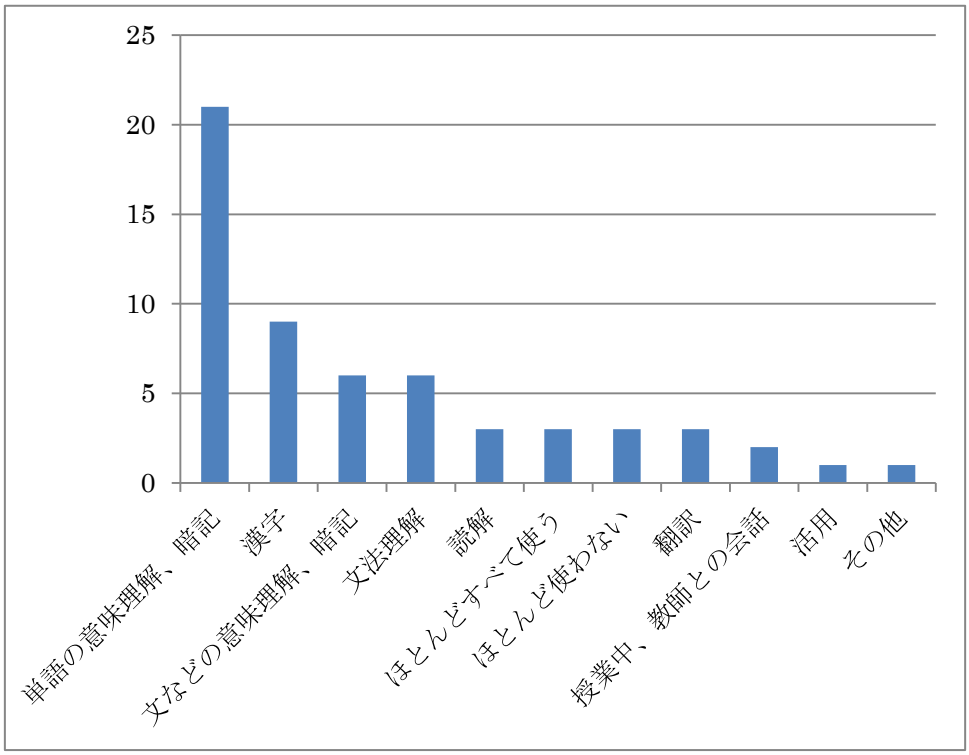


図 11：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語を学習する際の中国語の活用方法
（回答者数 47 名、回答数 58）

中国語を「ほとんど使わない」と答えた学生は、すべて初中 3 年生のクラスの学生であり、「ほとんどすべて使う」と答えた学生はすべて高中 1 年生のクラスの学生であった。すでに述べたが、鉄嶺市朝鮮族高級中学では、初級中学のクラスでは朝鮮語で書かれた教科書を使い、高級中学のクラスでは中国語で書かれた教科書を使っている。さらに初中 3 年の日本語授業を担当している教師は中国語より朝鮮語の方が上手な教師であり、なおかつ授業中の教授用語は 60%以上が朝鮮語である。また、高中 1 年の日本語授業を担当している教師は朝鮮族ではあるが朝鮮語がしゃべれないため、教授用語の 95%が中国語となっている。つまり、この項目の調査結果は、日本語の教科書の言語、及び日本語授業を担当している教師の言語能力や教授用語が、学生の言語活用に影響を及ぼしているということを示している。「授業中、教師との会話」で中国語を使っていると答えた学生も、高中 1 年のクラスの学生が 1 名、また、もう一人は「中国語も朝鮮語も両方使っている」ということで、両方の言葉が話せる教師のクラスの学生であった。

以上、朝鮮語、中国語という二つの言語の活用方法について見てきたが、調査結果を見ると、やはり二つの言葉の利用できる部分を日本語の学習に役立てていることがよくわかる。また、教師の教授用語も少なからず学生の言語活用に影響を与えていることがわかる。

次は、教師の教授用語として、どの言葉を使うのが最も良いと思うか学生に聞いた質問項目 8－5 について、その結果をまとめたものが図 12 である。

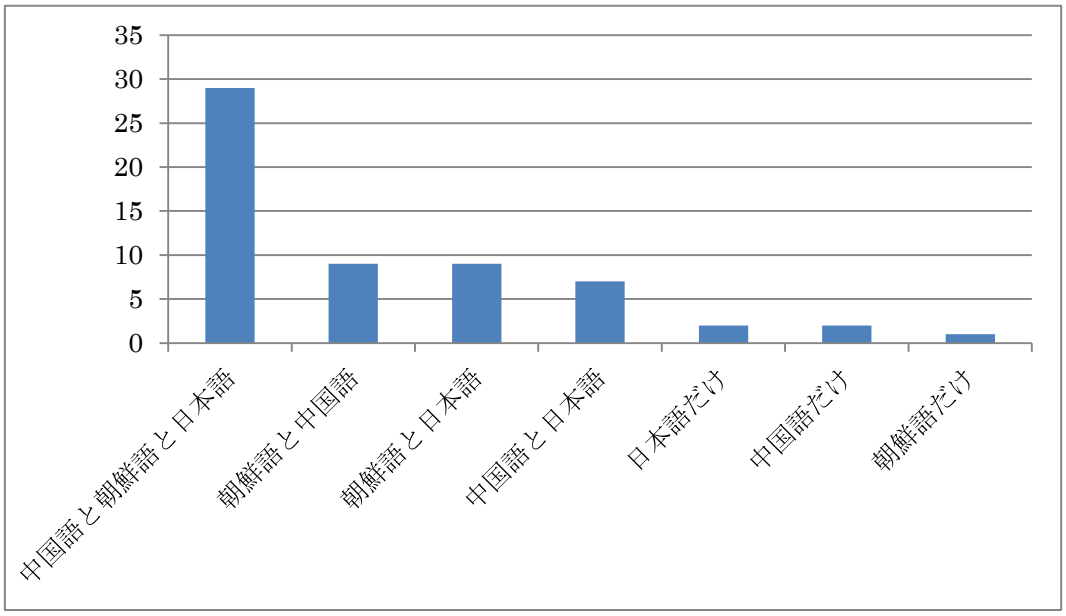


図 12：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語授業の最も良い教授用語
（回答者数 55 名、回答数 59）

結果を見ると、全回答数の半数ほどの学生が中国語、朝鮮語、日本語という三言語で授業をしてもらった方が良いと答えている。その理由はなんであろうか。理由をまとめたものを図 13 に示す。

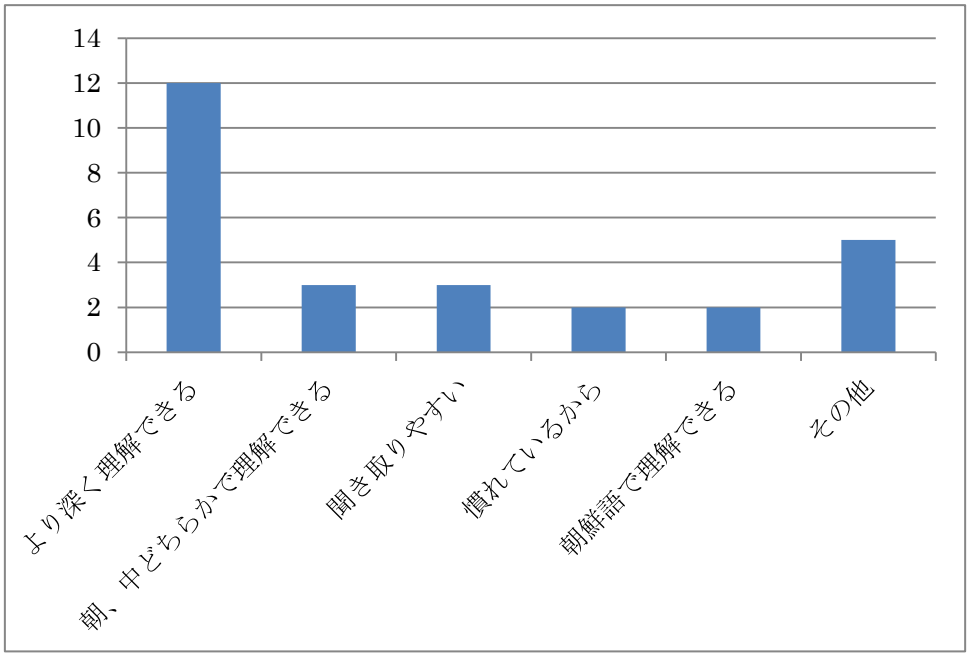


図 13：鉄嶺市朝鮮族高級中学、教授用語として三言語を使うのが良い理由
（回答者数 27 名）

すべての回答を見てみると、三言語を使うことで、より深く理解できる、より理解しやすいという意見が多く見られる。朝鮮語、中国語それぞれの長所を活かして日本語を学習していることが学生の回答からうかがえる。また、教師が授業中、三言語で教えているため「慣れているから」という回答も見られる。さらに、「朝鮮語の意味が分からなければ教師が中国語で言ってくれる」「中国語であまり理解できなくても、朝鮮語を使うと理解しやすい」など、苦手な言語を他の言語で補いながら日本語を学習していることもわかる。つまり、学生たちは三つの言語の長所を活用することで日本語をより深く理解し、なおかつ、ひとつの言語で理解できない場合も、もう一つの言語で補って理解していることがうかがえる。教師だけではなく、学習者にも三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」が見える。これはまさに朝鮮族学習者の言語学習の特徴と言えるのではないだろうか。

４－２－３．小括

以上、鉄嶺市朝鮮族高級中学において、55 名の日本語学習者（初級中学 16 名、高級中学 39 名）に対して行ったアンケート調査結果から、考察を行った。まず、日本語学習者の言語能力についてであるが、半数以上の学生が朝鮮語よりも中国語の方ができると答え、「家庭」「学校」「外」すべての場面において、朝鮮語よりも中国語を使う学生が多いことがわかった。朝鮮族学生の「漢語化」が浮き彫りになったが、日本語の学習の際は、朝鮮語を主に「翻訳」や「文法理解」に使い、中国語は「単語の意味理解、暗記」や「漢字」を覚える際に活用していることがわかった。さらに、授業の際は、教師が日本語、朝鮮語、中国語三つの言語を使って教えるのが良いと答えた学生が半数以上に上った。学生たちの学習方法には三つの言語の長所を活用することで日本語をより深く理解する「相乗的理解」と、一つの言語で理解できない場合も、もう一つの言語で補って理解する「補完的理解」がうかがえた。

４－３．吉林市朝鮮族中学校・日本語学習者の言語能力と学習方法

第 3 章では、吉林市朝鮮族中学校の教師に対するインタビュー調査から、教師の言語能力が教師の教授用語に大きな影響を与えていることが明らかになった。また、教師の語りの中には、学生が表音文字である朝鮮語のハングルを使って日本語の読みを書き表しているものもあった。では、実際に日本語学習者である学生たちは三言語をどのように活用して日本語を学んでいるのだろうか。学生に対しアンケート調査を行った。

４－３－１．吉林市朝鮮族中学校の日本語学習者に対するアンケート調査

ここでは、吉林市朝鮮族中学校において実施したアンケート調査について述べる。表 32 はアンケート調査の実施概要である。

表 32：吉林市朝鮮族中学校の日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2015 年 5 月 21 日（木）、22 日（金）
実施場所	吉林市朝鮮族中学校
実施クラス	・初級中学 1 年　31 名（男性 13 名、女性 18 名） ・初級中学 2 年　11 名（男性 3 名、女性 8 名） ・初級中学 3 年　16 名（男性 5 名、女性 11 名） ・高級中学 1 年　15 名（男性 4 名、女性 11 名） ・高級中学 2 年　23 名（男性 14 名、女性 9 名） ・高級中学 3 年　24 名（男性 9 名、女性 15 名） 合計　120 名（男性 48 名、女性 72 名） 設問 8 の項目すべてに記入されているもののみ抽出
調査方法	集合調査法を用いた。 日本語授業担当教師にアンケート用紙を渡し、各教師がそれぞれのクラスで授業の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問 初級中学：全 17 項目のうち、15 項目が選択回答、2 項目が自由回答。 また、15 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 15 項目の選択回答のうち 11 項目は複数回答可とした。 高級中学：全 21 項目のうち、19 項目が選択回答、2 項目が自由回答。 また、19 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 19 項目の選択回答のうち、15 項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	朝鮮語、中国語で書かれたアンケート用紙のうち、回答者が回答しやすい言語で書かれた用紙を選び記入。

アンケート調査は集合調査法を用い、初級中学 1 年から高級中学 3 年までの各学年の日本語選択者のアンケート用紙を回収した。ここでは、主に朝鮮族の学生たちが朝鮮語、中国語の二つの言語をどのように活用して日本語を学習しているかについて見るため、アンケートの設問 8（5 つの設問）について、すべて記入されているもののみ抽出した結果、計

120 名（男性 48 名、女性 72 名）のアンケート調査結果を得ることができた。

アンケートの調査項目は、鉄嶺市朝鮮族高級中学で行ったアンケート用紙と同じものを使用した。初級中学が全 17 項目、高級中学が全 21 項目に回答する形になっている。主に日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問である。アンケート用紙の言語は朝鮮語版と中国語版二つを用意し、回答者が回答しやすい言語で書かれた用紙を選んでもらう形にした。アンケート用紙については本論末尾に資料 14 として附す。

４－３－２．教師の教育方法の影響を受ける学習方法

ここでは、まず吉林市朝鮮族中学校の学習者の言語能力について考察する。質問項目 8 において、学習者の朝鮮語及び中国語能力について質問した。まずは、朝鮮語と中国語どちらができるかについての調査結果を図 14 に示す。

最も多いのは「中国語の方ができる」で 50 名、続いて、「同じくらいできる」が 39 名、「朝鮮語の方ができる」が 31 名であった。鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生と比べると、朝鮮語の方ができる学生が 2 倍以上多く在籍している。朝鮮族学校は、地域ごとに学生の言語能力が異なっていることがわかる。しかし「中国語の方ができる」「同じくらいできる」と答えた学生を合わせると、その数は 7 割を超え、吉林市朝鮮族中学校においても、「漢語化」が進む朝鮮族学生の現状がうかがえる。

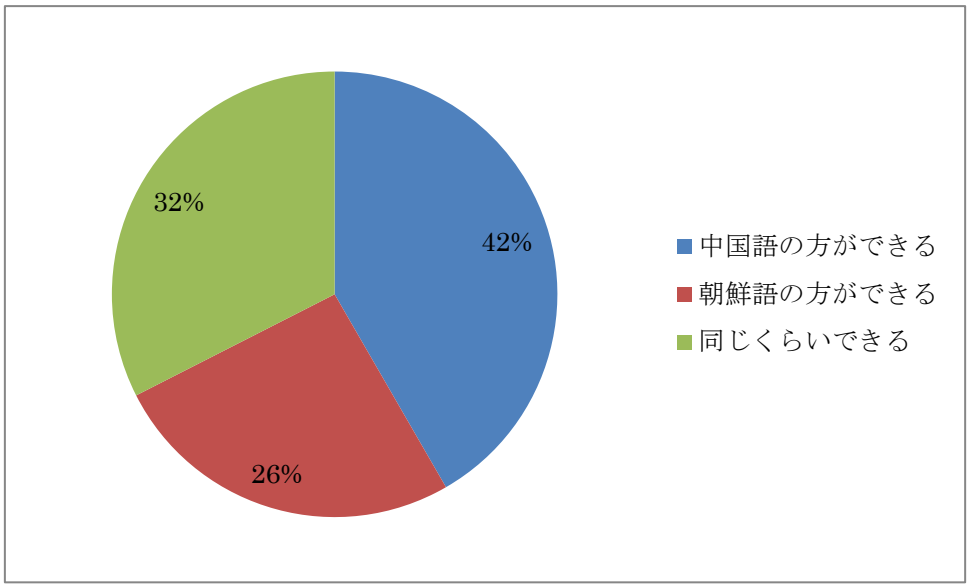


図 14：吉林市朝鮮族中学校、朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価
（回答者数 120 名）

では、「中国語の方が話せる」と答えた学生はどの程度朝鮮語を話すことができるのだろうか。それを示したのが図 15 である。

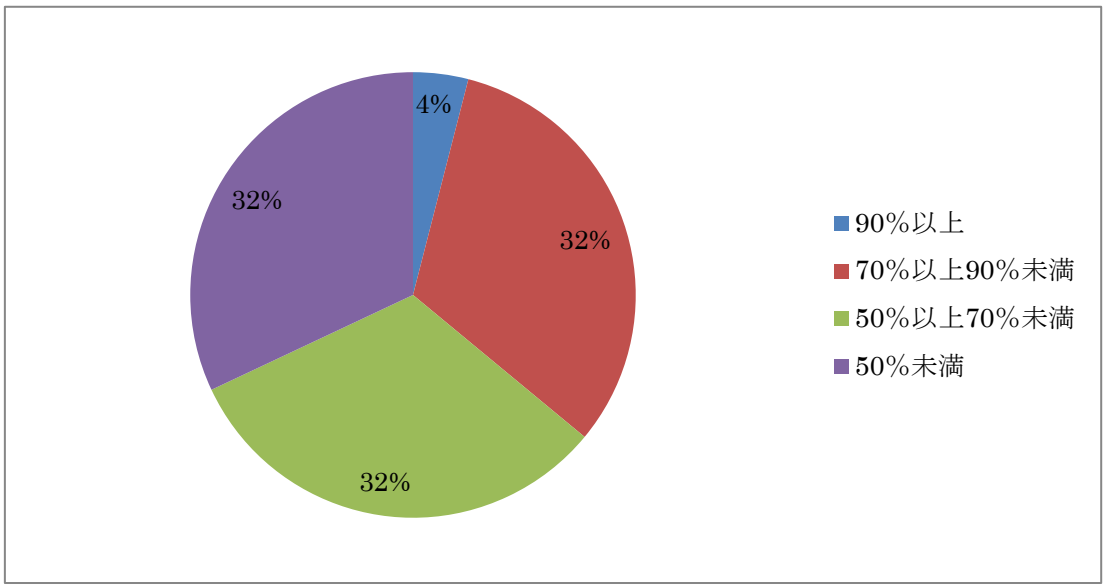


図 15：吉林市朝鮮族中学校、中国語の方ができる学習者の朝鮮語能力
（回答者数 50 名）〔中国語能力を 100%としたときの朝鮮語能力〕

「90%以上できる」以外の項目はちょうど均等になっている。これは鉄嶺市朝鮮族高級中学の調査結果と比べると、「70%以上 90%未満」「50%以上 70%未満」できる学生の割合が減り、「50%未満」である学生の割合が 2 倍近く増えていることがわかる。この結果から、吉林市朝鮮族中学校の学生の朝鮮語レベルは鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生の朝鮮語レベルに比べて低い学生の割合が高く、朝鮮語が「できる学生」「ふつうの学生」「できない学生」が均等に在籍していることがわかる。では、朝鮮語の方ができる学生の中国語レベルはどうであろうか。図 16 に示す。

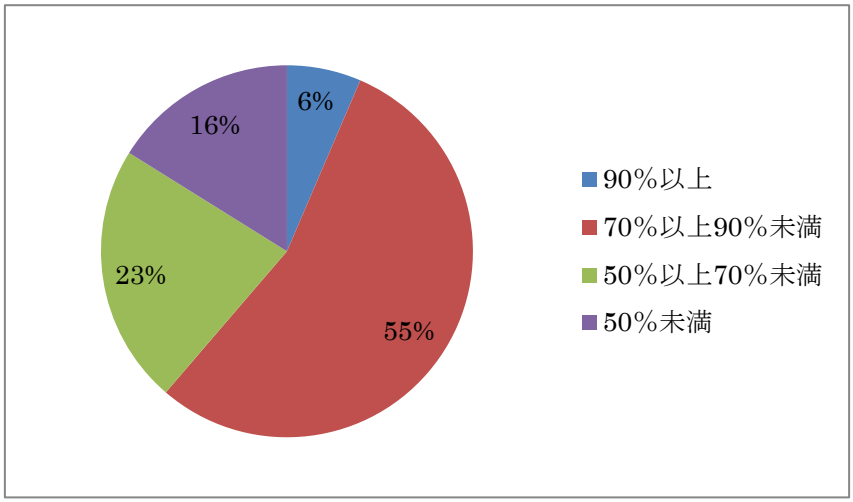


図 16：吉林市朝鮮族中学校、朝鮮語の方ができる学習者の中国語能力
（回答者数 31 名）〔朝鮮語能力を 100%としたときの中国語能力〕

最も多いのは「70%以上 90%未満」と答えた学生であり、「90%以上」の中国語レベルであると答えた学生と合わせると、6 割以上となる。また、「50%未満」と答えた学生も、朝鮮語が「50%未満」である学生より全体の割合が低いことがわかる。「中国語の方ができる」と答えた学生の朝鮮語レベルの平均は 54.2%であったのに対し、「朝鮮語の方ができる」と答えた学生の中国語レベルの平均は 66.2%であり、10%以上もの開きがあった。この点は鉄嶺市朝鮮族高級中学と同じ傾向が見られた。つまり、中国語の方ができる学生の朝鮮語能力は、朝鮮語の方ができる学生の中国語能力を下回っており、これは中国語の方ができる学生と朝鮮語の方ができる学生が会話する際に、中国語で会話する可能性が高いことを示している。

では、朝鮮語と中国語はどのような場面で使われているだろうか。図 17 に結果を示す。各項目の中で、唯一朝鮮語が中国語を上回っているのは「家族と話すとき」である。この項目については、鉄嶺市朝鮮族高級中学の調査結果においても朝鮮語使用と中国語使用の差が最も小さかった項目である。吉林市朝鮮族中学校の学生は、家族と話すときは中国語より朝鮮語を使っている学生が多いことがわかる。さらに、他の項目に関しても、鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生に比べて、朝鮮語を使用する割合が高いことがわかる。

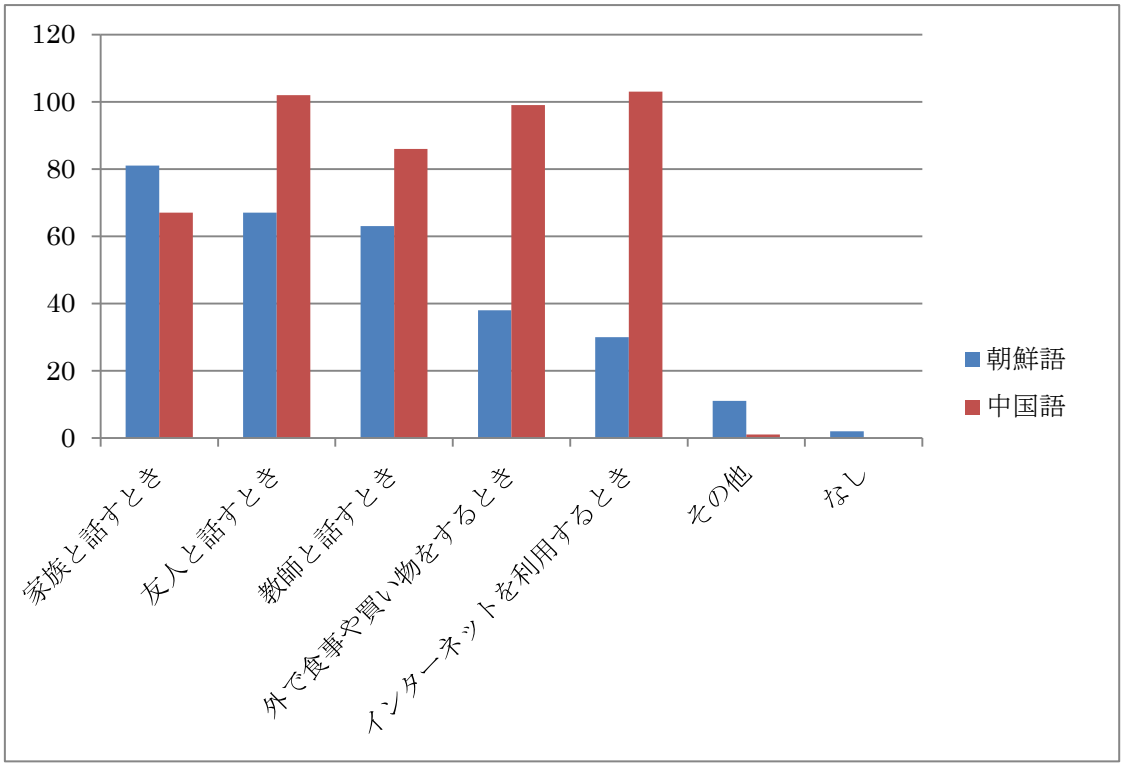


図 17：吉林市朝鮮族中学校、朝鮮語及び中国語をどんなとき使っているか

（回答者数 120 名、回答数「朝鮮語」292、「中国語」458）

このことから、吉林市朝鮮族中学校の学生の言語環境は鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生に比べ、朝鮮語を使用する割合が高く、「漢語化」が進んでいないことがわかる。しかしながら、「家族と話すとき」以外の項目はすべて中国語が朝鮮語を上回っており、その他の意見の中にも「朝鮮語は朝鮮語授業や日本語授業のときしか使わない」といった回答が多く見られることから、やはり中国語は朝鮮族にとってより多く使われている言葉であると言える。また、「韓国に行くときに使う」という回答も見られ、中国ではない場所で使われていることがわかった。ここからも朝鮮族にとって朝鮮語が民族語でありつつも、母国語である中国語より使用頻度の低いものとなり、むしろ「外国」である韓国でしか使っていない状況が浮かび上がっている。朝鮮族の朝鮮語が「外国語化」していることがうかがえる。

では、朝鮮語はどのように日本語学習に活かされているのだろうか。それを示したのが図 18 である。最も多かったのは「文法理解」、次は「単語の意味理解、暗記」であった。これは鉄嶺市朝鮮族高級中学で行った調査結果と同じく、多くの学生が挙げていたが、大きく異なったのは「翻訳」である。鉄嶺市朝鮮族高級中学では、「翻訳」がトップであったが、吉林市朝鮮族中学校では、上から 5 番目に多い項目となっている。

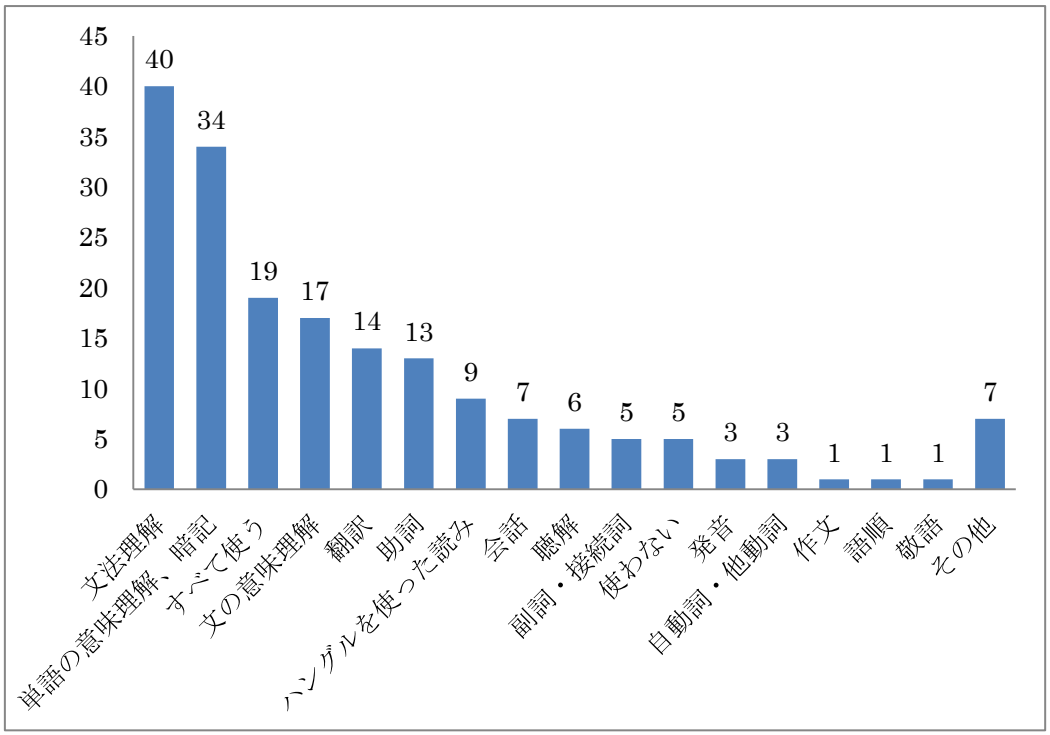


図 18：吉林市朝鮮族中学校、日本語を学習する際の朝鮮語の活用方法
（回答者数 120 名、回答数 185）

これは、教師の教育方法が大きな影響を与えているのではないかと考えられる。鉄嶺市朝鮮族高級中学では、高級中学入試を見据え、授業中に朝鮮語に翻訳する機会が多いこと

から「翻訳」が最も多くなったと考えられる。逆に吉林市朝鮮族中学校では「すべて使う」が三番目に多いが、これは、初中 3 年の教師がすべて朝鮮語で日本語を教えているためであると思われる。逆に「使わない」と答えた学生は朝鮮語で授業が行われていない可能性が高いと考えられる。現に、一人の学生の回答の中には「教師が漢族だから朝鮮語が使えない」というものもあった。このように、日本語の授業で重点的に教えている項目や、教師の教授用語が学生の言語使用に大きな影響を与えていることがわかる。

吉林市朝鮮族中学校の調査結果で注目したいのは「副詞・接続詞」を学ぶとき、朝鮮語を使っているという回答である。例えば「かなり（상당히）、 あるいは（혹은）、すっかり（완전）、ちなみに（어찌는 김에）、まるで（마치）、さて（그런데, 그럼）」などの具体例が挙げられている。この「副詞・接続詞」については、朝鮮族教師の話の中でも出てきており、品詞によって朝鮮語が使いやすいものがあるという点は非常に興味深い。さらに、単語の中でも、「日本語の外来語は朝鮮語の外来語と共通するものがあるので覚えやすい」といった回答もあった。これは、中国語の場合、外来語はすべて漢字で表記されるが、それはもともとの発音とは大きく異なる場合が多い。それに比べて、朝鮮語は音をハングルで表すことができるので、もとの音に近い音で読むことができる。つまり、同じ単語でも漢字のものに関しては中国語を、外来語に関しては朝鮮語を活用していることがわかる。日本語の文字によって、朝鮮語と中国語を使い分け、なおかつ発音や読み方についても区別し、それぞれ活用している点は朝鮮族ならではの日本語学習方法であると言える。では、中国語はどのように活用されているのであろうか。それを図 19 に示す。

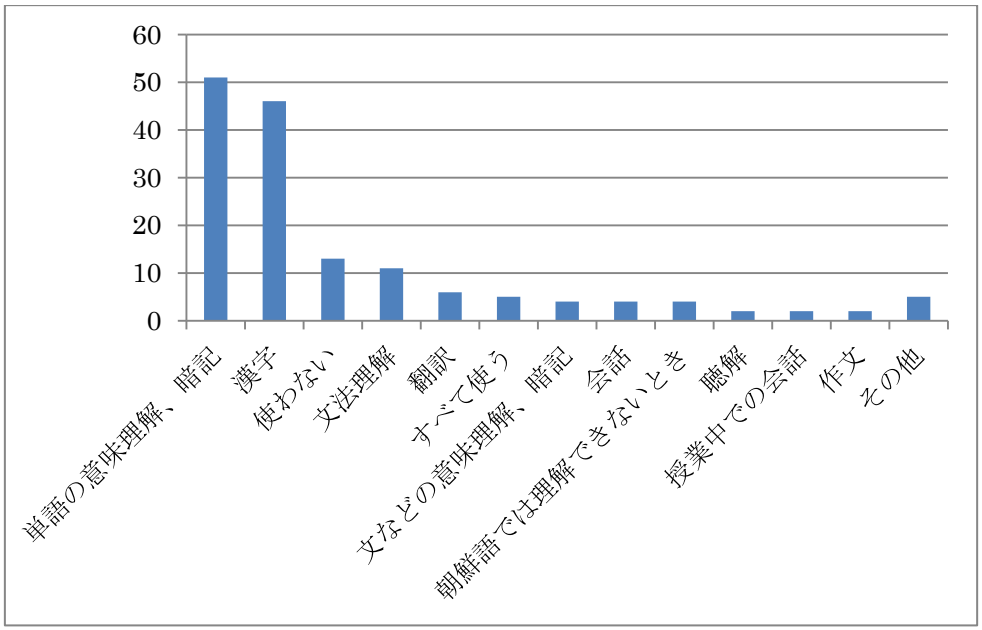


図 19：吉林市朝鮮族中学校、日本語を学習する際の中国語の活用方法

（回答者数 115 名、回答数 155）

最も多かったのは、「単語の意味理解、暗記」そして「漢字」であった。これは鉄嶺市朝鮮族高級中学の調査結果と同じであった。特に学生たちは「漢字の単語」の例を多く挙げていた。例えば、「日本人（日本人）、国際（国际）、簡単（简单）、場合　（场合）、朝鮮族（朝鲜族）、当然　（当然）、直接　（直接）、傘（伞）　怒る（怒）」などである。これらの漢字は意味も日本語の意味と共通しているため、中国語の利点を最大限に活かせる部分であると言える。このように、中国語の漢字を最大限に活かして単語を覚えたり、理解したりしていることがわかる。

注目したいのは「朝鮮語では理解できないとき」に中国語を使うと回答した学生が 4 名いたことである。これはおそらく、教師へのインタビューにも出てきたが、朝鮮語より中国語で説明した方がわかりやすい文法項目がある。例えば、推量表現の場合は、「～ようだ」＝「好像」、「～だろう」＝「应该」のように、朝鮮語より中国語で説明した方が、より説明しやすく、また理解しやすいと考えられる。さらに興味深かったのは、「友人が朝鮮語を聞いてわからないときに、中国語で教える」という回答があった点である。朝鮮語能力と中国語能力に差がある学生たちが、同じクラスで学習しているために生じる興味深い活用方法であると言える。では、教師の教授用語として学生が良いと思う組み合わせはどんなものであろうか。その調査結果を図 20 で示す。

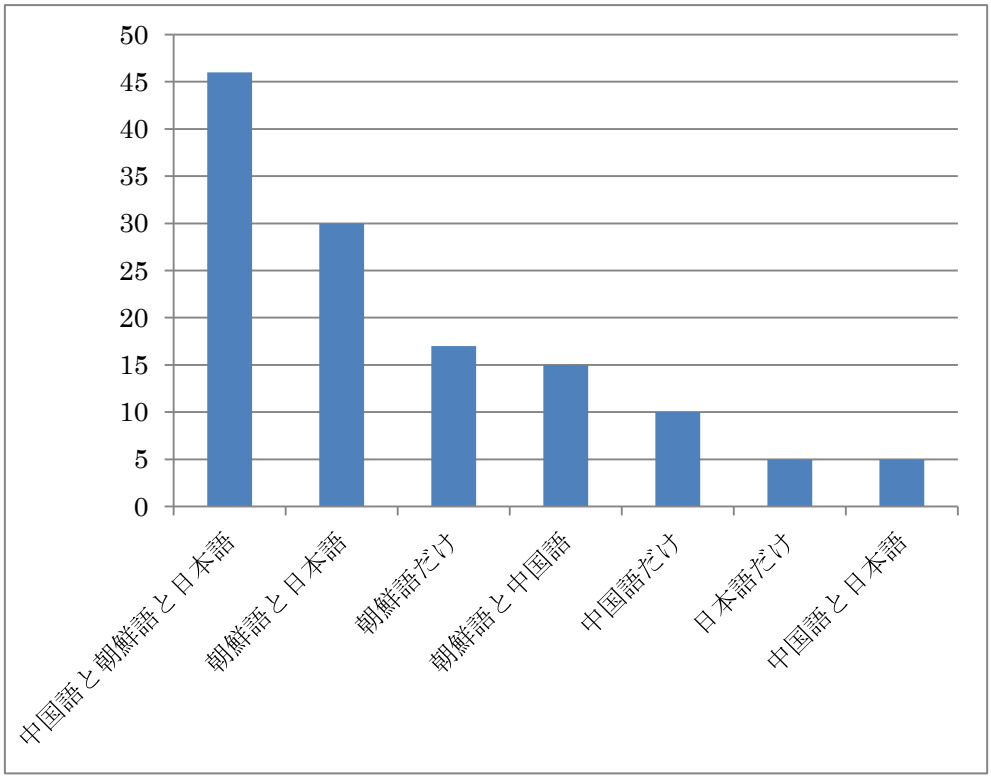


図 20：吉林市朝鮮族中学校、日本語授業の最も良い教授用語

（回答者数 120 名、回答数 128）

「中国語と朝鮮語と日本語」、つまり三言語を使って教えるのが一番良いと答えた学生が最も多かった。吉林市朝鮮族中学校の学生たちも、鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生と同様、三言語使用による授業を望んでいることがわかった。その理由について図 21 に示す。

最も多かったのは「理解しやすいから」であったが、回答を詳しく見てみると、いろいろな理解の仕方があることがわかる。一つ目は、「文法は朝鮮語、漢字のある単語は中国語、日常会話は日本語のように、それぞれの長所を使いながら教えれば、いろいろな面から深く理解することができるから」という理由、二つ目は、「ひとつの言語で聞き取れなかった場合でも、他の言語で聞き取ることができ理解しやすい」という理由である。

中にはクラスメイトのことを考えて、「中国語ができる学生が多いから、朝鮮語だけではなく、三言語で教えた方が良い」という意見や、「学生によって朝鮮語、中国語の能力に差があるから、どちらも使った方が良い」という意見もあった。三言語による教え方は、朝鮮語、中国語を話すことができるものの、その能力に差がある朝鮮族学校の学生たちに合った教育方法であるということがわかる。

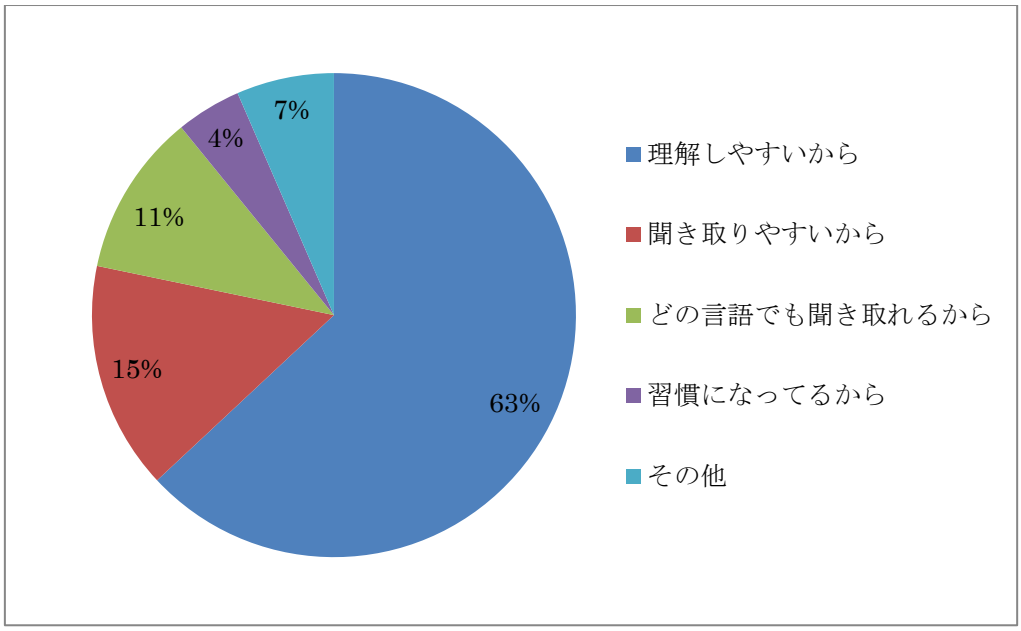


図 21：吉林市朝鮮族中学校、教授用語として三言語を使うのが良い理由（回答者数 46 名）

では、次に多かった「朝鮮語と日本語」が良い理由を図 22 に示す。最も多かったのは「朝鮮語と日本語は似ているから」と「理解しやすいから」であった。中には「朝鮮語は上手ではないが、朝鮮語と日本語は似ているから」という回答もあった。自分自身の言語の得意不得意より、日本語との近似性を重視していることがわかる。それ以外の意見として注目したいのは、「日本語の授業で朝鮮語も学ぶことが出来る」と答えた学生がいたことである。これは朝鮮族の日本語教師へのインタビューにおいても同様のことが指摘されていたが、学生たちも「朝鮮語を外国語」として捉えていることがわかる。

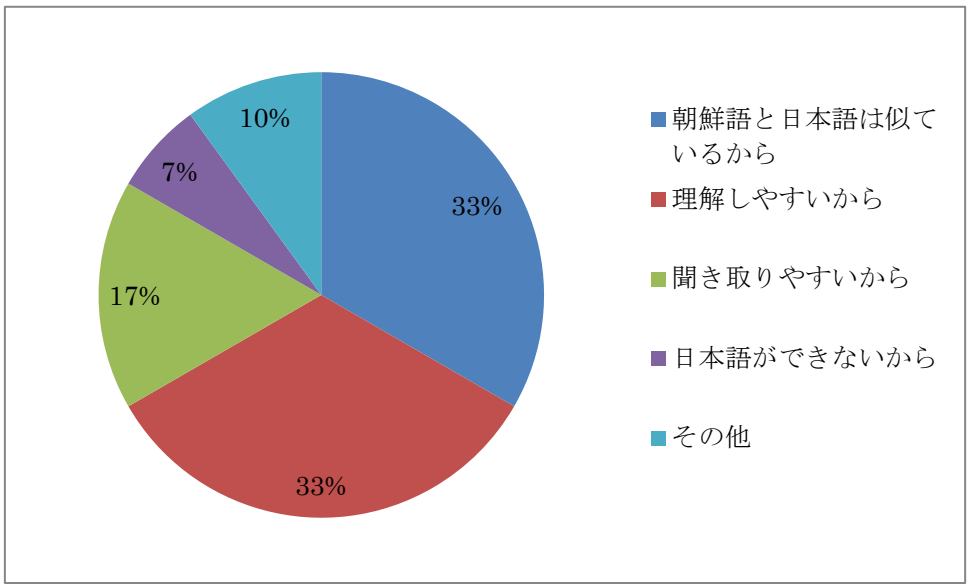


図 22：吉林市朝鮮族中学校、教授用語として「朝鮮語と日本語」を使うのが良い理由
（回答者数 30 名）

他には「中学で日本語の学習をはじめたときから日本語と朝鮮語で理解しているので習慣になったから」といった意見や、「朝鮮族だから朝鮮語を使わなければならない」といった民族語として朝鮮語を意識している意見も見られた。学生たちの朝鮮語に対する様々な思いがうかがえる結果となった。なお、「朝鮮語だけで教えるのが良い」を選んだ学生の理由もほとんどが「朝鮮語と日本語は似ているから」というものであった。さらに「朝鮮語と中国語」を選んだ理由としては、「聞き取りやすいから」が最も多く、「中国語だけが良い」を選んだ理由としては、「中国語ができるからわかりやすい、聞き取りやすい」という回答が多かった。

鉄嶺市朝鮮族高級中学と比較してみると、「朝鮮語」をより多く取り入れて授業してほしいという回答が多いことがわかる。これは、吉林市朝鮮族中学校の朝鮮語を話せる学生の割合が比較的高いことが要因であると考えられる。しかしながら、両校とも「三言語で教える方が良い」と答えた学生が最も多かったことは、三言語による理解、つまり「相乗的理解」と「補完的理解」が有効であるということを学習者である学生自身が認識しているということを示している。

４－３－３．小括

以上、吉林市朝鮮族中学校におけるアンケート調査結果をもとに、主に朝鮮語、中国語という言語に注目して考察を加えた。吉林市朝鮮族中学校は、鉄嶺市朝鮮族高級中学の学生と比べて、朝鮮語ができる学生の割合が高く、家族との会話は中国語より朝鮮語を使う学生の方が多かった。しかし、中国語の方ができる学生の朝鮮語能力より、朝鮮語の方が

できる学生の中国語能力が高いことから、学生同士では朝鮮語よりも中国語が使われている可能性が高く、実際に友人と話すときは朝鮮語より中国語を話す学生が多いことが明らかになった。また、日本語を学習する際の朝鮮語と中国語の活用方法は、担当教師の教える学習項目や教授用語が大きな影響を与えていることがわかった。しかし、主に朝鮮語の「文法」と中国語の「漢字」を活用して日本語を学習していることから、それぞれの言語の長所を日本語学習に役立てていることが明らかになった。さらに教授用語に関しては、日本語、朝鮮語、中国語の三言語で教えるのが一番良いと答えた学生が最も多く、これは鉄嶺市朝鮮族高級中学の調査結果と共通していた。その理由としては、「あるときは朝鮮語、あるときは中国語、あるときは日本語で理解する」というように、それぞれの長所を使いながら教えることでより多角的に、深く理解することができるという「相乗的理解」を期待したもの、そして、「ひとつの言語で聞き取れなかった場合でも、他の言語で聞き取ることができ、理解しやすい」という「補完的理解」を重視していることが挙げられる。

同じ朝鮮族学校であるにもかかわらず、調査結果にはいくつかの違いが見られた。これはすなわち朝鮮族学校の多様性を示している。その一方で、現在、三言語で行われている日本語教育が、多くの学生たちにとっては概ね受け入れられており、三言語の長所を駆使して日本語を学習しているということもまた共通していた。

４－４．瀋陽市朝鮮族第一中学・日本語学習者の言語能力と学習方法

瀋陽市朝鮮族第一中学では教師に対するインタビュー調査から、朝鮮語を中心としながらも、日本語と中国語が朝鮮語の補助的役割を果たしている教育方法がうかがえ、また授業見学からは、三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、同校では学習者の日本語学習方法について明らかにするため、学生に対するインタビュー調査、及びアンケート調査を行った。まず、4－4－1 においてインタビュー調査について述べる。

４－４－１．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するインタビュー調査

瀋陽市朝鮮族第一中学では、実際に日本語を学習している学生たちに対してもインタビュー調査を実施することができた。インタビュー調査はそれぞれ異なるメンバーで 2 回に分けて行った。まず最初のインタビュー調査①について述べる。インタビュー調査①の実施概要を表 33 に示す。

3 名の学生は、瀋陽市朝鮮族第一中学で日本語教師をしているＳＡ氏に紹介してもらい、

調査を実施するにいたった。対象者はすべて同校で日本語授業を選択している高級中学 2 年生の女子学生 3 名である。インタビューは日本語及び韓国語で行った。また、半構造化インタビューの形式で行い、記録は録音する許可が得られたため、インタビューの内容を録音し、後日、文字起こしを行った。

表 33：瀋陽市朝鮮族第一中学・日本語学習者に対するインタビュー調査①の実施概要

実施日	2015 年 10 月 11 日（日）
対象者	日本語授業を選択している高級中学 2 年生の学生 3 名 （3 名とも女性）
使用言語	日本語及び韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	録音、及びフィールドノート
インタビューの実施場所	瀋陽市内
インタビューの時間	1 時間 30 分、3 名同時に実施

さらに、フィールドノートによる記録も行った。インタビュー時間は 1 時間 30 分であり、3 名同時に行った。次にインタビュー調査①の対象者の属性を表 34 に示す。

表 34：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査①の対象者の属性

	言語能力、日本語学習歴、及び出身初級中学など
ＳＤ（女性） 1999 年 5 月 16 日生	瀋陽市朝鮮族第二中学出身 朝鮮語と中国語はどちらも同じくらいできる。 日本語は初級中学から学習している。
ＳＥ（女性） 1999 年 3 月 25 日生	瀋陽市朝鮮族第二中学出身 朝鮮語と中国語はどちらも同じくらいできる。 日本語は初級中学から学習している。
ＳＦ（女性） 2000 年 3 月 18 日生	瀋陽市朝鮮族第三中学出身 朝鮮語と中国語はどちらも同じくらいできる。 日本語は初級中学から学習している。 漢族の幼稚園に通っていたため、中国語には慣れている。 小学校は朝鮮族学校。小学校から「韓国語」を習い始めた。

3 名ともに初級中学から日本語を学び始め、朝鮮語と中国語はどちらも同じレベルである。しかし、ＳＦ氏は漢族の幼稚園に通っていたため中国語には慣れており、小学校から朝鮮族学校に通い始めたため、「韓国語」（ＳＦ氏本人が「朝鮮語」ではなく「韓国語」と話した）はそのときから習い始めた。

次にインタビュー調査①の対象者の言語能力と言語使用環境について表 35 に示す。

表 35：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査①対象者の言語レベルと言語使用環境

	家庭内	学校内	学校外
ＳＤ（女性） 朝鮮語＝中国語	朝鮮語と中国語を混ぜて使用。祖父母と一緒に暮らしている。両親は出稼ぎで韓国にいる。	友人とも教師とも中国語で話す。	朝鮮語と中国語を混ぜて使用。
ＳＥ（女性） 朝鮮語＝中国語	朝鮮語使用。中国語はあまり使わない。 父親と一緒に住んでいる。	友人とは朝鮮語と中国語を混ぜて使用。教師とは授業中も授業以外でも中国語で話す。	中国語で話す。
ＳＦ（女性） 朝鮮語＝中国語	中国語使用。 両親と一緒に暮らしているが、両親は自分に対して朝鮮語で話す。	友人とも教師とも中国語で会話する。	中国語で話す。

3 名のインタビュー対象者の語りについては、録音の文字起こしを行った後、まとめたものを資料 15 として本論末尾に附す。次にインタビュー調査②の実施概要を表 36 に示す。

表 36：瀋陽市朝鮮族第一中学・日本語学習者に対するインタビュー調査②の実施概要

実施日	2015 年 10 月 11 日（日）
対象者	日本語授業を選択している高級中学 2 年生の学生 5 名 （男性 2 名、女性 3 名、うち女性 1 名は漢族）
使用言語	日本語及び韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	録音、及びフィールドノート
インタビューの実施場所	瀋陽市内
インタビューの時間	2 時間、5 名同時に実施

5 名の学生は、瀋陽市朝鮮族第一中学で日本語教師をしているＳＡ氏に紹介してもらい、調査を実施するにいたった。対象者はすべて同校で日本語授業を選択している高級中学 2

年生の学生 5 名である。インタビューは日本語、及び韓国語で行った。また、半構造化インタビューの形式で行い、記録は録音する許可が得られたため、インタビューの内容を録音し、後日、文字起こしを行った。また、フィールドノートによる記録も行った。インタビュー時間は 2 時間であり、5 名同時に行った。

次にインタビュー調査②の対象者の属性を表 37 に示す。

表 37：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査②の対象者の属性

	言語能力、日本語学習歴、日本語の選択理由など
ＳＧ（男性） 1999 年 5 月 12 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 60%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 英語が苦手で日本語を選択した。
ＳＨ（女性） 1999 年 4 月 1 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 80%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 父親が日本のアニメが大好きで、その影響を受けて日本が好きになり、日本語を選択した。 今年は学校の代表として、北京で開かれた「日本語作文コンクール」に参加し、賞をもらった。
ＳＩ（女性） 1998 年 4 月 28 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 50%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 英語のレベルが下がり、それがショックで日本語を選択した。
ＳＪ（男性） 1998 年 2 月 23 日生	朝鮮語と中国語はどちらも同じくらいできる。 日本語は初級中学から学習している。 英語ができなかったから日本語を選択した。
ＳＫ（女性） 1999 年 6 月 16 日生 漢族	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 50%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 漢族だが、朝鮮族幼稚園、朝鮮族小学校に通っていた。 アニメが好きだったので日本語を選択した。

5 名ともに初級中学から日本語を学び始めた。5 名のうち、4 名が朝鮮語より中国語の方が得意であり、1 名は同じくらいできると話していた。ＳＫ氏は漢族であるが、朝鮮族幼稚園、朝鮮族小学校に通っていた。漢族の幼稚園は厳しい教育をするので、両親が朝鮮族の幼稚園に通わせたのだと思うとＳＫ氏は話していた。また、5 名中、3 名が英語が苦手だったために、中学において日本語を選択している。次にインタビュー調査②の対象者の言語能力と言語使用環境について表 38 に示す。

表 38：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査②対象者の言語レベルと言語使用環境

	家庭内	学校内	学校外
ＳＧ（男性） 中国語＞朝鮮語 （60%）	①中国語のみ ②朝鮮語のみ ③朝鮮語と中国語を混ぜて ①、②、③のどれかで話す。両親と一緒に住んでいる。	女子学生と話す場合は朝鮮語。 男子学生と話す場合は中国語。	中国語
ＳＨ（女性） 中国語＞朝鮮語 （80%）	①中国語のみ ②朝鮮語のみ ③朝鮮語と中国語を混ぜて ①、②、③のどれかで話す。両親は出稼ぎで韓国にいるため、祖母と妹と一緒に住んでいる。	朝鮮語、中国語両方で話す。	朝鮮族の人のお店では朝鮮語で話すが、それ以外は中国語。
ＳＩ（女性） 中国語＞朝鮮語 （50%）	中国語でしゃべる。父と一緒に住んでいるが、父は「韓国語」でしゃべる。母は韓国に出稼ぎに行っている。	中国語でしゃべる。 しかし、友人とインターネットでチャットするときは朝鮮語を使う。	中国語
ＳＪ（男性） 朝鮮語＝中国語	朝鮮語のみ使う。両親は韓国に出稼ぎに行っているので、祖父母と一緒に住んでいる。	好きな女子学生とは朝鮮語で話す。それ以外は中国語で話す。	中国語
ＳＫ（女性、漢族） 中国語＞朝鮮語 （50%）	中国語	中国語	中国語

※言語レベルのパーセンテージはもう片方の言語レベルを 100%とした場合のもの

5 名のインタビュー対象者の語りについては、録音の文字起こしを行った後、まとめたものを資料 16 として本論末尾に附す。

４－４－２．多様な日本語理解と朝、中両言語の使い分け

まずインタビュー調査①をもとに、学習者の言語能力とその活用方法について考察をする。3 名の朝鮮語及び中国語の言語環境についての語りを以下に記す。

私は祖父母と一緒に暮らしている。家では朝鮮語と中国語を混ぜて使っている。学校では友達とも教師とも中国語で話す。学校の外では、朝鮮語と中国語を混ぜて使っている。人が多いところではあえて朝鮮語で話している。それは漢族が朝鮮語を聞き取れないからだ。漢族に聞かれたくないときは朝鮮語で話したりする。（ＳＤ氏）

私は父と一緒に暮らしている。家では朝鮮語で話しており、中国語はあまり使わない。学校では、友達とは朝鮮語と中国語を混ぜて話している。教師とは中国語で話す。授業以外でも教師とは中国語で話す。それは普段、中国語で学習しているため慣れているからだ。学校の外でも中国語を使っている。（ＳＥ氏）

私は家では中国語を使っているが、両親は朝鮮語で話している。両親は朝鮮語で話すが、私は中国語で話している。それは中国語で話すことに慣れているからだ。朝鮮語でしゃべるのは嫌だ。それは朝鮮語で話すのが苦手だからだ。学校では友達とは中国語、教師とも中国語で話す。学校の外でも中国語で話す。私は漢族の幼稚園に通っていたため、中国語には慣れている。小学校は朝鮮族学校に通い、小学校から「韓国語」を学習しはじめた。（ＳＦ氏）

まずは家庭内での言語使用であるが、3 名とも使用言語が異なっている。ＳＤ氏は朝鮮語と中国語を混ぜて使用し、ＳＥ氏は朝鮮語で話し、ＳＦ氏は中国語で会話している。さらにＳＦ氏は、両親は朝鮮語で話しているにもかかわらず、中国語で話している。

次に学校内であるが、ＳＤ氏とＳＦ氏は中国語のみを使用しているが、ＳＥ氏は朝鮮語と中国語を混ぜて使っていることがわかる。さらに学校外ではＳＥ氏とＳＦ氏は中国語のみ使用しているが、ＳＤ氏は朝鮮語と中国語を混ぜて使用している。このように同じ学校に通っている同級生であっても、状況によって、それぞれ使用する言語が異なっていることがわかる。

3 名の学生は初級中学から日本語を学習しているが、英語ではなく、日本語を選んだ理由として「大学入試に有利である」ことを挙げていた。日本語は英語に比べて学びやすいのだそうだが、高級中学に入って、日本語がだんだん難しくなってきている感じがするという。中でも文法や尊敬語が一番難しいと話していた。

では、日本語を学習する際に、どのように朝鮮語と中国語を活用しているのだろうか。3 名の語りから、特に朝鮮族の特徴が表れているものを以下に記す。

教師は普段から中国語の漢字と日本語の漢字を比較させながら教えている。例えば、「手紙」というのは、中国語では「トイレットペーパー」という意味なので、日本語の「手紙」を覚える場合は、意味は朝鮮語の「편지」で覚え、文字はそのまま「手紙」で覚える。つまり、文字は中国語を活用し、意味は朝鮮語を活用している。「間に合う」という表現は中国語の「赶趟」で理解する。教師は朝鮮語の「제 시간에 가닿다」で説明するが、朝鮮語よりも中国語の方がぴったりくるから中国語で理解する。（ＳＤ氏）

受身表現は中国語の「被」で覚え、使役表現も中国語の「让」で覚える。可能表現も中国語の「会、能」で理解する。それは、中国語で理解する方が簡単だからだ。教師が朝鮮語で説明しても、それを中国語で理解している。このような切り替えが朝鮮族はみんなできる。（ＳＦ氏）

まずＳＤ氏の語りから、同じ漢字であっても日本語と中国語で意味が違う場合は、朝鮮語を使って、その意味を区別していることがわかる。日本語と中国語が表記上では同じであっても、意味にズレが生じる場合に朝鮮語を使用して補完している。ここにも新たな「補完的理解」の事例が見られる。

次にＳＤ氏、ＳＦ氏の語りから、教師がたとえ朝鮮語で日本語の文法の解釈を行い、説明したとしても、学習者は朝鮮語、中国語のどちらか理解しやすい方を選んで解釈していることがわかる。しかし、可能表現などは、「教科書が朝鮮語で翻訳されているし、教師も朝鮮語で説明するため朝鮮語の方が理解しやすい」と話していた。日本語のひとつの文法表現に対して、朝鮮語で解釈するか、中国語で解釈するか、選択するときは、まず学習者自身の言語能力、及び言語使用、そして教師が日本語を説明する際に使用する言語、さらに、日本語の意味と朝鮮語、中国語それぞれの意味のズレの大きさが影響を与えているのではないかと考えられる。学習者自身の言語能力については、ＳＦ氏のように、普段中国語で話しているため、教師が朝鮮語で説明しても、それを中国語で解釈し理解していると考えられる。また、ＳＤ氏が「間に合う」を中国語で理解するのは、日本語の意味と中国語の意味のズレがあまり感じられず、朝鮮語の意味とのズレが大きく感じられたためではないだろうか。可能表現について、教師の教えたとおりに朝鮮語で解釈しているのは、朝鮮語であっても中国語であっても日本語の意味とそれほどズレはなく、またＳＤ氏が朝鮮語と中国語を同じレベルで使いこなせているからであると考えられる。しかし、この判断は朝鮮族一人一人によって異なるとも考えられるため、さらなる検証が必要であろう。

次にインタビュー調査②について、学習者が三言語をどのように日本語学習に活用しているのかについて考察をする。三言語使用に関する語りは以下のとおりである。

日本語の受身表現は中国語で理解しているが、使役表現は日本語で理解している。依頼表現は朝鮮語の「～해 주세요」（～してください）で理解している。可能表現は中国語の

「能、会」（できる）を使っている。単語は主に中国語で覚え、助詞や敬語は朝鮮語を使っている。（ＳＧ氏）

受身、使役、可能表現すべて中国語で理解している。（ＳＨ氏）

日本語の文法は、受身表現は中国語で理解するが、使役表現と可能表現は朝鮮語で理解している。（ＳＩ氏）

日本語の文法は、受身、使役、可能表現ともに中国語で理解している。（ＳＪ氏）

日本語の文法は、受身表現と使役表現は中国語で理解し、可能表現は朝鮮語で理解している。なぜなら、朝鮮語と日本語は文法が似ているし、教師は昔から朝鮮語で日本語の文法を説明しているからである。（ＳＫ氏）

受身表現については、5名とも中国語の「被」で理解している。一方、使役表現については、3名は中国語の「让」、1名は朝鮮語の「시키다」、1名は日本語でそのまま理解と、三つのタイプに分かれた。まさに三言語を駆使して日本語教育を行っている朝鮮族の特徴が出た形となった。可能表現については、3名が中国語の「能、会」、2名は朝鮮語の「할 수 있다」で理解している。助詞や敬語は5名とも朝鮮語で理解している。

ここで注目したいのは、使役表現と可能表現を朝鮮語で理解しているのが、普段朝鮮語を使っていないＳＩ氏であり、可能表現を朝鮮語で理解しているのが漢族であるＳＫ氏であった点である。この点について、ＳＫ氏に質問してみると、日本語の教師が朝鮮語で教えているから朝鮮語で理解しているのだという。さらにＳＫ氏は朝鮮語と日本語は文法が似ているから、日本語の文法については朝鮮語で理解し、日本語の単語については中国語で覚えているのだそうだ。インタビュー調査①のＳＦ氏は、教師が朝鮮語で説明したものを中国語に変換して理解していたが、ＳＩ氏とＳＫ氏の場合は、教師が朝鮮語で説明したものを得意な中国語で解釈せず、そのまま朝鮮語で理解していることがわかる。つまり、得意な言語で理解することが可能である日本語の文法である場合でも、必ずしもその得意な言語を使って理解するわけではないことを示している。それと同時に、日本語を学習している学生にもよるが、教師が授業中、日本語をどの言語によって解釈し、説明するかが学生の理解に大きな影響を与えているとも考えられる。

最後に、朝鮮語と韓国語の違いについて触れたい。今回インタビューした8名の学生に、韓国人学習者が苦手とする「つ〔tsu〕」、「ず〔dzu〕」、「ぜ[ze]」の音を発音してもらった。すると8名とも正確な発音ができていた。ハングルでそれぞれの音を表すとすれば、「つ」は「쯔[ʨ'ɯ], 츠[ʨʰɯ]」、「ず」は「즈[ʤɯ]」、「ぜ」は「제[ʤe]」となる。韓国語の場合、「쯔, 츠」の音を日本語の「ちゅ」と近い音で発音するが、朝鮮族の学生たちは日本語の「つ」に近

い音で発音していた。同様に、「ㅈ」は韓国語の場合、日本語の「じゅ」に近い音になるが、学生たちは日本語の「ず」に近い音で発音し、「ㅉ」は日本語の「ぜ」に近い音で発音していた。これは、朝鮮語の南の発音法（ソウル方言）と北の発音法（平壌方言）に違いがあるためである。南では/ㅈ/，/ㅊ/，/ㅉ/の音が、歯茎硬口蓋破擦音[ʨ]，[ʨʰ]，[ʨ’]で発音されるが、平壌方言では、それぞれ歯茎破擦音[ʦ]，[ʦʰ]，[ʦ’]で発音されるため、日本語の発音により近い音を出すことができると考えられる。北の発音法に則った朝鮮語を使っている朝鮮族は、韓国人学習者が苦手とする日本語発音もあまり苦にせず、さらに言えば、日本語の「つ」は中国語の「ci」の音、「ず」は「zi」の音と似ており、中国語の発音も日本語を発音する上で、プラスになっているのではないかと考えられる。つまり、朝鮮族は朝鮮語と中国語という二つの言語の発音ができるため、日本語を発音する際も両言語の音を活用していることがわかる。

以上、瀋陽市朝鮮族第一中学の学生 8 名に対してインタビュー調査を行った。彼ら、彼女らのインタビュー調査から明らかになったことは、まず家庭内、学校内、学校外という言語環境を見ていくと、家庭内では主に朝鮮語、学校内では中国語、または朝鮮語、学校外では主に中国語が使われてはいるものの、その中で相手や状況によって朝鮮語と中国語が使い分けられているということである。つまり、朝鮮族の言語環境はひとつの環境においても多様な言語が使われていることがわかる。しかし、8 名中、中国語より朝鮮語が得意という学生は一人もいなかった。一日のほとんどの時間を学校で過ごすため、朝鮮語が使われる割合が比較的高い家庭での時間は限られる。また、週末に外に出れば、中国語の環境となるために、それが学生の「漢語化」を一層進めていると考えられる。

学生たちは日本語学習においては、必ずしも得意な言語で日本語を理解しているわけではなく、その日本語の特性に合わせて使い分けていたり、または教師が授業で説明する言語でそのまま解釈したりしていた。8 名の三言語による日本語の文法表現理解を表 39 に示す。表 39 から、受身表現は 8 名中、7 名が中国語で理解し、使役表現も 8 名中、6 名が中国語で理解していることがわかる。その一方で可能表現については、4 名ずつと、ちょうど半分に分かれている。言語能力の影響を見ると、ＳＦ氏は自己評価では朝鮮語能力は中国語能力と同じくらいだと話していたが、実際に朝鮮語を話す機会はほとんどない。ＳＦ氏は、教師が朝鮮語で日本語を教えていても、中国語で解釈し、理解していると話していたために、言語使用の頻度が自身の言語理解に影響を与えていることがうかがえる。また、ＳＧ氏、ＳＨ氏も朝鮮語より中国語が得意であるために、日本語の文法理解にもその影響が出ていると考えられる。しかし、その一方で、ＳＦ氏と同じく朝鮮語を使う機会がほとんどなく、朝鮮語能力も中国語能力の半分と話していたＳＩ氏が使役と可能の理解については朝鮮語で行っており、さらに漢族のＳＫ氏も可能については朝鮮語で理解している。

表 39：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者の三言語による日本語文法表現理解

	ＳＤ 朝＝中	ＳＥ 朝＝中	ＳＦ 朝＝中	ＳＧ 朝＜中 60%	ＳＨ 朝＜中 80%	ＳＩ 朝＜中 50%	ＳＪ 朝＝中	ＳＫ（漢族） 朝＜中 50%
朝鮮語	可能	受身 可能				使役 可能		可能
中国語	受身 使役	使役	受身 使役 可能	受身 可能	受身 使役 可能	受身	受身 使役 可能	受身 使役
日本語				使役				

※言語レベルのパーセンテージはもう片方の言語レベルを 100%とした場合のもの

この理由として、ＳＫ氏は日本語と朝鮮語の文法の近さと、教師が授業中、朝鮮語で日本語の文法を説明している点を挙げていた。さらに、ＳＩ、ＳＫ両氏も朝鮮語で解釈していた可能表現は、朝鮮語でも中国語でも解釈でき、日本語との意味のズレもほとんどない文法表現である。それは、4 名が朝鮮語で、4 名が中国語で理解していることにも表れている。よって、すでに述べたが、日本語のひとつの文法表現に対して、朝鮮語で解釈するか、または中国語で解釈するかは、①学習者自身の言語能力、及び言語使用の頻度　②教師が日本語を解釈し、説明する際に使用する言語　③日本語の意味と朝鮮語、中国語それぞれの意味の近さという三つの点が影響を与えているのではないかと考えられる。

日本語学習者である学生たちに直接インタビュー調査を行った結果、より多様な言語使用、そして日本語の学習方法がうかがえた。それらの点について、さらにアンケート調査により検討を加える。

４－４－３．瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するアンケート調査

ここでは瀋陽市朝鮮族第一中学で行ったアンケート調査について述べる。表 40 は調査の実施概要である。なお、日本語クラスには 3 名の漢族学習者がいるが、他の朝鮮族学生と同じ日本語授業を受けているため、調査結果に含めることとした。

アンケート調査は集合調査法を用い、高級中学 1 年から高級中学 3 年までの各学年の日本語選択者のアンケート用紙を回収した。計 131 名（男性 59 名、女性 72 名）分のアンケート調査結果を得ることができた。

アンケートの調査項目は学習者の言語能力と言語活用に関するものであり、全 9 項目で

ある。アンケート用紙の言語は中国語で書かれたものを使用した。

表 40：瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2015 年 10 月 10 日（土）、12 日（月）
実施場所	瀋陽市朝鮮族第一中学
実施クラス	・高級中学 1 年　日本語クラス　3 クラス　46 名（男性 16 名、女性 30 名） ・高級中学 2 年　日本語クラス　3 クラス　41 名（男性 19 名、女性 22 名） ・高級中学 3 年　日本語クラス　2 クラス　44 名（男性 24 名、女性 20 名） 合計　131 名（男性 59 名、　女性 72 名）
調査方法	集合調査法を用いた。 筆者自身が直接教室に行き、授業の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。また一部のクラスでは、日本語授業担当教師にアンケート用紙を渡し、各教師が授業の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	学習者の言語能力と言語活用などに関する質問 全 9 項目のうち、8 項目が選択回答、1 項目が自由回答。 また、8 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 8 項目の選択回答のうち 3 項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	中国語で書かれたアンケート用紙を使用

アンケート用紙については本論末尾に資料 17 として附す。

４－４－４．三言語にみる「相乗的理解」と「補完的理解」

ここでは、アンケート調査の結果から瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者の言語能力と、言語活用について考察する。

まず、男女比率について見てみると、「男：女＝45：55」となっており、女子学生の割合がやや高くなっている。次に日本語能力に関する調査結果を表 41 に示す。

表 41：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者が自己評価した日本語能力四技能の平均値

	話す	読む	聞く	書く
平均値	2.85	3.08	2.94	2.66

※小数点第 3 位以下は切り捨て

最も高いのは「読む」であり、「普通」を示す 3 を唯一超えている。その次は「聞く」「話す」の順になり、「書く」が最も低いという結果となった。ここから考えられるのは、普段どの能力を使っているかが結果に表れているのではないかということである。つまり、高級中学になると、初級中学のときに比べ、学習する文法が多くなり、大学入試に向けて読解問題を解く機会も増えるため、日本語の四技能の中で「読む」機会が最も多いのである。次は「聞く」と「話す」の順になるが、これは教科書の中のリスニング問題、そして会話練習が挙げられるが、「聞く」能力が「話す」能力より高くなっているのは、日本のアニメの影響もあると考えられる。インタビュー調査した学生の話の中にも、アニメが聴解練習に役立つという点が挙げられていた。最もできないと感じているのは「書く」ことであるが、これは、作文を書く機会があまりなく、内容も簡単なものになってしまっていることから、「書く」能力を伸ばせていないと感じている学生が多いのではないだろうか。さらに、書く能力は、朝鮮語または中国語を書く能力とも密接な関係があると考えられる。インタビューした教師も、「学生の日本語作文の力が低いのは、朝鮮語で作文を書く力が備わっていないから」と指摘していた。その点については、朝鮮語及び中国語能力の結果を見て改めて検討したい。

次に学習者の言語能力の自己評価の結果を表したものが図 23 である。

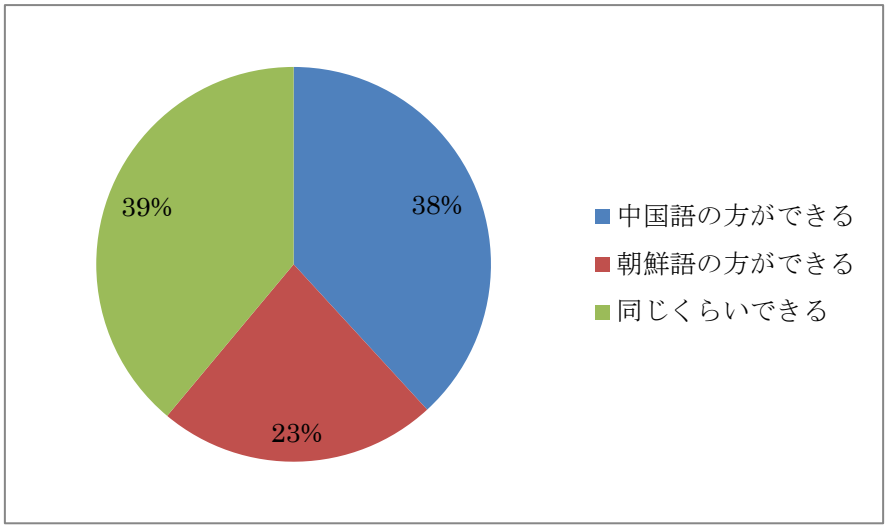


図 23：瀋陽市朝鮮族第一中学、朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価
（回答者数 131 名）

「中国語の方ができる」と答えた学習者と「同じくらいできる」と答えた学習者がほぼ同じ割合であり、「朝鮮語の方ができる」と答えた学習者は全体の 4 分の 1 に満たないことがわかった。同じ遼寧省の朝鮮族学校である鉄嶺市朝鮮族高級中学に比べると、中国語ができる学習者の割合が低く、朝鮮語ができる学習者の割合が高くなっている。また、「中国語の方ができる」学習者と「朝鮮語の方ができる」学習者の割合は、吉林市朝鮮族中学校

の学習者とほぼ同じであることがわかる。では、学習者のインタビュー調査の中に出てきた「言語能力の男女差」は存在するのであろうか。男子学生の言語能力の自己評価を図 24 に、女子学生の言語能力の自己評価を図 25 に示す。

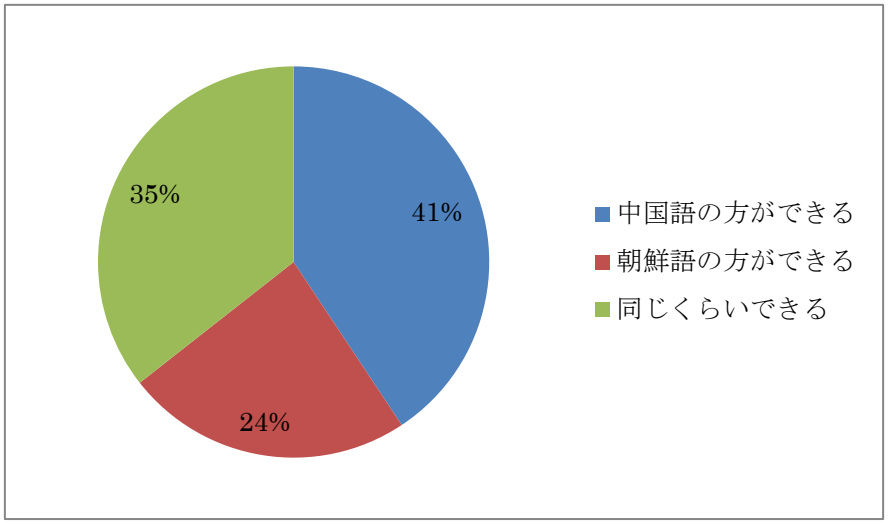


図 24：瀋陽市朝鮮族第一中学・男子学生の朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価（回答者数 59 名）

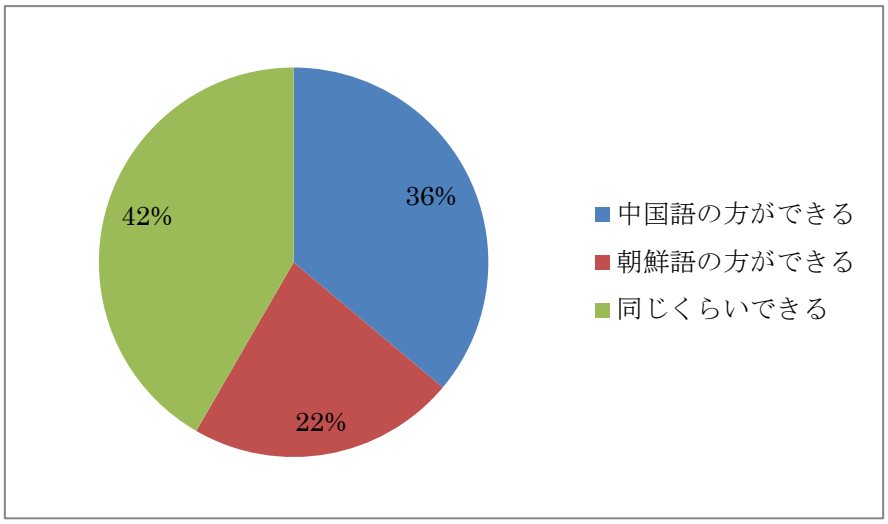


図 25：瀋陽市朝鮮族第一中学・女子学生の朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価（回答者数 72 名）

男女の割合を見てみると、それほど大きな違いは見られない。中国語の割合はたしかに男子学生の割合が高いが、同時に朝鮮語の割合も男子学生の方が若干高い。あくまで自己評価の結果であるために、なかなか結論付けるのは難しいが、インタビューにあった男子学生は中国語で話し、女子学生は朝鮮語で話すというのは、おそらく朝鮮語が中国語に比

べて柔らかい印象を与えるため、女性的な印象を与えるためではないだろうか。逆に中国語はかたいイメージがあるため、男性的な印象を与えやすい。その結果、言語能力というよりは、男性らしさ、女性らしさを出すために言語の選択が行われたと考えられる。

次に「朝鮮語の方ができる」と答えた学生の中国語レベル、及び「中国語の方ができる」と答えた学生の朝鮮語レベルをそれぞれ示したものを図 26、及び図 27 に示す。

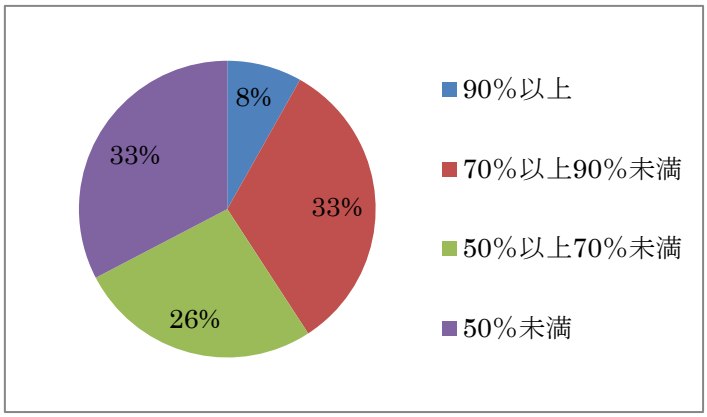


図 26：瀋陽市朝鮮族第一中学、中国語の方ができる学習者の朝鮮語能力
（回答者数 49 名）〔中国語能力を 100%としたときの朝鮮語能力〕

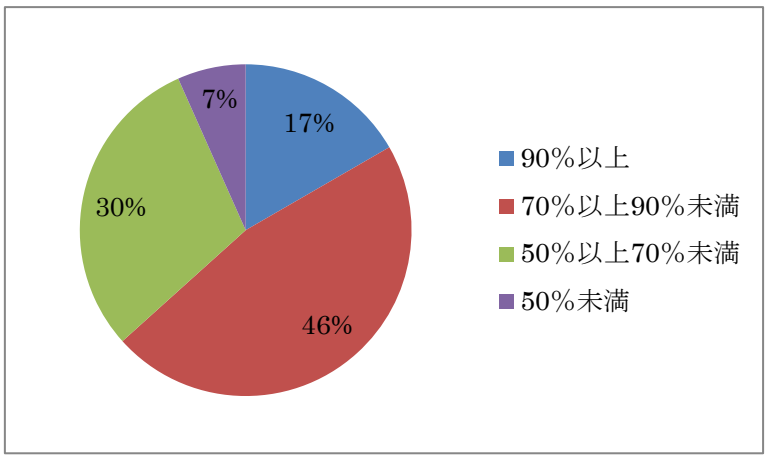


図 27：瀋陽市朝鮮族第一中学、朝鮮語の方ができる学習者の中国語能力
（回答者数 30 名）〔朝鮮語能力を 100%としたときの朝鮮語能力〕

二つの図から、「朝鮮語の方ができる」と答えた学習者のうち、6 割以上の学習者が 70%以上の中国語レベルがある一方、「中国語の方ができる」と答えた学習者のうち、6 割近くの学習者の朝鮮語レベルは 70%未満であることがわかる。これは、70%未満か、それ以上かという境界線で区切れば、朝鮮語レベル、中国語レベルともに吉林市朝鮮族中学校の学習者の言語レベルの割合と似ている。朝鮮語レベルが 50%に満たない学習者の割合も 3 割

以上を占めていることから、これらの学習者にとっては朝鮮語での授業は難しさを感じていることが予想される。

次に、学習者の朝鮮語レベル、及び中国語レベルについて四技能別に自己評価してもらった平均値を示したものが表 42 である。

表 42：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者が自己評価した朝鮮語能力及び中国語能力の四技能別平均値

	話す	読む	聞く	書く
朝鮮語	3.69	3.43	3.77	2.96
中国語	3.95	3.51	3.93	2.96

※小数点第 3 位以下は切り捨て

まず朝鮮語能力であるが、高いものから並べると「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の順になる。次に中国語は「話す」「聞く」「読む」「書く」の順となった。数値を見れば、「聞く」レベルと「話す」レベルにはそれほど大きな差は見られない。つまり、学習者たちにとって「聞く」「話す」という会話で使われる能力は、他の能力と比べて高いと感じていることがわかる。これは普段から朝鮮語、中国語で会話しているために数値が高くなっていると考えられるが、その一方で、「読む」ことと「書く」ことについては「聞く」「話す」能力に比べ、数値が低くなっている。特に「書く」ことに関しては普通レベルである 3 を下回っている。インタビューした朝鮮族の日本語教師が指摘したように、数値を見ると、学習者たちの朝鮮語、中国語の「書く」力が低いために、外国語である日本語を書く力も弱くなっているということが考えられる。

朝鮮語と中国語の差を見てみると、最も差が大きいのが「話す」能力であり、次に「聞く」「読む」の順となっている。これは、普段朝鮮語よりも中国語で会話する機会が多いために「話す」能力と「聞く」能力に差が出ていると考えられる。また「書く」能力であるが、偶然にもまったく同じ数値となった。これは、朝鮮語、中国語ともに普段から書く機会が少ないということを示しているのではないだろうか。「朝鮮語」と「中国語」の授業ではどのような授業を行っているのか定かではないが、メール社会である現代において、授業以外で文字を書く機会はあまりないように思える。朝鮮語、中国語で文字を書く機会が少なくなっていることが、学習者の日本語を書く力にも影響を与えていると考えられる。

次に、朝鮮語と中国語をいつ使っているかについての回答結果を図 28 に示す。図 28 を見ると、どの場面においても中国語が朝鮮語を上回っていることがわかる。学習者は朝鮮族学校に通ってはいるものの、あらゆる場面において中国語を使う割合が高くなっている。その差が最も大きいのは「外で食事や買い物をするとき」であり、これは中国語使用の項目の中で最も多い回答数となっている。

一方、その差が最も小さいのは「家族と話すとき」であり、これは朝鮮語使用の項目の

中で最も多い回答数となっている。ここで注目したいのは、学習者へのインタビューにもあった、現実世界とインターネット世界の言語使用の違いである。「インターネットを利用するとき」の言語使用を見てみると、「外で食事や買い物をするとき」の朝鮮語使用より多く、中国語使用より少なくなっていることがわかる。つまり、インターネットの世界に入ると、朝鮮語使用の割合が上がっている。

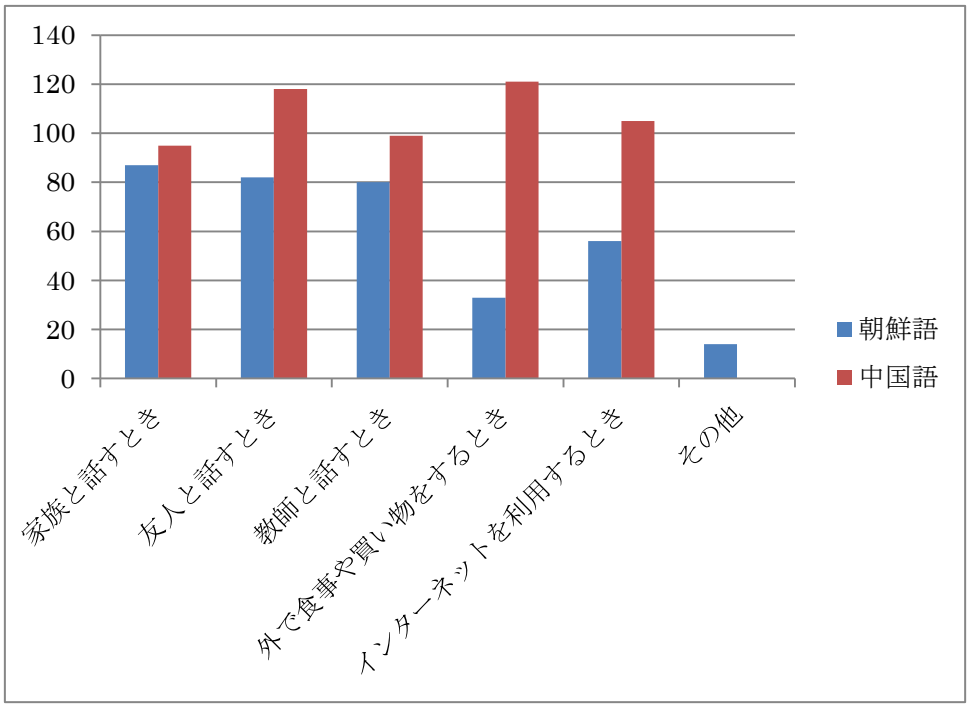


図 28：瀋陽市朝鮮族第一中学、朝鮮語及び中国語をどんなとき使っているか

（朝鮮語の回答者数 131 名、回答数 352、中国語の回答者数 131 名、回答数 538）

他の学校ではどうであろうか。鉄嶺市朝鮮族高級中学では、ほぼ同じ頻度で使っているが、吉林市朝鮮族中学校では、むしろインターネットで中国語を使うという回答数の方が多くなっており、それぞれ違う結果となった。よって、一概に現実世界とインターネット世界における言語使用の割合に違いが見られるとは言えないが、今後も増え続けるであろうインターネット利用における言語使用の変化についてもさらに検討する必要があろう。

では、日本語を学習するとき、朝鮮語、中国語はどのように使い分けられているのだろうか。まずは朝鮮語をどのように活用しているのか示したものが図 29 である。最も回答数が多かったのは、「文法理解」と「単語理解・暗記」である。この二つの項目については、鉄嶺市朝鮮族高級中学と吉林市朝鮮族中学校においても回答数が多かった項目である。注目したいのは「読解」という回答が多い点である。他の 2 校では見られなかった項目であるため、瀋陽市朝鮮族第一中学では、授業で読解問題を多くこなしているのではないかと考えられる。

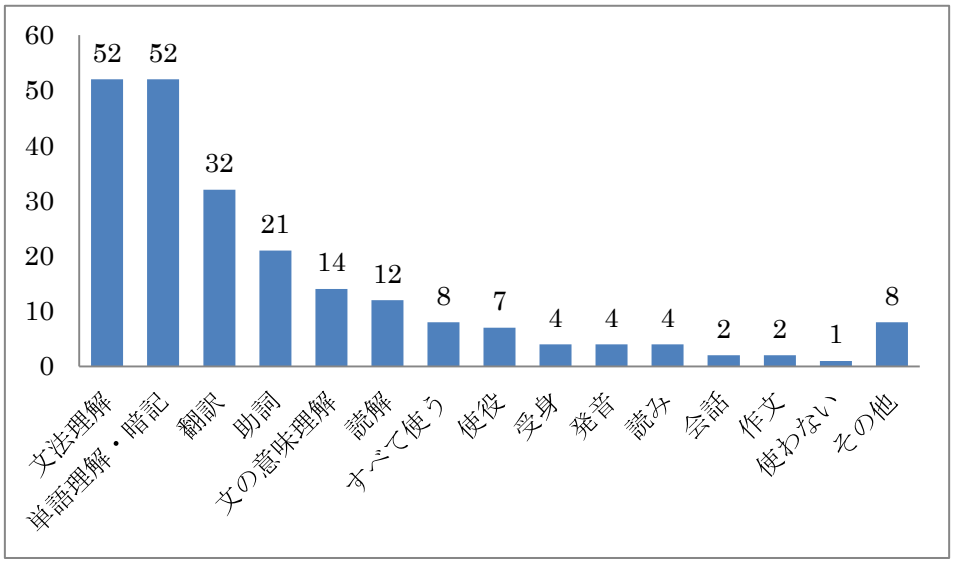


図 29：瀋陽市朝鮮族第一中学、日本語を学習する際の朝鮮語の活用方法
（回答者数 120 名、回答数 223）

続いて中国語をどのように活用しているのかを示したものが図 30 である。

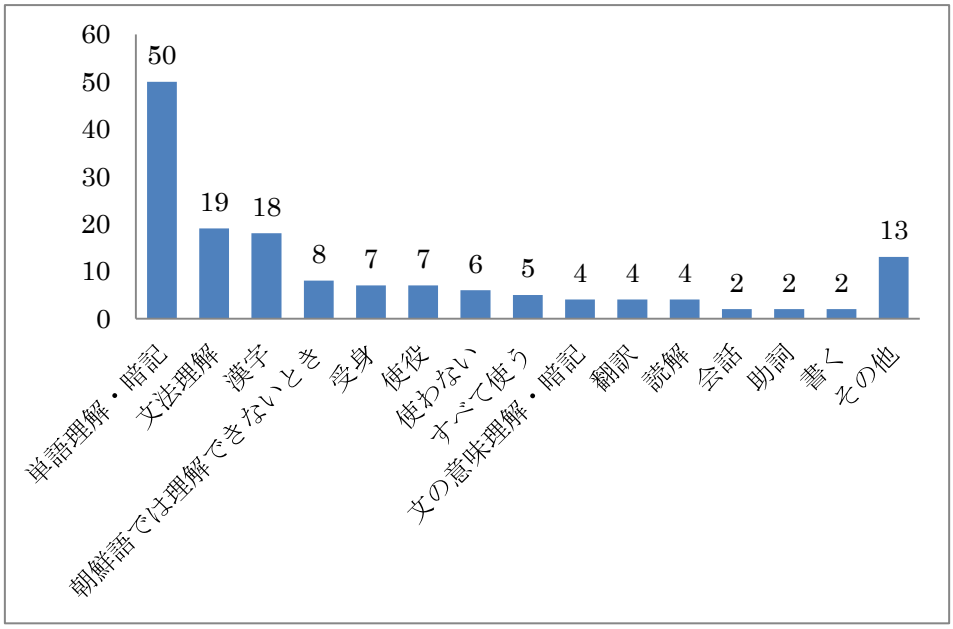


図 30：瀋陽市朝鮮族第一中学、日本語を学習する際の中国語の活用方法
（回答者数 110 名、回答数 151）

まず注目したいのは、「朝鮮語では理解できないとき」の回答数が他の学校に比べて多い点である。これは、日本語の授業が主に朝鮮語で行われており、さらに教科書の内容も朝鮮語で解説されていることから、学習者たちはまず朝鮮語で理解しようとしていることが

うかがえる。その上で、理解しづらいときは中国語を活用していることがわかる。その良い例が「受身」と「使役」である。それぞれ回答数は 7 であるが、朝鮮語の結果を見ると、「受身」が 4、「使役」が 7 となっており、受身表現では中国語の方が理解しやすいことがうかがえる。学生のインタビューの中にも、受身表現を朝鮮語で理解するのは難しいという意見もあり、また 8 名の学習者のうち、7 名が受身表現を中国語の「被」を使って理解していることからも中国語がより理解しやすいということがうかがえる。

最後に、学習者が望む教授用語についての調査結果を図 31 に示す。

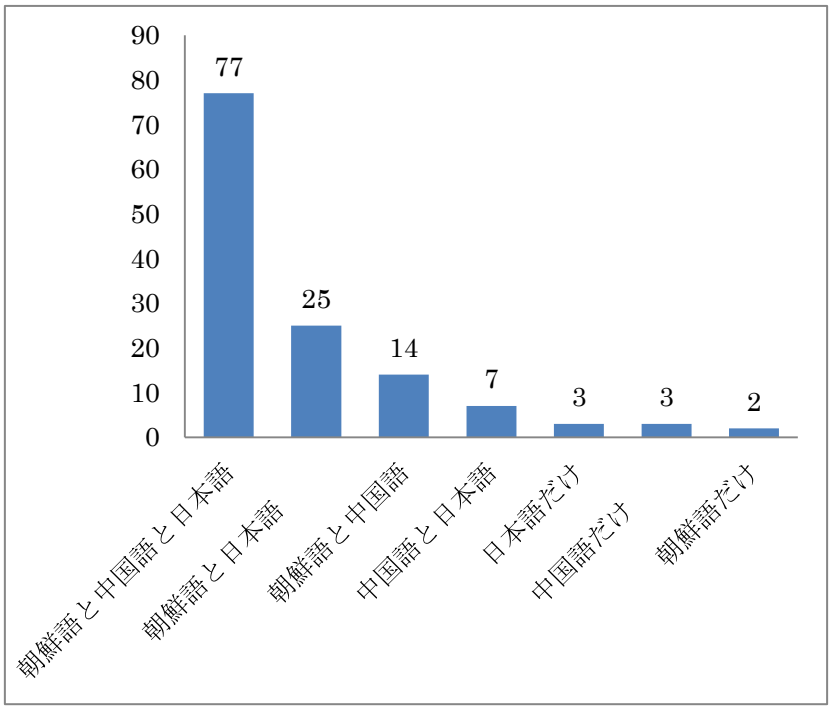


図 31：瀋陽市朝鮮族第一中学、日本語授業の最も良い教授用語

（回答者数 131 名、回答数 131）

最も多かったのは「朝鮮語と中国語と日本語」で、全体の 6 割近くの人が三つの言語で教えることを望んでいることがわかった。その理由として最も多かったのは、「理解しやすいから」であったが、「それぞれの言葉の翻訳はどれも同じではなく、いろいろな言葉を一緒に使って翻訳すれば、よりよく理解できる」といった意見、つまり「朝鮮語と中国語両方の意味でより深く理解できる」という「相乗的理解」、そして「中国語と朝鮮語は日本語の補助的な役割」という意見のように、それぞれの言語では理解しづらい部分を補いながら理解する「補完的理解」を挙げている人も多くいた。この「補完的理解」は、「朝鮮語と日本語」、「朝鮮語と中国語」を選んだ学習者の意見の中にも見られた。このように、三言語による教育方法によって可能となる「相乗的理解」及び「補完的理解」は日本語学習者である学生たちにも意識されていることがわかった。

以上、瀋陽市朝鮮族第一中学において日本語学習者に対するアンケート調査をもとに彼ら、彼女らの言語能力と日本語学習における言語活用について検討した。その結果、学習者たちの朝鮮語、中国語の「書く」力が低いために、外国語である日本語を書く力も弱くなっているということがうかがえた。その中でも特に朝鮮語能力の低下は顕著に表れており、日本語を学習する際はまず朝鮮語で理解しようとするものの、朝鮮語では理解できないときに中国語を活用する割合が他の学校に比べて高いことがわかった。また、教師が主に朝鮮語で解釈し、説明しているにもかかわらず、受身表現では中国語で解釈し、理解する学生が多いことがうかがえた。学習者が朝鮮語で理解することに難しさを感じている様子がうかがえるが、教師が使用する言語については、「三言語」で教えてほしいという意見が全体の 6 割近くを占めていた。その理由としては、朝鮮語と中国語両方の意味でより深く理解できるという「相乗的理解」と、それぞれの言語では理解しづらい部分を補いながら理解する「補完的理解」を挙げている学習者が数多くいた。よって、学習者それぞれの朝鮮語能力、中国語能力が異なっており、特に朝鮮語が苦手な学生が多く見られるものの、朝鮮語のみ、または中国語のみを使って日本語を理解しているのではなく、両方の言語を使用することで、さらには日本語を加えた三言語を使用することで日本語学習を行っていることがわかった。

４－４－５．小括

4－4 では、瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者に対するインタビュー調査、及びアンケート調査から、学習者の言語能力と、その言語能力を活かした日本語学習方法について検討した。学習者に対するインタビュー調査からは、学習者の多様な言語活用の実態が見られ、日本語の文法表現を理解する際は、①学習者自身の言語能力、及び言語使用の頻度 ②教師が日本語を解釈し、説明する際に使用する言語　③日本語の意味と朝鮮語、中国語それぞれの意味の近さという三つの点から、朝鮮語、中国語使用を選択していることがうかがえた。さらに学習者に対するアンケート調査からは、学習者の言語能力に「漢語化」が見られた。日本語の授業では教師がまず朝鮮語で解釈し説明するために、日本語を朝鮮語で理解しようとするが、朝鮮語で理解できなかったときに中国語を活用するという意見が多く見られたことからも「漢語化」の影響がうかがえた。しかし、教師が中国語のみを使って教えることを望む意見は少なく、三言語を使用することで「相乗的理解」と「補完的理解」によって日本語を理解したいという意識が強いことがうかがえた。

４－５．寧安市朝鮮族中学・日本語学習者の言語能力と学習方法

寧安市朝鮮族中学では教師に対するインタビュー調査から、主に日本語と朝鮮語の二言語による日本語授業が行われており、中国語は限定的にしか使われていないことがうかが

えた。では、学習者である学生たちは三言語をどのように活用して日本語を学習しているのだろうか。同校では学習者の日本語学習方法について明らかにするため、学生に対するインタビュー調査、及びアンケート調査を行った。まず、4−5−1 において、インタビュー調査について述べる。

４－５－１．寧安市朝鮮族中学の日本語学習者に対するインタビュー調査

寧安市朝鮮族中学においても、実際に日本語を学習している学生たちに対してインタビュー調査を実施することができた。インタビュー調査の実施概要を表 43 に示す。また、対象者の属性を表 44 に示す。

表 43：寧安市朝鮮族中学・日本語学習者に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 10 月 14 日（水）
対象者	日本語授業を選択している初級中学 3 年生の学生 4 名 （4 名とも女性）
使用言語	日本語及び韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	寧安市朝鮮族中学
インタビューの時間	2 時間、4 名同時に実施

表 44：寧安市朝鮮族中学・学習者インタビュー調査の対象者の属性

	言語能力、日本語学習歴など
ＮＤ（女性） 2002 年 8 月 30 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 75%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 漢族幼稚園、朝鮮族小学校に通った。
ＮＥ（女性） 2000 年 12 月 19 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 50%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 漢族幼稚園、朝鮮族小学校に通った。
ＮＦ（女性） 2001 年 1 月 3 日生	中国語の方ができる。朝鮮語能力は中国語能力と比べたら 70%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 朝鮮族幼稚園、朝鮮族小学校に通った。
ＮＧ（女性） 2001 年 12 月 18 日生	朝鮮語の方ができる。中国語能力は朝鮮語能力と比べたら 60%ほど。 日本語は初級中学から学習している。 漢族幼稚園、朝鮮族小学校に通った。

4名の学生は寧安市朝鮮族中学で日本語教師をしているＮＢ氏に紹介してもらい、調査を実施するにいたった。対象者はすべて同校で日本語授業を選択している初級中学 3 年生の女子学生 4 名である。インタビューは日本語及び韓国語で行った。また、半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートによる記録を行った。インタビュー時間は 2 時間であり、4名同時に行った。

4名の学生はともに初級中学1年から日本語を学習している。4名のうち3名は朝鮮語より中国語の方が得意であるが、ＮＧ氏は中国語より朝鮮語の方が得意である。ＮＥ氏の朝鮮語能力は中国語能力の半分にあたる 50%ほどであり、ＮＧ氏の中国語能力は朝鮮語能力の 60%であるため、同じクラスメイトであっても、言語能力の違いがかなり大きいことがわかる。

次にインタビュー調査の対象者の言語能力と言語使用環境について表 45 に示す。

表 45：寧安市朝鮮族中学・学習者インタビュー調査の対象者の言語レベルと言語使用環境

	家庭内	学校内	学校外
ＮＤ（女性） 中国語＞朝鮮語 （75%）	朝鮮語を使用。 祖父母と一緒に暮らしている。	80%は中国語を使用。 インターネットでチャットするときは80%朝鮮語を使う。	中国語
ＮＥ（女性） 中国語＞朝鮮語 （50%）	中国語を使用。 祖母と一緒に暮らしている。	80%は中国語を使用。 インターネットのチャットは 90%は中国語。	中国語
ＮＦ（女性） 中国語＞朝鮮語 （70%）	朝鮮語を使用。 祖母と一緒に暮らしている。	80%は中国語を使用。 インターネットのチャットは 80%は中国語、10%は朝鮮語、10%は日本語。	中国語
ＮＧ（女性） 朝鮮語＞中国語 （60%）	朝鮮語を使用。 両親と一緒に暮らしている。	80%は中国語を使用。 インターネットのチャットは 90%は朝鮮語、10%は中国語。	中国語

※言語レベルのパーセンテージはもう片方の言語レベルを 100%とした場合のもの

4名のインタビュー対象者の語りをまとめたものを資料 18 として本論末尾に附す。

４－５－２．教師の教育方法と学習者の学習方法に見られる差異

まずインタビュー調査結果から、環境別に言語使用の状況を見てみる。家庭内では、4名

中 3 名が朝鮮語で話していると答えた。学校になると、一気に中国語環境となっていることがわかる。4 名に学校の授業の言語環境について聞いてみると、まず外国語科目である「日本語」は主に日本語、または朝鮮語で教えられ、「英語」は主に中国語が使われている。また、「漢語（中国語)」科目は朝鮮族の教師が中国語で教え、「化学」も 80%は中国語、「物理」、「数学」といったほかの理系科目も 50%は中国語で教えられる。「物理」に関しては、テストは朝鮮語で出題されるものの、朝鮮語の教材は少ない。一方、教授用語として朝鮮語の割合が高い科目は「朝鮮語」「歴史」「政治」などがある。このことから、基本的に文系科目は朝鮮語、理系科目は中国語で教えられていることがわかる。しかし、「歴史」の授業では、例えば「ホモ・サピエンス」など固有名詞が長い場合は、「智人」のように中国語で簡単に表して説明したりするのだという。言語科目以外においても、中国語の特性が活かされていることがうかがえる。

次に日本語学習について 4 名の学生に質問したところ、4 名とも以下のように話していた。

日本語の文法は朝鮮語で理解している。例えば自動詞・他動詞の区別などは朝鮮語を使っている。また、単語の読み方も「にほんご（니혼고)」のように朝鮮語を活用している。しかし、漢字がある単語は中国語を活用し、受身は「被」、使役は「让」で理解したりしている。日本語の授業はやはり日本語を使って教えてもらいたい。

4 名は、筆者が授業見学を行ったＮＢ氏の授業を受けているが、ＮＢ氏の授業で使われている言語は 9 割が日本語であった。また、日本語を翻訳する際は、中国語はまったく使わず、朝鮮語で行っていた。しかし、学習者である 4 名は、受身や使役などについては、それぞれ中国語の「被」、「让」を活用しており、日本語の文法に合う方を選んで理解していることがうかがえた。つまり、教師が日本語を説明する言語と、学習者が理解する言語は必ずしも一致していないことがわかる。教授用語として主に日本語が使われていることについては、やはり日本語の授業なので日本語を使って教えてもらいたいと話していた。この点に関してはアンケート調査で検討したい。また、日本語の単語の読み方も「にほんご（니혼고)」のように朝鮮語を活用している点は、吉林市朝鮮族中学校の教師に対するインタビュー調査の中にも見られた。読みの点では表音文字であるハングルを活かしていることがうかがえる。

以上、寧安市朝鮮族中学で日本語を学習している学生 4 名に対するインタビュー調査から、彼女らの言語環境や日本語学習について考察した。瀋陽市朝鮮族第一中学の学生同様、家庭内では朝鮮語、学校内では中国語と朝鮮語、学校外では中国語という言語環境であることがわかるが、ＮＥ氏のように、朝鮮語が苦手な学生は家庭内においても得意な中国語を使用していることがわかる。つまり「漢語化」が家庭内においても生じていることがうかがえる。しかし、インターネットの世界では、ＮＤ氏のように、中国語の方が得意であっても、主に朝鮮語を使用していることもわかる。ここでもやはり学生一人一人の言語使

用の多様性が感じられる。日本語学習については、教師が日本語使用を中心とした教育方法をとり、翻訳は朝鮮語で行っているものの、学習者である学生たちは、文法表現によっては、中国語を使って理解していることがわかった。つまり、教師が説明する言語と学生が理解する言語に差が見られた。しかし、学生たちは日本語による日本語授業を望んでいた。次項では、アンケート調査をもとに寧安市朝鮮族中学の学習者の言語能力と日本語学習方法についてさらに検討する。

４－５－３．寧安市朝鮮族中学の日本語学習者に対するアンケート調査

ここでは寧安市朝鮮族中学で行ったアンケート調査について述べる。表 46 はアンケート調査の実施概要である。

表 46：寧安市朝鮮族中学、日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2015 年 10 月 14 日（水）、15 日（木）
実施場所	寧安市朝鮮族中学
実施クラス	・初級中学 1 年　日本語クラス　14 名（男性 10 名、女性 4 名） ・初級中学 2 年　日本語クラス　26 名（男性 12 名、女性 14 名） ・初級中学 3 年　日本語クラス　26 名（男性　8 名、女性 18 名） 初級中学合計　66 名（男性 30 名、女性 36 名） ・高級中学 1 年　日本語クラス　15 名（男性　9 名、女性 6 名） ・高級中学 2 年　日本語クラス　20 名（男性 10 名、女性 10 名） ・高級中学 3 年　日本語クラス　18 名（男性　6 名、女性 12 名） 高級中学合計　53 名（男性 25 名、女性 28 名） 初級中学・高級中学合計 119 名（男性 55 名、女性 64 名）
調査方法	集合調査法を用いた。 日本語授業担当教師にアンケート用紙を渡し、各教師が各クラスで授業の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	学習者の言語能力と言語活用などに関する質問 全 9 項目のうち、8 項目が選択回答、1 項目が自由回答。 また、8 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 8 項目の選択回答のうち 3 項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	中国語で書かれたアンケート用紙を使用

寧安市朝鮮族中学には漢族学生も在籍しているが、在籍している学生は多様化しており、①朝鮮族　②漢族　③朝鮮族と漢族のハーフのように分けられる。また漢族の学生はほとんどが英語を選択していることも考慮し、また、民族にかかわらず日本語選択者が寧安市朝鮮族中学の日本語授業を同じクラスで受けていることから、日本語選択者はすべて調査結果に含めることとした。

アンケート調査は集合調査法を用い、初級中学 1 年から高級中学 3 年までの各学年の日本語選択者のアンケート用紙を回収した。その結果、計 119 名（男性 55 名、女性 64 名）分のアンケート調査結果を得ることができた。

アンケート用紙は瀋陽市朝鮮族第一中学で実施したアンケート調査用紙と同一のものを使用した。調査項目は学習者の言語能力と言語活用に関するものであり、全 9 項目である。アンケート用紙の言語は中国語で書かれたものを使用した。アンケート用紙については本論末尾に資料 17 として附す。

４－５－４．三言語に対する学習者の意識とその役割

ここでは、アンケート調査をもとに寧安市朝鮮族中学の日本語学習者の言語能力、および学習者が望む教育方法について検討し、考察する。寧安市朝鮮族中学の教師に対するインタビュー調査により、初級中学、高級中学で朝鮮語、中国語能力及び言語使用に違いが見られたため、その点に注目し、初級中学、高級中学に分けて分析を行った。さらに、学習者に対するインタビュー調査により、学習者が日本語による教育方法を望んでいることがうかがえた。よって、その点についてもアンケート調査をもとに検討する。

まず、アンケート対象者の男女比率は「男：女＝46：54」となっており、女子学生の割合がやや高くなっている。これは瀋陽市朝鮮族第一中学とほぼ同じ割合である。

次に日本語能力に関する調査について検討する。あくまで学生たちの自己評価であるが、119 名の自己評価を初級中学、高級中学別に平均してみると、表 47 のような結果となった。

表 47：寧安市朝鮮族中学・学習者が自己評価した日本語能力四技能の平均値

	話す	読む	聞く	書く
初級中学	3.35	3.49	3.30	2.72
高級中学	3.15	3.17	2.98	2.82
初中・高中	3.25	3.35	3.16	2.77

※小数点第 3 位以下は切り捨て

まず、初中、高中どちらも高い方から「読む」「話す」「聞く」「書く」の順になった。初級中学の自己評価の数値が、高級中学のものより高くなっているのは、高級中学になると、日本語授業の内容が難しくなることがひとつの原因であると考えられる。また、高中 3 年生になると、受験対策のため文法中心の授業となり、教授用語も朝鮮語の割合が高くなる。

そのことが、数値に表れていると考えられる。初中・高中合計した平均値を見ると、やはり「書く」数値がもっとも低く、普通を表す 3 を下回っている。この点については、瀋陽市朝鮮族第一中学でも共通して見られ、また「読む」数値が最も高いという点も共通している。「読む」ことについては、ＮＢ氏の日本語授業にも見られたように、日本語の授業において読む練習を多く取り入れていることから、数値が高くなっていると考えられるが、「書く」ことについては、やはり朝鮮語・中国語の書く力が影響を与えているのではないだろうか。

次に学生の中国語レベルと朝鮮語レベルを自己評価したものを図 32 に示す。

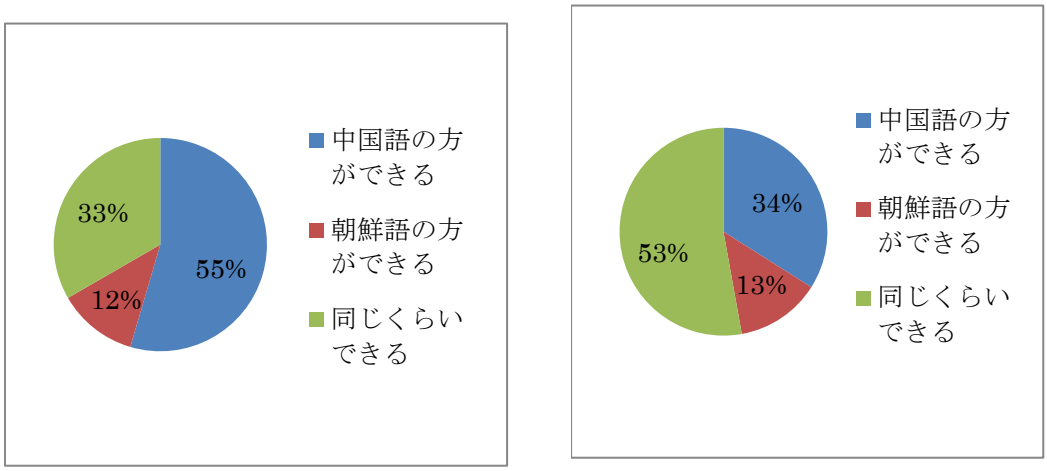


図 32：寧安市朝鮮族中学・初級中学（左）と高級中学（右）の学習者の朝鮮語及び中国語レベルについての自己評価（回答者数　初級中学 66 名、高級中学 53 名）

初級中学の学習者と高級中学の学習者を比べてみると、初級中学では「中国語の方ができる」と答えた学生が半数以上に上っている。一方、高級中学では、「中国語の方ができる」と答えた学生は半分に達していない。学生の「漢語化」が顕著に表れている。

では中国語、朝鮮語それぞれの四技能を学生たちはどのように評価しているのだろうか。その結果を表 48 に示す。まず、朝鮮語であるが、高級中学では数値が高い順に「聞く」「話す」「読む」「書く」の順になっている。「聞く」「話す」数値が高いのは、普段から朝鮮語で会話する機会があるからであろう。一方、初級中学では数値が高い順に「読む」「聞く」「話す」「書く」の順になっている。高中では 3 番目であった「読む」が、初中では最も高い数値を示している。この数値は、初中の学生が日本語レベルを自己評価した数値と非常に似ている。つまり、初中の学生が「朝鮮語」を、外国語である「日本語」のように学習し、習得している可能性が考えられる。普段、朝鮮語で会話する機会が限られているため、「話す」能力と「聞く」能力より、むしろ「朝鮮語」の授業において、読みの練習の時間が多くなり、まるで外国語のような四技能レベルとなっているのではないだろうか。

表 48：寧安市朝鮮族中学・学習者が自己評価した朝鮮語及び中国語能力の四技能別平均値

		話す	読む	聞く	書く
朝鮮語	初級中学	3.58	3.70	3.62	3.04
	高級中学	3.66	3.56	3.75	3.20
	初級・高級中学	3.61	3.64	3.68	3.11
中国語	初級中学	4.24	3.93	4.10	3.32
	高級中学	3.77	3.67	3.94	3.22
	初級・高級中学	4.03	3.82	4.03	3.27

※小数点第 3 位以下は切り捨て

一方、中国語はどうであろうか。初級中学、高級中学とも各項目で朝鮮語よりも高い数値であることがわかる。初級中学では、「話す」「聞く」「読む」「書く」の順になっており、高級中学では「聞く」「話す」「読む」「書く」の順となっている。ここで注目したいのは、初級中学の朝鮮語レベルの数値と中国語レベルの数値に大きな差がある一方、高級中学のその差は小さいという点である。これは図 32 で示したように、初級中学において朝鮮語と中国語が同じくらいできると答えた学生が全体の 3 割程度であったのに対し、高級中学では、その割合が半分以上を占めていることからもわかる。つまり、高級中学の学生は中国語、朝鮮語能力を比較的バランスよく備えている学生が多いが、初級中学の学生は、そのバランスが崩れ、中国語レベルに傾斜している学生が多いことがわかる。

最後に、「書く」能力についてであるが、朝鮮語、中国語にかかわらず初級中学、高級中学ともに最も低い数値となった。瀋陽市朝鮮族第一中学での調査結果と同じ結果となったが、やはり学生たちの朝鮮語、中国語で書く力が弱いために、日本語を書く力にも影響を与えているのではないだろうか。

では、学生たちは朝鮮語、中国語をどのような場面で使用しているのだろうか。まず初級中学の結果について、図 33 に示す。朝鮮語の使用割合が中国語を上回っているのは「家族と話すとき」と「教師と話すとき」であり、その他の場面では中国語が朝鮮語を大きく上回っている。「教師と話すとき」に朝鮮語が中国語を上回っているのは、これまで調査した学校では見られない傾向である。注目したいのは、同じ学校であっても、友人と話すときは中国語を使用する割合が圧倒的に高いにもかかわらず、教師と話すときは朝鮮語の割合が中国語の割合より高い点である。同じ学校というコミュニティの中でも、相手によって言語を使い分けていることがわかる。その他の意見を見てみると、朝鮮語については「朝鮮語の授業のときに使う」という回答があり、中国語も「中国語の教師と話すとき使う」という回答があることから、教師によっても言葉を使い分けていることがわかる。

学生に対するインタビュー調査の中でも、基本的に文系科目は朝鮮語、理系科目は中国語で教えられていることが明らかになったが、担当科目によって教師の言語能力も様々であるため、学生はコードスイッチングしていると考えられる。

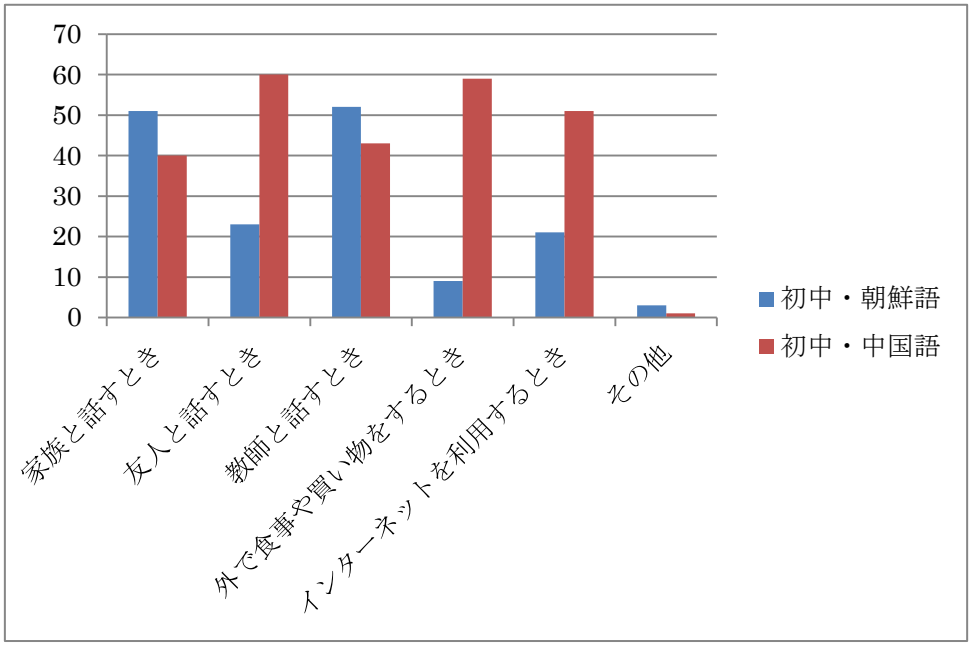


図 33：寧安市朝鮮族中学・初級中学の学習者の朝鮮語及び中国語の使用場面

（初級中学：回答者数 66 名、朝鮮語回答数 159、中国語回答数 254）

次に高級中学の学生の調査結果を図 34 に示す。

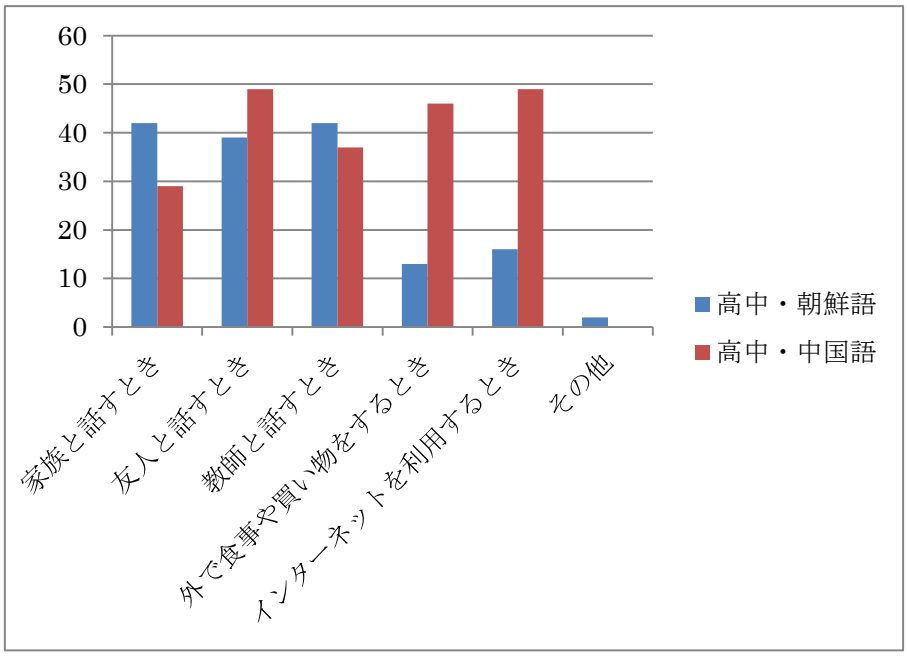


図 34：寧安市朝鮮族中学・高級中学の学習者の朝鮮語及び中国語の使用場面

（高級中学：回答者数 53 名、朝鮮語回答数 154、中国語回答数 210）

寧安市朝鮮族中学の日本語授業では主に教授用語として日本語が使われているが、学習者は教授用語についてどのように考えているのだろうか。ここでは初級中学と高級中学を合わせた結果を図 35 に示す。調査結果から「朝鮮語と中国語と日本語」という三つの言葉で教えてほしいと答えた学生が最も多いことがわかった。その理由としては、やはり「理解しやすい」という回答が多く見られたが、「中国語が得意な学生もいるし、朝鮮語が得意な学生もいるから」、「ある人は朝鮮語、ある人は中国語が苦手なので、教師が両方の言葉で説明するのが比較的良い」など、学生それぞれの言語能力が違う点を挙げた意見も多く見られた。また、1 位から 3 位まではすべて朝鮮語が入っているが、朝鮮語が必要な理由としては、「理解しやすい」という意見の他に、「教師が朝鮮語を使えば、私たちはより自分の民族の言葉を覚えることができる」「朝鮮語は私たち民族の言葉だから」「私たちは朝鮮族だが、中国語をより多く使うので、授業時間まで中国語を使ってしまうと、朝鮮語能力がなくなってしまうから」など、「民族の言葉」だから必要であるといった意見も見られた。ここから、日本語の授業が、自民族の言語を見つめなおすきっかけとなっていることがうかがえる。また、複数の言語で教えてもらいたいという意見の中には、「中国語と朝鮮語を使う環境にすでに慣れてしまった。中国語と朝鮮語のどれかひとつだけ話すというのはとても不便だ」「朝鮮語と中国語は普段から話しており、より理解しやすく、わかりやすい」のように習慣となっているからという意見も見られた。

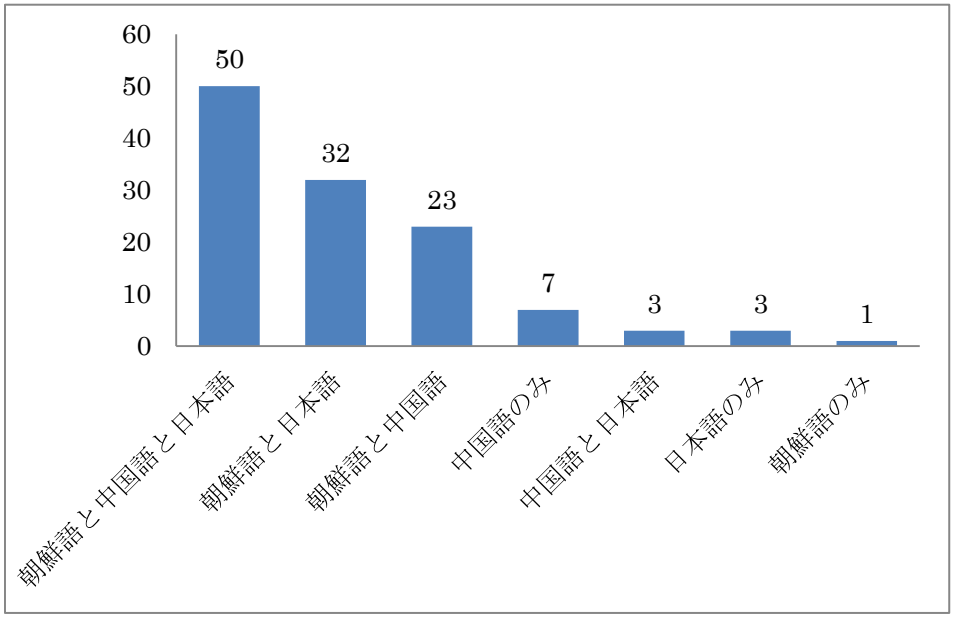


図 35：寧安市朝鮮族中学、日本語授業の最も良い教授用語（回答者数 115 名、回答数 119）

また、日本語で教えてもらいたいという意見としては「教師は私たちと日本語で会話するので、私たちの日本語レベルが上がり、日本文化もより理解することができる。また、日本語の聞き取り能力も伸ばすことができる」「よりよく日本語を学習でき、会話の訓練に

もなる」など、日本語能力を伸ばすことにつながるといった意見が多く見られた。ここでは学生たちの言語に対する意識、そして役割がそれぞれ異なっていることがうかがえた。

４－５－５．小括

4−5 では、寧安市朝鮮族中学の日本語学習者に対するインタビュー調査、及びアンケート調査から、その言語能力と日本語学習方法、そして言語に対する意識について検討した。

まず、インタビュー調査からは、教師は日本語の授業において日本語使用を中心とした教育方法をとり、翻訳は朝鮮語で行っているが、学習者である学生たちは文法表現によっては、中国語を使って理解していることがわかった。教師が説明する言語と学生が理解する言語には差が見られた。インタビューでは、学生たちは日本語による日本語授業を望んでいたが、アンケート調査では、「朝鮮語と中国語と日本語」という三つの言葉で教えてほしいと答えた学生が最も多かった。理由としては、「理解しやすい」という回答が多く見られると同時に、他の学生それぞれの言語能力が違うからという理由を挙げた意見も多く見られた。このことから、日本語学習者である学生たちが、他の学習者と自分自身の言語能力に違いがあり、それを認識しながら日本語を学習しているということがうかがえた。複数の言語で教えてもらいたいという意見の中には「朝鮮語と中国語、普段からどちらも話しているから」など二言語を両方使う言語習慣も理由として多く挙げられていた。さらに、朝鮮語を使用することについては、「民族の言葉だから」という意見も多く見られ、日本語を使用することについては、「日本語能力を伸ばすことにつながる」といった意見が多く見られた。

学生の「漢語化」については、初級中学と高級中学の言語能力には差が見られ、初級中学の学生ほど中国語能力が朝鮮語能力より高いと感じている傾向があった。初級中学の学生の朝鮮語の四技能レベルについても、日本語の四技能のレベルの順番と共通点が見られたことから、初級中学の学生にとって、「朝鮮語」が「日本語」と同じ「外国語」のような感覚で学習していることがうかがえた。また、初級中学の学生と高級中学の学生はともに教師と話すときは中国語ではなく朝鮮語で話している傾向があることがわかった。それは朝鮮語は敬語があるために、教師のような目上の人に対しては尊敬の念を伝えやすいために使用している点などが理由として考えられる。

このことから、学習者の日本語、朝鮮語、中国語それぞれの言語能力は異なり、また各言語に対する意識、さらにはその役割も異なっていることが明らかになった。

４－６．まとめ

本章では、朝鮮族学習者の三言語使用による日本語学習方法について、主に朝鮮族の言語能力に注目しながら学校別、学習者別に明らかにした。

まず、梅河口市朝鮮族中学では学習者の日本語の教科書に対する評価、及び日本語を学

習する上で良い点について明らかにした。学生たちは、教師同様、内容が豊富である点、わかりやすい点で現在使用している教科書について概ね良い評価をしていることがわかった。また、日本語を学習する上で良い点として、「受験日本語」を意識した回答が多かったものの、将来、日本に行くことを念頭において学習している学生も多いことがうかがえた。

次に、鉄嶺市朝鮮族高級中学において、「家庭内」「学校内」「学校外」すべての場面において、朝鮮語よりも中国語を使う学習者が多いことがわかった。また、学習者は三言語による教育方法を望んでおり、その理由として、三つの言語の長所を活用することで日本語をより深く理解する「相乗的理解」と、三つの言語で補って理解する「補完的理解」のためとする回答が多く見られた。

吉林市朝鮮族中学校における学習者の朝鮮語と中国語の活用方法は、担当教師の教える学習項目や教授用語が大きな影響を与えていることがわかった。しかし、主に朝鮮語の「文法」と中国語の「漢字」を活用して日本語を学習していることから、それぞれの言語の長所を日本語学習に活かしていることが明らかになった。さらに教授用語に関しては、日本語、朝鮮語、中国語の三言語で教えるのが一番良いと答えた学生が最も多く、「それぞれの長所を使いながら教えることでより多角的に、深く理解することができる」「ひとつの言語で聞き取れなかった場合でも、他の言語で聞き取ることができ、理解しやすい」という「相乗的理解」と「補完的理解」がその理由として挙げられていた。

瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語学習者には多様な言語活用の実態が見られ、日本語の文法表現を理解する際は、①学習者自身の言語能力、及び言語使用の頻度　②教師が日本語を解釈し、説明する際に使用する言語　③日本語の意味と朝鮮語、中国語それぞれの意味の近さという三つの点から、朝鮮語、中国語使用を選択していることがうかがえた。学習者の言語能力には「漢語化」の影響が見られ、日本語の授業では教師がまず朝鮮語で解釈し説明するために日本語を朝鮮語で理解しようとするが、朝鮮語で理解できなかったときは中国語を活用する方法が見られた。しかし、教師が中国語のみを使って教えることを望む意見は少なく、三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」を望む意識が強いことがうかがえた。

寧安市朝鮮族中学では教師が日本語使用を中心とした教育方法をとり、翻訳は朝鮮語で行っているものの、学習者たちは文法表現によっては、中国語を使って理解していることがうかがえ、教師が説明する言語と学生が理解する言語には差があることがわかった。また、日本語は「日本語能力を伸ばすもの」、朝鮮語は「民族の言葉」であり、中国語とともに「普段使い慣れている言葉」であるという意識があることがわかった。このように各言語に対する意識、さらに、その役割も異なっていることが明らかになった。

朝鮮族学校により、そして教師により日本語の授業で使われる言語の割合は異なり、教育方法も異なるものの、学習者たちは日本語、朝鮮語、中国語の三言語を活用してこそ可能となる「相乗的理解」そして「補完的理解」により日本語を学習していることが明らかになった。朝鮮族の日本語教育は、朝鮮族の「漢語化」により、「中国語」という三つ目の

言語能力を得たことで、「相乗的理解」をさらに高め、日本語と朝鮮語だけでは理解が難しい文法表現についても中国語による「補完的理解」により乗り越えていることがうかがえた。

第５章

三言語使用による日本語教育の可能性

本章では、日本語教育が途絶えた通化市朝鮮族学校の事例、そして途絶えた日本語教育が再開された和龍市第三中学校の事例から、これからの朝鮮族の日本語教育を展望し、三言語使用による日本語教育の可能性について言及する。

中国では 2000 年以降、学習指導要領に当たる「教学大綱」が新たに公布された。そこでは、実際の場面や話題に基づいたコミュニケーション能力の養成を重視する姿勢が打ち出され、従来のものとは異なる指針が示された。それはグローバル社会に対応すべく、多様な外国語能力を有する人材を生み出すことを目的として出されたものであることがわかる。このように、国家レベルでは、多様な外国語を学ぶことが奨励されながらも、省レベル、そして自治州レベルでは、「国際化」＝「英語化」という認識の下、英語を学ぶ学生を増やす政策がとられた。金紅梅（2009）によれば、延辺朝鮮族自治州では、「学校改革のひとつとして、「国際化」に適応するために朝鮮族学校で英語を学ぶ学生を増やすことを掲げた[192]」とあり、朝鮮族が多く住む吉林省においても「英語学習人口を増やす通達を行い、英語教育を実施している学校に対して奨励した[193]」とあり、「延辺を含む吉林省では急速に日本語教育から英語教育に移行し始めた[194]」という。このように国家レベルでは多様な外国語能力を有する人材を求めながらも、省レベルでは英語化への移行が急速に進んでいることがわかる。

筆者が調査を行った通化市朝鮮族学校は吉林省にある朝鮮族学校であり、和龍市第三中学校は延辺朝鮮族自治州の学校である。通化市朝鮮族学校では 2013 年まで日本語教育が行われていたが、その年をもって日本語教育が行われなくなった。3 名の朝鮮族教師へのインタビュー調査から、その原因を探ったところ、先行研究でも見られた英語教育の影響と朝鮮族学生の減少により日本語教育が「消滅」してしまったことが明らかになった。通化市朝鮮族学校のように日本語教育がなくなる学校が出てきている一方で、一度途絶えた日本語教育が再開された学校もある。延辺朝鮮族自治州和龍市にある和龍市第三中学校では、2003 年に日本語教育が行われなくなったが、近年再開された。その理由は、日本語教育が一度なくなったことで、日本語の優位性が再認識されたことにあることがわかった。これまでの英語化とは異なる新しい動きが出ていることがわかる。また、和龍市第三中学校では朝鮮語を中心とした授業が行われており、これまで延辺以外の朝鮮族学校で行われている三言語使用による日本語教育とは異なる教育方法であることが明らかになった。二つの

---

[192]金紅梅(2009)「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 55

[193] 同上：p. 55

[194] 同上：p. 55

学校の日本語教育の事例から、今後の朝鮮族の日本語教育を展望し、三言語使用による日本語教育の可能性について言及する。

５－１．途絶えた日本語教育　－通化市朝鮮族学校－

通化市朝鮮族学校は、学校の沿革資料によれば、1945 年 9 月に創立、60 年以上の歴史があり、通化市所轄の 7 つの県（市、区）の朝鮮族学生 9 年の義務教育（幼児教育、小学校、初級中学)、普通高中教育を担っている。幼稚園、小学校、初級中学教育、普通高中教育、職業高校教育、成人外国語教育をひとつに集め、一体となった総合的昇級重点学校となっている。現在、23 の教学クラス、1000 人以上の学生、168 名の教職員を擁している。

筆者が通化市朝鮮族学校を訪れた際、日本語の授業はすでに行われておらず、日本語を教えていた教師にも会うことはできなかった。そこで、通化市朝鮮族学校の 2 名の教師（事務主任 1 名、朝鮮語教師 1 名）に対して、学校について、そして日本語教育について直接インタビュー調査を行うことにした。また、後日、日本語を教えていた教師とも連絡がとれたため、メールに質問紙を添付し、それに記入してもらう形で回答を得た。

写真 9：通化市朝鮮族学校（筆者撮影）

５－１－１．通化市朝鮮族学校の教師に対するインタビュー調査

ここでは通化市朝鮮族学校で行った教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 49 に示す。調査は、筆者の友人の両親が通化市朝鮮族学校の校長と知り合いであり、その校長を通じて実施が可能となった。学校で事務の主任を務めている教師 1 名と朝鮮語を教えている教師 1 名に対してインタビュー調査を行った。インタビューは韓国語で行った。また半構造化インタビューの形式で行い、フィール

ドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 40 分から 1 時間ほどであった。

表 49：通化市朝鮮族学校・教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2014 年 8 月 11 日（月）
対象者	学校事務主任 1 名、朝鮮語教師 1 名、元日本語教師 1 名 3 名とも女性
使用言語	韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー（元日本語教師については、メールに質問紙を添付して送り、それに回答してもらう形とした）
インタビューの記録	フィールドノート （元日本語教師については、質問紙に記入してもらったものをメールに添付し、送付してもらった）
インタビューの実施場所	通化市朝鮮族学校
インタビューの時間	1 人あたり 40 分から 1 時間

また、元日本語教師については、調査した際に不在であったため、後日連絡をし、メールに質問紙を添付して送付し、それに回答してもらう形で調査を行った。その質問紙については、本論末尾に資料 19 として附す。

次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 50 に示す。

表 50：通化市朝鮮族学校・朝鮮族教師の属性

	属性
ＴＡ（女性）	通化市朝鮮族学校、事務主任
ＴＢ（女性）	通化市朝鮮族学校、朝鮮語教師
ＴＣ（女性）	通化市朝鮮族学校、元日本語教師 初級中学、高級中学で日本語を学習し、大学でも日本語を専攻した。 2004 年から 2013 年までの 10 年間、通化市朝鮮族学校で日本語を教えていた。 現在は学校で財務会計の仕事を担当。 ときどき朝鮮語の授業を担当することもある。

ＴＣ氏は第 2 章において、インタビュー調査結果を示したが、ここではＴＣ氏自身の日本語教育についての語り、また学校についての語りについて述べる。

ＴＡ氏は事務主任、ＴＢ氏は朝鮮語教師である。ＴＣ氏は 2004 年から 2013 年まで通化市朝鮮族学校で日本語を教えていたが、2014 年に日本語の授業がなくなってしまったため、現在は学校で財務・会計の仕事を担当している。また、ときどき朝鮮語の授業を担当する

こともある。インタビュー調査の語りについては本論末尾に資料 20 として附す。

５－１－２．英語教育の影響と朝鮮族学生の減少

ここでは、インタビュー調査の語りから、通化市朝鮮族学校の日本語教育がなぜ途絶えてしまったのかその要因を探る。以下は同校の日本語教育に関する語りである。

日本語の授業は､学校の正規の授業として 2013 年まであった｡日本語教育はもともと 1977 年から始まり、学校には初級中学 1 年から高級中学 3 年まで各学年 2 クラスずつ日本語クラスがあった。1 クラスは日本語を普通に学ぶクラスであり、もう 1 クラスは大学入試のために日本語を学習するクラスであった。2001 年には外国語科目として各学年、英語 2 クラス、日本語 1 クラスあり、学生が選択できるようになっていた。当時は朝鮮語ができる学生が多かったために、教師たちは朝鮮語で教えていた。日本語の教師は 4 名おり、いずれも大学で日本語を専攻していた教師たちだった。その教師たちは今、日本語の授業がなくなってしまったため、学校内で別の仕事をしている。現在、日本語の教師は、もし日本に留学したいという学生がいれば、その学生にアドバイスをしたりする役目も果たしている。（ＴＡ氏）

外国語科目は 2000 年まで日本語しかなかったが､2001 年から英語と日本語の 2 科目になった。日本語は、かつては他の学校で学習している学生たちが学習しに来ていた。彼らはみな、農村出身者だった。しかし、2013 年に日本語科目はなくなってしまった。（ＴＢ氏）

私が通化市朝鮮族学校において日本語を最後に教えたとき、初級中学 1 年から高級中学 3 年まで各学年 1 クラスずつ日本語クラスがあった。しかし 1 クラスの人数は 6 名程度であった。一方、英語クラスは、初級中学には各学年 2 クラスずつ、高級中学には各学年 4 クラスずつあり、日本語クラスよりも圧倒的に多かった。（ＴＣ氏）

これらの語りから、2000 年代に入り、英語教育が始まったことで、日本語選択者が減っている状況がうかがえる。そこから 10 数年で日本語教育がなくなってしまったことから、日本語学習者が急激に減ってしまったことがわかる。

また、日本語の教師は日本語科目自体がなくなってしまったため、学校内で他の仕事を行っている。日本に留学したい学生がいれば、アドバイスをするという役割もあることから、これは大学で言えば、国際部のような仕事を担っていることがわかる。元日本語教師のＴＣ氏は現在、財務・会計の仕事をしており、ときどき朝鮮語科目を教えることもあるという。日本語の授業がなくなっているのは、この通化市朝鮮族学校だけではない。日本語教育がなくなった後の日本語教師の役割も多様化して行くのかもしれない。通化市朝鮮族学校の日本語教育がなくなった要因としてＴＣ氏は以下のように話している。

まず一つ目は、大学入学後はほとんどのカリキュラムが英語と関わっている点、二つ目は、ここ数年、多くの大学がゼロ初級者向けの日本語基礎科目を開設したため、大学に入ってから日本語を学びたいという学生が増え、逆に初級中学のときは英語を学びたいという学生が増えたという点、三つ目は、我々の学校は朝鮮族学校であるため、朝鮮族の学生を募集するが、現在は朝鮮族の学生がだんだん少なくなってきている点である。以前は初級中学 1 年の 3 クラスのうち、一つが日本語クラス、二つが英語クラスであったが、現在は各学年１クラスずつしかなく、すべての学生が英語を学習している。（ＴＣ氏）

日本語教育がなくなった要因としては英語教育の影響と朝鮮族学生自体の減少が挙げられている。英語教育の影響は他の朝鮮族学校においても見られ、ＴＣ氏が理由のひとつとして挙げている大学入学後の話についても寧安市朝鮮族中学のＮＡ氏が以下のような話をしていた。

2003 年に成績優秀な学生が北京にある有名な医科大学に合格したが、中学で英語ではなく日本語を選択し学習してきたため、入学前に１年間英語を学習してから大学に入学することになってしまった。（ＮＡ氏）

つまり、日本語を選択してしまうことが大学の選択肢の幅を狭めてしまうという状況が存在していることがわかる。また、朝鮮族学生自体が少なくなってきている状況も、他の朝鮮族学校にも共通して見られ、特に鉄嶺市朝鮮族高級中学は学生の 7 割が漢族の学生であった。英語教育の影響と朝鮮族学生の減少は、これまで調査した朝鮮族学校でも見られる状況であり、日本語教育の存続の難しさがうかがえる。

５－１－３．通化市朝鮮族学校で行われた日本語教育

ここでは、ＴＣ氏に対するインタビュー調査結果をもとに、かつて通化市朝鮮族学校で行われた日本語教育について明らかにする。まず、朝鮮語についての語りは以下のとおりである。

私の日本語授業における教授用語の割合は、朝鮮語が 40%、中国語が 30%、日本語が 30%であった。朝鮮語は本文、読解、例文などを説明するときに使っていた。朝鮮語で翻訳しながら説明するのは分かりやすい。また、文法を説明するとき、中国語より朝鮮語を使う方が良い場合が多かった。例えば、尊敬語や美化語にあたる「お/ご 」であるが、「お月さま」の場合、朝鮮語では「달님」という形となり、これも日本語と同様、尊敬語の形になっている。また、「ご両親」は「부모님」となる。中国語は「ご両親」にあたる言葉はない。さらに、尊敬表現の「お/ご～になる 」の場合、例えば、「先生はこの本をお読みになりま

した」という例文は、朝鮮語では「선생님께서는 이 책을　읽으셨습니다」となる。一方、中国語では適当な言葉はない。（ＴＣ氏）

ＴＣ氏は日本語の敬語を説明する際に朝鮮語を使用していた。中国語は敬語表現が少ないために、日本語の敬語と対応する敬語がある朝鮮語を活用していたことがわかる。
次に日本語使用についての語りは以下のとおりである。

授業での日常用語はできるだけ日本語を使っていた。例えば、①教室用語：「前を見てください」「ポイントに気をつけて、よく聞いてくださいね」「一緒に読んでみましょうか」「授業を始めます。皆さん、こんにちは」「では、今日の授業はここまでです。みなさん、お疲れさま」など　②学生たちを褒める時や励ます時：「すごいですね」「上手ですね」「素晴らしいです」「発音が本当にきれいです」「これからも頑張ってくださいね」「気をつけてください」など　③学生との簡単な会話：「金さん、新しい服きれいですね」など、授業の内容と関係のないおしゃべりをするときなどに日本語を使っていた。（ＴＣ氏）

ＴＣ氏は教室用語、そして学生たちを褒めるとき、さらに学生との簡単な会話まで日本語を使用していたことがわかる。寧安市朝鮮族中学では教室用語や学生を褒めるときにも日本語が使われていたが、ＴＣ氏はさらに学生との簡単な会話まで日本語を使っていたことから、授業中だけでなく、普段の生活でも学生の発話を引き出そうとしていたことがうかがえる。最後に中国語使用についての語りは以下のとおりである。

中国語は、文法を説明する時、朝鮮語より中国語を使う方が良い場合がある。例えば、「ようだ」の使い方には

①比喩（처럼, ～와 같다）　②推測（～ㄴ 것 같다）　③例示（～와 같은）
④目的（게끔, 도록, ～ㄹ 수 있게）　⑤内容指示（～와 같이）⑥反復習慣
（～와 같이, 처럼）⑦願望、希望、請求、要求(～기를 바란다, ～를 희망한다)

以上、7 つの意味があるが、朝鮮語では④と⑦を除いて意味が大体同じなので、中国語で説明する方が良い。それぞれの例文は以下のとおりである。

①　顔はまるでりんごのようだ。얼굴은 마치 사과 같다.
②　風を引いたようだ。감기에 걸린 것 같다.
③　数学のような科目は大嫌いだ。수학과　같은 과목은 제일 싫다.
④　風が入るように窓を開けろ。바람이 들어오도록 창문을 열라.
⑤　小説の終わりには下のように書かれている。소설결말에는 다음과　같이 씌여져있다.

⑥　毎日のように繰り返して読む。매일과　같이 반복하여 읽다.
⑦　今年も幸せでありますように。금년도 행복하기를 바란다.

（以上、ＴＣ氏）

ＴＣ氏は「ようだ」を例に出して、中国語活用を説明してくれた。同じ「ようだ」という言葉でも、いろいろな意味があるため、その意味ひとつひとつに朝鮮語と中国語を当てはめ解釈していることがわかる。また注目すべきは、朝鮮語と中国語両方とも同じように解釈できる場合は、中国語を選んでいる点である。これは、学習者である学生たちの言語能力が大きいと考えられる。ＴＡ氏とＴＢ氏の語りを以下に記す。

初級中学になると、社会科目以外はすべて中国語で教えており、高級中学になると、すべての科目を中国語で教えている。（ＴＡ氏）

学生たちは朝鮮族であるが、普段朝鮮語は使わない。（ＴＢ氏）

以上の語りから、朝鮮族学生の「漢語化」が顕著に表れていることがわかる。日本語の授業においても、朝鮮語、中国語どちらの解釈でも理解できる場合は、学習者である学生の言語能力に合わせて中国語で教えていたことがうかがえる。

以上、通化市朝鮮族学校の日本語教育について、ＴＣ氏のインタビュー調査結果をもとに考察した。かつて行われていた日本語授業は、朝鮮族教師が日本語、朝鮮語、中国語の三言語をバランスよく活用したものとなっており、まさに朝鮮族ならではの授業が行われていたことがわかった。

５－１－４．小括

日本語教育が途絶えた通化市朝鮮族学校では、英語教育の勢いと朝鮮族学生の減少により、日本語教育がなくなってしまったことが明らかになった。それは、2001 年に英語教育が取り入れられてからわずか 12 年後のことであった。ここから、英語教育の勢いと朝鮮族学校の減少が急激であったことがわかる。現在の学生数は、幼稚園、小学校、初級中学、高級中学まで合わせても 700 名ほどであるという。調査を行った朝鮮族学校はどの学校も学生数減少に悩まされており、それに伴って日本語を受ける学生も少なくなってきている。それに英語人気が拍車をかけた形となっており、長年続けられてきた朝鮮族学校の日本語教育は今後も減少し続ける可能性がある。

しかしながら、次節で紹介する和龍市第三中学校では、一度途絶えた日本語教育が再開された。朝鮮族学校で日本語教育が次々となくなっている中、これまでとは違う新たな動きが出てきている。

５－２．再開した日本語教育　－和龍市第三中学校－

和龍市第三中学校は吉林省延辺朝鮮族自治州和龍市にある朝鮮族中学である。延辺朝鮮族自治州の人口は、2013 年時点で約 214 万人おり、このうち、朝鮮族の人口は約 78 万人である。和龍市の人口は約 18 万人であり、そのうち朝鮮族の人口は 9 万 3,257 人となっている。和龍市には初級中学 16 校、高級中学が 3 校ある。そのうち、朝鮮族の初級中学は 3 校、高級中学は 1 校ある[195]。

和龍市第三中学校の前身である和龍鎮職業中学は 1965 年に創立され、1971 年に現在の名称になった。2007 年時点で、学生数は 1000 名、24 のクラスがあり、学校職員は 103 名、そのうち教師は 85 名、高級中学の教師が 14 名、初級中学の教師が 54 名、その他 35 名である。また、300 名の学生が収容可能な学生寮と食堂設備がある。学生の 1 割以上は漢族の学生である。

現在、3 分の 1 の学生が日本語を学習し、残りの 3 分の 2 の学生が英語を学習している。初級中学 1 年のときに日本語と英語両方を学び、初中 2 年のときに日本語科目を取るか、英語科目を取るか学生が選ぶ方式をとっている。日本語の授業は 2003 年に一度なくなったが、現在は再開されており、学校全体では 150 名ほどの学生が日本語を学習している。初級中学において日本語を教える教師は 4 名おり、いずれも朝鮮族の女性教師である。現在日本語の授業は、初級中学 1 年は週に 3 時間、2,3 年は週に 5 時間行われている。

筆者が和龍市第三中学校を訪れたのは 2015 年 8 月 20 日であった。学校は夏休み期間中であり、全学年の授業が始まるのは 8 月 24 日からということであったが、受験を控えた初級中学 3 年生だけは一週間はやく授業が行われていた。

和龍市第三中学校では、日本語教師 2 名、学生 3 名に対するインタビュー調査、日本語クラス 2 クラス（どちらも初級中学 3 年生）、計 41 名の学生に対するアンケート調査を行い、また一つのクラスでは授業見学も実施した。

５－２－１．和龍市第三中学校の朝鮮族教師に対するインタビュー調査

ここでは和龍市第三中学校で行った日本語教師に対するインタビュー調査について述べる。まず、インタビュー調査の実施概要を表 51 に示す。

筆者の朝鮮族の友人が和龍市第三中学校の卒業生であり、その友人の紹介で調査を実施するにいたった。対象者は日本語を教えている 2 名の朝鮮族教師であり、2 名とも女性であった。インタビューは日本語と韓国語で行った。また半構造化インタビューの形式で行い、フィールドノートで記録した。インタビューの時間は 1 人あたり 40 分から 1 時間であった。

195　延辺州統計局『2014 延辺統計年鑑』の統計資料による。

表 51：和龍市第三中学校・日本語教師に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 8 月 20 日（木）
対象者	朝鮮族の日本語教師 2 名（すべて女性）
使用言語	日本語、韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	和龍市第三中学校
インタビューの時間	1 人あたり 40 分から 1 時間

次に、インタビューした朝鮮族教師の属性について表 52 に示す。

表 52：和龍市第三中学校・朝鮮族日本語教師の属性

	担当学年、日本語学習歴、及び教育歴
ＨＡ （20 代半ば、女性）	初級中学 1 年生の日本語授業を担当。 初級中学、高級中学では英語を学んだ。（2004～2010 年） 大学では日本語を専攻。 2014 年から現在の学校で日本語を教えている。
ＨＢ （50 代前半、女性）	初級中学 1 年生の日本語授業を担当。 初級中学、高級中学で日本語を学んだ。（1978～1983 年） 1984 年から日本語を教えている。 2011 年から現在の学校で日本語を教えている。

ＨＡ氏は 2004 年から 2010 年まで朝鮮族中学に通ったが、外国語科目が英語しかなかったため英語を学んだ。大学では日本語を専攻し、2014 年から和龍市第三中学校で日本語を教えている。現在、初級中学 1 年生の日本語授業を担当している。

ＨＢ氏は 1978 年から 1983 年まで延辺の朝鮮族中学で日本語を学び、1984 年から母校の朝鮮族学校で日本語を教え始めた。2003 年に日本語授業がなくなってしまったため、別の学校で日本語を教えることになった。和龍市第三中学校では 2011 年から日本語を教えている。現在、初級中学 1 年生の日本語授業を担当している。

次に、インタビューした教師の教授用語についてまとめたものを表 53 に示す。

表 53：和龍市第三中学校・朝鮮族日本語教師の日本語授業における教授用語について

	日本語	朝鮮語	中国語
ＨＡ氏(20 代半ば) 中・朝両方できるが朝鮮語の方ができる。	使用割合：20% 教室用語、簡単なあいさつ、日常会話など。	使用割合：70% 文法解釈、会話、翻訳するとき。	使用割合：10% 単語の説明。特に日本語の地名など。
ＨＢ氏(50 代前半) 中・朝両方できるが朝鮮語の方ができる。	使用割合：10% あいさつや簡単な質問をするとき。 敬語など。	使用割合：80% 主に文法、特に助詞を説明するときに使っている。	使用割合：10% 日本語の漢字を教えるときに使う。

2 名の教師の語りについては、本論末尾に資料 21 として附す。

５－２－２．日本語の優位性の再認識による再開

ここでは、インタビュー調査の語りから、和龍市第三中学校の日本語教育がなぜ一度なくなったのか、その要因を探る。以下は延辺地域の日本語教育に関する語りである。

私は延辺にある朝鮮族学校に通っていたが、日本語ではなく英語を学んだ。その理由は外国語科目としては英語しかなかったからだ。しかし、もしそのとき日本語科目があれば、日本語を選択して学びたかった。（ＨＡ氏）

私は 1984 年から延辺にある朝鮮族学校で日本語を教えていたが、以前勤めていた学校は私の母校であった。2003 年に日本語授業がなくなってしまったため、また別の学校で日本語を教えることになった。和龍市第三中学校では 2011 年から教えている。

もともと学校には日本語クラスしかなかったが、1996 年か 1997 年ごろ英語授業が開始された。和龍市第三中学校で日本語授業がなくなったのは、2003 年のことであり、その原因は英語人気に押されてしまい、日本語選択者が少なくなってしまったことが一番である。（ＨＢ氏）

以上の語りから、延辺地域の朝鮮族学校の日本語教育は 2003 年ごろなくなり始め、和龍市第三中学校も同じく、2003 年に行われなくなったことがわかる。本田（2012）によれば、「延辺朝鮮族自治州では 2002 年～2003 年をもって朝鮮族学校での「日本語」科目の履修を打ち切り、民族中学かふつうの中学であるかを問わず、すべての初級中学、高級中学の外国語科目は「英語」のみとなった[196]」とある。ＨＡ氏が延辺の朝鮮族中学に入学したのが 2004 年であるから、ちょうど日本語科目の履修が打ち切られた次の年にあたる。

[196] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 30

日本語教育がなくなってしまった要因としては、英語人気が挙げられている。それでは、なぜ再開されたのであろうか。以下は再開に関する語りである。

私が卒業した朝鮮族学校も、ここ 2,3 年で日本語教育が再開された。（ＨＡ氏）

（和龍市第三中学校では）2003 年以降も「日本語サークル」という形で残された。学校の外国語科目は英語クラスだけになってしまったが、大学入試の際にやはり日本語の方が良い点数が取りやすいのではないかということで、その後、日本語クラスが正式に復活した。やはり朝鮮族にとって日本語は英語よりも学習しやすいので、大学入試でも点数が取りやすい。また、去年の初級中学 2 年生の日本語選択者は 37,8 人いたが、今年は 50 人ほどに増えた。初級中学で日本語科目が再開されたことに伴い、高級中学でも日本語科目が復活した。現在は初中、高中ともに日本語教育が行われている。さらに、初中で英語を選択していたが、高中から日本語を選択する学生もいる。その理由は、やはり日本語の方が簡単で学習しやすいからである。（ＨＢ氏）

語りから、日本語授業はなくなったが、「日本語サークル」という形で残された日本語授業は、大学入試で良い点数が取りやすいという優位性のため再開されたことがわかる。これは、英語のみで大学入試にのぞんだ結果、思ったような点数が取れなかったことが大きな要因であると思われる。日本語教育は一度なくなってしまったことで、英語に比べて学びやすく点数が取りやすいという優位性が再認識されたため、再開されたのである。

また現在は、初級中学での日本語選択者が増えており、高級中学でも日本語教育が行われ、高級中学から日本語を学ぶ学生もいるほど日本語の学びやすさが見直されていることがうかがえる。この動きは和龍市第三中学校だけではなくＨＡ氏の母校においても起こっていることがわかる。

以上、和龍市第三中学校の日本語教育が再開された要因を探ったが、日本語教育が一度なくなったことで、日本語の学びやすさ、そして入試で高い点数を取りやすいという面が再認識された結果、再開されたことが明らかになった。

５－２－３．朝鮮語環境における三言語使用の有効性

ここでは、現在和龍市第三中学校において行われている授業について教師に対するインタビュー調査から、その日本語教育方法を明らかにする。

まずは、ＨＡ氏、ＨＢ氏の語りから、日本語使用に関する語りを以下に記す。

朝鮮語の次に割合が高いのが日本語で全体の 20%ほど使っている。日本語は主に教室用語、例えば「まず～します」「次に～します」など簡単な指示を出すときに使っている。他には日常会話や簡単なあいさつなどは日本語で行っている。（ＨＡ氏）

日本語は全体の 10%しか使っていない。主に簡単なあいさつや質問をするときに使っている。（ＨＢ氏）

日本語が使用されるのは教室用語、簡単なあいさつ、質問、日常会話などであり、これは他の朝鮮族学校でも見られる使われ方である。次に、朝鮮語使用については以下のとおりである。

私が授業中使っている教授用語は、朝鮮語が 70%と一番割合が高い。朝鮮語は日本語の文法、そして翻訳するときに使う。また会話の授業の際も、使用している。例えば、助詞、自動詞・他動詞、尊敬語、擬音語・擬態語、可能形、願望などはすべて朝鮮語で教えている。教科書も朝鮮語のものを使っている。（ＨＡ氏）

私が授業で使用する教授用語のうち 8 割を占めるのが朝鮮語である。主に文法の説明の際に使用しているが、特に中国語では説明が難しい助詞などについては朝鮮語で教えている。他には自動詞・他動詞、擬音語・擬態語、願望表現、敬語表現などは朝鮮語で説明している。（ＨＢ氏）

朝鮮語の使われ方であるが、2 名の教師ともに使用する割合が最も高く、日本語の文法表現を解釈する際にも広く使われていることがわかる。中国語使用については以下のとおりである。

中国語は全体の 10%ほどしか使っていない。中国語は、例えば、「万里の長城」のような地名であったり、「佐藤さん」「鈴木さん」といった人名を教えるときに活用している。他には、例えば受身表現や使役表現は中国語で教え、推量表現も朝鮮語ではなく中国語で説明している。（ＨＡ氏）

中国語であるが、全体の 10%しか使っていない。主に日本語の漢字を教えるときに使用している。また、受身表現、使役表現、可能表現、推量表現などは中国語を活用している。しかし、例えば、日本語の「通じて」と「通して」の違いなど、細かな違いがある日本語の表現に関しては、朝鮮語でも中国語でも説明するのが難しい。（ＨＢ氏）

中国語は使用割合こそ低いが、ＨＡ氏の場合は、漢字を利用しているだけでなく、受身、使役、推量表現にも中国語を活用していることがわかる。ＨＢ氏も日本語の文法表現に合わせて幅広く使っている。

ここで注目したのは、和龍市第三中学校は他の地域に比べて朝鮮語が使われている延辺

朝鮮族自治州にある朝鮮族学校であり、ＨＡ氏も「学生は中国語より朝鮮語の方が得意な学生が多い」と話していた。また、ＨＡ氏とＨＢ氏はともに中国語よりも朝鮮語の方が得意である。これまでの朝鮮族学校では、朝鮮語より中国語が得意な学生が多く、中国語より朝鮮語の方が得意な朝鮮族教師とは言語能力に差があった。しかしながら、和龍市第三中学校では教師、学生ともに朝鮮語の方が得意であるにもかかわらず、中国語が漢字だけでなく文法解釈まで幅広く活用されているのである。たとえ日本語と文法が似ている朝鮮語の方が得意であっても、すべて朝鮮語で説明するのではなく、中国語を活用されていることから、朝鮮語と日本語だけでなく、中国語を加えて教える方が日本語教育にとって有効であるということが認識されていることがうかがえる。では、実際の授業では三言語はどのように使われているのだろうか。授業見学をもとに明らかにする。

５－２－４．和龍市第三中学校の日本語授業見学

和龍市第三中学校では、初級中学 3 年生 1 クラスの授業見学を行うことができた。授業見学は、実際に朝鮮族の日本語教師が三言語を使用してどのように授業を行っているのか確認するために実施した。表 54 は授業見学の実施概要である。

表 54：和龍市第三中学校・授業見学の実施概要

実施日	2015 年 8 月 20 日（木）
見学クラス	初級中学 3 年生の日本語クラス
クラスの学生数	24 名（男子学生 10 名、女子学生 14 名）
授業時間	8：35～9：25
授業形態	グループ形式　4 つのグループ（1 グループ 6 名）
使用教材	『義務教育教科書 日語 8 学年用』 （延辺教育出版社、朝鮮語版）
記録方法	フィールドノート

授業見学を行ったクラスの学生数は 24 名で、男子学生が 10 名、女子学生が 14 名であった。授業時間は 8：35 から 9：25 まで 50 分間行われた。授業形態はグループ形式であり、4 つのグループ（1 グループ 6 名）に分かれていた。使用教材は『義務教育教科書 日語 8 学年用』（延辺教育出版社、朝鮮語版）であった。授業内容はフィールドノートにより記録した。授業見学の記録は、本論末尾に資料 22 として附す。

５－２－５．朝鮮語による日本語教育

ここでは、授業見学をもとに、和龍市第三中学校の日本語授業について、実際に三言語がどのように使われているのか明らかにする。まず、日本語使用は以下のとおりである。

教師が教科書の本文をまず読む。その後、学生に 3 回ずつ本文を読ませる。
（ここでの指示は日本語）

本文について教師が学生に日本語で質問。その後、朝鮮語に訳して質問。
例）中国の学校と日本の学校の違いはなにか？
　　学校の生徒の数は？

ＨＡ氏とＨＢ氏も話していたように、日本語は教室用語や質問をするときに使われている。注目したいのは、日本語で質問した後、朝鮮語で訳し、そこで終わっている点である。つまり中国語での翻訳は見られない。ここから、学生が朝鮮語だけで聞き取ることができ、意味を理解することができるということがわかる。
次に朝鮮語使用は以下のとおりである。

教師（T）が第 11 課の新しい単語を朝鮮語で言い、学生（S）に答えさせる。
例）T：「적다」「깊다」「얕다」
　　S：「少ない」「深い」「浅い」
　　T：「浅い」의 반대 말은？　（「浅い」の反対語は？）
　　S：「深い」

第 11 課の文法表現である「～より～のほうが」について説明
　　T：朝鮮語で意味は？
　　S：보다

　　S：車より自転車のほうが好きです。
　　T：朝鮮語で？
　　S：자동차보다 자전거를 좋아합니다.

本文の詳しい説明については、教師が朝鮮語で行う

朝鮮語は、日本語の単語や文を翻訳するときに使われ、本文の詳しい説明も朝鮮語で行われている。また、授業では中国語使用は見られなかったことから、日本語授業を見る限りでは、ほとんどが朝鮮語と日本語の二言語が使われていることがわかった。これは和龍市が延辺朝鮮族自治州に属しており、教師も学生も朝鮮語を話せる環境にあり、そのため中国語よりも朝鮮語能力が高いためであると考えられる。
次に、読むことに重点を置きつつも、学生に文をつくらせて発表させるなど、学生に考

えさせる授業を行っていることがわかる。また、日本語だけで答えさせるのではなく、朝鮮語に翻訳させている点については、おそらく高級中学受験の際に、日本語を朝鮮語に翻訳する問題が出題されるからではないかと考えられる。さらに、日本語が上手な学生をうまく活用して、他の学生のモチベーションを上げさせている点にも工夫が見られる。

最後に、グループ活動を積極的に活用し、クラス全員で日本語を学習しているという一体感を出している。こうすることで、落ちこぼれる学生を防ぎ、学生を全員を引っ張って行くことができるようにしている。

ただ、ひとつ気になったのは、教師の日本語の発音である。例えば、「学校（がっこう)」が「かっこう」、「歌（うた)」が「うだ」、「来て（きて)」が「きで」のように、特に清音が濁音になる場合が多く見られた。これは、例えば、朝鮮語の「가[ga]」は語頭では濁音化せず、日本語の「か」のように発音するため「がっこう」が「かっこう」になってしまうと考えられる。他の二つの音については、「うた」を「우다[uda]」、「きて」を「기데〔kide〕」のように、「た」と「て」を朝鮮語の平音のまま発音してしまっている。朝鮮語は、語中に平音が来て、なおかつ前の音が母音で終わっている場合は、濁音化するという性質があるため、「うた」が「うだ」、「きて」が「きで」のように聞こえてしまったと考えられる。発音に関して言えば、朝鮮語の影響が出てしまい、正しい日本語の発音とは異なって聞こえているが、テープなども活用して授業を行っており、さらに今の学生たちはインターネットを活用して日本のドラマやアニメをいつでも見ることができるため、それほど大きな問題にはなっていないようである。現に、授業が終わった後、学生たちと少し話す時間があったが、学生たちはみんな日本のドラマやアニメに興味があり、自分の好きなドラマやアニメについて目を輝かせながら話していた。また、授業中に教師に指名され本文を読んだ学生に、なぜそんなに日本語が上手なのか尋ねたところ、やはり「日本のアニメが好きだから」と答えていた。日本のドラマやアニメが、彼らの一番良い日本語教材と言えるのかもしれない。

５－２－６．和龍市第三中学校の日本語及び英語学習者に対するインタビュー調査

2015 年 8 月 22 日、和龍市第三中学校に通っている 3 名の学生たちに対してインタビュー調査を行うことができた。3 名の学生は新学期から初級中学 3 年生になる女子学生であり、2 名は日本語を学習しており、1 名は英語を学習している。調査の実施概要を表 55 に示す。

3 名のうち日本語の授業を受けている 2 名の学生とは授業見学の際に知り合った。また、英語を選択している 1 名の学生は、授業後に筆者を訪ねて来た際に知り合った。なお、日本語授業を選択している女子学生 2 名は双子の姉妹である。インタビューは日本語、及び韓国語で行った。また、半構造化インタビューの形式で行い、記録はフィールドノートにより行った。インタビュー時間は 1 時間 30 分であり、3 名同時に行った。

表 55：和龍市第三中学校・日本語及び英語学習者に対するインタビュー調査の実施概要

実施日	2015 年 8 月 22 日（土）
対象者	日本語授業を選択している初級中学 3 年生の学生 2 名、及び英語授業を選択している初級中学 3 年生の学生 1 名 （3 名とも女性）
使用言語	日本語及び韓国語
インタビュー形式	半構造化インタビュー
インタビューの記録	フィールドノート
インタビューの実施場所	和龍市内
インタビューの時間	1 時間 30 分　3 名同時に実施

調査の対象者の属性を表 56 に示す。

表 56：和龍市第三中学校・インタビュー調査対象者の属性

	言語能力、日本語学習歴など
ＨＣ（女性） 2001 年 1 月 10 日生	朝鮮語の方ができる。 中国語能力は朝鮮語能力と比べたら 60～70%ほど。 初級中学 1 年から日本語を学習している。 当初、漢族幼稚園に通っていたが、その後、朝鮮族幼稚園に通うこととなった。ＨＤは双子の妹。
ＨＤ（女性） 2001 年 1 月 10 日生	朝鮮語の方ができる。 中国語能力は朝鮮語能力と比べたら 60～70%ほど。 初級中学 1 年から日本語を学習している。 当初、漢族幼稚園に通っていたが、その後朝鮮族幼稚園に通うこととなった。ＨＣは双子の姉。
ＨＥ（女性） 2001 年 8 月 11 日生	朝鮮語の方ができる。 中国語能力は朝鮮語能力と比べたら 60～70%ほど。 初級中学では英語を学習している。 日本語は独学で習得した。

3 名の対象者とは日本語と韓国語を交えながら話したが、ＨＥ氏の日本語が堪能であったため、ＨＥ氏に頼んで朝鮮語に翻訳してもらうこともあった。3 名の言語能力であるが、3 名とも中国語より朝鮮語の方がよくでき、朝鮮語が 100%とするなら、中国語は 60～70%くらいできる。3 名と話をするとき、中国語を使うことはなかった。

次にインタビュー調査対象者の言語能力と言語使用環境について表 57 に示す。

表 57：和龍市第三中学校・学習者インタビュー調査対象者の言語レベルと言語使用環境

	家庭内	学校内	学校外
ＨＣ（女性） 朝鮮語＞中国語 （60～70%）	朝鮮語で話す。 両親と一緒に暮らしている。	友達とは朝鮮語で話し、中国語は中国語の授業のときだけ話す。	日常会話はすべて朝鮮語で話し､漢族と会ったときは中国語で話す。
ＨＤ（女性） 朝鮮語＞中国語 （60～70%）	朝鮮語で話す。 両親と一緒に暮らしている。	朝鮮語で話す。	漢族のお店で買い物をするときだけ中国語を使う｡それ以外は朝鮮語。
ＨＥ（女性） 朝鮮語＞中国語 （60～70%）	朝鮮語で話す。 両親と一緒に暮らしている。	朝鮮語で話す。ときどき友達と冗談を言うとき中国語を使う。漢族教師と話すときも中国語を使うが、それ以外はほとんど朝鮮語を使う。	漢族の人と話すときだけ中国語を使う｡それ以外は朝鮮語。

3 名のインタビュー対象者の語りについては資料 23 として本論末尾に附す。

５－２－７．母語による日本語教育と母国語による英語教育

ここでは、まず日本語学習者であるＨＣ氏、ＨＤ氏の語りから、両氏がどのように三言語を活用して日本語学習を行っているかについて考察する。両氏の日本語学習方法は以下のとおりである。

日本語を学習するとき、例えば、中国語の場合は日本語の漢字の単語を覚えるときに使っている。一方、朝鮮語は「アイスクリーム」や「チョコレート」など、外来語を覚えるときに活用している。外来語の場合、中国語よりも朝鮮語の方が日本語の発音に近い。また、朝鮮族が使う朝鮮語の中には「弁当」や「ペンチ」などの日本語が残っているため、単語が覚えやすい。助詞も朝鮮語を活用しており、例えば、日本語の助詞「に」は朝鮮語では「에」、「が」は朝鮮語では「가/이」となり、覚えやすい。（ＨＣ氏、ＨＤ氏）

注目したいのは、日本語の外来語を覚える際に、朝鮮語を活用している点である。それは、朝鮮語の外来語の音が、中国語の外来語の音よりも日本語に近いためである。この外来語については、瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語教師であるＳＡ氏も朝鮮語を活用して日本語の外来語を教えていると話していた。よって、教師、学習者ともに外来語については朝鮮語を活用していることがうかがえる。また、朝鮮語の単語の中にかつての植民地教育

の影響で残った「日本語」が含まれているために、そのまま活用している点はこれまでの語りにはないものである。「満洲国」期に日本語教育を受けた人々に対するインタビュー調査からも、今でも使われている日本語として以下のようなものが挙げられた。

バケツ、めがね、弁当、トマト、たまねぎ、ランニング、上着、オーバー、Ｙシャツ、半袖、襟、チョッキ、ズボン、パンツ、タンス、下駄、スリッパ、スパナ、ペンキ、ドレバー（ドライバー）、段取り、基礎、足場、ノコギリ、ねじまわし、インキ、ペンチ、桜、座布団、窓

「満洲国」期の日本語教育によって朝鮮語の中に残された日本語が、朝鮮族社会で今も使われ、それらが日本語を学ぶ際に活用されていることから、「満洲国」期と現在の日本語教育のつながりを見ることができる。

さらにＨＣ氏とＨＤ氏は教師が話す日本語について、以下のように話していた。

日本語教師の日本語は、やはり、はやいと聞き取りづらい。初級中学 1 年生のころは、教師は日本語を話した後、すぐに朝鮮語でも話してくれたが、2 年生になると、日本語の割合が増えた。（ＨＣ氏、ＨＤ氏）

ここから、和龍市第三中学校では、学年が上がるにつれて日本語使用の割合を増やしていることがわかる。しかし、両氏は教師の日本語が「はやいと聞き取りづらい」と話しており、朝鮮語での翻訳がなくなったことで難しさを覚えていることがうかがえる。延辺自治州以外の朝鮮族学校では、学生が日本語を聞き取れなかった際には、まず朝鮮語で話し、その後、中国語でも話すことで「補完的理解」促す教育方法がとられていたが、延辺自治州の朝鮮族学校である和龍市第三中学校では、学生の朝鮮語能力が中国語能力を上回っていることから、三言語による「補完的理解」は見られない。延辺と延辺以外の学校では学生の言語能力に大きな差があり、それは教育方法にも学習方法にも影響を与えていることがうかがえる。次にＨＥ氏の語りから、英語教育についての語りを以下に記す。

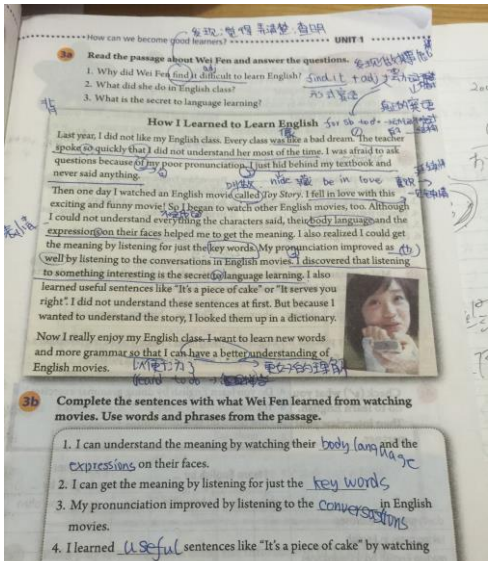
私は学校で英語を選択し、学んでいる。母親が看護師であることもあって、将来の夢が医者になることなので、日本語ではなく、英語を選んだ。日本語は日本のアニメやドラマ、映画などを見て独学で習得した。（ＨＥ氏）

まず、日本語ではなく英語を選んだ理由として、「医者になりたいから」という点を挙げている。すでに述べたが、寧安市朝鮮族中学の卒業生も医科大学に進む際に英語ができず大変だったという話もあった。日本語が将来の選択肢を狭めてしまうという点がここでも見られる。その一方で、ＨＥ氏は日本語を独学で学んだものの、日本語選択者であるＨＣ

氏とＨＤ氏よりも日本語が堪能であり、筆者が話す日本語を的確に朝鮮語に翻訳し、伝えていた。ここから、日本語の学びやすさがうかがえ、また日本のアニメやドラマなど学習するツールも豊富であることがわかる。

では、朝鮮族学校では英語をどのように学習しているのであろうか。以下に記す。

英語の授業の教師は朝鮮族ではなく、漢族の教師であり、英語の教科書は中国語で書かれている。英語の教師は朝鮮族ではなく、漢族の教師が多い。漢族の教師の教授用語は英語 90%、中国語 10%の割合である。英語教師は主に英語、もしくは中国語で授業を行うため、私は朝鮮語ではなく中国語でメモをとっている。書いているのは中国語であるが、頭の中では朝鮮語で英語を理解している。しかし、母語ではない英語と中国語で説明されるため、やはり難しさを感じている。（ＨＥ氏）



How can we become good learners? UNIT 1

3a Read the passage about Wei Fen and answer the questions.

1. Why did Wei Fen find it difficult to learn English?
2. What did she do in English class?
3. What is the secret to language learning?

How I Learned to Learn English

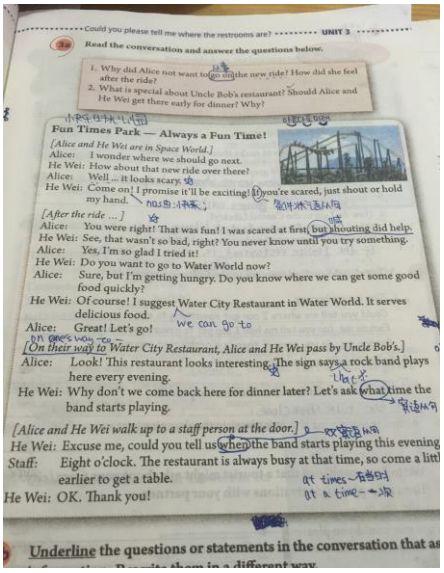
Last year, I did not like my English class. Every class was like a bad dream. The teacher spoke so quickly that I did not understand her most of the time. I was afraid to ask questions because of my poor pronunciation. I just hid behind my textbook and never said anything.

Then one day I watched an English movie called *Toy Story*. I fell in love with this exciting and funny movie! So I began to watch other English movies, too. Although I could not understand everything the characters said, their body language and the expression on their faces helped me to get the meaning. I also realized I could get the meaning by listening for just the key words. My pronunciation improved as well by listening to the conversations in English movies. I discovered that listening to something interesting is the secret to language learning. I also learned useful sentences like "It's a piece of cake" or "It serves you right". I did not understand these sentences at first. But because I wanted to understand the story, I looked them up in a dictionary.

Now I really enjoy my English class. I want to learn new words and more grammar so that I can have a better understanding of English movies.

3b Complete the sentences with what Wei Fen learned from watching movies. Use words and phrases from the passage.

1. I can understand the meaning by watching their body language and the expressions on their faces.
2. I can get the meaning by listening for just the key words.
3. My pronunciation improved by listening to the conversations in English movies.
4. I learned useful sentences like "It's a piece of cake" by watching



Could you please tell me where the restrooms are? UNIT 3

3a Read the conversation and answer the questions below.

1. Why did Alice not want to go on the new ride? How did she feel after the ride?
2. What is special about Uncle Bob's restaurant? Should Alice and He Wei get there early for dinner? Why?

Fun Times Park — Always a Fun Time!

[Alice and He Wei are in Space World.]
Alice: I wonder where we should go next.
He Wei: How about that new ride over there?
Alice: Well ... it looks scary.
He Wei: Come on! I promise it'll be exciting! If you're scared, just shout or hold my hand.
[After the ride ...]
Alice: You were right! That was fun! I was scared at first, but shouting did help.
He Wei: See, that wasn't so bad, right? You never know until you try something.
Alice: Yes, I'm so glad I tried it!
He Wei: Do you want to go to Water World now?
Alice: Sure, but I'm getting hungry. Do you know where we can get some good food quickly?
He Wei: Of course! I suggest Water City Restaurant in Water World. It serves delicious food.
Alice: Great! Let's go!
[On their way to Water City Restaurant, Alice and He Wei pass by Uncle Bob's.]
Alice: Look! This restaurant looks interesting. The sign says a rock band plays here every evening.
He Wei: Why don't we come back here for dinner later? Let's ask what time the band starts playing.
[Alice and He Wei walk up to a staff person at the door.]
He Wei: Excuse me, could you tell us when the band starts playing this evening
Staff: Eight o'clock. The restaurant is always busy at that time, so come a litt earlier to get a table.
He Wei: OK. Thank you!

Underline the questions or statements in the conversation that a

写真 10：ＨＥ氏の英語教科書　朝鮮語ではなく、中国語で書き込まれている（筆者撮影）

ここで注目すべきは、ＨＥ氏が英語を学習する際、中国語でメモをとりながらも、頭の中では朝鮮語で英語を理解している点である。朝鮮族学校の英語教育は、英語と中国語の二言語による教育方法がとられているが、朝鮮族の学生たちは、さらに朝鮮語で理解していることから、「英語→中国語→朝鮮語」という三言語による理解が行われていることがうかがえる。しかし、ＨＥ氏は、母語ではない英語と中国語で授業が行われているために難しさを感じていると話していることから、この点が母語である朝鮮語で授業が行われている日本語との大きな違いであり、日本語教育が再開されたひとつの要因であるとも考えられる。

５－２－８．和龍市第三中学校の日本語学習者に対するアンケート調査

これまでインタビュー調査及び授業見学により和龍市第三中学校の日本語教育方法、及び学習者の学習方法について検討したが、ここでは、同校で行ったアンケート調査について述べる。今回、鉄嶺市朝鮮族高級中学、及び吉林市朝鮮族中学校で行ったアンケート調査と同じ内容のアンケートを用い調査を行った。吉林市朝鮮族中学校のアンケート調査結果同様、今回も主に朝鮮族学習者たちが朝鮮語、中国語の二つの言語をどのように活用して日本語を学習しているかについて明らかにするため、アンケートの設問 8（5 つの設問）についての調査結果について考察することとする。和龍市第三中学校で行ったアンケート調査の実施概要を表 58 に示す。

表 58：和龍市第三中学校の日本語学習者に対するアンケート調査の実施概要

実施日	2015 年 8 月 20 日（木）
実施場所	和龍市第三中学校
実施クラス	初級中学 3 年　日本語クラス　2 クラス 計 41 名　（男性 23 名、女性 18 名）このうち 1 名は漢族の学生
調査方法	集合調査法を用いた。 クラスの日本語授業担当教師とともに教室に行き、授業の最初の時間を利用してアンケート用紙を直接配布し、記入後、すべて回収した。
アンケートの調査項目	日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問 全 17 項目のうち、15 項目が選択回答、2 項目が自由回答。 また、15 項目の選択回答のうち、2 項目については、選択した後、自由回答方式とした。 15 項目の選択回答のうち 11 項目は複数回答可とした。
アンケート用紙の言語	朝鮮語で書かれたもの。

アンケート調査は集合調査法を用い、初級中学 3 年の二つの日本語クラスにおいて調査を行い、計 41 名（男 23 名、 女 18 名）分のアンケート用紙を回収することができた。アンケートの調査項目は全 17 項目であり、主に日本語授業や学習者の言語能力などに関する質問である。アンケート用紙は朝鮮語版を使用した。アンケート用紙については本論末尾に資料 14 として附す。

５－２－９．朝鮮語による日本語理解

ここでは、アンケート調査の結果から和龍市第三中学校の朝鮮族学習者たちが朝鮮語、中国語の二つの言語をどのように活用して日本語を学習しているかについて明らかにする。

まず、男女比率について見てみると、「男：女＝56：44」となっており、男子学生の割合がやや高くなっている。まずは、学習者たちがどちらの言語ができるかどうか示したものが図 36 である。

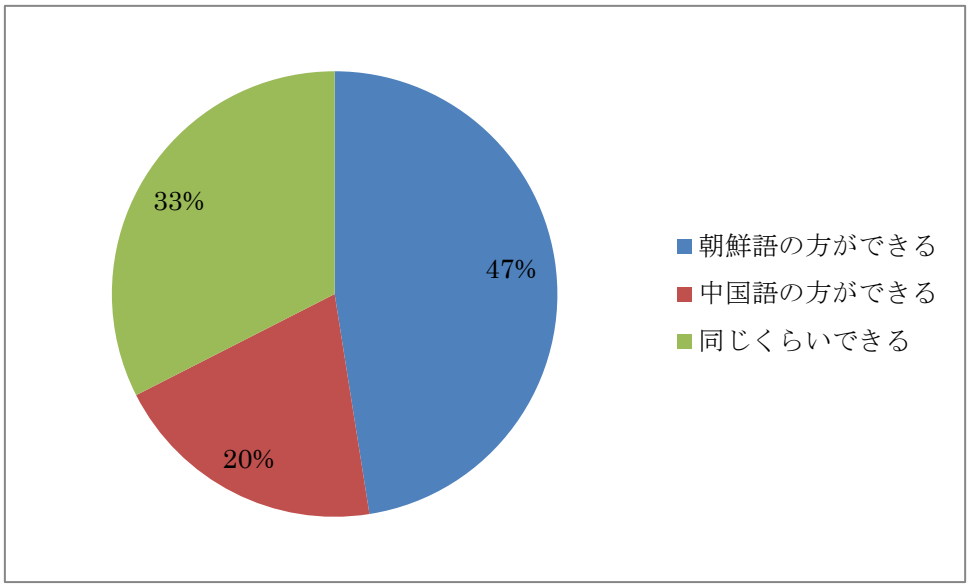


図 36：和龍市第三中学校、朝鮮語と中国語どちらができるかについての自己評価
（回答者数 40 名）

最も高い割合であったのは「朝鮮語の方ができる」で半数近くを占めた。調査した延辺以外の調査対象学校ではすべて「中国語の方ができる」と答えた学生が最も多かったが、ここでは対照的な調査結果となっている。「中国語の方ができる」と答えた学生は全体の 2 割であった。ここに、延辺朝鮮族自治州に住む朝鮮族の言語能力の特徴が表れていると言える。延辺以外の地域が、「漢語化」により中国語の方ができる学生が大きな割合を占めているのに対し、延辺の学校では、このように、朝鮮語優位の状況であることがわかる。この朝鮮語、中国語の言語能力の差に、延辺と延辺以外の地域の違いが表れている。

では、「朝鮮語の方ができる」学習者はどの程度の中国語能力を有しているのであろうか。図 37 に示す。「朝鮮語の方ができる」と答えた学習者の中国語能力を見てみると、「70%以上」と答えた学習者が全体の半数以上に上った。これを、吉林市朝鮮族中学校の「朝鮮語の方ができる」と答えた学習者の中国語能力を示したものと比較してみると、吉林市朝鮮族中学校では「70%以上」と答えた学習者が 61%となっており、わずかに高い割合を示している。

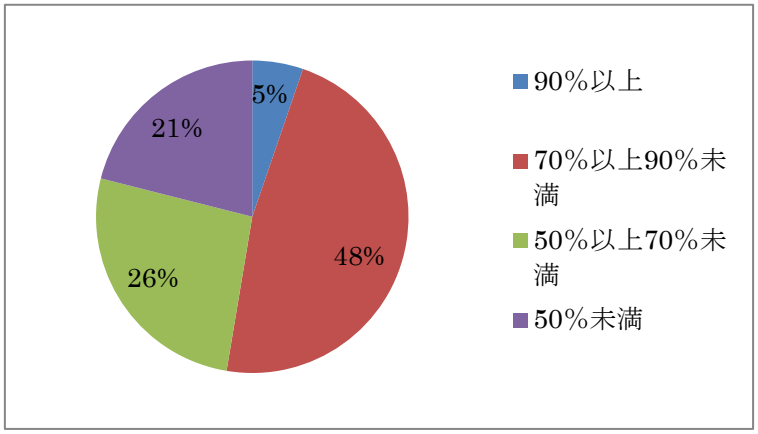


図 37：和龍市第三中学校、朝鮮語の方ができる学習者の中国語能力
（回答者数 19 名）〔朝鮮語能力を 100%としたときの中国語能力〕

また、「50%未満」と答えた割合は、和龍市第三中学校が 21%であったのに対し、吉林市朝鮮族中学校では 16%と、その割合は低くなっている。わずかな差ではあるが、延辺以外の地域である吉林市朝鮮族中学校の学習者の方が、延辺にある和龍市第三中学校の学生より中国語レベルが高い学生の割合が若干高いと言える。

次に「中国語の方ができる」と答えた学習者の朝鮮語レベルを図 38 に示す。

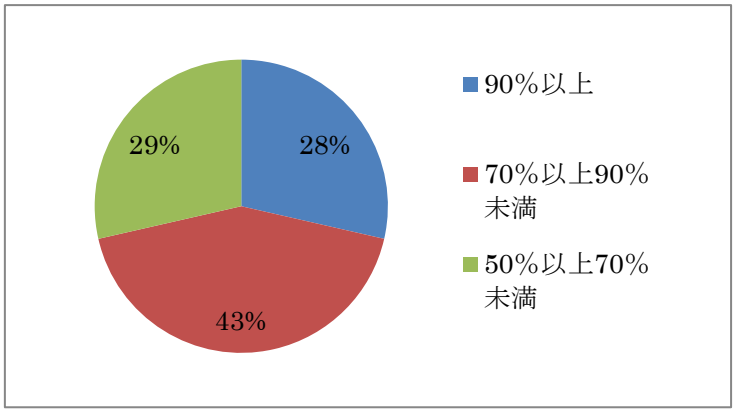


図 38：和龍市第三中学校、中国語の方ができる学習者の朝鮮語能力
（回答者数 7 名）〔中国語能力を 100%としたときの朝鮮語能力〕

回答者が 7 名しかいなかったが、7 名中、「50%未満」の朝鮮語能力しかないと答えた学生はゼロであった。一方、吉林市朝鮮族中学校では、「50%未満」と答えた学生が 32%もおり、対照的な結果となった。つまり、和龍市第三中学校では、「中国語の方ができる」学習者であっても、朝鮮語レベルは比較的高く、「朝鮮語の方ができる」学習者は、若干ではあるが、中国語レベルが比較的低い傾向にあると考えられる。つまり、延辺以外の朝鮮族学校の学習者に比べて、「朝鮮語能力」が高い学習者が多いと考えられる。その理由を示して

いるのが学習者たちの言語環境である。図 39 に示す。

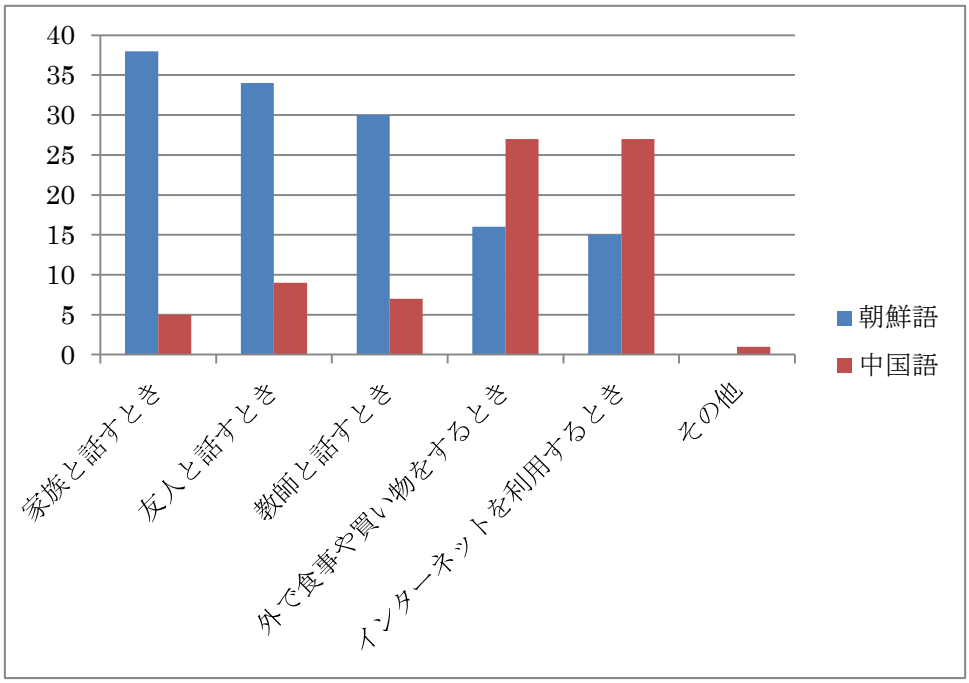


図 39：和龍市第三中学校、朝鮮語及び中国語をどんなとき使っているか

（朝鮮語の回答者数 40 名、回答数 133、中国語の回答者数 38 名、回答数 76）

5 項目のうち、「家族と話すとき」「友人と話すとき」「教師と話すとき」の 3 項目で、朝鮮語が中国語を大きく上回った。その差が最も開いたのは、「家族と話すとき」である。この項目については、吉林市朝鮮族中学校では、唯一朝鮮語が中国語を上回った項目であり、鉄嶺市朝鮮族高級中学においても中国語が朝鮮語を上回ったものの、他の項目に比べて、その差は小さかった。延辺朝鮮族自治州にある和龍市第三中学校では、家族と話すときは圧倒的に朝鮮語を使用する割合が高いことがわかる。また、友人と話すとき、教師と話すときの割合も朝鮮語が中国語を大幅に上回った。このことから「家庭内」と「学校内」では依然として朝鮮語が多く使われていることがわかる。3 名の学生に対して行ったインタビュー調査からも、「家庭内」「学校内」ではほとんど朝鮮語が使われ、学校外においてのみ中国語が使用されていることがうかがえた。日本語の授業においても中国語ではなく、朝鮮語が使われていた。「家庭内」そして「学校内」においても朝鮮語が使われる環境が残っている点が、延辺と延辺以外の地域との大きな違いであると言える。

その一方で、学校外である「外で食事や買い物をするとき」は中国語が朝鮮語を上回った。延辺においても、学校の外に出れば、中国語が使われている環境であることがわかる。

和龍市ではないが、延辺朝鮮族自治州の州都である延吉市においても朝鮮語より中国語が使われる割合が高くなっている。それは、漢族人口の増加と朝鮮族人口の減少が大きな

要因と考えられるが、和龍市においても「学校外」においては、朝鮮語より中国語が多く使われていることがうかがえる。

もうひとつ注目したいのは「インターネットを利用するとき」朝鮮語よりも中国語を多く利用している点である。これは中国であるから当然中国語サイトを多く利用することになり、それが結果として表れているとも考えられるが、おそらく友人とチャットする際も、中国語が使われているのではないだろうか。実は中国語を使っている項目のうち「その他」がひとつある。これは、「ゲーム友達との会話」であった。インターネットを使い、しかもゲームをするとなると、そこには大多数の漢族の人々が存在している。すると、朝鮮族の学生は朝鮮語ではなく中国語に切り替えて会話するのである。インターネットは国境を越えるツールであると言える。日本語を学習している朝鮮族の場合、中国人とは中国語で、韓国人とは韓国語で、そして日本人とは日本語で会話できる。英語が話せれば、その他の国の人々とも会話ができるようになる。この多言語を有しているという意識は、アンケート調査の回答の中でも多く見られた。つまり、朝鮮族は実際に国境を越えて活動している民族であるが、インターネットの世界においても、多言語を使い分け国境を越えているのではないだろうか。

では、日本語を学習するとき、朝鮮語、中国語をどのように使い分けているのだろうか。まずは朝鮮語をどのように活用しているのか示したものが図 40 である。

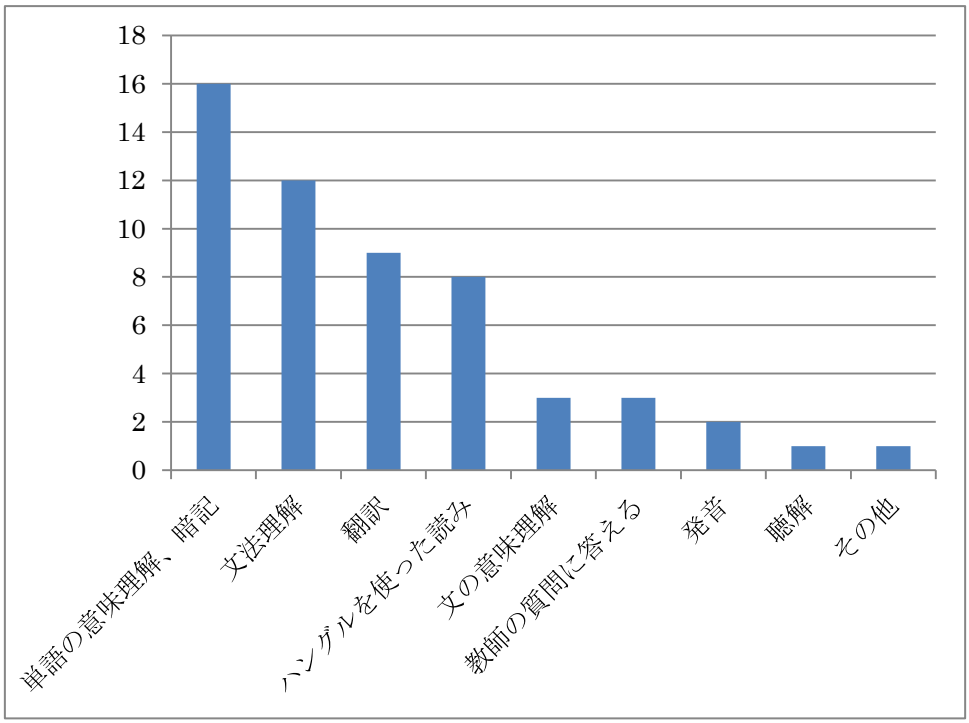


図 40：和龍市第三中学校、日本語を学習する際の朝鮮語の活用方法

（回答者数 38 名、回答数 55）

最も多かったのは「単語の意味理解、暗記」であり、続いて「文法理解」、「翻訳」、「ハングルを使った読み」が多かった。「単語の意味理解、暗記」と「文法理解」については、鉄嶺市朝鮮族高級中学でも吉林市朝鮮族中学校においても最も割合が高かった上位 2 項目であったが、注目したいのは、「ハングルを使った読み」の割合が他の 2 校と比べ、高くなっている点である。これは家庭でも学校でも朝鮮語環境にあり、また外の環境も漢字表記だけではなくハングル表記が見られ、常に朝鮮語と接することができる環境にあることが大きいのではないだろうか。また、「日本語授業」以外でも多くの授業は朝鮮語で行われており、教科書も朝鮮語のものが使われていることから、朝鮮語で読むということが習慣付けられているためではないかと考えられる。

次に、中国語をどのように活用しているのかについての結果を図 41 に示す。

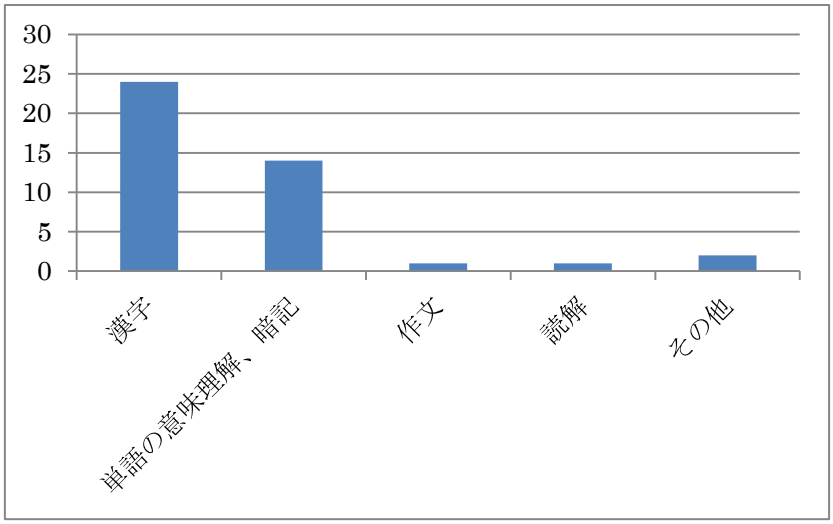


図 41：和龍市第三中学校、日本語を学習する際の中国語の活用方法

（回答者数 38 名、回答数 42）

最も多かったのは「漢字」であり、次が「単語の意味理解、暗記」となっている。この結果、和龍市第三中学校の学生たちが日本語の学習をする際、最も朝鮮語を使っている部分は「単語の意味理解、暗記」であり、中国語を使っている部分は「漢字」であるということがわかる。鉄嶺市朝鮮族高級中学では、最も朝鮮語を使っている部分が「翻訳」、中国語を使っている部分が「単語の意味理解、暗記」であり、吉林市朝鮮族中学校では、朝鮮語活用は「文法理解」が最も多く、「中国語」活用は鉄嶺市朝鮮族高級中学同様、「単語の意味理解、暗記」であった。つまり、和龍市第三中学校の学生は両校に比べ、「単語の意味理解、暗記」においても朝鮮語を多く活用していることがわかる。これは、和龍市第三中学校の学生たちの朝鮮語能力の高さが日本語を学習する際も影響を与えていると考えられる。また、「単語を予習するとき」に朝鮮語を活用するという回答もいくつか見られたことから、日本語の授業の際も、日本語の単語を朝鮮語で解釈していることがわかる。一方で、

文字の面では、中国語と共通する漢字を最大限に活かしており、「中国語の漢字と日本語の漢字を区別するとき」中国語を活用しているという回答が多く見られた。このことから、和龍市第三中学校の学生たちは、「単語の意味理解、暗記」においても朝鮮語を最大限に活かし、その中でも朝鮮語ではカバーできない「漢字」を伴う単語に関しては、中国語を利用していることがわかった。ここでも「日本語授業」における言語使用と、学習者自身の言語能力が日本語学習への活用方法に大きな影響を与えていることがわかる。

最後に、和龍市第三中学校の学習者が望む教授用語についての調査結果を図 42 に示す。

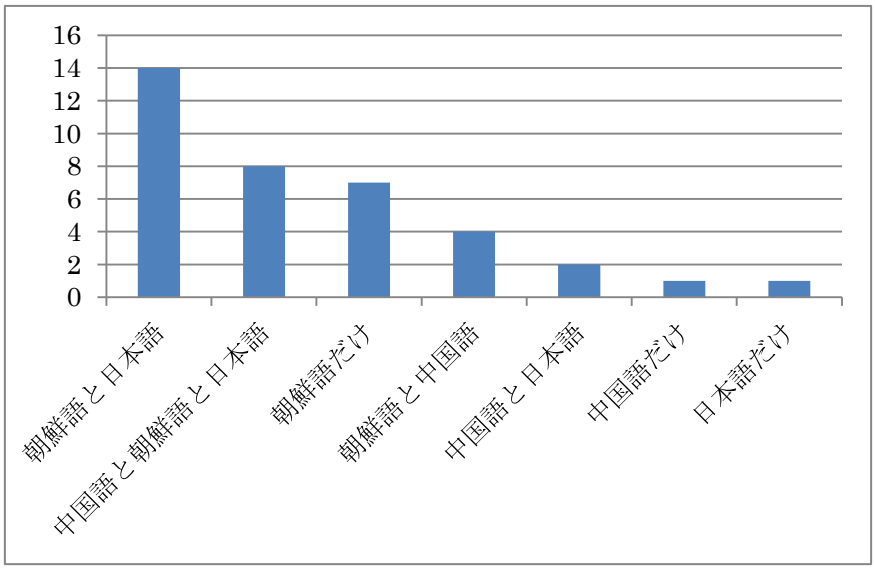


図 42：和龍市第三中学校、日本語授業の最も良い教授用語（回答者数 36 名、回答数 37）

最も多かったのは「朝鮮語と日本語」であり、次が「中国語と朝鮮語と日本語」、続いて、「朝鮮語だけ」「朝鮮語と中国語」という順になった。この 4 つの回答に共通するのは、すべて「朝鮮語」が入っていることである。学生たちの回答の中にも、「朝鮮語は私たちが最もよくわかる言葉だから」「朝鮮語が上手だから」「朝鮮語が一番聞き取りやすいから」などが見られた。やはり一番理解しやすい言葉で授業を受けたいという気持ちが強いことがうかがえる。また、「日本語で聞き取れなかった場合は、朝鮮語で解釈できるから」という回答も見られたことから、和龍市第三中学校の日本語授業では、朝鮮語が日本語の補完的役割を果たしていることがわかる。これは鉄嶺市朝鮮族高級中学と吉林市朝鮮族中学校において、中国語が朝鮮語の補完的役割を果たしているのとは対照的である。その両校で最も回答数が多かった「中国語と朝鮮語と日本語」であるが、和龍市第三中学校の学生の回答としては、「理解しやすい」という回答より、「多くの言語を学んで外国の人と話したい」「いろいろな国の人々と会話するチャンスがある」「今後使う言語だから」など、将来的に役に立つことを意識した回答が見られた。延辺以外の学校では、「理解しやすい」という理由で三つの言語による授業を望んでいた学生が多く見られたが、和龍市第三中学校では、

授業中それほど中国語が使われていないということも理由のひとつではないだろうか。授業見学もさせてもらったが、そこでは中国語による解説などはなく、すべて朝鮮語、もしくは日本語で授業が行われていた。朝鮮語を補完する中国語の役割が見られた延辺以外の朝鮮族学校とは大きな違いがあると言える。

和龍市第三中学校の日本語選択者に対するアンケート調査結果は、延辺朝鮮族自治州以外の地域の日本語選択者に対して行ったアンケート調査結果とは大きな違いが見られた。

まず第一に、朝鮮語の方ができる学習者が中国語の方ができる学習者より多く、中国語の方ができる学習者の朝鮮語能力も高いことがうかがえた。その理由としては、朝鮮語環境であるという点が最も大きい。朝鮮語を使用する範囲は、「家庭内」のみならず「学校内」でも多く使われており、中国語使用の割合を大きく上回った。その一方で、外で買い物や食事などをするときは朝鮮語より中国語を使うと答えた学習者の割合が高く、延辺朝鮮族自治州であるとはいえ、学校外は「漢語化」の影響を受けていることも明らかになった。さらにインターネットを利用する際も中国語を使用していると答えた学習者が朝鮮語を選んだ学習者を上回り、現実世界だけではなくインターネットの世界においても中国語が広く使われていることがわかった。

日本語の学習の際は、「単語の意味理解、暗記」や「文法理解」など広く朝鮮語が使われており、特に「ハングルを使った読み」を選んだ学習者の割合が延辺以外の二つの学校に比べて高いことも大きな特徴のひとつであった。一方、中国語は日本語の「漢字」を覚える際に活用しているという学習者が最も多く、「文法理解」などで活用している学習者はほとんどいなかったことから、和龍市第三中学校の学生たちは、日本語を学習する際には、彼ら、彼女らがより得意とする朝鮮語能力を最大限活用し、朝鮮語だけではカバーできない漢字などについては中国語を活用していることがわかった。

学習者が望む教授用語としては、「朝鮮語」を交えた授業を望んでいる回答が大きな割合を占めた。これは、延辺以外の朝鮮族学校において「中国語と朝鮮語と日本語」三つの言語が教授用語として好まれた結果とは異なる結果となった。その原因としては、授業で中国語を使うことがまだ少なく、ほとんどは朝鮮語もしくは日本語で授業が行われているということが大きな原因として挙げられる。また、和龍市は延辺以外の地域に比べ、朝鮮語環境が残っており、学校での教授用語も多くは朝鮮語が使われているため、学生たちの朝鮮語能力が比較的高く、その点が大きな原因のひとつであると考えられる。さらに三言語による日本語授業を選んだ学習者の回答からは、「理解しやすいから」という理由より、「多くの言語で教えてもらえれば、将来、役に立つから」という理由で選んだ学習者が多いことがわかった。これは、母語ではなく母国語である中国語が、彼ら、彼女らにとって日本語を理解するための言語としてそれほど認識されていないことを示している。しかし、学校外ではすでに「漢語化」が見られ、将来は延辺以外の地域同様、学校内においても、また家庭内においても中国語が使われるようになれば、中国語能力と朝鮮語能力に変化が生じ、中国語が日本語学習に有効なものとして認識されるのではないだろうか。

５－２－１０．小括

5－2 では、一度は途絶えた日本語教育が再開された和龍市第三中学校の事例から、まず再開された要因を探った。日本語教師に対するインタビュー調査から、日本語の授業が一度なくなったことで、日本語が学びやすく、大学入試においても点数が取りやすい科目であるということが再認識されたために再開されたことがわかった。それは同時に英語教育一本にした結果、大学入試において思うような点数が取れなかったということも示している。英語を学習している学生へのインタビューからは、英語教育は母語ではない中国語と英語という二つの言語によって行われているため、理解するのが難しいという現状が明らかになった。これは母語である朝鮮語による授業が行われている日本語の授業とは対照的であり、母語による理解と母国語による理解の差が大学入試の点数の差となって表れたのではないだろうか。英語教育の不振が日本語教育の再開につながったと考えられる。

和龍市第三中学校で行われている日本語授業を見学した際には、中国語の活用は見られなかったが、日本語教師によるインタビュー調査からは文法表現の一部に中国語が活用されていることがうかがえた。しかし、学習者である学生たちには日本語を学ぶ際に、中国語活用の必要性はあまり見られず、漢字を活用するなど、限定的な使われ方しかされていなかった。母語である朝鮮語を最大限に活かすという学習方法により日本語を理解し学んでいることがうかがえた。それは、家庭内においても学校内においても朝鮮語環境であることが最も大きな要因であると考えられるが、学校外ではすでに「漢語化」が見られていることから、将来、延辺以外の地域と同じように中国語環境になる可能性もあり、学習者の母語が朝鮮語ではなくなったときに、中国語を加えた三言語使用による日本語教育が行われるようになるのではないかと考えられる。

５－３.朝鮮族学校における日本語教育の展望と三言語使用による日本語教育の可能性

第 5 章では、日本語教育が途絶えてしまった通化市朝鮮族学校の事例、そして一度途絶えてしまった日本語教育が再開された和龍市第三中学校の事例を紹介した。これからの朝鮮族の日本語教育はどのように展開していくだろうか。これは地域ごと、学校ごとによって異なってくるであろうが、まず通化市朝鮮族学校のように英語教育の影響と朝鮮族学生の減少などにより、日本語教育をやめざるを得ない学校も出てくるであろう。これまで調査を行った朝鮮族学校においても、英語教育の勢いに押される日本語教育の実態があり、また朝鮮族学生の減少により、漢族の学生や韓国人留学生を受け入れている学校もあった。

その一方で、和龍市第三中学校のように日本語教育が再開された学校もある。この再開の動きは、ＨＡ氏の話の中にもあったように、延辺朝鮮族自治州内の他の学校でも起こっている。筆者はこの新しい動きに注目したい。延辺朝鮮族自治州では 2003 年ごろに中等教

育での日本語教育が行われなくなったということはすでに述べたが、日本語教育が行われなくなったことによって、むしろ日本語が英語よりも学びやすく、大学入試においても点数が取りやすい外国語であるということが浮き彫りになったのではないだろうか。そのために和龍市第三中学校のように、日本語教育の優位性を見直し、再開するにいたったのではないかと考える。そして、それは英語教育で思ったような成果が出なかったということの裏返しでもある。和龍市第三中学校のように、日本語教育が一度なくなったものの、英語教育で成果が出せなかった場合に、日本語教育に回帰するという学校も今後出てくるのではないかと考えられる。

そして、もうひとつの流れとしては、研究背景でも述べたように「第二外国語」として日本語教育を開始する学校が出てきている点があげられる。韓（2012）には、延辺の龍井高級中学での新たな試みとして、「2007 年度入学者の中から実験的に日本語を一から教えるクラスを設けた[197]」事例が紹介されている。このクラスは英語に自信のない学生や日本語に興味のある学生を中心に編成されたとのことであるが、「最終的に 25 人が 2010 年の大学入試に参加、内 21 人が見事に大学に現役合格できた[198]」とし、日本語が朝鮮族にとって英語より学びやすい言語であり、「短期間で成績がアップでき、他の教科にも負担をかけずに行われることが可能である[199]」と、第二外国語としての日本語の可能性に言及している。筆者が朝鮮族教師に対して行ったインタビュー調査の中にも「初中で英語を選択していたが、高中から日本語を選択する学生もいる。その理由は、やはり日本語の方が簡単で学習しやすいからである」（ＨＢ氏）「高中 1 年生から日本語を始めた学生、つまり初中では英語を学習していたが、高中から日本語を学習し始めた学生が 10 名ほどいる。このうち半分の 5 名ほどはかなり日本語ができる」（ＫＣ氏）など、高級中学から日本語を学習する学生が実際にいることがわかり、その理由は「学びやすさ」にあるとしている。このように高級中学に見られる「第二外国語」としての日本語教育が、大学入試において実績を残し続ければ、日本語の優位性に気づき、日本語教育を新たに始める学校も出てくるのではないだろうか。

朝鮮族にとって、日本語が学びやすい外国語であり、試験の際も点数が取りやすいという点は、その他の先行研究でも見られる。金紅梅（2009）では、黒龍江省の朝鮮族中学の 2007 年度の大学受験成績表に基づき、大学受験における日本語、英語の成績を比較し、分析した結果、日本語の点数の方が高く、「朝鮮族にとって、英語より日本語のほうが、成績が取りやすい[200]」と考察している。また、本田（2005）では、ハルビン第一朝鮮族中学の

---

[197] 韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢（三重大学）』第 29 号 三重大学人文学部文化学科 p. 182

[198] 同上：p. 182

[199] 同上：p. 182

[200] 金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号 立命館大学 p. 59

2000 年の高考[201]の平均点が、「日本語 116 点、英語 90 点であった（150 点満点）[202]」とし、「黒龍江省各地の朝鮮族中学の日本語の高考平均点は、同様に 110～120 点のあいだ[203]」であるとし、英語より日本語の方が点数が取りやすいということを示している。筆者が朝鮮族の日本語学習者に対して行ったインタビュー調査の中にも、「初級中学１年生のとき、日本語のテストで 90 点以下を取ることがなかった。逆に英語は初級中学１年生のとき、いつも 60 点以下だった。日本語と英語で 50 点差ほどあった」（ＳＧ氏）「英語のテストで 60 点以上を取れなかった」（ＳＪ氏）など、英語に対する難しさ、逆に日本語に対する学びやすさを感じている語りが多く見られた。

今後の朝鮮族の日本語教育は、三つのパターンが予想される。一つ目は通化市朝鮮族学校の事例のように日本語教育が完全に「消滅」してしまう。二つ目は和龍市第三中学校のように「再開」される。そして、三つ目は「第二外国語」として新たに「開始」される。どの道を辿るかは地域や学校の状況によって異なってくるであろうが、日本語教育が「再開」され、新たに「開始」される新しい動きに今後も注目していきたい。

最後に、三言語使用による日本語教育の可能性について述べる。通化市朝鮮族中学では、日本語教育が途絶えてしまったが、元日本語教師であるＴＣ氏へのインタビュー調査から、かつては三言語をバランス良く使用した日本語授業が行われていたことがうかがえた。また、日本語教育を再開した和龍市第三中学校では、日本語授業において、まだ中国語使用が十分になされていないものの、朝鮮族教師のインタビュー調査からは、中国語使用の利点がうかがえた。さらに、第 3 章、及び第 4 章で取り上げた 5 つの朝鮮族学校においては、実際に日本語、朝鮮語、中国語の三言語使用により日本語の授業が行われていることがわかった。和龍市第三中学校のように、現在も朝鮮語環境が存在する学校においても、いずれは「漢語化」の波がやってくると考えられる。学校内が朝鮮語環境から中国語環境に変わることで、日本語授業における中国語使用の割合も高まり、同時に教師、学習者ともに中国語使用の利点にも気づかされるのではないだろうか。

延辺以外の朝鮮族学校においても中国語を使用する割合が今後さらに高まると予想されるが、三言語使用による日本語授業は、日本語の授業であると同時に朝鮮語を維持する役割も果たしている。教師に対するインタビュー調査だけでなく、学習者に対するアンケート調査の回答の中にも日本語の授業は朝鮮語を使える場であるという認識が存在していることがうかがえた。三言語使用による日本語教育が、朝鮮語維持の役割も果たしており、学習者自身も「朝鮮語」の授業を受けている限り、教師及び学習者の「漢語化」が進んだとしても、朝鮮語は日本語授業において使われ、三言語使用による日本語教育は朝鮮族学校において今後も続けられるのではないかと考える。

---

[201] 「全国普通高等学校招生入学考試」の通称。中国の大学入学試験。

[202] 本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会　p. 26

[203] 同上：p. 26

朝鮮族学校における日本語教育の事例から、三言語使用による日本語教育の可能性が見えてくる。朝鮮族の場合は、自らの民族語である朝鮮語を維持する役割も日本語教育が果たしていることがわかったが、それは、朝鮮語が日本語の文法と非常に類似しているからこそ可能であると言える。つまり、三言語のうち、日本語を除く二つの言語のどちらかは日本語となにかしら共通するものを持っているからこそ、「学びやすさ」につながると言える。例えば、英語が母語であり、日本語と同時に中国語も学んでいる学習者の場合は、中国語の漢字などを活用して日本語を学習することができる。逆に日本語の漢字を活用して中国語を学ぶことも可能であろう。また、モンゴル語が母語であり、日本語と同時に朝鮮語も学んでいる学習者は、文法の面で三言語とも共通している部分が多いため、モンゴル語の文法を最大限活用して、朝鮮語と日本語を学習することができる。このように学習者の第一言語や第二言語が日本語と共通した要素を持っている場合、三言語使用による日本語教育の有効性が発揮されることとなる。それは朝鮮族の朝鮮語能力を維持する役割と同じように、学習者の第二言語能力を維持するだけでなく、日本語との「相乗的理解」により第二言語の能力をも伸ばす可能性も秘めていると考える。

第６章

結論

本章では、中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育についてまとめ、東アジアにおける三言語使用の有効性と限界について考察し、結論とする。

６－１．二言語使用には見られない三言語使用の有効性

第 2 章では、「満洲国」期、改革開放期、そして現在にいたるまでの日本語教育方法について比較、検討した。そこから、中国朝鮮族が「漢語化」により中国語を日本語教育における教授用語として取り入れたため、それまでの二言語使用の教育方法から、三言語使用の教育方法へと変化していったことが明らかになった。その結果、日本語と朝鮮語だけでは理解が難しい文法表現について、中国語を使用することで理解する「補完的理解」と、日本語、朝鮮語、中国語の三言語を使用することで、より深く理解する「相乗的理解」が可能となった。特に、「補完的理解」は、三言語による日本語教育を受けたＫＦ氏の語りからうかがえる。ＫＦ氏の「補完的理解」の例を表 59 に示す。

表 59：ＫＦ氏の「補完的理解」

文法表現	日本語	朝鮮語	中国語
①～にしろ、～にしろ		△	○「选这个、选这个」
②使役、受身、使役受身		△	○
③食べさせられた （使役受身表現）	○　＋しかたなく ＋むりやり	△	△

表 59 からは、日本語と朝鮮語という二言語による教育では、文法表現①、②、③ともに教える際に難しさを伴うと考えられる。なぜなら、朝鮮語でも理解することが難しく、日本語も「しかたなく」や「むりやり」などの表現がわからなければ理解できないからである。しかし、中国語を活用できることができれば、①、②の表現については理解しやすくなり、さらに朝鮮語、中国語どちらも活用する習慣が身に付けば、そこに「相乗的理解」が生まれ、日本語をより深く理解することが可能となる。「相乗的理解」が深まれば、③のように「しかたなく」や「むりやり」という他の日本語表現に対する理解も深まり、それが日本語による日本語理解へとつながる。ＫＦ氏は朝鮮族学校の日本語教育において、この「補完的理解」と「相乗的理解」を繰り返すことで、「大学では日本語で日本語を理解で

きるようになっていた」と話していた。

このように、二言語使用では理解が難しい表現についても、中国語を加えた三言語使用によって「補完的理解」と「相乗的理解」を可能にし、克服していることがわかる。これが二言語使用には見られない三言語使用の有効性であると考える。

６－２．中国朝鮮族の三言語使用による多様な日本語教育方法

第 3 章では、朝鮮族学校の日本語教師に対するインタビュー調査をもとに、三言語使用による日本語教育方法について考察した。まず、学校別に見てみると、使用言語の割合が異なることが明らかになった。鉄嶺市朝鮮族高級中学では中国語の使用割合が他の学校に比べて高く、吉林市朝鮮族中学校、瀋陽市朝鮮族第一中学では朝鮮語を使用する割合が高かった。一方、寧安市朝鮮族中学では日本語の使用割合が最も高く、学校により大きな違いが見られた。

その要因としては、まず中国語使用の割合が高い鉄嶺市朝鮮族高級中学においては、日本語学習者である学生の「漢語化」が著しく、学習者の中国語能力が朝鮮語能力に比べ高いこと、そして教師が日本語を説明するのに十分な中国語能力を有していることが挙げられた。また、その傾向は吉林市朝鮮族中学校の初級中学の日本語教育でも見られたが、高級中学で教えている教師は中国語能力が伴っていないために、朝鮮語使用の割合が高く、初級中学と高級中学で教授用語が異なり、また同じ学年であっても、教師の言語能力で教授用語、さらには教科書の言語まで決められていることがわかった。瀋陽市朝鮮族第一中学では、朝鮮語使用の割合が高い傾向が見られるものの、授業では三言語を使用し、「相乗的理解」と「補完的理解」による教育方法がとられていることがわかった。寧安市朝鮮族中学では、教師と学習者の言語能力にかかわらず、日本語使用による教育方法がとられ、それは学校の伝統的な教育方法であることが明らかになった。また、梅河口市朝鮮族中学では、教師によって使用言語に違いが見られることがわかった。梅河口市朝鮮族中学の日本語教師が授業中使用する言語の割合をまとめたものを表 60 に示す。

梅河口市朝鮮族中学で教師の使用言語の割合が異なっているのは、初級中学担当であるか高級中学担当であるか、また、教授経験、研修経験、留学経験などの影響により変わってくると考えられる。初級中学では学習者の日本語の基礎ができていないため、日本語の使用割合が最も低く、朝鮮語や中国語で授業を行っている。また、高級中学では学習者が日本語をある程度聞き取れるため、日本語の割合が高くなっている。さらに、日本語の教授経験が長く、日本語教育研修の経験もあるＫＡ、ＫＢ両氏は日本語使用の割合が高く、またＫＥ氏はもともと中国語を教えていたことから、他の教師に比べ、中国語使用の割合が高くなっていると考えられる。さらに日本に留学経験のあるＫＣ氏も日本語を最も多く使用していることから、教師自身の教育経験などが使用言語の割合にも影響を与えていることがうかがえた。

表 60：梅河口市朝鮮族中学の日本語教師が授業中使用する言語の割合

	日本語	朝鮮語	中国語
ＫＡ 高中の授業担当 日本語教育研修の経験有り	60%	30%	10%
ＫＢ 高中の授業担当 日本語教育研修の経験有り	40%	50%	10%
ＫＣ 高中の授業担当 日本に留学経験有り	◎　最も多い	○　次に多い	△　一番少ない
ＫＤ 初中の授業担当	15%	85%	×　ほとんど 使わない
ＫＥ 初中の授業担当 元中国語教師	10%	70%	20%

このように、各朝鮮族学校により、使用言語の割合に違いは見られるものの、どの学校においても三言語を使用しながら日本語教育が行われていることがわかった。また、「相乗的理解」と「補完的理解」を促す授業がなされていることも共通していた。まずは瀋陽市朝鮮族第一中学の授業から「相乗的理解」の事例を表 61 に示す。

表 61：教師の教育方法に見られる「相乗的理解」の事例

	日本語	朝鮮語	中国語
①　笑う	笑わせる	웃게 하다	让笑
②　楽しむ	楽しませる	즐겁게 하다	让我们开心
③　ますます		더욱더	越来越
④　まったく		완전	完全赞成
⑤　生活上の問題		생활상의 문제	生活方面的问题

表 61 から、①、②のような使役の活用については、まず日本語で活用の形をしっかり示し、その後、朝鮮語と中国語で翻訳していることがわかる。また、③、④のような副詞についても朝鮮語、中国語それぞれ翻訳が可能であるが、両方の言語で翻訳させることによって学習者の理解を深めさせている。さらに、⑤のように漢字のあるものであっても、中国語だけで翻訳はせず、まず朝鮮語で翻訳してから中国語で翻訳していることがわかる。

次に、朝鮮族教師に対するインタビューの中に出てきた事例、そして授業見学の際に見られた事例をもとに、朝鮮語、及び中国語による「補完的理解」をまとめたものを表 62 に示す。

表 62：教師の中国語及び朝鮮語による「補完的理解」の事例

事例①

日本語	朝鮮語	中国語
わざわざ	일부러	特意
わざと	일부러	故意

事例②

日本語	朝鮮語	中国語
なかなか	좀처럼	很难 怎么也～、不～。
めったに	좀처럼	很少

事例③

日本語	朝鮮語	中国語
～することができない	～할 수는 없다	不能做，不会做
～するわけにはいかない	～할 수는 없다	不可以那么做 能力无关

事例④

日本語	朝鮮語	中国語
間に合う	△제 시간에 가닿다	○赶趟

事例⑤

日本語	朝鮮語	中国語
すっかり	완전히	完全
ぜんぜん	전혀	完全

事例⑥

日本語	朝鮮語	中国語
運動会が開かれる。	○ 운동회가 개최되다(열리다).	×

事例①から④までは中国語による「補完的理解」を示したものである。事例①から③までは、朝鮮語で区別できないものを、中国語で区別することで理解していることがわかる。また、事例④では朝鮮語、中国語どちらでも翻訳が可能であるが、より日本語の意味に近い中国語を選んでいる。朝鮮語でも中国語でも翻訳できる場合であっても、日本語の意味により近い方を選択して使用していることがわかる。

事例⑤と⑥は、朝鮮語による「補完的理解」の事例であるが、事例⑤では中国語で区別できないため、区別のある朝鮮語を使用し、事例⑥では、普段は中国語で解釈している受身表現であっても、中国語で翻訳できない場合については、朝鮮語を使用していることがわかる。

最後に、朝鮮語と中国語を使用しても説明が難しい日本語の事例を表 63 に示す

表 63：朝鮮語、中国語両言語を使用しても理解が難しい日本語の事例

①	「こと」と「もの」の違い
②	「ちっとも」と「少しも」の違い
③	「あける」と「ひらく」の違い
④	「通じて」と「通して」の違い

このように、朝鮮族教師たちは、朝鮮語と中国語の区別ができないものに関しては、日本語の例文を数多く挙げて理解させるようにしていると話していた。

以上、朝鮮族教師の教育方法に見られる「相乗的理解」と「補完的理解」についてまとめた。ここで示した事例からもわかるように、「相乗的理解」と「補完的理解」は朝鮮族学校において共通して見られるものの、どの文法表現を朝鮮語、中国語、そして日本語で説明するかは、教師ごとに異なっており、朝鮮族教師による多様な三言語使用が行われていることがわかった。

最後に、教師による「相乗的理解」と「補完的理解」を図式化したものが図 43 である。まず、教授用語については、教師がまず日本語で説明し、その後、それを朝鮮語に翻訳する。これにより、朝鮮語が日本語を補完する役割を果たすこととなる。さらに、朝鮮語で翻訳した後、中国語に翻訳することで、中国語は日本語だけではなく朝鮮語を補完する役割も果たす。これは、朝鮮族教師のインタビューの中で多く見られた「日本語の授業が朝鮮語の授業にもなっている」という状況を表している。朝鮮語と中国語で説明することにより、「補完的理解」が生まれ、さらには二つの言語で翻訳されることから、より理解が深まる「相乗的理解」も生まれることとなる。

次に、文法説明であるが、まずは文法的な共通点の多い朝鮮語で文法を説明するが、それでも理解が難しい場合は中国語を活用する。または、朝鮮語よりも中国語の方が理解がしやすいと判断した場合は中国語による説明を行う。さらに、朝鮮語でも中国語でも理解が難しい文法表現の場合は、日本語の例文などを活用することで、補完することとなる。

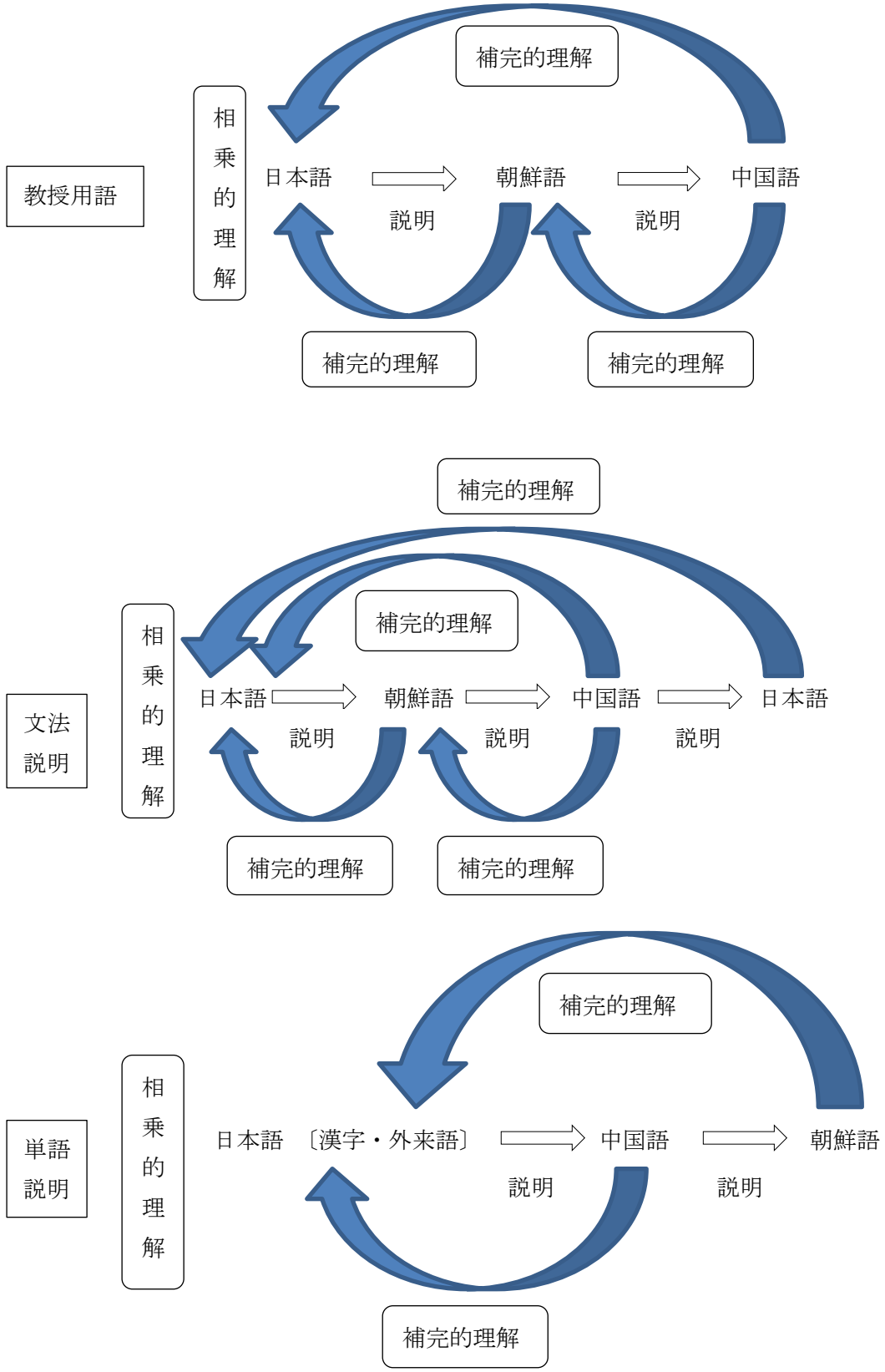


図 43：教師による相乗的理解と補完的理解

ここでは、日、朝、中の三言語使用による「補完的理解」と「相乗的理解」がなされていることがわかる。

次に、日本語の単語を説明する際は、漢字の含まれる単語に関しては、まず中国語で説明するものの、例えば、外来語については朝鮮語による説明を行うことで補完する。さらに、単語の意味については、日本語と中国語で違いがある場合は、朝鮮語で補完したりする。単語の説明も文法の説明と同じように補完しながら教えることで、「補完的理解」を生み出し、さらには両言語で翻訳が可能な単語についても、あえて両言語で翻訳することによって、「相乗的理解」を可能にしている。

このように、三言語使用による日本語教育方法は、あらゆる場面で「補完的理解」と「相乗的理解」を生み出していることがわかる。

６－３．中国朝鮮族の三言語使用による多様な日本語学習方法

第 4 章では、朝鮮族学校の学生に対するアンケート調査、及び学生に対するインタビュー調査により、朝鮮族学習者の三言語使用による学習方法について明らかにした。

アンケート調査結果から、日本語学習者である学生たちに共通していた点は、朝鮮語より中国語が得意な学生が多くいたこと、そして、日本語授業では教師が三言語を使って教えることを望んでいた点であった。その主な理由として「相乗的理解」と「補完的理解」が挙げられていた。さらに、日本語は「日本語能力を伸ばすもの」、朝鮮語は「民族の言葉」であり、中国語とともに「普段使い慣れている言葉」であるという意識が存在していることがうかがえた。このように各言語に対する意識、さらに、その役割も異なっていることが明らかになった。

瀋陽市朝鮮族第一中学の学習者に対するインタビュー調査からは、学習者によって言語能力、言語使用は様々であり、日本語学習を行う際の理解の仕方も異なっていることがわかった。日本語学習者が日本語の文法表現を理解する際は、①学習者自身の言語能力、及び言語使用の頻度　②教師が日本語を解釈し、説明する際に使用する言語　③日本語の意味と朝鮮語、中国語それぞれの意味の近さという三つの点から、朝鮮語、中国語使用を選択していることがうかがえた。さらに、寧安市朝鮮族中学では、学習者たちが文法表現によっては、中国語を使って理解していることがうかがえ、教師が日本語を説明する言語と学習者が日本語を理解する言語に違いがあることがわかった。学生たちに対するアンケート調査、及びインタビュー調査の結果から、三言語を使った日本語学習方法の事例を以下に示す。まずは朝鮮語使用の事例を表 64 に示す。

表 64：日本語学習者の朝鮮語使用の事例

使用項目	理由、使用例
日本語の読み	「です」→「데스」 「日本語（にほんご)」→「니혼고」 「あいうえお」→　「아이우에오」 発音が似ているから
助詞	から：부터　に：에　を：를/을
外来語	日本語の外来語の大部分が朝鮮語でも外来語なので覚えやすい
語順	朝鮮語と一緒だから
自動詞・他動詞	朝鮮語は区別があるから
活用	します　→　합니다 しました　→　했습니다
敬語	朝鮮語にもあるから
漢字語	紹介　→　소개
副詞	かなり　→　상당히　まるで　→　마치 すっかり　→　완전
接続詞	ちなみに　→　어찌는 김에 さて　→　그런데, 그럼　あるいは　→　혹은
擬音語・擬態語	朝鮮語にもあるから

表 64 から、学習者が、助詞、敬語、自動詞・他動詞、擬音語・擬態語など中国語にはあまり見られないものについて幅広く朝鮮語を使用していることがわかる。また、注目したいのは日本語の読みについて、表音文字である朝鮮語の文字、ハングルで表している点である。その理由としては、日本語との発音が近いという点が挙げられていた。また、漢字についても、朝鮮語の中には漢字がもとになっている「漢字語」が数多くあり、表 64 にもある「紹介」は、「소」が「紹」を表し、「개」は「介」と対応している。また、この「紹介」は中国語にすると「介紹」となり、漢字の順番が逆になる。このように、中国語と日本語の漢字が完全には一致しないときに、朝鮮語の漢字語を使用していることがわかる。

次に、中国語使用の事例を表 65 に示す。中国語は、日本語と共通する漢字を最大限に活用していることがわかる。また、読解問題の際に、漢字を見れば、だいたいの意味がわかるという利点も挙げられている。注目すべきは、ひとつの文法表現であっても、その用法などをさらに細かく区別する際に中国語を使用している点である。文法項目は広く朝鮮語が使われている傾向が見られるが、通化市朝鮮族学校の元日本語教師であるＴＣ氏が例として挙げた「ようだ」の用法などが、中国語使用の事例に当てはまる。

表 65：日本語学習者の中国語使用の事例

使用項目	理由、使用例
漢字	漢字が似ているので覚えやすい 例）日本人、国际　→　国際、简单　→　簡単、场合　→　場合 朝鲜族　→　朝鮮族、　当然　→　当然、　直接　→　直接、 伞　→　傘、　怒　→　怒る 日本語の単語が出てこないとき、漢字を見ることで、だいたいの意味の見当をつける。 読解理解の問題では、わからない漢字がある場合、その意味に近いもので日本語を理解する。
難しい文法	難しい文法を覚えるとき、具体的に中国語で用法の区別をする。 細かく文法を区別するとき、理解しやすくなる。 紛らわしい文法や単語は中国語で理解する。
朝鮮語で翻訳しづらいとき	朝鮮語で翻訳しても分かりづらいものは中国語を使う。 例）間に合う　→　赶趟

表記の面では、漢字という共通の文字を最大限活用しながら、日本語の漢字と中国語の漢字に違いがある場合は、朝鮮語の漢字語を使用して理解している。さらに、読みについては朝鮮語の文字であるハングルを活用していることがわかる。また、文法については、共通点の多い朝鮮語を最大限活用しながら、朝鮮語では区別ができないもの、理解しづらいものについては中国語を使用し、さらに、ひとつの文法表現であっても、用法によって意味が異なる場合は、中国語も使用していることがわかる。このことから、学習者にも多様な「補完的理解」が見られ、朝鮮語と中国語、両言語で解釈することで、「相乗的理解」も深まっていると考えられる。アンケート調査では、日本語使用についての回答も多数見られた。日本語使用に関する学習者の回答を表 66 に示す。日本語は、主に日本語を聞き取る力を伸ばすためのものとして捉えている学習者が多数いた。また、日本語授業の雰囲気が出る、日本語を習慣づけることができるという回答から、日本語学習者と日本語教師の日本語使用に対する考え方が一致していることがわかる。

以上、朝鮮族学習者の三言語使用による学習方法についてまとめたが、教師だけではなく学習者自身も三言語使用により、日本語の理解を深め、日本語能力を伸ばそうとしていることがわかる。特に、朝鮮語と中国語の間には、様々な文法表現において、お互いに理解しづらい部分を補い合うという「補完的関係」が見られ、それが学習者の理解を促進していることがうかがえた。この三言語使用による学習方法は、学習者の朝鮮語、中国語、そして日本語能力により異なってくる。実際に、アンケート調査の中では「中国語ですべて理解している」「朝鮮語ですべて理解している」という回答もいくつか見られた。

表 66：日本語使用に関する学習者の回答

日本語を使えば、より聴解力が上がる。
教師の発音を聴いて、自分の発音の間違いを訂正することができる。
日本語を使えば、学生が日本語の日常会話を学習するのに便利である。
教師が日本語を使えば、新しい言語を学ぶことができる。
日本語を使うと日本語の単語を積み重ねることができ、日本語の授業の雰囲気も出る。
日本語を使うとよりはやく習得することができる。
日本語を習慣づけるため。
教師と私たちが日本語で会話すれば、私たちの日本語レベルは上がり、日本の文化もより理解することができる。

しかし、どの学校においても、三言語使用による教育方法を望んでいる学習者の割合が最も高かったことから、学習者たちは三言語使用による教育方法を受けながら、自らも三言語を使った学習方法を取り入れることで、一人一人が「相乗的理解」と「補完的理解」により日本語を学習していることがわかった。

最後に、学習者の「相乗的理解」と「補完的理解」を図式化したものが図 44 である。まず、授業の際の聞き取りであるが、教師が学習者に対し三言語で説明した際に、学習者は日本語で聞き取ることができなければ、朝鮮語で聞き取る。さらに、朝鮮語で聞き取ることができなければ中国語で聞き取ることで補完し理解している。ここに「補完的理解」が見られる。さらに、日本語で聞き取ることにより、日本語の聴解能力を伸ばすことができ、日本語で理解できない場合でも、朝鮮語と中国語でそれぞれ補完し理解することで、日、朝、中の「相乗的理解」も生まれることとなる。

次に、文法学習であるが、教師同様、学習者も日本語の文法表現に合わせて朝鮮語と中国語を使い分ける。朝鮮語で理解可能な場合は朝鮮語を活用し、中国語がより理解しやすい場合は、中国語を活用する。さらに、朝鮮語でも中国語でも理解が難しい場合は、日本語の例文や他の表現を使って理解しようとする。ここに、日、朝、中の「補完的理解」が見られる。また、ひとつの言語で解釈が可能な場合であっても、他の言語でも解釈することで、「相乗的理解」も可能となり、日本語の理解がより深まることとなる。

次に、単語学習であるが、漢字のあるものは主に中国語で理解し、外来語などは主に朝鮮語で理解する。これは教師の教育方法と共通しているが、さらに単語の読みについては、表音文字であるハングルを活用する。インタビューにも出てきたように、「日本語（にほんご）〔니혼고〕」や「です〔데스〕」などがその例であるが、これは表意文字である漢字と表音文字であるハングルを活用した朝鮮族独自の日本語学習方法であると言える。

このように、朝鮮族学習者も三言語使用による「補完的理解」と「相乗的理解」が可能となるために、それが日本語の学びやすさにつながっていると考えられる。

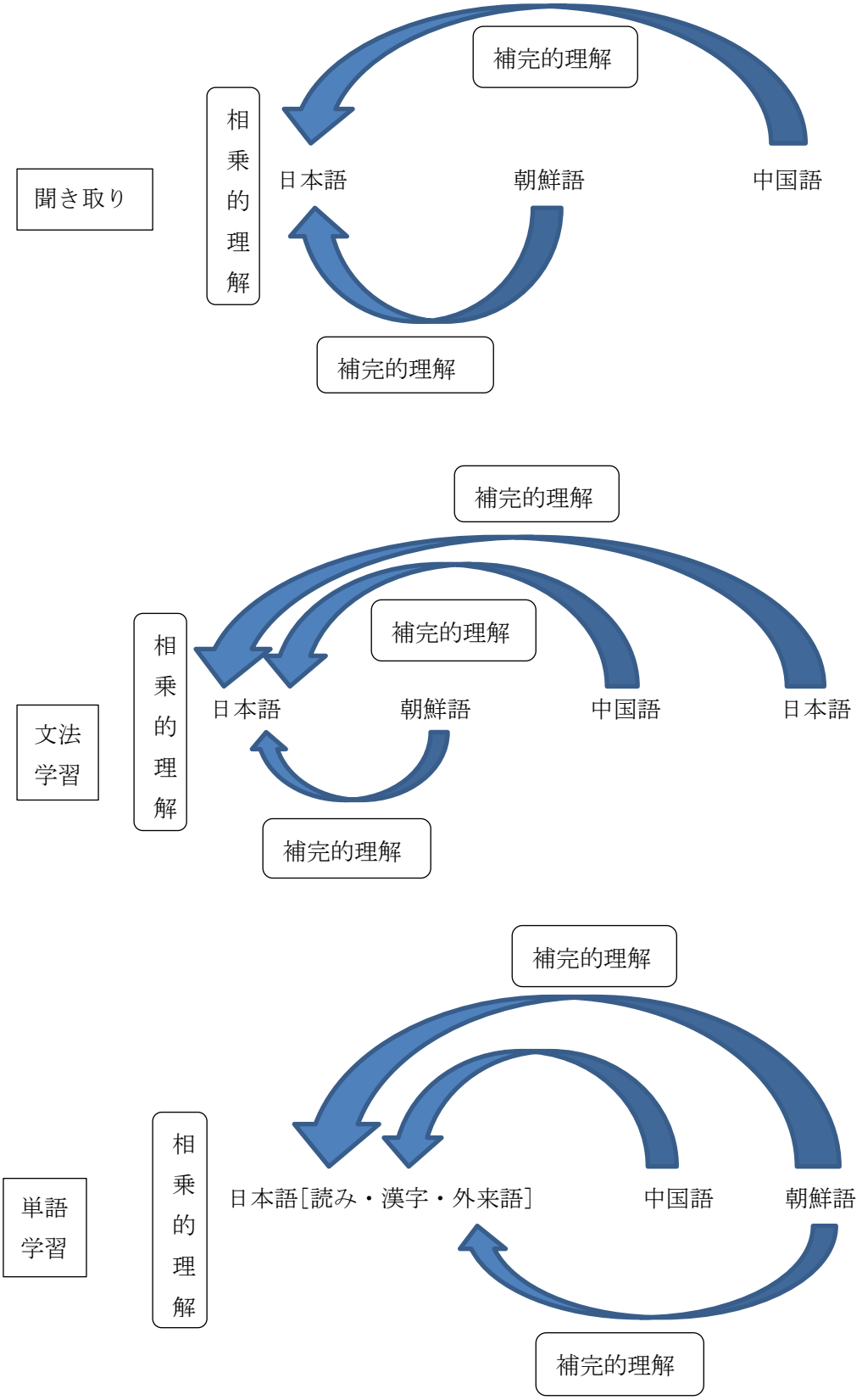


図 44：学習者の相乗的理解と補完的理解

６－４．「受験日本語」後の日本語の役割

第 5 章では、三言語使用による日本語教育の可能性について、日本語教育が「消滅」する学校、そして「再開」される学校、さらには「第二外国語」として新たに「開始」される学校が出てくると展望した。日本語教育が「再開」され、「開始」される理由としては「大学入試において、英語より良い点数が取りやすい」という「受験日本語」としての役割が挙げられていたが、朝鮮族学習者が朝鮮族学校において学習し、身に付けた日本語は「受験日本語」としての役割を終えた後は、どのように活用されて行くのだろうか。瀋陽市朝鮮族第一中学において日本語を学んでいる学生たちにインタビュー調査した際に、彼ら、彼女らは日本語の良い点について、以下のように話していた。

日本語の良いところは日本に行ける機会がある点である。将来は日本の医学を学びたいと考えている。（ＳＧ氏）

日本語の良いところは日本の大学に行けることである。また、日本人と交流できる点も良いと思う。（ＳＨ氏）

日本語の良いところは日本の企業で就職できる可能性がある点である。外国語ができることはすばらしいことだと思う。（ＳＩ氏）

日本語の良いところは、将来日本に留学したり就職できるチャンスがあることだ。
（ＳＪ氏）

朝鮮族である 4 名の学生は、「受験日本語」のその先を見つめていることがわかる。つまり、大学入学後も日本語を活かして、日本に留学し、日本で就職することを念頭に置いて日本語を学習している。

次に、鉄嶺市朝鮮族高級中学で行ったアンケート調査において、「日本語学習の良い点」について質問したところ、表 67 のような結果となった。「日本語学習の良い点」として最も割合が高かったのは「日本の漫画、アニメ、ドラマ、歌などを理解できる」であり、続いて「朝鮮語と文法が似ているので覚えやすい」という順となった。ここから、学習者にとっての日本語の魅力は「学びやすさ」ももちろんあるが、その一方で日本の漫画やアニメなど文化的な面に対する関心が非常に高く、それが日本語学習の良い点であると捉えている学習者が多数存在していることがわかる。さらに、「日本人の友人ができる」ことを望んでいる学習者も半数以上おり、「受験日本語」ではない日本語の魅力が如実に表れた結果となっている。

表 67：鉄嶺市朝鮮族高級中学、日本語学習の良い点（回答者数 55 名、回答数 197）

	回答数	割合
日本の漫画、アニメ、ドラマ、歌などを理解できる	42	76%
朝鮮語と文法が似ているので、覚えやすい	39	71%
日本人の友人ができる	28	51%
将来、日本に留学できる機会がある	25	45%
大学入学試験のとき有利	24	44%
将来、日本で働いたり、日系企業に就職したりする機会がある	23	42%
就職に有利	13	24%
特にない	3	5%

※ パーセンテージは回答者 55 名に対する割合

また、将来、日本に留学したり、日本で就職、または日系企業に就職したいと考えている学習者が、「大学入学試験のとき有利」と考えている学習者と同じくらいいることがわかる。この結果からも、「受験日本語」の後も日本語を活かしたいという朝鮮族学習者の考えがうかがえ、日本語に対する積極的な位置づけがなされていることがわかる。

本田（2012）では、「現在、日本は韓国についで海外に居住する朝鮮族が多い地域[204]」であるとし、「3 言語を使いわける生活、そしてその使いわけを常に意識させるような生活があるのは、朝鮮族にとって日本以外の地にはない[205]」としている。つまり、朝鮮族学校において三言語使用による日本語教育を受けた朝鮮族学習者は、日本語を活かして日本へ留学し、さらに、日本においても三言語使用による生活を送っていることがわかる。本田も指摘しているように、日本で留学生活を送る中で、日本人とは日本語で話し、中国人留学生とは中国語で話し、韓国人留学生とは朝鮮語（韓国語）で話すことができる。さらには、三言語ができることを活かして、多言語を操ることのできる貴重な人材として、日本で就職することも可能となるのである。ここから、朝鮮族学校の三言語使用による日本語教育は、「受験日本語」としての日本語能力を伸ばすだけではなく、日本での三言語を使い分ける生活にも役立っており、さらには就職にもつながっていることがうかがえる。実際に筆者がインタビュー調査を行ったＫＦ氏は、日本の大学に交換留学し、大学卒業後は日本で就職し、働いている。朝鮮族にとって日本語教育が受験だけのものではなく、将来のためのものであることがわかる。

[204] 本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房 p. 274
[205] 同上：p. 275

６－５．東アジアにおける三言語使用の有効性と限界

本論では中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育方法、及び日本語学習方法について明らかにし、考察した。そこからは、三言語使用による「相乗的理解」と「補完的理解」が教師、学習者ともに見られ、それが日本語の「学びやすさ」につながっていることがわかった。朝鮮族の三言語使用による日本語教育は、東アジアにおいて、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者に対して、また朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び日本語学習方法を提示できると考える。まず、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者に対して日本語を教える際は、表 65 で示したように、まず漢字を活用しながら日本語の単語を覚えさせることができる。この際に、気をつけなければならないのは、中国語の漢字と日本語の漢字で異なる意味のものを教えるときである。例えば、「手紙」という単語を覚えさせる際、「手紙」は中国語では「トイレットペーパー」の意味であるため、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者が意味を間違える可能性がある。その際は、日本語の「手紙」は朝鮮語で「편지」であり、中国語の「手紙」は「휴지」であると、強調しながら区別させる必要がある。さらに、中国語は簡体字である一方、日本語は繁体字の漢字が多く使われているため表記にも違いがある。漢字の表記については、朝鮮族教師の教育方法にも見られるように、表記の違いを強調しながら教える必要がある。文法の面においては、表 62 で示したように、朝鮮語では区別できない文法について、中国語の文法で補完することで理解させることが可能となり、また、朝鮮語と日本語の意味にズレがあるような文法表現でも中国語により補完できるようになる。さらに、難しい文法表現を学ぶときも、朝鮮語に加えて中国語で区別し、理解させることができるようになる。これは、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者が学習する際も同様である。

次に、朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対しては、文法の面でよりわかりやすく教えることが可能となる。表 64 にもあるように、中国語にはあまり見られない助詞、敬語、自動詞・他動詞、擬音語・擬態語などについては、朝鮮語を使用して教えることができる。さらに、読みについては、日本語の発音に近い発音を表すことができる表音文字のハングルを使うことで、日本語の音を表すことができ、さらに発音することができる。漢字についても、中国語の漢字と日本語の漢字で含まれる意味が異なっている場合に朝鮮語を活用することができる。例えば、日本語の「反対」の意味は①「ある意見などに対して反対する」②「逆の関係」という複数の意味が含まれているが、中国語の「反対」は①の意味のみであり、②の場合は「相反」で表す。この場合、日本語の「反対」に当たる朝鮮語の「반대」には①と②両方の意味があり、朝鮮語を使うことで、日本語の「反対」の意味を正確に伝えることが可能となる。気をつけなければならないのは、文法理解において、例えば、日本語で「具合が悪い」は朝鮮語で「몸이 아프다」であるが、これは直訳すると「体が痛い」となり、意味が異なる。日本語の文法を解釈する際は、朝鮮語に頼り

すぎず、朝鮮語の文法と日本語の文法の違いに十分留意しながら教える必要がある。それは、朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者が日本語を学ぶ際も同様のことが言える。

以上のように、三言語使用による日本語教育方法、及び学習方法は、東アジアの学習者にとって非常に有効であると言えるが、その一方で、朝鮮族教師からは、表 63 のように朝鮮語と中国語でも理解が難しい文法表現の事例が挙げられており、教師たちは日本語の例文を使うことで学習者に理解させようとしているが、やはり難しさを感じているという。ここに三言語使用による日本語教育方法、及び日本語学習方法の限界が見られる。さらに、朝鮮族学習者のアンケート調査の回答の中には、少数ではあったが、教師が三言語を使うことに対して、「いろいろな言葉を使うと、覚えにくい」「中国語以外の言葉は理解する能力に限界があり、聞き取れない」「ある単語や文は朝鮮語と日本語を使うと理解しにくい」という回答も見られた。特に「いろいろな言葉を使うと覚えにくい」という回答は、三言語使用によって逆に日本語の理解が妨げられているという事例であり、三言語使用による日本語教育の課題であると言える。

しかし、東アジアの三言語による日本語教育は「補完的理解」そして「相乗的理解」が教師、学習者双方で可能になる点で、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、また朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び日本語学習方法となり得ると考える。

おわりに

本論では、朝鮮族学校での現地調査をもとに、朝鮮族の日本語教育について、日本語、朝鮮語、中国語という三言語使用による日本語教育について考察した。当初は朝鮮族学校の地域を絞り、調査をすべきではないかとも考えたが、同じ地域の複数の朝鮮族学校を調査するのは困難であった。そこで、延辺以外の地域の朝鮮族学校を中心としながらも、その学校ひとつひとつの日本語教育を詳細に見ていき、地域というよりは、それぞれの学校を比較するというスタンスで進めてみようという結論に達した。しかし、そこに延辺地域の朝鮮族学校を比較対象として持ち出すことによって、学校ごとに異なる朝鮮族の日本語教育をより際立たせることを目指したのであるが、実際に調査をしてみると、延辺か延辺以外かという区切りで見ることはもちろん可能ではあるが、それより、その学校独自の日本語教育に迫った方がいろいろなものが見えてくることに気がついた。さらに言えば、それは学校よりも小さな単位である教師一人一人の日本語教育方法の違い、そして、学習者一人一人の日本語学習方法の違いというものを見つけることができたのである。朝鮮族学校では、教師の世代、出身地、日本語学習歴、日本語教授歴、そして言語能力によって教師独自の授業が行われており、日本語学習者である学生たちもまたそれぞれ異なる言語能力を持ち、それを自分たちなりに活かしながら独自に日本語を学習している。朝鮮族学校を訪れるたびに、学校ごとに、そして教師ごとに独自の日本語教育が存在していることに気づかされた。「現地に行って、自分の目で確かめて、自分の耳で聞いて、自分の肌で感じる」ということの大切さを実感した 6 年であった。

しかしながら、中国の他の民族学校との比較、さらには韓国や台湾など他の国での日本語教育との比較ができなかったのは偏に筆者の力不足である。また、三言語使用の事例もさらに収集し、まとめる必要がある。これらについては、今後の課題としたい。ただ、本論では朝鮮族の日本語教育の事例から、三言語使用による日本語教育の可能性を見出すことはできたと考える。今後は朝鮮語、中国語以外の複言語による日本語教育の可能性についても探っていきたい。他の言語による「相乗的理解」そして「補完的理解」とはどのようなものであるのか。多言語社会における複言語使用による日本語教育の可能性を今後も追究していきたい。

謝辞

筆者が研究を続ける上で一番嬉しかったのは、インタビュー調査をするたびに「私たち朝鮮族のことを研究してくれてありがとう」という朝鮮族の人たちの感謝の言葉であった。そして、調査に快く協力してくれた朝鮮族の方々の助けがなければ、この論文を書くことはできなかった。心より感謝申し上げたい。

今回、調査させていただいた梅河口市朝鮮族中学、鉄嶺市朝鮮族高級中学、吉林市朝鮮族中学校、瀋陽市朝鮮族第一中学、寧安市朝鮮族中学、通化市朝鮮族学校、和龍市第三中学校の先生方、学生のみなさん、授業でお忙しいにもかかわらず、ご協力いただきまして本当にありがとうございました。また、各学校を紹介してくださった方々にも感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

アンドリュー・ホール先生には 2011 年の東京での資料調査、また留学中長春での資料調査に同行させていただいた。また『建国教育』など「満洲国」期の貴重な資料を見せていただいた。ホール先生のおかげで、修士論文を書き上げることができた。心より感謝申し上げたい。指導教員である松原孝俊先生、阿部康久先生には中間発表、最終発表において貴重なご意見をいただき、またお会いするたびにいろいろなアドバイスをいただき本当にお世話になった。心より感謝申し上げたい。また、朝鮮族の研究について日ごろからアドバイスいただき、鉄嶺市朝鮮族高級中学を紹介していただいた金斑実先生、本当にありがとうございました。博士論文を執筆する際、最も参考にさせていただいた本田弘之先生には、日本語教育史学会において、はじめてお会いしたにもかかわらず親身になって相談に乗っていただき、またご助言いただいた。心より感謝申し上げたい。

最後に、朝鮮族の日本語教育の研究を始めるきっかけを与えてくださり、熱心にご指導していただいた主査の松永典子先生に心より感謝申し上げたい。先生には筆者が日本に滞在していない間も、変わらず熱心にご指導いただいた。筆者が海外において自由に研究調査でき、学会発表を行い、また博士論文を書き上げることができたのは、偏に先生のおかげである。また、朝鮮族の日本語教育の研究を 6 年間続けることができたのは、先生のご指導、助言、そして激励があったからである。

「松永先生、本当にありがとうございました。」

参考文献

○日本語文献

王智新編著（2000）『日本の植民地教育・中国からの視点』社会評論社
岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
『外地・大陸・南方日本語教授実践』復刻版　冬至書房　1943
韓景旭（2001）『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店
韓秀蘭（2012）「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」
『人文論叢（三重大学）』第 29 号 三重大学人文学部文化学科 pp. 175-183
金花芬（2015）「在日本朝鮮族の教育戦略：家庭内使用言語と学校選択を中心に」
『人間社会学研究集録』第 10 号　大阪府立大学大学院人間社会学研究科　pp. 49-70
金紅梅（2009）「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について」『政策科学』第 16 号
立命館大学 pp. 51-63
金紅梅（2010）「中国延辺朝鮮族自治州における言語教育政策の今日の展開　－中国の普通
話政策との関わりを中心に－」『政策科学』第 17 号　立命館大学 pp. 71-84
金斑実(2004)「清朝末期の学校カリキュラムに見られる間島朝鮮族の日本語教育」
『韓国言語文化研究』 第 5 号 pp. 1-32
金斑実(2005)「間島に設立された普通学校について」『韓国言語文化研究院』第 11 号 pp. 1-23
金斑実(2006)　「間島における日本側が設立した補助学校について」『比較社会文化研究』
第 19 号 pp. 37-51
金斑実(2014)『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』比較社会文化叢書
金美花（2005）「満洲国期間島における朝鮮人の社会と教育の展開－延吉県楊城村の事例を
中心に（1932-1936）－」『東アジア研究』第 41 号 pp. 65-80
金美花（2007）『中国東北農村社会と朝鮮人の教育－吉林省延吉県楊城村の事例を中心と
して（1930－49 年）－』御茶の水書房
金美善（2009）「朝鮮総連系民族学校のバイリンガル教育」『国立民族学博物館調査報告』
第 83 号　国立民俗学博物館　pp. 299-315
久保田優子（2005）『植民地朝鮮の日本語教育』九州大学出版会
小林路義（2011）「圧倒的高評価とちょっぴり抗日イデオロギー　－延辺大学日本語専攻者
の対日意識調査－」『鈴鹿国際大学紀要』No. 18　鈴鹿国際大学 pp. 29-52
権香淑（2011）『移動する朝鮮族　－エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社
権寧俊（2005）「朝鮮人の「民族教育」から朝鮮族の「少数民族教育」へ」『文教大学国際
学部紀要』第 15 巻 2 号　文教大学　pp. 175-203
駒込武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
崔学松（2005）「中国東北地域における近代化改革と「日本語ブーム」－朝鮮族にとっての
日本語教育－」『一橋論叢』第 134 巻　第 3 号　一橋大学 pp. 416-437

斉紅深編著　竹中憲一訳（2004）『「満洲」オーラルヒストリー＜奴隷化教育＞に抗して』
皓星社
坂田篤義（2015）「大出正篤の日本語教材と速成式教授法」『リテラシーズ』16
くろしお出版 pp. 12-24
坂部晶子（2008）『「満州」経験の社会学　植民地の記憶のかたち』世界思想社
佐々木衛・方鎮珠編（2001）『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店
徐敏民（1996）『戦前中国における日本語教育』エムテイ出版
白井恭弘（2008）『外国語学習の科学　－第二言語習得論とは何か』岩波新書
関正昭・平高史也編（1997）『日本語教育史』アルク
千惠蘭（2005）「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について　－「하오 hao 体」を中心に－」
『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 pp. 57-68
孫蓮花（2005）「中国朝鮮語における呼称の通時的考察－役職名を中心に－」
『社会言語科学』社会言語科学会 第 8 巻 第 1 号 社会言語科学会 pp. 31-42
孫蓮花（2013）『多民族国家における言語生活研究』宮帯出版社
高崎宗司（1996）『中国朝鮮族　歴史・生活・文化・民族教育』明石書店
竹中憲一（2000）『「満洲」における教育の基礎的研究』第 1 巻　柏書房
竹中憲一（2000）『「満洲」における教育の基礎的研究』第 5 巻　柏書房
竹中憲一（2000）「間島における民族主義組織による朝鮮人教育」『東アジア研究』
第 27 号 pp. 5-17
竹中憲一（2003）『大連　アカシアの学窓』明石書店
田中真紀子（2010）「小学校英語教育における「英語支配」と「英語母語話者信仰」」
『神田外語大学紀要』第 22 号　pp. 1-29
趙貴花（2008）「グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容」
『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 47 巻 東京大学　pp. 177-187
槻木瑞生（1998）「満洲国における学校体系の展開　－間島省の「新学制」－」
『同朋大学論叢』第 77 号　同朋大学 同朋学会 pp. 9-32
槻木瑞生（1999a）「中国近代教育の発生と私塾 －中国間島における近代的学校の発生－」
『東アジア研究』第 24 号 pp. 15-28
槻木瑞生（1999b）「中国間島における朝鮮族学校の展開　－1910 年代から 1920 年代初頭に
かけて－」『東アジア研究』 第 25 号 pp. 73-85
槻木瑞生(2005)　「中国東北地区朝鮮族の教育構造の変化 －満洲国期を中心に－」
『東アジア研究』 第 41 号　pp. 19-34
槻木瑞生(2006)　「満洲教育史研究のフロンティア　－いま満洲教育史研究が直面してい
る問題－」『東アジア研究』 第 44 号 pp. 3-17
槻木瑞生(2007)　「満洲国時代の宗教教団の活動と教育」『東アジア研究』第 48 号 pp. 3-18
辻野裕紀（2010）「〈越境〉した言語　－在外コリアンの朝鮮語と言語生活をめぐって－」
『朝鮮語教育 －理論と実践－』第 5 号　朝鮮語教育研究会 pp. 70-82

独立行政法人　国際交流基金編（2013）『海外の日本語教育の現状 2012 年度
日本語教育機関調査より』くろしお出版
戸田郁子（2011）『中国朝鮮族を生きる』岩波書店
中田敏夫（2012）「中国朝鮮族の母語・国家語に関する言語意識調査－瀋陽市在住朝鮮族を対象に　その１－」『愛知教育大学大学院国語研究』第 20 号　pp. 96-66
永嶋洋一（2012）「教育雑誌『建国教育』から見る「満洲国」期の「朝鮮族」教師」について」『東北アジア文化研究』第 33 集　東北アジア文化学会 pp. 353-366
永嶋洋一(2013)「「満洲国」期の「朝鮮族」学校における日本語教授法と日本語使用状況に関する一考察」『日語日文学』第 57 集　大韓日語日文学会 pp. 399-415
永嶋洋一（2014）「「満洲国」期「朝鮮族」学校の教育環境について－教育雑誌『建国教育』及び現地調査を中心に－」『東北アジア文化研究』第 38 集
東北アジア文化学会 pp. 319-333
二ノ宮崇司・丸島歩・桐越舞・渡辺和希・早川友里恵・福盛貴弘（2010）
「韓国人日本語学習者による「ザ行音」「ジャ行音」の聴取・発話能力の関連性」
『言語学論叢』オンライン版　第 3 号（通巻 29 号）筑波大学 pp. 57-73
日本語教育振興会『日本語』第１巻～５巻　1941, 1942, 1943, 1944, 1945
花井みわ（2011）「中国朝鮮族の人口移動と教育－1990 年以後の延辺朝鮮族自治州を中心として－」『早稲田社会科学総合研究』第 11 巻 第 3 号 早稲田大学社会科学学会 pp. 61-82
本田弘之（2005）「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語科学』
第 8 巻 第 1 号　社会言語科学会　pp. 18-30
本田弘之（2006）「中国朝鮮族中学における日本語教育の選択メカニズム　－「満州国」後の日本語教育の連続性と非連続性－」『杏林大学外国語学部紀要』
第 18 号　pp. 107-117
本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』
ひつじ書房
本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子（2014）『日本語教育学の歩き方』
大阪大学出版会
松永典子・麻生迪子・季江静・永嶋洋一・新井克之（2012）
「外国人「生活者」のための日本語教育と多文化理解教育の現状と課題
－伊都地区から考える多文化化する地域における社会連携モデルの模索－」
『比較社会文化』第 18 号　九州大学大学院比較社会文化学府　pp. 9-23
松原孝俊　監修　金珽実　翻訳(2002)「1945 年以前の吉林省朝鮮学校」『韓国言語文化研究』
第 2 号 pp. 47-64
松宮弥平（1939）『日本語教授法』復刻版　冬至書房
満州国語研究会『満州国語』　1940

満州帝国教育会『建国教育』　1940 1941 1942 1943 1944
『「満洲・満洲国」教育資料集成第十巻　教育内容Ⅱ』エムテイ出版　1993
宮下尚子（2005）「中国朝鮮語の規範問題」『社会言語科学』第 8 巻 第 1 号
社会言語科学会 pp. 139－150
宮下尚子（2007）『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会
柳坪幸佳・鈴木今日子・松浦とも子（2015）
「『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化 －中国中等教育段階のための教材作成－」
『国際交流基金日本語教育紀要』第 11 号　独立行政法人国際交流基金 pp. 21-35
山口喜一郎（1933）『外国語としての我が国語教授法』復刻版　冬至書房
山口喜一郎（1941）『日本語教授法概説』復刻版　冬至書房
山下達也（2011）『植民地朝鮮の学校教員　初等教員集団と植民地支配』九州大学出版会
山本忠士（2011）「延辺朝鮮族自治州の日本語教育」『アジア研究所・アジア研究シリーズ』
No. 77 亜細亜大学アジア研究所 pp. 87-113
尹貞姫（2005a）「中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克－中国朝鮮族学校
における教育課程に着目して－」『国際開発研究フォーラム』第 30 号
名古屋大学　pp. 183-200
尹貞姫（2005b）「現代中国朝鮮族における言語問題と学校選択　－延辺地域の言語使用に
関する調査・分析を手がかりとして－」『ことばの科学』第 18 号
名古屋大学言語文化研究会 pp. 119-142
林梅（2008）「国家と民族のはざまの歴史－中国東北地域の朝鮮族農民」
『関西学院大学社会学部紀要』No. 106 関西学院大学社会学部研究会
pp. 85-99

○中国語文献

黄有福 主編『中国朝鮮族史研究 2008』民族出版社
姜淳和（1994）「対延辺朝鮮族言語使用状況的調査」『延辺大学学報（哲学社会科学版）1』
延辺大学 pp. 101-102
金炳鎬（2011）『中国民族政策与朝鮮族』中央民族大学出版社
金海英（2015）「対朝鮮族学校民族文化教育的理性思考」『民族高等教育研究』第 3 巻
第 2 期　内蒙古民族大学 pp. 29-36
李得春・金祥元（2007）『速成朝鮮語自学読本（中級）』延辺人民出版社
李得春・金祥元（2007）『速成朝鮮語自学読本（高級）』延辺人民出版社
朴婷姫（2010）『中国朝鮮族与在日朝鮮人社会比較研究』延辺大学出版社
孫春日（2009）『中国朝鮮族移民史』中華書局
『延辺朝鮮族自治州志（上下巻）』中華書局　1996

太平武（2005）「中国朝鮮族民族教育現状」『民族教育研究 2005 年 第 5 期』中央民族大学 pp. 17-21
延辺州統計局『2014 延辺統計年鑑』中国国際図書出版社　2014
延吉市統計局『延吉統計年鑑 2014』中国国際図書出版社　2014
中国朝鮮民族史学会編『朝鮮族研究 2013』民族出版社　2014
『走近中国少数民族丛书・朝鮮族』遼寧民族出版社　2012

○朝鮮語（韓国語）文献

권태환 편저(2005)『중국조선족사회의변화　1990 년이후를 중심으로』서울대학교출판부
『중국조선족교육사』동북조선족교육출판사 1991
김강일・박동훈（2013）「중국조선족사회의 변연문화특성과 민족공동체 재건」『동아시아한국학연구총서 18 연변조선족의 역사와 현실』인하대학교 한국학연구소 편 pp. 249-284
金鐘国他（1996）『中国 朝鮮族史 研究Ⅰ』연변대학출판사 서울대학교출판부
김해영（2014）「중국 조선족학교 민족문화 교육과정 개발의 문제점과 개선 방향」『인문논총』 제 71 권 제 4 호　pp. 269-300
朴文一他（1996）『中国 朝鮮族史 研究Ⅱ』연변대학출판사 서울대학교출판부
최춘희・선우상열（2014）「한국 서울말이 우리 조선족방송의 언어표현에 주는 계시」『중국조선어문』동북 3 성조선어문협의지도소조 기관지 2014 년 제 3 호(루계 191 호) pp. 63-64

資料

資料１：「満洲国」期の「朝鮮族」に対する日本語教育についての質問事項

１．お名前はなんですか？
２．生年月日を教えてください。
３．出身地はどこですか？
４．偽満洲国時代に通っていた学校の名前はなんですか？
５．入学したのは何年ですか？また、いつまで学校に通っていましたか？
６．通っていた学校の歴史は古いですか？いつできた学校ですか？
７．学校の建物は木造ですか？それともレンガ造り（砖造建筑物）ですか？
８．学校の建物は１階建てですか？
９．学校は朝鮮族の学校ですか？それとも日本人の学校ですか？
１０．学校の教師は朝鮮族の教師ですか？日本人の教師はいましたか？
　　例：普通の教師は朝鮮族だったが、校長は日本人だった。
１１．学校の教師の名前を覚えていますか？
１２．学校の子どもたちの数はどのくらいでしたか？
１３．一学年にいくつクラスがありましたか？また、クラスの名前は何でしたか？
　　例：一学年４つのクラスがあって、クラスの名前は「松組」「竹組」などがあった。
１４．子どもたちは一クラス、何人でしたか？
１５．クラスに女子学生はいましたか？もしいれば、何人くらいでしたか？
１６．子どもたちの親の職業は農業でしたか？
１７．学校は朝何時からはじまり、何時に終わりましたか？
１８．朝礼は毎日ありましたか？朝礼はどんなものでしたか？
　　例：「皇国臣民の誓い」を言わされた。
１９．日本語の授業について質問します。日本語の授業は週に何回ありましたか？
２０．授業は１コマ（一节）何分でしたか？
２１．教師は日本語で日本語を教えていましたか？
２２．日本語を教えるときに、教師は絵などを見せながら教えていましたか？
２３．教科書はなんという名前でしたか？どのような内容でしたか？
２４．授業は教師がまず日本語の文章を読んで、その後に続いて学生が読むというやり方でしたか？
２５．宿題は出ましたか？どんな宿題でしたか？
　　例：教科書の文章を暗記する、作文を書いてくる、など
２６．日本語は学校以外で使いましたか？
　　例：友人と遊ぶときは日本語だった。

２７．日本語を学校で使うと、どのような罰則がありましたか？
例：罰金、トイレ掃除など
２８．教師について覚えていることがあれば、なんでもいいので教えてください。
例：日本の学校を卒業した教師だった、答えを間違えたら棒でたたかれた、など
２９．日本語以外の授業について質問します。
日本語以外の授業はどのようなものがありましたか？
例：「国史」、「修身」、「算術」、「地理」、「音楽」、「体操」、「書き方」など
３０．印象に残っている授業はなんですか？それはなぜですか？
３１．「当番（とうばん）」（委員のようなもの）などはありましたか？
例：「学習当番」、「看護当番」など
３２．学校の休み時間は何をしていましたか？
例：友人と運動場でサッカーをした。
３３．学校で給食はありましたか？
３４．放課後は何をしていましたか？
例：友人と遊んだ、家の手伝いをした、など
３５．家は学校から近かったですか？
例：歩いて３０分くらいのところにあった。
３６．学校で軍事訓練は行われていましたか？どんな内容でしたか？
３７．学校で印象に残っている行事はありますか？それはどのような行事でしたか？
例：運動会、修学旅行、神社参拝など
３８．当時覚えた日本の歌はありますか？
例：「花の北京」、「満洲むすめ」、「馬車が行く行く」など
３９．父親と母親の職業は何でしたか？
例：農業
４０．父親と母親とは朝鮮語で話していましたか？
４１．兄弟はいましたか？何人兄弟でしたか？
４２．兄弟とは朝鮮語で話していましたか？
４３．日本人と接する機会はありましたか？
４４．当時の日本人に対する印象を教えてください。
例：日本人の軍人、警察官はこわかった。
４５．中国人（漢族）と接する機会はありましたか？
４６．当時の中国人（漢族）に対する印象を教えてください。
例：「苦力」（下層労働者）が多かった。
４７．解放後に日本語を使う機会はありましたか？
４８．当時の日本の教育について、どのように考えていますか？
例：当時の日本の教育は奴化教育であり、日本人を恨んだ。

資料２:「満洲国」期の日本語教育に関するインタビュー調査・対象者の語り

①ＭＡ氏の語り

私は「朝鮮族」の学校である「朝陽川国民優級学校」に通っていた。朝鮮語をしゃべったら、罰金をとられるか、もしくはトイレ掃除を１週間させられた。学校で教えられた日本語は学校外でも使うことがあった。それは、放課後、友人と一緒に遊んでいるときであった。私の母語は朝鮮語であり、日本語よりも朝鮮語レベルの方が上であったが、学校では日本語だけで話していたために、学校外で友人といるときも日本語を使っていた。しかし、その日本語を使って日本人と話す機会はなかった。日本人は朝陽川駅の近くに暮らしており、そのため日本人と接する機会があまりなかった。知っている日本人と言えば教師だけで、道を歩いているときに日本人の軍人を見るぐらいだった。両親と話すときは朝鮮語を使った。なぜなら両親は日本語も中国語もわからなかったからだ。母親は文字も読めなかった。

②ＭＢ氏の語り

私が通っていた「石建坪公立国民優級学校」では、ほとんどの授業は担任の教師が担当し、授業科目は「国語」「国史」「修身」「算術」「地理」「音楽」「体操」「書き方」などであった。このうち「修身」の授業は「朝鮮人」の教頭が教えていた。授業時間は 60 分で、授業はすべて日本語で行われ、もし児童が朝鮮語を話せば、罰金をとられた。罰金の金額は 1 回につき１銭であった。「国語」の授業、つまり「日本語」の授業は 1 週間に 6 回、学校の授業がある月曜日から土曜日まで毎日行われた。「算術」の授業も「国語」の授業同様、毎日行われていた。１年生のときにはひらがな、カタカナ、漢字を学習し、1 から 100 までの数字を習った。「国語」の授業は暗唱形式で日本語を覚えさせられ、教師が教科書を読んだ後に、児童がそれを読むという形式であった。または、教師が黒板に文字を書き、それを児童が声に出して読んでいた。日本語の文法事項は「名詞」「動詞」「代名詞」「形容詞」「形容動詞」「副詞」など、品詞別に分けて習っていた。宿題もあり、教師が読んだ教科書の文を次の日までに覚えてくるというものだった。私が暮らしていた地域の警察署や協和会には数多くの日本人がいた。警察官は日本人が多かったが、「朝鮮人」もいた。警察署の署長は日本人で、実際に署長に会ったこともあった。私は日本人と会うと日本語でペラペラ話せた。

③ＭＣ氏の語り

私が通った延吉県月晴村公立杰満洞国民優級学校では、教科書をすべて覚えさせられた。教師に敬礼をしなければ殴られ、朝鮮語を話しても殴られた。学校では、朝鮮語を話すごとに１枚ずつカードが配られ、そのカードが 10 枚になると掃除をさせられた。

④MD氏の語り

私が通った敦化県馬号小学校では、教師はまず、授業の前半は 1 年生に授業をし、その後、自習をさせた。1 年生が授業を受けている間、4 年生は自習をし、後半は教師が 4 年生に授業をするという形式であった。それは教師が一人しかいなかったため、そのような形式になったのだと思う。学校では、朝鮮語を話すと「ケペ」(朝鮮語で「名札」という意味)というものを付けさせられ、罰金を科せられた。罰金を払えない人は便所掃除をさせられた。そのために家に遅く帰ったこともあった。日本語は学校内だけではなく、友人と遊ぶときにも使っていた。また公共の場所においても日本語を使っていた。家では朝鮮語で話した。

⑤ME氏の語り

私は幼かったため、学校に通っていなかったが、龍井には 1909 年以来、日本総領事館があったため、そこで働く日本人たちと接する機会があり、自然に日本語ができるようになった。

⑥MG氏の語り

父親は学校には通っていなかったが、朝鮮人の子どもたちと遊びながら日本語を学習したと話していた。

⑦MH氏の語り

私が通った桓仁県国民優級学校では、教師は日本語で教えていたが、低学年に対してはすべて日本語で教えるのは無理であったために、学年が上がるにつれて、少しずつ日本語で教えるようにしていた。教師は授業中に絵などを見せながら日本語を教えていた。また、きちんとした教科書もあり、内容はほとんど生活用の言葉や文章であった。授業の進め方は、教師がまず教科書の文章を読み、その後、児童に読ませるというやり方もあったが、教師が児童を当てて読ませたりもしていた。宿題は毎日あり、文章を暗唱したり、単語を覚えたりした。学校では、日本語を使うと罰則としてトイレ掃除をさせられた。これは、「トイレ掃除は恥である」とみなされていたためであった。どの児童も貧しかったために罰金はなかった。学校では、授業以外の時でも必ず日本語を話すよう命令されていた。家では朝鮮語で話した。

資料 3:改革開放期以降に朝鮮族学校において日本語教育を受けた朝鮮族の語り

①ＪＡ氏の語り

私が日本語に興味を持ったきっかけは、祖母の影響だった。祖母は「満洲国」期に日本語教育を受けており、いつも寝る前に日本語で「いち、に、さん、し」と言っていた。また、普段「べんとう」などの日本語も使っていた。

高級中学に入ると、2 年弱、日本語を学習した。当時は外国語科目としては日本語しかなかった。高中の日本語教師は、おじいさん教師で、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。その人の日本語のアクセントは下手で、文法の説明などはなく、教材もあまりなかった。授業では日本語で書かれた薄い 1 冊の本で学習していた。授業のときは毎日、教師がその本をガリ版刷りで刷ってきて配っていた。紙は黄色で、紙の質はあまりよくなかった。教師は年をとっていたこともあり、ミスプリントもよくあった。当時はガリ版刷りであったが、教師が私に日本語のチェックを頼んだこともあった。特に濁音や促音などのミスが多かった。宿題は単語のプリントが多かった。高中 3 年生のときは、大学入試があったので、毎日日本語の授業があり、日本語を読んだり書いたりした。しかし、日本語の教材も少なく、日本語教師も試験を受けた経験がなかったので大変だった。

②ＬＣ氏の語り

私は初中、高中の 5 年間、日本語を学習した。初中のときの日本語教師は、50 代の男性教師であり、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。その教師は日本語で会話するのは上手だったが、文法の説明はできなかった。彼は朝鮮語で日本語を教えていたが、授業のやり方としては、教科書をただひたすら読むだけであり、教師が本文を読んだ後に、学生たちに読ませるという形式のものであった。教科書は朝鮮語で書かれたものであり、内容は現在のものより簡単であった。クラスで日本語を上手に読めるのは私を含めて 2 人しかおらず、そのため授業中はいつも私が読まされ、それが嫌だった。

もう一人の教師は、若い男性教師だった。字をきれいに書く人だった。その教師は独学で日本語を学習した人だった。彼はラジオ放送で日本語を学習したようで、そのラジオのテキストは中国語で書かれたものであった。

③ＪＢ氏の語り

私の初中、高中時代の日本語教師は、当時 50 歳くらいのおじさん教師で、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。朝鮮族の小説家としても有名な人で、背が高くてかっこよかった。彼はオルガンを弾きながら、日本の歌「春が来た」や「さくら」などを歌っていた。日本語の発音とアクセントはあまり上手ではなかった。他にも日本語教師は、おじさん教師を含めて 3 人いた。他の二人は若い教師で 30～40 歳くらいの人だった。そのうちの一人はロシア語専攻の教師だったが、日本語を教えていた。

④ＫＡ氏の語り

私は初中のときから日本語を学習した。両親はともに「満洲国」時代に日本語教育を受けており、両親と日本語で会話することもあった。

日本語のクラスは 1 クラス 40～50 名ほどいたが、日本語は当時から大学入試の必修科目であり、日本語を学習している学生がほとんどだった。日本語の教師は高中では 3 人いて、3 人とも男性教師であった。当時は学校の中で日本語ができる教師が日本語を教えていた。私に日本語を教えていた教師は、「満洲国」時代に日本語教育を受けた人で、専門は物理だった。彼はやさしい教師で、学生が宿題をやってきていない場合も、特に怒ったりはせず、「今、勉強しないと、後で必ず後悔する」と学生たちに言っていた。授業では、中国語で書かれている日本語の教科書を使い、すべて暗記形式であった。教科書の内容は今の教科書に比べ、難しかった。宿題は教科書に出てくる単語を覚えさせるというものであったが、次の授業の際、教師が学生たちに直接、その単語の意味を答えさせる形式であった。また、教師は授業中、中国語は使わず、日本語と朝鮮語を半々の割合で使っていた。教師が日本語で教えたとき、理解できる学生もいれば、理解できない学生もいた。教師が授業で、大きな紙に動詞と、その動詞の活用を書き、活用する部分を隠し、学生たちに答えさせていた。これは教師独自のものであったが、おかげでスラスラ活用できるようになった。

英語の授業もあったが、一度なくなったことがあった。そのときは、英語の教師が日本語を独学で習得し、日本語を教えていた。

また、当時は教師の推薦で教師になれるという時代だった。私自身も学校の校長から、「日本語の教師が足りないから、教師になってくれないか」という依頼の手紙をもらい、日本語を教えることになった。その後、校長と面接をし、三ヶ月の研修の後、正式に日本語を教えることになった。

⑤ＫＥ氏の語り

私は 80 年代の半ばまで初中、高中で日本語を学習した。初中のときの日本語教師は当時 28 歳の男性教師で、優しくておもしろい人だった。教科書は朝鮮語で書かれたものを使用していた。授業では、日本の文化、例えば「桜」の絵などを使いながら日本語を教えていた。桜の絵は残念ながら白黒のものであり、学生たちは実際に桜を見たことがなかったが、非常に印象に残っている。授業は文法中心であり、教科書の内容を覚えさせるという暗記形式であった。初中のとき、日本語以外に英語の授業もあったが、日本語の学習をしている学生が多かった。

⑥ＫＢ氏の語り

私は初中、高中の 6 年間、日本語を学習した。日本の文化や歴史に興味が湧き、日本語を学習し始めた。初級中学の日本語教師は、50 代の人で、おそらく「満洲国」時代に日本

語を学習した人ではなかったかと思う。彼は朝鮮語のみを使って日本語を教えていた。また、日本語の発音やアクセントは気にせず、自分勝手に発音していた。

日本語教師の宿題は、教科書の本文を暗記させたり、単語を三回ずつ書かせたりするものだった。また、とても厳しい人で、宿題をやってこなければ学生を叩いていた。

高級中学に入ると、日本語の授業は自習のような形になり、学生がわからないところがあれば、教師に教えてもらうようなスタイルであった。

⑦ＬＢ氏の語り

私は 1985～1991 年まで初中、高中で日本語を学習した。初中では 1 学年 4 クラスあり、全校生徒は 700 名ほどであった。外国語科目は日本語だけであり、日本語教師は二人いた。

一人は女性教師で、大学を卒業したばかりのとても優秀な人だった。授業はすべて朝鮮語で行われた。彼女は日本語の活用を教えるために、黒板に動詞の活用表を書いて、学生たちに無理矢理覚えさせていたが、おかげで日本語の動詞の活用を覚えることができた。しかし、彼女は結局学校を辞めてしまい、出家してしまった。

もう一人の教師は当時 50 代の男性教師で、「満洲国」で日本語教育を受けた人だった。日本語能力自体は高かったが、日本語の発音はおかしかった。授業では日本語を念仏のように言わされた。

高中の日本語教師は、大学を卒業したばかりの若い人だった。大学での専攻も日本語であった。

もう一人の教師は、半年間くらい教えてもらったが、授業は中国語と日本語で行い、たまに朝鮮語も混ぜていた。単語を覚えさせるときは、黒板に単語をたくさん書いて、その単語の意味を詳しく説明した。彼はその後、上海で他の仕事をすることになった。

もう一人の教師は、かなり朝鮮語を使う教師だった。日本語教師の言語能力によって、日本語の教え方も違ってくると思う。

⑧ＱＡ氏の語り

私は黒龍江省七台河市にある朝鮮族学校で 6 年間日本語を学習した。学生数は、初中、高中合わせて 1000 人ほどおり、1 学年 3 クラスずつあり、1 クラスの人数は 50～60 人であった。外国語科目は日本語科目しかなく、選択の余地はなかった。日本語教師は 6,7 人おり、すべて朝鮮族の女性教師だった。教師たちは日本への留学経験はないが、中国の大学で日本語を専攻しており、日本語は上手だった。日本語の授業は毎日 1 コマ（45 分）行われ、教科書は黒龍江省の民族出版社が出していたものを使っていた。授業は、教科書を使った暗唱型の授業で、文法中心の授業だった。教科書の文章を次の授業のときまでに覚えて来なければならず、それを授業中、学生に一人ずつ立たせて言わせる形式であった。学生は文章を覚えることができれば、早く終わることができた。また、1 ヶ月に 1 度は単語の小テストがあった。朝鮮語の単語が書かれてあり、それを日本語で書く形式であった。教

師は朝鮮語のみを使って日本語の授業を行い、中国語が使われることはなかった。中国語科目も朝鮮語で授業が行われていた。当時の学生たちにとって、中国語も日本語と同様、外国語という感覚であった。

高中に進学すると、日本語の授業は、はじめは教師が日本語で説明するが、学生たちが理解できないため、結局朝鮮語で説明していた。また、「会話」の授業では、教科書の会話文を暗記したものを、その場で立って学生たちに言わせる形式であり、ロールプレイ形式ではなかった。しかし、教科書は場面別に会話文が掲載されており、「茶道」「生花」「富士山」「日本茶」など、日本文化に関するものもあった。さらに、日本人については、教科書の中で、よく働く「働きバチ」だという内容のものや、日本の男性は亭主関白であり、日本の女性は女らしいといった内容のものもあった。それが私自身の日本人のイメージにつながった。

「朝鮮族は日本語、漢族は英語」というプライドみたいなものがあった。また、「朝鮮語の柔らかい発音は日本語を学習するのに有利」「日本語を学習すれば、大学受験のときに良い点数が取れる」といった考え方があった。

⑨ＫＣ氏の語り

私は 90 年代に初中、高中と 6 年間日本語を学んだ。初級中学のときは、他の科目を教えていた教師が日本語を教えており、日本語レベルも高くなかった。日本語教師たちは朝鮮語だけで日本語を教えていた。

授業内容については、作文の授業はなく、教材自体に聞き取り練習も会話練習もなかった。高級中学のときは、校長が日本語を教えていた。日本語の授業は書いて覚える形式だった。

⑩ＹＡ氏の語り

私は延辺朝鮮族自治州出身であり、延吉市内の初中、高中を卒業した。1993 年に初級中学に入学し、そのときから日本語の学習を始めた。日本語は初中で学び始めてから好きになった。当時は日本語クラス以外に英語クラスもあったが、強制的に日本語クラスに入れられた。初中では、日本語クラスが 9 クラスあったが、英語クラスは 1 クラスしかなかった。田舎の中学になると、英語の教師がいないので、日本語を教えていた。初中には日本語の教師が 4, 5 人おり、教えてもらった教師は当時 35, 6 歳の教師だった。教師たちの日本語の発音はめちゃくちゃだった。初中 1 年生のときは、朝鮮語で教えられたが、2 年生からは徐々に日本語を交えながら教えるようになり、3 年生のころには、教師は日本語のみで教えていた。日本語の授業は、教科書に沿って教える形式で、宿題は単語を覚えさせたりする暗記型であった。しかし、ためになったと感じたのは、教師が日常生活に関する絵を見せ、それをもとに学生たちに話を作らせるという方法だった。私は学校での日本語授業の

他に、自主的に教科書の本文を覚えたりしていた。これは、自分で声に出して読めば、耳も刺激され、聴解力もアップするはずだと考え、行っていたものだった。

1996～1999 年にかけて高中で日本語を学習した。高中のクラスは 8 クラスあり、日本語クラスは 5 クラスあった。そのうち、文系クラスは 1 クラス、理系クラスは 4 クラスであった。クラス分けは、学校側が初級中学での外国語選択を考えてクラスを決めていた。つまり、初中のときに日本語を学習していれば日本語クラス、英語を学習していれば英語クラスに入れられた。学生は 1 クラス 68 人もいた。

高中の日本語教師は 10 人以上いた。また日本人の教師も 1 人いた。その日本人教師は 31 歳の男性教師であり、週に 1 度会話の授業を担当していた。私は高中に入ってはじめて日本人の日本語を聞いた。日本人教師の授業形式は、ある場面を設定して会話の練習をさせた。例えば、日本語の会話文の 1 文をカッコにして、それを使って会話させた。（下記参照）

A ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
B ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
A （　　）
B ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

一方、朝鮮族教師たちは日本に留学経験があり、発音もアクセントも良かった。授業は教科書によって進められたが、朝鮮族の教師たちも日本語で授業していた。さらに、学生たちは教師が話す日本語をほとんど理解していた。学生たちは理解できないとき、教師ではなく同級生に聞いていた。

⑪ＴＣ氏の語り

私は、1994 年に朝鮮族中学に入学、2000 年に卒業した。初中には日本語の教師が 7 人おり、そのうち 6 人が朝鮮族、1 人が漢族であった。初中時代に日本語を教えてもらったのは 30 代の女性教師で、朝鮮族学校で日本語の学習をした教師だった。授業では、朝鮮語と日本語を使って日本語を教えていた。日本語会話能力は普通のレベルであり、発音は「ふ」や「す」の発音以外はまあまあであった。日本語教師が書く日本語の字はとてもきれいだった。日本語の教え方は

１．単語を覚えさせ、単語の書き取りをさせる
２．文法は主に朝鮮語で説明し、例文なども朝鮮語で翻訳する
３．教科書の本文を朝鮮語で翻訳し、本文を覚えさせるが、朗読は少ない
４．会話練習は少なく、聞き取り練習はより少ない

というものだった。

高中のときの日本語教師は、30 代の女性の教師で、使用していた言語は主に日本語であった。その教師は初中、高中で日本語を学習し、さらに大学の専攻も日本語であった。日本語会話能力はかなり高く、発音も正確であり、アクセントも比較的正確で、字もきれいに書いていた。また、授業は

１．単語を覚えさせ、書き取りをさせる
２．主に日本語を使って文法の説明を行い、必要なときはときどき朝鮮語を使って説明する
３．よく教科書の本文を朗読させ、日本語、あるいは朝鮮語を使って本文の質問について解説する
４．よく会話練習をさせるが、聞き取りの練習は少なく、授業で使う言葉は基本的に日本語である

という特徴があった。

⑫ＱＢ氏の語り

私はハルピン出身であり、初中、高中ともにハルピン郊外にある朝鮮族学校に通った。学校は、初中、高中合わせて全校生徒 1000 人弱であり、1 学年に 130 人ほどいた。クラスは 1 学年 3 クラスあった。私は 1999 年に朝鮮族中学に入学し、2005 年に卒業した。私は当時、学校の寮で生活しており、1 階と 2 階は男子寮、3 階と 4 階は女子寮であった。外国語は初中 2 年生のときから学ぶことになっており、第一外国語として日本語、第二外国語として英語を学習した。第一外国語として日本語を選んだ理由は、叔父が朝鮮族学校の日本語教師であったからだ。さらに、叔父の娘、つまり私のいとこのお姉さんは日本語が上手で、そのお姉さんに対する憧れもあった。ちなみに、私の祖母は「かばん」などの日本語を使っており、「満洲国」期に日本語教育を受けたのではないかと思う。

日本語教師は、朝鮮族の教師で、3,4 人ほどいた。初中のときは男性教師、高中のときは女性教師に教えてもらった。高中の日本語教師は 42,3 歳くらいで、10 年ほど日本に滞在した経験のある教師だった。彼女は夫の仕事の関係で、日本にいた。日本に滞在経験があったため、日本語の発音はとてもきれいで、アクセントもよかった。その教師のおかげで私は日本語が好きになった。授業は教科書に沿って行われ、文法中心であった。教え方はとても上手で、中国語と朝鮮語を半々、混ぜながら教えていた。しかし、日本語は使っていなかった。教科書は朝鮮語で書かれたものであったが、その教科書を見ながら中国語で説明することもあった。日本語教師たちが中国語と朝鮮語を混ぜて授業を行っていた理由として、日本語教師たちが普段から中国語、朝鮮語両言語を混ぜて話していたからだと思う。また、それは教師だけではなく、学生たちも普段中国語と朝鮮語を混ぜて会話をしていた。その割合は、朝鮮語 60%、中国語 40%くらいだった。日本語以外の科目も、例えば「地理」

の授業の場合は、日本語の授業同様、中国語と朝鮮語を混ぜて教えていたが、「数学」の場合はほぼすべて中国語で教えていた。

学校では中国語と朝鮮語、外では中国語、家では朝鮮語、たまに中国語というように場面によって両言語を使い分けていた。外で中国語をしゃべるのは、私が住んでいた地域が漢民族が多く暮らしていたところであったためだ。家庭内でたまに中国語を話すのは、主に妹と話すときで、妹は私としゃべるとき、すべて中国語で話し、私は中国語と朝鮮語を混ぜてしゃべる。

私は日本語を学習するとき、99%は朝鮮語で理解している。特に文法の面から言えば、中国語より朝鮮語が役に立つ。一方、中国語は、日本語の漢字や単語を覚える際に活用している。「～させる」という使役表現も、中国語の使役形「让」ではなく、朝鮮語の使役形「～를/을 시키다」で理解している。

今考えても、初中のころから日本語を学習していてよかったと思う。それは、中国語、朝鮮語両方の言語を活かせるという点で、朝鮮族にとって日本語は英語より学習しやすいものであるからだ。

⑬ＪＣ氏の語り

私は、2000 年から 2006 年まで、朝鮮族中学で日本語を学んだ。初中は吉林市の田舎にある学校であった。日本語を学習していた学生は同学年で 2 クラス 60 人いた。一方、英語選択者は 1 クラス 40 人で日本語クラスより人数は少なかった。私は小学校のときから英語を学習していたが、英語に難しさを感じ、両親の反対を押し切って日本語を選択した。初級中学のときの日本語教師は、20 代の女性教師で、今でも日本語の教師をしている。その教師は朝鮮語で日本語を教えており、主に文法、単語を覚えさせる形式の授業を行っていた。高中のときの教師も朝鮮語で日本語を教えていた。ただ、簡単な日本語については、そのまま日本語で教えていた。

⑭ＬＡ氏の語り

私は 2001 年に中学校に入学し、2007 年に卒業した。中学では外国語科目は日本語しかなかった。初級中学の日本語教師は 40 歳くらいの男性教師で、日本に研修経験のある人だった。日本語の教科書は朝鮮語で書かれたもので、授業は朝鮮語で行われ、簡単なあいさつなどは日本語を使っていた。日本語の作文もたくさん書かせ、また会話もさせるようにしていた。また、文法を教える際、選択問題を 40 問用意し、その中から学生同士ペアで問題を出し合って答えさせていた。私が学生だったころは、日本語の練習問題が少なかったので、学生たちが以前やったことのある練習問題から選んで出題したり、内容によっては学生たちに問題をつくらせたりもしていた。その問題の中から、よくできた問題をコピーして練習させたりしていた。この方法はとても印象深く、おもしろいと感じた。ロールプレイなどもさせたりしていた。

高中１年生になると、練習問題が少なくなり、教科書の内容が終われば、『みんなの日本語』で学習していた。当時から日本語教材は英語教材に比べて少なく、練習問題も限られていた。また、副教材として『精析精練』を使っていた。この教材は長春の高中の教師がつくった練習問題であった。

⑮ＫＦ氏の語り

私は、2004 年から 2010 年まで朝鮮族学校に通い、初中１年生から日本語を学習することになった。私は最初、1 週間英語を学習していたのだが、母親が強制的に日本語に変更させた。それは当時、私の成績があまり良くなく、担任の教師から日本語を学習するようにすすめられたからだ。

初中に日本語の教師は１人しかいなかった。教師は当時 32 歳くらいの女性教師で、旅行や研修などで日本に行ったことがある人だった。優しい人だったが、不真面目な学生に対しては厳しく、教室の後ろに座らせたりした。日本語の授業は毎日 1 コマずつ行われていた。全体の 80％は朝鮮語で日本語を教え、残りの 20％は日本語を使って教えていた。中国語はほとんど使っていなかった。教科書は新しい教科書を使っていた。それは『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語１』（人民教育出版社　課程教材研究所　日語課程教材研究開発センター編著）という教科書であり、それを延辺教育出版社が朝鮮語に翻訳したものを使用していた。初中１年生のときは、教科書の本文を読ませた後、二人でペアになり、フリートーキングさせていた。日本語教師は実用的な日本語を教えており、たまに日本人の教師をゲストに招いたりもしていた。また、初中 2 年生のころまでは、教科書の本文は短かったが、3 年生になると、だんだん長くなっていった。宿題はあまり出されなかったが、たまにひとつの単語につき、3 回ずつ書かせる宿題が出された。私は授業の後はあまり学習しなかったが、授業中、集中して聞けば問題なかった。また、クラスメイトの日本語能力も比較的高かった。3 年生になると、基本的な日本語会話はできるようになっていた。しかし、日本語教師は私が初中 3 年生のときに、韓国へ行ってしまった。給料の安さなど待遇面が悪かったから辞めたのだと思う。その教師がいなくなった後は、半年ほど日本語教師がおらず自習していたが、結局、専門学校（高級中学）で教えていた女性教師に頼んで、両方の授業を担当してもらうことになった。しかし、その教師も会議などで忙しく、初中 3 年生のときはほとんど自習だった。そのとき学校はつぶれかけていた。

高級中学の日本語教師は女性教師で、その教師に 3 年間日本語を教えてもらった。高中のときは、6 クラス（理系 3 クラス、文系 3 クラス）あり、それぞれのクラスの日本語選択者を集めた二つの日本語クラスをつくり、授業を行っていた。最初の授業で、教科書第 1 課の本文を読むテストがあった。それは学生の発音がどうなっているのかを確認するためだったと思う。また、学生一人一人のレベルによって教え方を考えてくれる教師だった。授業は、自分の言葉で表現させる授業だったため、日本語の授業は私にとって、自己表現ができる場だった。自分自身の日本語レベルが上がると、同じ意味ではあるが、あえて別

の表現を使ったりすることができるようになり、それができると達成感を感じることができた。日本語教師は中国語も混ぜながら、日本語の単語の説明をしていた。また、JLPT の練習問題もさせていた。参考書はすべて中国語で書かれていたので、中国語で説明していた。

私が高中 1 年のとき、はじめて日本人の教師が来た。日本人の教師は青年海外協力隊の教師で女性だった。主に会話授業を担当しており、週に 2 回授業があった。日本人の教師のおかげで、実際使われる会話能力、例えば使役、受身、使役受身などの表現が身についた。

日本語は高中 1 年生、2 年生までは大丈夫だったが、N2 レベルになると、朝鮮語に対応しない日本語が出てきた。レベルの高い日本語になると、朝鮮語では表せない表現が出てくる。そんなときは中国語の説明を見ると理解できたりする。例えば、「～にしろ、～にしろ」は中国語で「选这个、选这个」となるが、このような表現は、朝鮮語よりも中国語を使った方がぴったりくる。また、使役、受身、使役受身など朝鮮語では理解するのが難しい文法事項については、教師から個別に中国語と日本語を交えて教えてもらっていた。例えば、「食べさせられた」という日本語は、嫌な気持ちも含まれた表現だが、これは中国語の「让」とはまた違う。このように中国語でも朝鮮語でも理解が難しい場合は、他の日本語の表現で説明してもらっていた。例えば「しかたなく」「むりやり」などの表現を入れて理解していた。このように、朝鮮語の限界を補うために、中国語や日本語を利用したりしていた。

私にとって朝鮮語は母語であり、中国語は小学校から学習しているため、中学に入るまでには二つの言語を使いこなせるようになった。また、日本語は初中から学習しているため、高中になると三言語を駆使して日本語を理解することが可能になった。私が学生だったころは、言語レベルとしては、「朝鮮語＞中国語＞日本語」であったので、朝鮮語が中国語に比べて日本語の学習に与える影響は大きかったと思う。しかし、今の多くの学生たちの言語レベルは「中国語＞朝鮮語＞日本語」のように、中国語が朝鮮語を逆転してしまっている。しかし、やはり日本語は文法的には朝鮮語と共通点が多く、文字的には中国語と共通点が多いので、朝鮮族にとって日本語は最も学びやすい言語であることに変わりはないと思う。私は大学でも日本語が専攻であったが、初中、高中と日本語を学習していたため、大学では日本語で日本語を理解できるようになっていた。

今は昔に比べて、教師のレベルや日本語の教材レベルは良くなったが、それに反比例するかのように、日本語を学習する朝鮮族の学生数は減り、学生たちの学習意欲も減少しているような気がする。

⑯ＹＢ氏の語り

私は、初中 1 年生から日本語の学習をはじめ、現在も高中で日本語の授業を受けている。日本語の学習をはじめたきっかけは、日本のアニメが好きだったからだ。初中は延吉市内

からバスで 40 分くらい離れた郊外の中学校で、全校生徒は 90 名であり、日本語のクラスは 1 クラスしかなく、人数は 4 人だった。日本語教師は 1 人で、初中 1 年生のときは、男性教師に教えられていた。その教師はすべて朝鮮語で授業を行っていた。初中 2 年生になると、当時 55 歳の女性の朝鮮族教師に日本語を教えられた。その教師は日本に行った経験があり、日本語は上手だった。授業中使用する言葉は、日本語が 60%、朝鮮語が 40%であり、中国語はまったく使っていなかった。授業をする際も基本的には日本語で説明をし、学生たちがわからないときは、朝鮮語を使用していた。初中の日本語の授業は、週に 5 回、毎日行われ、1 コマ 45 分授業だった。授業内容は、単語、会話、文法、聴解などであり、教科書は延辺教育出版社の『日語』であった。初級中学の教科書は全部で 6 冊あり、各学年 2 冊ずつ終わらせる。初中のとき、卒業試験（全科目 640 点満点）があるが、日本語のテスト（120 点満点）で、私は 114 点取った。その日本語のテストの内容は、単語、作文、文法、聴解、読解などであった。教師はプリントを配ったりせず、教科書に沿って教えていた。宿題は単語を覚えさせるものが多く、毎日出された。教科書の聞き取り問題は好きだったが、会話は日本語がすぐに出てこなかったため、あまり好きではなかった。

現在通っている高中でも日本語を学習しているが、日本語授業の学生数は私を含め 2 名しかいない。もう一人の学生は和龍市から来た女子学生で、その人は朝鮮語よりも中国語が得意だ。私が高中でも日本語を選択したのは、初中で日本語を学習していたからだ。現在の高中の英語選択者は、高中 1 年生（全 550 人、12 クラス）中 548 人である。日本語の教師は 1 人おり、24 歳くらいの女性教師で、延辺大学で日本語を専攻し、修士課程を卒業している。日本語能力が高く、きれいな日本語をしゃべる。授業中に使用する言葉は、80%が日本語であり、10%は朝鮮語、10%は中国語である。授業のときは、基本的に日本語で説明し、板書するときも日本語で書く。また、朝鮮語は私が理解できなかったとき、中国語はもう一人の学生が聞き取れなかったときにそれぞれ使用する。私としては、日本語の授業だから、日本語で説明してもらった方が良い。教師の授業は、延辺教育出版社の『日語』を使用しながら進められ、教科書の中の会話、聴解、作文、文法、読解問題などを解いて行く。宿題は教科書の本文を暗記してきたり、月に一度確認テストをしたりする。確認テストの内容は、覚えた会話を書いたり、単語を書かせたりするものだ。私にとって、日本語の授業はそんなに大変ではなく、高中を卒業したら、延辺大学の日本語学科に進みたい。そして、いつか日本に留学したい。

資料４：朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査用紙

あなたの性別（　　）　生年月（　　年　　月）出身地（　　）	
大学名（　　）　学年（　　）年生　　専攻（　　）	

１．いつから日本語の学習を始めましたか？　（　　）

Ａ：初級中学から　Ｂ：高級中学から　Ｃ：大学から

Ｄ：日本語を学習したことがない

［Ａ → ２から回答　　Ｂ → ３から回答　Ｃ → ４から回答　Ｄ → ５から回答 ］

２．あなたの卒業した初級中学について質問します。

２－１　初級中学はなんという名前ですか？　（　　）

２－２　日本語の授業は第１外国語の授業でしたか？補習授業（補導課）でしたか？

（　　）

Ａ．第１外国語　　Ｂ．補習授業（補導課）　Ｃ．授業は受けていない

［　Ｃ　→　２－３、２－１０のみ回答　］

２－３　初級中学で日本語を学習したきっかけはなんですか？　［複数回答可］

（　　）

Ａ：両親の影響　Ｂ：祖父母の影響　Ｃ：兄弟の影響　Ｄ：その他家族の影響

Ｅ：友人の影響　Ｆ：日本の漫画やアニメ

Ｇ：その他　（　　）

２－４　初級中学で日本語を選択した理由はなんですか？［複数回答可］

（　　）

Ａ：日本語に興味があったから

Ｂ：日本語は他の言語に比べて学習しやすいから

Ｃ：学校で決められていたから

Ｄ：その他　（　　）

２－５　日本語の授業は１コマ何分でしたか？　（　　）分

２－６　日本語の授業は週に何回ありましたか？　週に（　　）回

２－７　日本語の授業の内容はどんなものでしたか？

例：日本語の文法、会話、作文など

（　　）

２－８　使っていた教科書は何ですか？（　　）

２－９　日本人の教師はいましたか？　（　　）

Ａ．いた　　Ｂ．いなかった　　Ｃ．わからない

２－１０　日本語以外の言語を学習した方に質問します。

その言語は何ですか？　（　　）

３．あなたの卒業した高級中学について質問します。

３－１　高級中学はなんという名前ですか？　　（　　）

３－２　日本語の授業は第１外国語の授業でしたか？補習授業（補导课）でしたか？
（　　）

Ａ．第１外国語　　Ｂ．補習授業（補导课）　Ｃ．授業は受けていない

［　Ｃ　→　３－３、３－１０のみ回答　］

３－３　高級中学で日本語を学習したきっかけはなんですか？[複数回答可]
（　　）

Ａ：両親の影響　Ｂ：祖父母の影響　Ｃ：兄弟の影響　Ｄ：その他家族の影響

Ｅ：友人の影響　Ｆ：日本の漫画やアニメ　Ｇ：初級中学で習っていたから

Ｈ：その他　（　　）

３－４　高級中学で日本語を選択した理由はなんですか？[複数回答可]
（　　）

Ａ：日本語に興味があったから

Ｂ：日本語は他の言語に比べて学習しやすいから

Ｃ：学校で決められていたから

Ｄ：初級中学で習っていたから

Ｅ：その他　（　　）

３－５　日本語の授業は１コマ何分でしたか？　　（　　）分

３－６　日本語の授業は週に何回ありましたか？　　週に（　　）回

３－７　日本語の授業の内容はどんなものでしたか？

例：日本語の文法、会話、作文など

（　　）

３－８　使っていた教科書は何ですか？（　　）

３－９　日本人の教師はいましたか？　（　　）

Ａ．いた　　Ｂ．いなかった　　Ｃ．わからない

３－１０　日本語以外の言語を学習した方に質問します。

その言語は何ですか？（　　）

４．日本語を学習している期間はどのくらいですか？（　　）年　（　　）ヶ月

５．両親は初級中学、高級中学で日本語教育を受けたことがありますか？　（　　）

Ａ．父は受けたことがある　　Ｂ．母は受けたことがある

Ｃ．両親とも受けたことがある　　Ｄ．両親とも受けたことがない

６．祖父母は日本語教育を受けたことがありますか？　（　　）

Ａ．祖父は受けたことがある　　Ｂ．祖母は受けたことがある

Ｃ．祖父母とも受けたことがある。　Ｄ．祖父母とも受けたことがない

資料５：朝鮮族学校の卒業生に対するアンケート調査結果

（１）男女数の割合

性別	男性	女性	不明	合計
人数	26	85	1	112
割合	23.2%	75.8%	0.8%	

（２）出生年

出生年	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	不明	合計
人数	2	2	8	16	10	15	15	20	18	4	2	112
割合	1.7%	1.7%	7.1%	14.2%	8.9%	13.3%	13.3%	17.8%	16.0%	3.5%	1.7%	

（３）出身地

地域名	吉林省	遼寧省	黒龍江省	福建省	不明	合計
人数	89	12	7	1	3	112
割合	79.4%	10.7%	6.2%	0.8%	2.6%	

（４）大学及び学年

大学名／学年	１年	２年	３年	４年	院生	既卒	不明	合計	割合
吉林大学		4	6	1			1	12	10.7%
吉林大学工商管理学院			6	1				7	6.2%
吉林大学生命科学学院			2					2	1.7%
東北師範大学	4	2	3			1		10	8.9%
大連民族学院	4					3	5	12	10.7%
延辺大学	1	1	1				1	4	3.5%
吉林交通職業技術学院	5							5	4.4%
吉林華橋外国語学院	2	10	1					13	11.6%
福州大学		2						2	1.7%
九州大学（日本）					7	2		9	8.0%
その他	5	1		7	2	4	4	23	20.5%
不明			2				11	13	11.6%
合計	21	20	21	9	9	10	22	112	
割合	18.7%	17.8%	18.7%	8.0%	8.0%	8.9%	19.6%		

（５）大学の専攻

	日本語系	日・英語	英語系	他の言語	他の専攻	不明	合計
男	8	1	2	1	12	2	26
女	26	2	7	4	41	5	85
不明						1	1
合計	34	3	9	5	53	8	112
割合	30.3%	2.6%	8.0%	4.4%	47.3%	7.1%	

質問１　日本語学習の開始時期

	初中から	高中から	大学から	学習したことがない	合計
人数	64	2	30	16	112
割合	57.1%	1.7%	26.7%	14.2%	

質問２　卒業した初級中学について

２－１　日本語教育を受けた初級中学（計 64 名）

学校名	男	女	不明	合計	割合
吉林市朝鮮族中学校	6	9		15	23.4%
長春市朝鮮族中学校	1	3		4	6.2%
和龍市第三中学校		1	1	2	3.1%
舒蘭市朝鮮族第一中学校	1	1		2	3.1%
舒蘭市朝鮮族第二中学校		3		3	4.6%
永吉県朝鮮族第一中学校		2		2	3.1%
永吉県朝鮮族第二中学校	1	1		2	3.1%
瀋陽市朝鮮族第六中学校		2		2	3.1%
その他	6	20		26	40.6%
不明	2	4		6	9.3%
合計	17	46	1	64	

２－２　日本語授業の選択形式

初級中学で日本語を学習した 64 名すべて第一外国語として学習

２－３　初級中学で日本語を学習したきっかけ（複数回答可）

きっかけ	回答数	割合
両親の影響	7	10.6%
祖父母の影響	1	1.5%
兄弟の影響	4	6.0%
その他親戚の影響	8	12.1%
友人の影響	3	4.5%
日本の漫画やアニメ	11	16.6%
学校の規定など	23	34.8%
外国語科目が日本語しかなかった	5	7.5%
成績やクラス分けテストの結果	2	3.0%
日本語が好き	1	1.5%
英語が嫌い	1	1.5%
合計	66	

＊割合は総回答数 66 に対する数値

２－４　初級中学で日本語を選択した理由（複数回答可）

理由	回答数	割合
日本語に興味があったから	11	15.7%
日本語は他の言語に比べて学習しやすいから	18	25.7%
学校で決められていたから	39	55.7%
成績のため	1	1.4%
その他	1	1.4%
合計	70	

＊割合は総回答数 70 に対する数値

２－５　日本語の１コマの授業時間

授業時間	40 分	45 分	50 分	合計
人数	9	54	1	64
割合	14.0%	84.3%	1.5%	

２－６　日本語授業の一週間の実施回数

回数	1 回	3 回	3-5 回	4 回	4-5 回	5 回	5-6 回	6 回	7 回	合計
人数	1	6	1	13	3	22	3	10	5	64
割合	1.5%	9.3%	1.5%	20.3%	4.6%	34.3%	4.6%	15.6%	7.8%	

２－７　日本語の授業内容　（複数回答有り）

内容	文法	単語	会話	聴解	読解	作文	その他	不明	合計
回答数	59	16	39	6	7	37	3	1	168
割合	35.1%	9.5%	23.2%	3.5%	4.1%	22.0%	1.7%	0.5%	

＊割合は総回答数 168 に対する数値

２－８　使用した教科書

大部分が延辺教育出版社の『日語』を使用。朝鮮語で書かれたもの。

２－９　日本人の教師の有無

	いた	いなかった	わからない	合計
人数	20	42	2	64
割合	31.2%	65.6%	3.1%	

２－１０　日本語以外に学習した言語（複数回答有り）

	英語	朝鮮語	中国語	なし	合計
回答数	21	7	4	35	67
割合	31.3%	10.4%	5.9%	52.2%	

＊割合は総回答数 67 に対する数値

質問３　卒業した高級中学について

３－１　日本語教育を受けた高級中学（計 66 名）

学校名	男	女	不明	合計	割合
吉林市朝鮮族中学校	6	16		22	33.3%
長春市朝鮮族中学校		4		4	6.0%
和龍高級中学	1	5	1	7	10.6%
舒蘭市朝鮮族第一中学校	1	1		2	3.0%
龍井高級中学	1	2		3	4.5%
永吉県朝鮮族第一中学校	1	1		2	3.0%
和龍第二高級中学		2		2	3.0%
瀋陽市朝鮮族第一中学校	1	2		3	4.5%
鉄嶺市朝鮮族高等学校		3		3	4.5%
その他	6	10		16	24.2%
不明	1	1		2	3.0%
合計	18	47	1	66	

３－２　日本語授業の選択形式

選択形式	第一外国語	補習授業	授業は受けていない	不明	合計
人数	63	1	1	1	66
割合	95.4%	1.5%	1.5%	1.5%	

３－３　　高級中学で日本語を学習したきっかけ（複数回答可）

きっかけ	回答数	割合
両親の影響	5	7.1%
祖父母の影響	0	0%
兄弟の影響	1	1.4%
その他親戚の影響	5	7.1%
友人の影響	2	2.8%
日本の漫画やアニメ	10	14.2%
初級中学で学習したから	35	50%
学校の規定	6	8.5%
外国語科目が日本語しかなかった	3	4.2%
英語が嫌い	1	1.4%
自分のため	1	1.4%
その他	1	1.4%
合計	70	

＊割合は総回答数 70 に対する数値

３－４　　高級中学で日本語を選択した理由（複数回答可）

理由	回答数	割合
日本語に興味があったから	13	15.4%
日本語は他の言語に比べて学習しやすいから	8	9.5%
学校で決められていたから	29	34.5%
初級中学で学習したから	33	39.2%
外国語科目が日本語しかなかった	1	1.1%
合計	84	

＊割合は総回答数 84 に対する数値

３－５　　日本語の１コマの授業時間

授業時間	40 分	45 分	50 分	100 分	不明	合計
人数	10	53	1	1	1	66
割合	15.1%	80.3%	1.5%	1.5%	1.5%	

３－６　日本語授業の一週間の実施回数

回数	2 回	3 回	3-4 回	4 回	4-5 回	5 回	5-6 回	6 回	7 回	8 回	不明	合計
人数	1	6	2	20	2	13	2	6	8	5	1	66
割合	1.5%	9.0%	3.0%	30.3%	3.0%	19.6%	3.0%	9.0%	12.1%	7.5%	1.5%	

３－７　日本語の授業内容　（複数回答有り）

授業内容	文法	単語	会話	聴解	読解	作文	その他	不明	合計
回答数	59	14	45	8	6	47	3	1	183
割合	32.2%	7.6%	24.5%	4.3%	3.2%	25.6%	1.6%	0.5%	

＊割合は総回答数 183 に対する数値

３－８　使用した教科書

大部分が延辺教育出版社の『日語』を使用。朝鮮語で書かれたもの。

３－９　日本人の教師の有無

	いた	いなかった	わからない	不明	合計
人数	32	31	2	1	66
割合	48.4%	46.9%	3.0%	1.5%	

３－１０　日本語以外に学習した言語（複数回答有り）

	英語	朝鮮語	中国語	フランス語	なし	合計
回答数	25	7	5	1	32	70
割合	35.7%	10%	7.1%	1.4%	45.7%	

＊割合は総回答数 70 に対する数値

質問４　日本語の学習期間について　（計 96 名）

	1 年未満	1-3 年未満	3-6 年未満	6-10 年未満	10 年以上	合計
人数	10	15	8	35	28	96
割合	10.4%	15.6%	8.3%	36.4%	29.1%	

質問５　父母の日本語教育について（計 112 名）

	父のみ受けた	母のみ受けた	両親とも受けた	受けなかった	不明	合計
人数	12	15	21	60	4	112
割合	10.7%	13.3%	18.7%	53.5%	3.5%	

質問６　祖父母の日本語教育について（計 112 名）

	祖父のみ受けた	祖母のみ受けた	祖父母とも受けた	受けなかった	わからない	不明	合計
人数	18	19	24	46	1	4	112
割合	16.0%	16.9%	21.4%	41.0%	0.8%	3.5%	

資料６：梅河口市朝鮮族中学の日本語教師の語り

①ＫＡ氏の語り

私の両親は「満洲国」期に日本語教育を受けたため、日本語が上手で、両親と日本語で会話することもあった。

私の授業では、日本語を使う割合が一番高い。主に会話練習の際、日本語を使っているが、本文の内容を教える際も日本語を使っている。会話練習では、学生に教科書の本文をそのまま暗記させるのではなく、あらすじだけ頭の中に入れさせ、自由に会話させている。これは読解能力を身に付けるという点でも良い方法であると思う。また、文を作る力を付けることもでき、同時に自分で考える力も付く。さらに、一人ずつ本文の内容を自分の言葉でまとめさせたりもしている。このやり方で、日本語ができる学生はこれまで学習してきた文法も活かしながら、自分自身の言葉で上手に話すことができるようになった。自分自身で日本語を話す方法を考える良いトレーニングになると思う。この教え方は、私自身が学生のとき受けた日本語の授業が暗記形式でつまらなかったということが一つの要因だ。

朝鮮語は文法説明やその解釈、日本語と対応している朝鮮語がある場合に使用しているが、最近は朝鮮語で説明しても、それがどんな意味か理解できない学生が増えており、中国語で説明する割合が増えている。中国語は、朝鮮語では訳しづらい日本語を訳すときに使ったり、書き取りテストを行う際に使用している。これは、私が中国語で言った単語を学生たちが日本語で書くという形式で行っている。

授業では毎日日記を書かせている。日記の長さは自由で、学生たちははじめ、みんな「中国語式日本語（中国語の影響が出ている日本語）」で日記を書いていた。日記の良い点は、普段使われている言葉を日本語で表すことができる点である。それを毎日チェックし、コメントを書いて学生に渡している。中には、「日記なんて意味がない、必要ない」と直接文句を言ってきた学生もいたが、書き始めると語学力が身に付くことに気づき、素直に書くようになった。今では、その学生は大学に進学し、日本語を専攻している。しかし、日本語ができる学生は授業を楽しんでいるようだが、できない学生は日本語を怖がっている様子がうかがえる。

授業で使っている教科書は『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語１』（人民教育出版社　課程教材研究所　日語課程教材研究開発センター編著）であり、それを延辺教育出版社が朝鮮語に翻訳したものである。教科書は、内容が改定されたことで、以前のものより良いものになっていると感じる。以前の教科書は主に文法、読解のみであったが、ここ数年の教育改革で日本語の教科書も新しいものに変わった。日本語は話す力、聞く力など、これまでになかったものが取り入れられている。以前はモデル教科書はあったが、正式なものとしては使われておらず、現在は新しいものを使用している。もちろん、何冊まで終わらせなければならないという規定はあるものの、学生たちに役立つ内容となっている。例えば、聞き取りや発音、そして作文なども今の教科書には含まれており、大学入試の問

題（聴解 30 点分）にも対応したものとなっている。作文については、教科書とは別に作文指導用の教材もある。学生たちの日本語で弱いなと感じられるのは作文である。しかし、その原因としては日本語能力の低下というよりも、作文を書く力、特に朝鮮語での作文力の低下が原因であると考えられる。

学生たちは入試で良い点数を取るために日本語を選択する場合が多い。朝鮮族の学生にとっては、英語より日本語の方が良い点数が取れるからだ。

私はこれまで日本人の教師が教える研修会にも参加した経験があり、大いに役立った。この研修会は北京、長春、大連などで開催されており、日本人の教師に発音やアクセントを指導してもらったりした。

青年海外協力隊から派遣された教師（3 人目、去年から働いている）からも日本語の指導を受けたりしている。例えば、初級中学 1 年生の学生に対しては、まず日本人の教師が 1 ヶ月間日本語の指導をする。日本人の教師は「作文」や「会話」授業を担当しており、「会話」授業では、教科書の「言葉の広場」「こんな時あんな時どう言う？」の項目を担当する。

学生たちが参加する日本語関連のプログラムとしては、「中日サマープログラム」などがある。これは、日本の学生たちと交流できるプログラムである。

②ＫＢ氏の語り

私は、初級中学、高級中学の 6 年間、日本語を学習した。大学では日本語ではなく、歴史を専攻したために、日本語教師をしながら、日本語の教え方を学んだ。私は 1992 年から輝南の中学校で日本語を教え始めた。その学校には日本語の教師が 3 人ほどいた。2003 年から現在の梅河口市朝鮮族中学で日本語を教えている。

日本語の授業は週に 5 回、月～金曜日まで毎日 1 時間ずつ行っている。授業は、「会話」、「聞き取り」、「読み」などを中心に行っている。授業では半分くらい朝鮮語を使っており、40％くらいは日本語、10％くらい中国語を使っている。日本語は教科書の「話し合いましょう」という項目から、いろいろな例文を選んで、学生の聞き取り能力を確かめている。今の教科書は応用問題がたくさんある。

朝鮮語は文法を説明するときに使用している。中国語は、一部分、難しい単語を説明するときに使っている。単語を説明するときは朝鮮語より中国語を使った方がよい。朝鮮族にとって日本語の漢字は難しくない。なぜなら、中国語の漢字は幼稚園のころから学んでいるからだ。しかし、日本語の文法には難しさを感じている。例えば、「こと」や「もの」の違い（朝鮮語ではどちらも「것」）など、朝鮮語とズレがある日本語表現はやはり難しい。さらに副詞、例えば「ちっとも」と「少しも」の違いなどはわかりにくい。他には「ひらく」と「あける」の違いも難しい。

学校の学生の高考（全国普通高等学校招生入学考試、中国での大学入試試験）での日本語科目最高点は 146 点〔150 点満点〕で、聞き取り問題で 30 点満点を取る学生はたくさんいる。また、日本語の点数を上げるために、いろいろな問題を出している。単語、活用、

文型の問題を出したり、翻訳させたりしている。また、学年ごとに日本語を教える内容が異なっている。高中 1,2 年生には、宿題は毎日出し、提出してもらっており、授業中、間違いが多いところを説明している。宿題の量がそれほど多くないからなのか（1回の宿題の量は単語 10 個ほど）学生たちの反応は良い。高中 3 年生からは、聴解問題を出す。北京大学が出している問題集の N2,3 レベルの問題をやって、学生の聴解レベルを確かめている。

外国語科目として日本語を選択する学生が最近減ってきているが、その要因は、まず、日本語を選択する学生の成績が以前に比べ下がった点が挙げられる。それは日本語を学習する教材の少なさも少なからず影響している。日本語の高考用の参考書は英語に比べると少なく、また JLPT の参考書はあるが、高考専用の練習問題は少ない。以前は延辺にある出版社に頼んで、取り寄せなければならなかったが、今は出版すらしていない。

日本語の研修は 2004 年から 2010 年までの夏休みと冬休みに、北京で日本語の研修を受けた。この研修期間は 3,4 日間であったが、2010 年には日本のさいたま国際交流センターで 2 ヶ月ほど研修を受けた。

梅河口市朝鮮族中学で日本語を選択した卒業生は、大学でも日本語を専攻して学習している場合が多い。学生の一人は、高中 3 年生のときに日本に留学したが、日本語が大好きな学生だった。また、高中で英語を選択した学生であっても、大学で日本語を選択する人も多い。

③ＫＣ氏の語り

私は、日本に 6 年間留学経験がある。授業中はなるべく日本語を使うようにしている。日本語の使用割合は最も高く、主に会話練習や聞き取り練習のとき、簡単な日本語を使っている。

朝鮮語は日本語の次に使用しており、主に文法解説や練習問題のときに使っている。中国語を使用する割合は最も低いが、朝鮮語で説明しても学生たちがわからなかったときに朝鮮語の補助的なものとして使用している。中国語の利点は、短く相手に伝えることができる点である。例えば、「テレビ」や「冷蔵庫」などの単語は中国語の方が短いので、朝鮮語で話していても、それらの単語については中国語で言ったりする。また、学生たちに「끼치다, 신세주다」（お世話になる）という言葉を使っても、通じない場合がある。そのときは中国語で「添麻烦」と言えば通じる。漢字はもちろん中国語と日本語で違うものがあるので、学生たちは細かい違いで間違えたりする場合がある。また、漢字は読めるが、書くのが難しいという学生も多い。他には、敬語や受身、使役、授受表現などに難しさを感じている学生が多い。

学生たちの多くは梅河口市内に住んでおり、小学生のときは中国語の環境で育っている。また、小さいころから漢族と一緒に遊んでいるため、朝鮮語よりも中国語の方が得意な学生が多い。幼稚園に入るまでの環境は、祖父母、または親戚の家で過ごす場合が多いので、朝鮮語の環境であるが、漢族幼稚園に入ってからは中国語の環境になってしまう。2000 年

くらいまでは、学校でもすべて朝鮮語で日本語を教えていた。そのときも中国語でしかわからない学生が何人かいたが、そのような学生は市内に住んでいる学生たちだった。今は学生の多くが市内に住んでおり、中国語の環境で育っているため朝鮮語よりも中国語の方ができる。しかし、学生たちは授業中、朝鮮語で聞いてわからない場合も、正直にわからないと言えない。それは朝鮮族であるのに「朝鮮語がわからない」ということが恥ずかしいと考えているためである。

私が担当している高級中学 3 年生は 4 つのクラスがあり、日本語を受ける学生は 1 組と 3 組の学生を合わせた 20 名クラス、2 組と 4 組を合わせた 20 名クラス、計 2 クラスある。そのうち、高中 1 年生から日本語を始めた学生、つまり初中では英語を学習していたが、高中から日本語を学習し始めた学生が 10 名ほどいる。このうち半分の 5 名ほどはかなり日本語ができる。発表の授業では、旅行地を調べて、その案内をさせたりしている。他には料理の作り方なども発表させている。今はグループごとに発表させているが、発表させても盛り上がらない場合が多い。会話の授業のときは、二人ずつペアで座ってもらい、1 対 1 で会話させたりしている。成績が良い学生と成績が良くない学生をペアにしている。

学生たちの日本語レベルは、毎年入ってくる学生によって異なる。日本のアニメや漫画が好きな学生は多く、彼ら、彼女らの日本語の聞き取り能力はすごい。学生たちは日本文化に興味があり、中国文化と比較したりしている。このように、日本文化、特に日本のアニメや漫画に対する興味はかなり高い一方、日本語の文法を学習したり、単語を覚えたりするのを嫌がる学生が多い。

高中 1 年生から半年くらいは、日本語レベルが下の学生たちも見放さず引っ張って行くが、本当にやる気のない学生は後ろの席に座らせて、小説を読んでもいいし、他の科目の学習をしてもいいと言っている。寝たり、ケータイを見たり、おしゃべりしなければ、あとは何をしてもいいと言っている。私は彼ら、彼女らのことを「自由人」と呼んでいる。一方で、やる気のある学生は前の席でちゃんと授業を聞いている。それに対し、「自由人」のような、やる気のない学生は、ひらがなすら覚えない。

現在、学生たちの 95%は両親が出稼ぎに行っており、家にはいない。また、そのため朝鮮語ができる学生とできない学生が生まれ、学生の「漢語化」につながっている。私自身が学生だったころは、朝鮮族はみんな朝鮮語を話すことができ、朝鮮族の村もたくさんあったため、子どもたちは朝鮮語が話せた。現在は特に朝鮮族の村の人口が少なくなっており、かつてのような朝鮮語が使える環境が少なくなっていることが、学生たちの言語能力に大きな影響を与えている。

④ＫＤ氏の語り

私は、初級中学 3 年生のクラスを担当している。授業で使う言葉は、85%が朝鮮語であり、主に文法解釈の際に使っている。日本語は会話練習で使用している。中国語はほとんど使っていない。

日本語の文法を教える際、学生たちは朝鮮語の文法自体ができないから時間がかかってしまう。また、教科書の会話文を学生に暗唱させているが、やはり学生たちは覚えさせられることに抵抗があるようだ。今は学生たちが理解したうえで覚えさせている。また、昔は文法中心の授業であり、作文などもなかったが、今は会話中心の授業に変わっており、グループ形式で日本語での会話を楽しみながら進めている。また、毎日日記をつけさせており、作文も一週間に 2,3 回書かせているが、宿題で作文を出すと学生たちは嫌がる。

⑤ＫＥ氏の語り

私の大学時代の専攻は中国語であり、大学卒業後は、故郷の朝鮮族中学で 10 年間中国語を教えていた。しかし、今の学校の校長から日本語を教えてくれないかと頼まれ、2003 年から日本語を教えている。

私が担当しているのは、初級中学 2 年生の 1 クラス（20 名ほど）である。初中 2 年生は、日本語クラスが 1 クラスしかない。以前は 2 クラスあったが、日本語選択者が減ってしまったため、1 クラスになってしまった。

外国語科目の選択、つまり英語科目を選択するか日本語科目を選択するかは学生自身が決める。初中 1 年生のときに、まず日本語と英語を 2 週間くらい同時に学習し、その後、どちらかを選択させる。しかし、日本語を選択する学生は、成績があまり良くない学生が多い。その要因としては、まず朝鮮族にとっては英語よりも日本語の方が試験で点数が取りやすいという点が大きい。成績優秀な学生は日本語を選択しなくても、他の科目でも良い点数が取れるため問題ないが、他の科目で点数が取れない学生は、外国語科目で有利な日本語で点数を稼ぐしかない。よって、成績があまり良くない学生が日本語科目を選択する傾向にある。

私が授業で使用する言葉は、朝鮮語が 70％と最も割合が高く、次に中国語 20％、最も低いのが日本語である。日本語は主に会話、コミュニケーションの際に使用している。朝鮮語は文法解釈のとき使っている。そして中国語は学生たちが朝鮮語でわからないときに使用している。私が中国語を教えていたときは、漢字中心なので、教科書の内容を理解させるため、たくさん読ませていた。声に出して読ませたり、黙読させたり、作文を書かせたりしていた。中国語を教えていた経験は、日本語の授業において、特に日本語の単語を教えるときに活かされている。中国語がわかる学生たちは中国語で日本語の単語の説明を受けると理解しやすい。

日本語の会話授業では、場面を設定し、会話してもらっている。グループで行ったりするが、学生たちは積極的に参加している。また、学生たちは単語を覚えるのが苦手である。それは覚えること自体を嫌がっているからだ。その場合は、再テストをして覚えさせている。また、毎日小テストを実施しており、例えば、テスト用紙には「손　（　　）」のように、朝鮮語で単語を書き、（　）の中に答えとなる日本語を記入させている。学生たちは日本語の漢字に難しさは感じておらず、中国語と日本語の漢字を比較させながら、覚えさせ

ている。文法の時間は、文型などの練習問題をやりたがらないので、極力少なくしている。しかし、練習問題自体少ないので、補助的にプリントを活用している。日本語の練習問題は少ないが、特に助詞の問題や、「～してください」など依頼表現の問題がもっと必要だと感じる。

日本語の授業は、以前に比べれば、おもしろいものになった。その要因としては教科書の内容が変わったこと、そして研修などで教師たちのレベルが上がったこと、最後に日本人の教師が来たことで発音・アクセントなどを教えることができるようになった点が挙げられる。

資料７：鉄嶺市朝鮮族高級中学の日本語教師の語り

①ＬＡ氏の語り

私が担当している日本語クラスは、1 組と 3 組の日本語選択者を合わせたクラスであり、計 23 名である。使用している教科書は人民教育出版社のもので、延辺教育出版社が朝鮮語に翻訳したものではなく、中国語のものである。朝鮮語の教科書を使うのか中国語の教科書を使うのかは、学生たちの言語能力を考慮して教師たちで決めている。しかし、初中から高中に上がる際の試験問題は、日本語を朝鮮語に翻訳させる問題が出るので、現在は初級中学では朝鮮語の教科書を、高級中学では中国語の教科書を使用している。高中に上がると、教科書が朝鮮語のものから中国語のものに変わるため、学生たちは高中１年のときには少々混乱したりもするが、初中のころから中国語で日本語の文法を説明したりもするので、それほど大きな混乱はない。

授業内容は聴解、会話、文法、作文、読解などであり、聴解の授業は主に高中 1 年生のときテープを使いながら行う。教科書の「考えてみよう」という項目でヒアリングを行い、テープを使って練習したりしている。現在、学生たちの大学入試のために文法、作文、読解を中心に授業を行っている。一方、日本人教師には会話の授業や、作文授業、日記などを担当してもらっている。授業は、最初の 5 分間を使って単語テストを行っている。その後、教科書に入り、教師が本文を読んだ後、学生に読んでもらったりする形式で進めて行く。また、グループ別に本文を読んでもらったりもしている。宿題としては、日本語で文章を作らせるものを出している。

授業中、使用する言語の割合は、高中 1 年生のときは、60%は日本語を使い、朝鮮語と中国語はそれぞれ 20%ずつ使っている。しかし、高中 2 年生になると、受験対策をしなければならないため、それまでの会話中心の授業から文法、読解中心の授業になってしまうので、日本語の文法事項を説明する時間が増え、朝鮮語、中国語を使用する割合が高くなる。そのため日本語の使用割合は 10%にまで下がり、逆に朝鮮語、中国語は合わせて 90%ほど（それぞれ 45%くらい）使うようになる。

日本語はあいさつや、新しい課に入るときに使う。朝鮮語を使うときは、主に日本語を翻訳するときである。例えば、日本語で「～まま」という表現を説明する場合、朝鮮語では「그 대로」または「～채로」という表現を用い、例えば、「靴を履いたまま寝てしまった」という文は、朝鮮語では「신발을 신은 채로 자 버렸다」となるが、中国語では「着」を用い、「穿着鞋睡着了」となる。この場合、中国語よりも朝鮮語で説明した方がしっくりくるので、学生には朝鮮語で説明している。

また、擬音語・擬態語などは、中国語よりも朝鮮語の方がいろいろな表現があるので、活用したりしている。例えば、日本語で「ぐるぐる」は朝鮮語では「빙글빙글」、「きらきら」は「반짝반짝」、「べたべた」は「끈적끈적」となる。中国語を例に出すと、日本語で

「ゆらゆら」は「晃动貌」という表現があるが、この表現はあまり使われておらず、やはり朝鮮語の「흔들흔들」や「한들한들」といった表現の方がぴったりくる。

中国語は主に練習問題の説明をするとき、文法の説明をするとき、そして、漢字を見るだけで意味がわかるような単語は中国語で説明する。中国語で覚えやすい場合は、中国語で覚えさせるようにしている。例えば、「見聞」「故障」「意思」などの単語は、学生たちにとっては単語を見るだけで、その意味がわかる。

日本語の使役表現「させる」は、朝鮮語の「시키다」、中国語の「让」どちらも使っている。受身表現は中国語の「被」を使って説明している。使役受身表現については、例えば、「私は嫌いな野菜を食べらせられた」という文の場合、朝鮮語では説明しにくいので、中国語の「我不得不吃不喜欢的蔬菜」のように「～せざるを得ない」を表す「不得不～」を用いる。可能表現は朝鮮語の「할 수 있다、할 줄 알다」、中国語の「能、会」どちらも使っている。自動詞・他動詞は、例えば日本語の「始まる」（自動詞）は「시작되다」、「始める」（他動詞）は「시작하다」と、日本語同様、朝鮮語には自動詞と他動詞の区別がある。一方、中国語ではどちらも「开始」になるため、日本語の自動詞・他動詞の説明は朝鮮語を使っている。「もうすぐ授業が始まります」という表現については、中国語の「快上课了」、朝鮮語の「이제 곧 수업이 시작됩니다」どちらも使っている。

②ＬＢ氏の語り

私は初級中学 3 年生の日本語授業を担当している。学生数は 8 名である。教科書は人民教育出版社の『日語』の朝鮮語のものを使用している。高級中学に進学する際の試験問題は、日本語を朝鮮語で翻訳する問題があるため、初級中学の日本語授業は朝鮮語の教科書を使っている。

学生たちは朝鮮語が読めることは読めるものの、聞き取れないことが多い。その場合は、中国語で説明したりする。学生たちの朝鮮語レベルが落ちていることは、日本語の助詞の問題をよく間違えることからもわかる。学生たちの朝鮮語能力の低下は、学生たちの言語環境が大きな原因のひとつだと思う。現在、学生たちは朝鮮語を使う環境がなく、たとえ両親と一緒に暮らしていたとしても、学生自身が朝鮮語を使わないため、両親とも中国語で話してしまう。その一方で、鉄嶺市以外の地域、例えば営口の盘錦などから来た学生や、瀋陽市から来た学生は他の学生に比べ、朝鮮語ができる学生が多い。しかし、最近は瀋陽市のコリアンタウンである「西塔」地域でも朝鮮語より中国語の方が使われている。20 年前は中国語より朝鮮語ができる学生の方が多かった。しかし、2010 年ごろから朝鮮語よりも中国語が得意な学生が来るようになり、現在はほとんどの学生は中国語で話している。

授業で使う言語は、全体の 60%以上は朝鮮語を使っている。主に文法を説明するときに使っている。授業中、ある問題があって、その問題について説明するときは日本語と朝鮮語を交えて使っている。

中国語は、学生に対して朝鮮語で説明してもわからないときに使っている。また、例えば「間に合う」という表現の場合、中国語では「来得及」「赶趟」を使うが、朝鮮語では「제 시간（제 때）에 대이다（가닿다)」（韓国語では「대다」）という。この場合は、中国語の方が説明しやすい。

使役表現は、朝鮮語の「～를/을 시키다」「～게 하다」を使っている。受身表現は、基本的に中国語の「被」を用いている。しかし、「運動会が開かれる」のような場合は、朝鮮語の「개최되다」や「열리다」の方が説明しやすいが、例えば「子供に泣かれる」など迷惑の受身表現などは朝鮮語でも中国語でも説明するのが難しい。他には自動詞・他動詞は、区別のある朝鮮語で教えており、願望表現も朝鮮語を使う。例えば、「～たい」＝「～고 싶다」「～したがる」＝「～고 싶어하다」というように、日本語に対応する朝鮮語があるので説明しやすい。

また学生たちは、日本語で「柔らかい」という単語を「柔（rou）らかい」、「返す」を「返（fan）す」、「思う」を「思（si）う」と覚えたりしている。

③ＬＣ氏の語り

私は鉄嶺市朝鮮族高級中学で 30 年間教えている。現在は初級中学 3 年生の日本語クラス（8 名）を担当している。現在初中 3 年生は全部で 27 人しか学生がおらず、そのうち 19 人は英語選択者である。初中 2 年生はさらに少なく全部で 20 人しかいない。鉄嶺市朝鮮族高級中学でも朝鮮族の学生数は年々減少している。今の学生たちにとって朝鮮語は外国語と同じだ。それほど朝鮮語が話せない学生が多い。農村（朝鮮族の村）の学生は朝鮮語が上手で、都市部の学生は中国語が上手という特徴があるが、学生に問題があると、学校に呼び出すのは両親ではなく、祖父母になってしまう。それは両親が韓国などに出稼ぎに行っていて、学生と一緒に暮らしていないからだ。これは子どもの教育にとってはマイナスの面が大きい。また、今の学生は瀋陽、鉄嶺、盘錦、遼陽などの都市から来ているため、学校の寮で生活する学生も多い。また、日本語の学習方法も多様化しており、例えば、インターネットや日本のアニメを活用して日本語を学習している学生が数多くいる。

授業の進め方は、基本的に中国語で説明し、その後、「これは朝鮮語では～という」というように朝鮮語も日本語と一緒に覚えさせるようにしている。中国語を使う割合は 70%ほどである。例えば、「アメリカ」という単語が出てきた場合、まずは朝鮮語の「미국」に変換し、最終的に中国語の「美国」に訳す。また漢字に関して言えば、中国語の漢字と日本語の漢字で違うところは、その違いを強調して教えるようにしている。

朝鮮語は、全体の 20%ほどしか使っていない。朝鮮語は文法、特に助詞の説明の際に活用している。また、本文の内容を朝鮮語で翻訳するときなどに使っている。

例えば「理解する」という動詞を説明するときは、中国語の「理解」を使った方が良い。漢字もほぼ同じであるし、意味も共通しているからだ。また「にぎやかだ」という形容詞を説明する際も、中国語の「热闹」の方が、朝鮮語の「흥성거리다」よりぴったりくる。

一方で、「大変だ」という形容詞を説明する場合は、朝鮮語の「힘들다」を使う方が良い。中国語で「大変だ」にぴったり合う言葉はないからだ。このように、あるときは中国語を使い、またあるときは朝鮮語を使える朝鮮族は、日本語を学習するのに有利だと感じている。しかし、あまりに朝鮮語に頼りすぎると、日本語のレベルが高くなるにつれて、反対に邪魔になってしまう恐れもある。例えば、「具合が悪い」は朝鮮語では「몸이 아프다」となるが、これを日本語で直訳すると「体が痛い」となり、違う意味になってしまう。

現在、遼寧省で日本語教育を行っているところは少ないが、大連や遼陽では、漢族学校でも日本語教育を行うところが増えている。

④ＬＤ氏の語り

私は高中 1 年生の日本語クラス（1 組と 3 組の合同クラス）を担当しており、学生数は 21 名である。私は朝鮮族であるが、小学校から漢族の学校に通っていたために朝鮮語がまったくしゃべれない。漢族の学校に通った理由は、私の祖母が「朝鮮族の教育は漢族の教育より良くない」と言ったからだ。小学校と同じく、初中、高中も漢族の学校に通った。そのため外国語科目は英語だった。大学では日本語を専攻し、ひらがなから学習したが、大学 4 年生のときは古文を学習するまでになっていた。

私は朝鮮語がしゃべれないために、授業で使う言葉はほとんどが中国語である。受身表現は「被」、使役表現は「让」、推量表現の「好像（～ようだ)」「应该（～だろう)」のように日本語に対応する中国語があるため教えやすいが、助詞など中国語にはないものを教える際は難しさを感じている。また、単語を説明したりするときは日本語を使ったりするが、学生たちに日本語で言ってもわからないときは、やはり中国語で説明する。文法項目を教える際は、学生たちが興味を持つように日本のアニメやドラマを例に出して教えるようにしている。

資料８：吉林市朝鮮族中学校の日本語教師の語り

①ＪＡ氏の語り

私は、1988 年から現在の学校で日本語を教えている。現在は、高中 1 年生の日本語クラスを担当しており、日本語クラスは 1 クラスのみである。クラスは文系の学生が 22 人、理系の学生が 9 人の合計 31 人おり、授業は毎日 1 コマ（40 分）ずつ行っている。学生たちのうち、朝鮮語がまったくわからない学生は 1,2 人しかいないので、朝鮮語で書かれている教科書『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語』（朝鮮語版、延辺教育出版社発行）を使用しており、この教科書に沿って日本語を教えている。

授業は基本的に朝鮮語を使って行っているが、朝鮮語の単語もあまりわからないという学生がほとんどなので、その場合は、「日本語 → 朝鮮語 → 中国語」のように、朝鮮語も同時に教える形にしている。

日本語の使役表現は朝鮮語の「～를/을 시키다」「～게 하다」を使用している。受身表現については、例えば「教師に言われます」は、朝鮮語で「선생님한테 말을 듣습니다」と翻訳して教えている。また、朝鮮語には日本語同様、自動詞・他動詞の区別があるため、日本語と同じように朝鮮語の自動詞・他動詞も一緒に教えている。また、自動詞・他動詞それ自体だけで教えるのではなく、主語や目的語を伴った形、例えば「授業をはじめる（수업을 시작하다）」〔他動詞〕、「授業がはじまる（수업이 시작되다）」〔自動詞〕の形で教えている。

授業では作文に力を入れている。作文は、語句を翻訳したり、暗記したりするのに役立つ。例えば、日本語は「気」に関する熟語が多い。その場合は、「気」のつく他の熟語、例えば、「気にする、気になる、気にかかる」などもセットで覚えさせたりしている。また、宿題は主に語句を暗記させている。例えば、「傘」という単語の場合、「傘」だけではなく、「傘をさす」という形で覚えさせるようにしている。また、初級中学１年生の学生の例であるが、日本語の「です」を学生たちは、ハングルで「데스」と書いて覚えている。

現在、高中で日本語を選択している学生は、700 人中、約 200 人おり、英語選択者は 500 人いる。初級中学 1 年生のときは、日本語、英語両方学習するようにさせており、初中 2 年生になってからどちらの科目にするか選択させるようにしている。最近は英語を選択する学生が年々増えており、学生の両親もそう願っている人が多い。その要因としては、やはり英語を話せるようになれば、将来、就職するときに有利であり、また、仕事の際に日本語よりも使う機会が多いという点が大きい。

日本語を選択した学生のモチベーションは、例えば「全国日本語作文コンクール」など、自らの日本語能力を発揮できる場があるということが挙げられる。もし、作文コンクールなどで入賞すれば、日本に 1 週間ほど行けるチャンスがあるからだ。学生の間で日中交流がもっと増えれば良いと考えているが、残念ながら今は交流が少ない。

②ＪＢ氏の語り

私は 1989 年から朝鮮族学校で日本語を教えているが、1996 年から現在の学校で教えている。現在は高中 3 年生 2 クラスで日本語の授業を行っており、1 クラスは理系クラスで 15 人、もう 1 クラスは文系のクラスで 26 人の学生がいる。

授業で使っている教科書は、朝鮮語で書かれている教科書『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語』（朝鮮語版、延辺教育出版社発行）である。授業では、日本語を教える際に、朝鮮語も教えるようにしている。日本語を翻訳するときは、「日本語 → 中国語」ではなく、「日本語 → 朝鮮語 → 中国語」の順で行っている。私は中国語があまり得意ではなく、中国語で話すと学生から笑われたりするのが嫌なので、中国語で説明する際は、口には出さず、黒板に書いている。授業は基本的に朝鮮語で行っているが、やはり聞き取れない学生がいる。また、学生たち同士は朝鮮語ではなく中国語で話しており、朝鮮語で会話する時間は限られている。授業での使用言語で最も多いのは、やはり朝鮮語であり、その割合は全体の 90%ほどである。朝鮮語を使用するのは主に文法の説明などである。中国語は、簡単な単語の意味を話して教えるのではなく、中国語で黒板に書いて説明している。日本語を使うのは、会話練習のときである。例えば、「本を貸してください」など簡単なものは、日本語を使っている。さらに簡単な教室用語などは日本語で行っている。しかし、高中 1, 2 年生のときは日本語で会話する機会が比較的多いが、高中 3 年生になると、受験対策のために授業中、日本語を使う割合が減ってしまう。

受身表現は中国語の「被」、使役表現も中国語の「让」を使用している。例えば、「～させていただけませんか」という依頼表現も、中国語の「请让我做～？」で説明している。使役表現、受身表現、ともに朝鮮語よりも中国語を活用した方が説明しやすい。

学生たちは、友人同士では普段中国語で、または中国語と朝鮮語を混ぜて会話している。また受験のために日本語を選択し、学習しているという側面が大きいと思う。受験目的以外では、やはり日本の文化、特にアニメが好きな学生は多く、そのような学生は日本語が上手であり、特に聞き取りがよくできる。今の学生が日本語を選ぶのは、アニメなどの影響が大きく、英語ができない学生が日本語クラスに来るというパターンも多い。よって、日本語クラスに来る学生は①アニメ好き　②英語が苦手　③成績があまり良くないため、教師にすすめられて、という 3 パターンに分けられる。このうち、③のパターンの学生は、大学入試の際に、英語より日本語の方が点数が取りやすいという理由で日本語を選んでいる。

③ＪＣ氏の語り

私は初級中学、高級中学の 6 年間日本語を学び、その後、大学においても日本語を専攻した。現在、初中 1 年生 3 クラスのうちの 1 クラス 29 人と、初中 2 年生の 1 クラス 16 人に日本語を教えている。初中 1 年生の場合、日本語クラスが 3 クラスあるので、それぞれ 3 人の教師が 1 クラスずつ受け持っている。

私は朝鮮語で授業を行い、また、使用している教科書も朝鮮語のものであるが、他の 2 クラスで教えている教師は中国語しかできない教師であるため、中国語で授業を行い、しかも教科書も朝鮮語ではなく、中国語のものを使用している。日本語と朝鮮語は文法的に似ているので、私自身は朝鮮語で教える方が良いと考えている。

初中 1 年生ではまず、「あいうえお」から覚え、その後、助詞や簡単な単語も学ぶ。初中 2 年生になると、日本語で作文も書けるようになる。私は授業中、朝鮮語を 90%、中国語を 10%ほど使っている。まだ初中で習い始めたばかりの学生が多いため、日本語では教えていない。学生に対し、まず朝鮮語で説明するが、それでもわからない場合は中国語で説明している。

今の学生たちは、やはり日本のアニメをよく見ている。学校での質問も、アニメで出てきたわからない日本語についての質問が多い。しかし、最近は日本語よりも英語を学習する学生が多くなっている。初級中学での日本語選択者は、初中 3 年生は 30 人ほどいるが、一つ下の初中 2 年生になると、16 人とほぼ半分に減っている。また、今の学生は朝鮮語よりも中国語の方ができる学生が増えており、その影響で日本語を学習する際も難しさを感じる学生が増えてきている。それは、やはり朝鮮語の方が文法的に日本語と似ているし、日本語の教科書も朝鮮語になっているためだと思う。

現在、吉林市朝鮮族中学校では、日本語以外の科目では朝鮮語と中国語を両方使っている。また、「朝鮮語」の授業では、基本的に朝鮮語で授業が行われるものの、やはり朝鮮語が苦手な学生が多いため、中国語も使っている。

資料９：瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語教師の語り

①ＳＡ氏の語り

私は現在、高級中学２年生３クラス（1,2 組合同クラス 12 名、3,4 組合同クラス 15 名、5,6 組合同クラス 18 名）計 45 名の学生に対して日本語を教えている。日本語の授業は水曜日以外、週に４回あり、１日３コマ授業がある。使用教科書は延辺教育出版社の『普通高級中学校課程標準実験教科書　日語』であり、朝鮮語で書かれている。

授業では朝鮮語を 80%使っている。その理由は、私自身の朝鮮語能力が中国語能力よりも高いからである。朝鮮語は文法や外来語のときに使っている。中国語は受身表現や使役表現、漢字のある単語を説明するときに使っているが、朝鮮語で説明するか中国語で説明するかは、そのとき、そのときで楽な方を選んで使っている。これは普段から朝鮮語と中国語を合わせて使用しているためである。また、授業中は自信のある中国語のみ使っている。

例えば「～することができない」と「～するわけにはいかない」というのは、朝鮮語では、どちらも「～할 수는 없다」だが、中国語では「～することができない」は「不能做～，不会做～」、「～するわけにはいかない」は「不可以那么做～，能力无关～」のように区別することができる。また「～するわけにはいかない」と「～するわけではない」（「并非～，并不是～」）も区別することができる。このような場合は、中国語を使う。また、「なかなか」「めったに」は、朝鮮語ではどちらも「좀처럼」だが、中国語では「なかなか」は「很难」、「怎么也～、不～」、「めったに」は「很少」で区別することができる。例えば、「めったに雪が降らない」は「很少下雪」となる。

日本語は授業中 15%程度の割合で使用している。例えば、主に教室用語（「立って」「答えて」「静かにして」「何ページ開いて」）として使っており、学生が日本語で聞き取れなかった場合は朝鮮語で説明している。

②ＳＢ氏の語り

私は、高級中学１年生３クラス（1,3 組合同クラス、2,4 組合同クラス、5,6 組合同クラス）合計 47 名に日本語を教えている。授業は週に４日、木曜日以外の日にあり、一日３コマの授業を行っている。

授業では 70%ほど朝鮮語を使っている。次に多いのは日本語、最も少ないのは中国語である。朝鮮語は文法の説明、解釈、そして助動詞、助詞、敬語などを説明するときに活用している。日本語は例文を挙げたり、学生に質問したりするときに使う。中国語は、朝鮮語の説明より、中国語で説明した方がぴったり合うときに使う。朝鮮語で説明しにくいものについては中国語の説明を加えている。

例えば、「間に合う」は中国語の「赶趟」の方がぴったりくる。また、中国語の「反対」と日本語の「反対」は意味が異なる。中国語の「反対」は、「ある意見などに対して反対す

る」という意味しかないが、日本語の「反対」は「逆の関係」を表す場合も含まれている。「逆の関係」の意味を表す中国語は「相反」となる。このように、同じ漢字でも意味が違う場合に、中国語を例に出し、その違いを強調して日本語を説明したりする。しかし、中国語をあまり使っていないのは、私自身が中国語が苦手だからだ。

受身表現、使役表現、可能表現については、中国語、朝鮮語両方使ったり、またはどちらか楽な方を選んで使っている。普段から中国語と朝鮮語を混ぜて話しているので、そのとき、そのときで選んで使っている。

③ＳＣ氏の語り

私は 1998 年から現在の学校で日本語を教えている。出身中学も瀋陽市朝鮮族第一中学であるが、そのとき私に日本語を教えていたのがＳＡ先生である。現在、担当しているクラスは高中 3 年生 2 クラスであり、授業は週に 12 時間（1 コマ＝40 分）行っている。

授業は、7 割から 8 割は朝鮮語で教えており、次に日本語が 20%、中国語はほとんど使っていない。日本語は本文を読んだり、読ませたりするときや、朝鮮語を日本語に訳す練習のときに使用している。また、朝鮮語でも区別しにくいもの、説明しづらいものについては、日本語の例文をたくさん挙げて覚えさせたり、中国語で解釈したりしている。決まった表現も日本語でそのまま覚えさせている。朝鮮語は文法の説明や翻訳の際に使用している。特に助詞を説明するときに活用している。中国語については、日本語の副詞や形容詞を説明するときにときどき使用している。例えば、「わざわざ」（特意）、「わざと」（故意）のように中国語では区別できるが、朝鮮語ではどれも「일부러」でしか表せない。また、受身表現や使役表現についても中国語で教えているが、可能表現や推量表現、形式名詞については朝鮮語で教えている。また、単語を教えるときにも活用している。

朝鮮語が苦手な学生は日本語を通じて朝鮮語も学習している感じである。学年によって、学生の朝鮮語レベルも様々であるが、言語能力は環境によって違ってくる。周りが漢族だったら中国語はペラペラになるが、朝鮮語は外国語のように学習することになる。

資料 10：瀋陽市朝鮮族第一中学の日本語授業見学の記録

2015 年 10 月 12 日　月曜日	担当　ＳＡ	クラス 14 名（男性 6 名、女性 8 名）
学年：高級中学 2 年生	使用教材：『日本語同期訓練』（延辺教育出版社） 朝鮮語で書かれたもの。	
時間　14：05　～　14：40		
授業形態：講義形式		

Ｔ＝教師　Ｓ＝学生

①　Ｔ「22 ページを開いてください」

「試験の前は 5 番までやりましたね？5 번까지？（5 番まで）」

②　学生に本文を読ませる。学生が上手に読めたら、ほめる。

「잘 했어요！（よくできました）」

③　漢字を説明するときは中国語。他は朝鮮語で説明。

「是吧？」（そうでしょう？）

④　まず問題文を日本語で読ませて、その後、朝鮮語に翻訳させる。

(6) 彼女は成功している。しかし、_____高い目標に向かって続けて頑張っている。大したものだ。

Ａ．それに　　Ｂ．さらに　　Ｃ．上に　　Ｄ．これから

「それに」＝그리고

(7) もう_____彼に会えないと思ったら、悲しくて涙が出てしまった。

Ａ．一度　　Ｂ．二度と　　Ｃ．三度と　　Ｄ．今度

板書

二度と_____ない 다시는

(8) 「昨日はどうして欠席したのですか。」

「_____急に熱が出たので、病院へ行って注射をしてもらったのです。」

Ａ．実に　　Ｂ．ところで　　Ｃ．実は　　Ｄ．本当に

実は　…　실은
実に　…　정말로，실로

(9) 中国は最近外国から進んだ技術を_____取り入れるようになりました。
A．だんだん　B．どんどん　C．ますます　D．本当に

どんどん　…　계속 계속
だんだん　…　좀좀　例）좀좀 추워졌어요.
ますます　…　越来越 ，더욱더

(10) 今年から兄も働くようになったので、生活_____問題は無くなりました。
A．上から　B．上の　C．上に　D．上を

生活上の問題　…　생활상의 문제
T「中国語でどういう意味？」
S「生活方面的问题」

(11)　宿題を_____してから、遊びなさい。
A．ちゃんと　B．しっかり　C．多く　D．まじめ

ちゃんとしてから　…　꼭 완성하고 ，다 해 놓고
しっかりしてから　…　열심히 하고

(12) 学生のみなさん、運動場へ行って横____一列に並んでください。
A．に　B．で　C．から　D．を

横に　…　中国語で「横排」로 ←　助詞の「に」の部分は朝鮮語で説明

(13)　あの教師はたいへんおもしろい教師でいつも冗談を言って、生徒たちを_____います。
A．笑われて　B．笑わせて　C．笑わせられて　D．笑って

「笑わせています」
T「せる가 뭐예요? 」(「せる」は何ですか？)
S「「게 하다」,「让」」

板書

せる／させる（사역）
Ｖ１　笑う　→　笑わせる　…　让笑　웃게 하다
Ｖ１　立つ　→　立たせる
Ｖ２　食べる　→　食べさせる　…　让吃
Ｖ３　来(く)る　→　来(こ)させる（学生に漢字の読みの部分を読ませる）
　　する　→　させる

⑤　学生に質問しながら説明　：　「공부를 시키다」　→　勉強させる
「숙제를 하게 하다」　→　宿題をさせる

(14) _____若い人はもちろん、年寄りでもコンピューターが使えるようになりました。
A．今　B．今から　C．今では　D．今さら

⑥　学生に文を読ませて、朝鮮語に翻訳させる。朝鮮語で翻訳しづらい部分は中国語で翻訳。

「今では」と「今は」の違い　…　時間の範囲が違う（朝鮮語で説明）

(15) この靴は_____わたしの足に合っていますね。
A．まったく　B．全然　C．すっかり　D．ちょうど

すっかり　…　완전히 다
ぜんぜん　…　전혀

(17) 日本の桜は３月のはじめからきれいな花を咲かせ、人々を_____。
A．楽しいです　B．楽しんでいます　C．楽しませてあげます
D．楽しませてくれます

楽しませる　…　즐겁게 합니다，让我们开心

(19) 息子が父____会議に出席しました。
A．に代わって　B．と代わって　C．を代えて　D．になって

板書

ー　に代わって　을 대신에서

T「９番をします」

(2) もっと（効果的（な））やり方はありませんか。

(4)　昨夜（　　）町が静かになりました。

にぎやかな　×

にぎやかだった　○

T「中国（zhongguo）하면 중국이야」（「中国」と書けば、中国の意味だよ）

T「いいですか？」

授業終了

資料 11：寧安市朝鮮族中学の日本語教師の語り

①ＮＡ氏の語り

私は寧安市朝鮮族中学で 28 年間日本語を教え続けている。今学期は高級中学 3 年生の授業を担当しているが、担当する学年によって教授用語の割合が異なる。初級中学 2,3 年生の場合は、日本語の割合が 80%、高級中学 1,2 年生になると 90%ほどになる。しかし、高中 3 年生になると、その割合は 40%にまで低下する。その理由は、大学受験が近づくため、受験問題対策の授業、つまり文法の説明中心の授業になってしまうからだ。逆に朝鮮語の使用は、初級中学 2,3 年生は 20%であり、高級中学 1,2 年生になると 10%にまで低下するが、高中 3 年生になると 60%ほどになる。

日本語の使用割合が高い教育方法は、寧安市朝鮮族中学において代々行われているやり方である。規則などはないが、先輩教師が日本語で教えている授業を見て、後輩教師たちも自然と日本語による教育方法を継承して行った。

授業では日本語、朝鮮語以外に中国語も活用しているが、使用割合は非常に低い。日本語の漢字がある単語や、朝鮮語では理解できない部分を説明する際に中国語を使用しているが、私自身がそれほど中国語が得意ではないため、ほとんど使っていない。そのため、受身や使役といった文法も中国語ではなく朝鮮語で教えている。

今の学生は朝鮮語より中国語の方ができるため、普段から中国語で話している。学生にとって朝鮮語はまるで外国語のようなものであり、学生は教師と話すときも中国語で話している。今の高級中学の学生が教師と話す時は、半分は中国語、半分は朝鮮語で話しているが、初級中学の学生は 100%中国語で話す。

また朝鮮族の学生にとって日本語は英語よりも簡単であり、大学入試で良い点数が取れるため、日本語を選択する学生が多いが、ここ数年、大学入試の英語科目の点数と日本語科目の点数は差がなくなってきている。

卒業後、中国の大学に行く学生がほとんどだが、韓国に留学する学生も多い。これは両親が韓国に出稼ぎに行っていることも大きく関係していると思われるが、朝鮮族の 80%以上は出稼ぎに行っているために学生たちは祖父母、親戚と一緒に住んでいることが多く、これは教育的にはあまり良くない環境である。

黒龍江省は中国東北地方の中でも最も日本語教育が盛んに行われて来た地域であり、寧安市朝鮮族中学は特に日本語教育に熱心な学校として有名であった。しかし、近年、その黒龍江省においても日本語教育がなくなってきており、寧安市の近くにある海林市の朝鮮族学校でも最近日本語の授業がなくなってしまった。黒龍江省の日本語教育の衰退の原因として、二つの原因が挙げられる。一つ目は、大学入試の日本語科目と英語科目の点数の差が近年なくなってきていることである。80 年代、90 年代は日本語科目と英語科目の点数の差が平均で 20 点ほどもあり、寧安市朝鮮族中学の学生の日本語の点数は英語の平均点よ

りさらに 32 点も高かった。かつて日本語は大学入試に有利な科目として、大きな魅力があったが、その最大の魅力も近年の外国語科目の難易度の変化により、失われつつある。

二つ目の原因としては、大学選択の幅が狭くなってしまうという点にある。例えば、学生が医科大学に合格し、入学すると英語で授業が行われる。そのため、中学で日本語を学習していた場合、英語ができないため不利になる。実際に、2003 年に成績優秀な学生が北京にある有名な医科大学に合格したが、中学で英語ではなく日本語を選択し学習してきたため、入学前に 1 年間英語を学習してから大学に入学することになってしまった。しかし、英語を学習しようとすれば、日本語の 2 倍は学習しなくてはならないと思う。

②ＮＢ氏の語り

私は 1999 年から寧安市朝鮮族中学で日本語を教えており、現在は初級中学 3 年生の授業を担当している。授業では 80%ほど日本語を使い、20%ほど朝鮮語を使う。朝鮮語は主に文法、単語を解釈するときに使っている。中国語は私自身があまり得意ではないために、ほとんど使っていない。しかし、学生たちが朝鮮語で理解できないときは、中国語で説明したりしている。授業はまず最初に単語テストを行い、ひとつ間違えたら、その単語を 1 回ずつ書かせるようにしている。会話練習ではロールプレイも行い、学生たちは楽しそうにやっている。また聴解は教科書に沿って行い、読解は教科書とは別に練習帳を使って練習させたりしている。作文は、初中 1 年生の後期から行うが、学年が上がるにつれて、書く量を増やしている。しかし、学生は作文に難しさを感じている。授業の最後にグループごとにゲームを行い、ひとつ間違えれば宿題として単語を 1 回ずつ書かせ、二つ間違えれば 2 回ずつ書かせるようにしている。

現在、初級中学 3 年生は全部で 50 名在籍しているが、そのうち 3 名は漢族であり、15 名は両親の片方が朝鮮族、片方が漢族のハーフの学生である。また、初級中学 1,2 年生になると、朝鮮族と漢族の割合がほぼ同じになる。漢族の学生が朝鮮族学校に入学するのは、親の考え方が大きい。漢族の学校は厳しく、競争も激しい。しかし、朝鮮族学校に入れば、学習以外の活動も多く、中国語以外に朝鮮語もできるようになるというメリットもある。

学生が日本語を選択すると、大学選択の幅が狭くなってしまう。また、これまで英語の試験の出題範囲は広く、日本語に比べ学習する量が多かったが、最近は範囲が狭くなり、その結果、以前に比べて点数が取りやすくなっている。一方、日本語の試験は英語とは異なり、問題の難易度が少し上がったため、英語と日本語の点数の差がなくなってきている。また、学生の両親が将来のことを考えて、学生に英語をすすめることが多く、社会に出れば日本語に比べ英語が役に立つという考え方がある。学生たちは小学生のころから英語を学習しているが、英語ができない学生は日本語を選択したり、全体的に成績があまり良くない学生も日本語を選択する傾向がある。一方、成績が優秀な学生は英語を選択する場合が多いが、それは学年によっても違う。また、英語を選択する学生が増えてはいるものの、

英語は単語が覚えにくいと感じている学生も多い。それとは逆に日本語は朝鮮語と中国語を活用すれば覚えやすいという利点がある。

③ＮＣ氏の語り

私は、もともと地理の教師であった。中学で 6 年間日本語を学習したが、大学での専攻は歴史であった。当初は地理のみを教えていたが、日本語教師が足りなかったため、独学で日本語を学びなおし、日本語を教えることになった。しかし、2002 年に勤めていた学校が廃校になったため、寧安市朝鮮族中学で日本語を教えることになった。2012 年まで初級中学で日本語を教えていたが、2012 年 9 月から高級中学で日本語を教えている。現在は高中 2 年生の授業を担当している。

授業では、80％は日本語を使い、20％は朝鮮語を使っている。日本語は教室用語として使い、朝鮮語は文法解釈のとき使っている。中国語はあまり使っていない。

英語については、大学入学の条件に英語を求めているところもあり、日本語を選択すれば、やはり大学選択の幅が狭くなってしまうというマイナス面がある。

英語の教師は朝鮮語より中国語の方が得意であり、日本語の教師は中国語より朝鮮語の方が得意である人が多い。しかも英語を教えている朝鮮族教師は小さいころ、漢族学校に通っていた教師が多い。

資料 12：寧安市朝鮮族中学の日本語授業見学の記録

<table>
<tr><td>2015 年 10 月 14 日　水曜日</td><td>担当　ＮＢ</td><td>クラス 27 名（男性 8 名、女性 19 名）</td></tr>
<tr><td>学年：初級中学 3 年生</td><td colspan="2" rowspan="2">使用教科書・課：『義務教育教科書 日語 9 学年用』
延辺教育出版社（朝鮮語版）第 3 課</td></tr>
<tr><td>時間　9：20　～　10：00</td></tr>
<tr><td colspan="3">授業形態：講義形式</td></tr>
<tr><td colspan="3">Ｔ＝教師、Ｓ＝学生

Ｓ「先生、こんにちは」
Ｔ「単語のテストです。準備してください」

①　単語テスト
教師が朝鮮語で日本語の単語を読み、それを学生が日本語で書く。

・여름　→　夏　・가을　→　秋　・시원하다　→　涼しい
・바람이 새다　→　風が強い　・비가 내리다 →　雨が降る

②　本文
第 3 課「子どもの頃の夢を忘れない」(p. 36)
テープで本文を 2 回聴く。
1 回目はただ単に聴くのみ
2 回目は聴きながら小さな声に出して読む。
Ｔ「みなさんは小さな声で読みます」

板書
本文の学習
一．テープを聞きなさい。
二．自由読
一　本文に出ている新出語を捜しながら読みなさい
三．新出語の学習

③　学生を一人ずつ指名して、本文を読ませる。
Ｔ「本文を読んで、新しい単語を探してください」</td></tr>
</table>

間違った場合　　S「10 月 15 円…」
T「15 円ですか？」
S「15 日」
T「続けて、○○さん、どうぞ」

学生が漢字の読み方を間違ったとき
T「(主人公について)“しゅうじんこう”ですか？“しゅじんこう”ですか？」
S「しゅじんこう」

T「生活する日（にち）ですか？」
S「生活する日（ひ）です」
T「はい、よくできました」

④　新出単語
まず、学生に単語を読ませて、その後、朝鮮語に翻訳させる。

科学　→　과학
博物館　→　박물관
研究者　→　연구자
仕組み　→　구조
特別　→　～で　→　～だった　→　～ではない（な形容詞の活用練習）
必ず　→　반드시
どうやって　→　어떻게
信じる　→　믿다　　信じて　→　信じた　→　信じない
（動詞のときは、取り出して活用練習）
動く
T「て形？」
S「動いて」
T「た形？」
S「動いた」
T「ない形？」
S「動かない」

⑤　テープで単語を流し、それに続いて学生に単語を読ませる。

⑥　2 回ずつ単語を読ませる。

⑦　単語をノートに 2 回ずつ書いて覚えさせる。

⑧　T「宿題は単語を 3 回ずつ書いてくることです」

⑨　最後にグループごとに単語を読ませて翻訳させるゲームをする。
もし間違ったら、そのグループは宿題の単語をより多く書いてこなくてはならない。
学生たちは一生懸命覚えはじめる。

⑩　最後に動詞の活用を「て形、た形、ない形」の順に言わせて復習する。

S「起立！」

授業終了

資料 13：梅河口市朝鮮族中学の日本語選択者に対するアンケート調査用紙

（朝鮮語で実施。以下は日本語に翻訳したもの）

あなたの性別（　　）生年月日（　　）学年（　　）

１．日本語を学習してどのくらいになりますか。　（　　）年　（　　）ヶ月

２．日本語を学習し始めたきっかけはなんですか。〔複数回答可〕（　　）

Ａ：家族及び親戚の影響　Ｂ：友人の影響　Ｃ：日本の漫画やアニメの影響

Ｄ：学校で学習しなければならなかったから　Ｅ：その他（　　）

３．学校で日本語を選択した理由はなんですか。〔複数回答可〕（　　）

Ａ：日本語に興味があったため

Ｂ：日本語は他の言語に比べて学習しやすいから

Ｃ：学校で決められていたから

Ｄ：その他（　　）

４．日本語の授業でおもしろい点はどんな点ですか。〔複数回答可〕（　　）

Ａ：日本語会話　Ｂ：日本語文法　Ｃ：日本語聴解　Ｄ：日本語作文

Ｅ：日本語読解〔発音、アクセント〕Ｆ：その他（　　）

５．日本語授業で難しい点はどんな点ですか。〔複数回答可〕（　　）

Ａ：日本語会話　Ｂ：日本語文法　Ｃ：日本語聴解　Ｄ：日本語作文

Ｅ：日本語読解〔発音、アクセント〕Ｆ：その他（　　）

６．日本語授業で今後、受けてみたい内容はなんですか。〔複数回答可〕

Ａ：日本の漫画やアニメ　Ｂ：日本人との会話　Ｃ：日本の歴史、文化理解

Ｄ：大学入学試験のための授業　Ｅ：日本語の資格〔JLPT、EJU など〕のための授業

Ｆ：その他（　　）

７．今、授業で使っている教科書はどうですか。（　　）

Ａ：とても良い　Ｂ：良い　Ｃ：ふつう　Ｄ：あまり良くない　Ｅ：良くない

８．７番の回答の理由はなんですか。（　　）

９．日本語の学習をする上で、良い点はなんですか。〔複数回答可〕

Ａ：朝鮮語と文法が似ており、学びやすい

Ｂ：大学入試のときに有利である

Ｃ：日本の漫画やアニメ、ドラマなどを理解することができる

Ｄ：将来、日本で勉強できる機会がある

Ｅ：今後、日本に留学できる機会がある

Ｆ：その他（　　）

１０．今後（学校を卒業しても）日本語の学習をしたいですか。（　　）

Ａ：したい　→　理由〔　　〕

Ｂ：したくない　→　理由〔　　〕

Ｃ：よくわからない

１１．家族、または親戚の中に、日本語ができる方はいますか。（　　）

Ａ：いる　→　だれですか〔　　〕

Ｂ：いない

資料 14：鉄嶺市朝鮮族高級中学、吉林市朝鮮族中学校、和龍第三中学校の日本語選択者に対するアンケート調査用紙

（朝鮮語または中国語で実施。以下は日本語に翻訳したもの）

あなたの性別　□男性　□女性　　生年月（　　年　　月）出身地（　　）
学年　□初中　□高中（　　）年生　　日本語学習歴（　　）年（　　）ヶ月

１．いつから日本語の学習を始めましたか？　（　　）

　　Ａ：初級中学から　Ｂ：高級中学から

［　Ａ → ２から回答　　Ｂ → ３から回答　］

２．あなたの初級中学について質問します。

２－１　初級中学の名前は何ですか？（　　）

２－２　初級中学で日本語を選択した理由はなんですか？[複数回答可]

□：日本語に興味があったから

□：日本の大衆文化(漫画、アニメ、ドラマ、ゲーム、J-POP など)に興味があったから

□：日本語は他の言語に比べて学習しやすいから

□：試験の成績が良くなくて、日本語クラスに入れられたから

□：学生自身が英語、または日本語を選ぶことができなかったから

□：外国語科目が日本語しかなかったから

□：将来、日本に留学したいから

□：将来、日本語を活かした仕事がしたいから

□：英語が嫌いだから

□：家族や親戚が日本語をしゃべれるから

その他　（　　）

２－３　初級中学の日本語授業の内容はどんなものですか？[複数回答可]

□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

２－４　初級中学の日本語授業で難しいところはどんなところですか？[複数回答可]

□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

２－５　初級中学の日本語授業で面白いところはどんなところですか？[複数回答可]

□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

２－６　初級中学にはどんな日本語の教師がいますか？[複数回答可]

□：朝鮮族の教師　　□：漢族の教師　　□：日本人の教師　その他＿＿＿＿＿＿

３．あなたの高級中学について質問します。

３－１　高級中学で日本語を選択した理由はなんですか？[複数回答可]

□：初級中学で日本語を学習したから

□：日本語に興味があったから

□：日本の大衆文化(漫画、アニメ、ドラマ、ゲーム、J-POP など)に興味があったから
□：日本語は他の言語に比べて学習しやすいから
□：試験の成績が良くなくて、日本語クラスに入れられたから
□：学生自身が英語、または日本語を選ぶことができなかったから
□：外国語科目が日本語しかなかったから
□：将来、日本に留学したいから
□：将来、日本語を活かした仕事がしたいから
□：英語が嫌いだから
□：家族や親戚が日本語をしゃべれるから
その他　（　　）

３－２　高級中学の日本語授業の内容はどんなものですか？[複数回答可]
□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

３－３　高級中学の日本語授業で難しいところはどんなところですか？[複数回答可]
□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

３－４　高級中学の日本語授業で面白いところはどんなところですか？[複数回答可]
□:会話　□:文法　□:聴解　□:読解　□:作文　その他（　　）

４．日本語の授業で、これからやってほしい授業はどんなものですか？[複数回答可]
□：日本の漫画、アニメ、ドラマ、J-POP など
□：日本の歴史や文化理解　　□：大学入学のための授業
□：日本語の資格試験合格のための授業　　□：ビジネス日本
□：日本人との会話授業
その他（　　）

５．日本語の学習の良い点はどんなところですか？[複数回答可]
□：朝鮮語と文法が似ているので、覚えやすい
□：大学入学試験のとき有利
□：日本の漫画、アニメ、ドラマ、歌などを理解できる
□：将来、日本に留学できる機会がある
□：将来、日本で働いたり、日系企業に就職したりする機会がある
□：就職に有利
□：日本人の友人ができる
□：特にない　　その他（　　）

６．日本語の学習の良くない点はどんなところですか？[複数回答可]
□：動詞の活用や敬語などが複雑で覚えにくい
□：大学入試で、英語の方が良い点数が取れそう
□：日本や日本語に興味がないのに、学習していて無駄
□：将来、使うことがなさそう

□：日本語より英語の方が就職に有利だし、役に立ちそう
□：日本ではなく、他の国に留学、または就職したい
□：親から日本語じゃなくて英語の学習をしてほしいと言われる
□：特にない　　その他（　　）

7．あなたの日本語能力について質問します。あなたの日本語レベルは１～５のうち、どれですか？〔　〕の中に記入してください。【５･･･とてもよくできる　４･･･よくできる　３･･･ふつう　２･･･あまりできない　１･･･できない】

話す〔　　〕　　読む〔　　〕　　聞く〔　　〕　　書く〔　　〕

日本語の資格があれば、書いてください。　□：JLPT　N〔　〕　その他＿＿＿＿＿＿

8．あなたの朝鮮語と中国語の能力について質問します。

８－１　あなたは朝鮮語と中国語､どちらができますか？3 つの中､1 つ選んでください。
□：朝鮮語の方ができる　→　朝鮮語能力が 100%なら、中国語能力は（　　）%
□：中国語の方ができる　→　中国語能力が 100%なら、朝鮮語能力は（　　）%
□：朝鮮語も中国語も同じくらいできる。

８－２　あなたは普段、どんなときに朝鮮語を使いますか？[複数回答可]
□：家族と話すとき　　□：友人と話すとき　　□：教師と話すとき
□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき
その他（　　）

８－３　あなたは普段、どんなときに中国語を使いますか？[複数回答可]
□：家族と話すとき　　□：友人と話すとき　　□：教師と話すとき
□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき
その他（　　）

８－４　日本語を学習するとき、朝鮮語と中国語をどのように活用していますか。
できるだけ具体的に書いてください。
例）文法を理解するときは朝鮮語、単語や漢字を覚えるときは中国語を使う。

朝鮮語	
中国語	

８－５　日本語の授業で教師が使う言葉として、最も良いと思うのはどれですか？
1 つだけ選んでください。また、それを選んだ理由はなんですか？
□：朝鮮語だけ　　□：中国語だけ　　□：日本語だけ　　□：朝鮮語と中国語
□：朝鮮語と日本語　　□：中国語と日本語　　□：中国語と朝鮮語と日本語

理由

９．家族の中で、日本語教育を受けた人はいますか？それは誰ですか？[複数回答可]

□：父　□：母　□：祖父　□：祖母　□：兄弟、姉妹　□：その他の親戚

資料 15：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査①対象者の語り

①ＳＤ氏の語り

私は祖父母と一緒に暮らしている。家では朝鮮語と中国語を混ぜて使っている。学校では友達とも教師とも中国語で話す。学校の外では、朝鮮語と中国語を混ぜて使っている。人が多いところではあえて朝鮮語で話している。それは漢族が朝鮮語を聞き取れないからだ。漢族に聞かれたくないときは朝鮮語で話したりする。

日本語を学習するとき、受身表現は中国語の「被」を使っている。受身表現を朝鮮語で理解するのは難しい。使役表現は中国語の「让」を使う。使役表現も朝鮮語では翻訳するのが難しいからだ。可能表現は朝鮮語の「할 수 있다」で理解する。それは、教科書が朝鮮語で翻訳されているからである。教師も朝鮮語で説明するため朝鮮語の方が理解しやすい。

推量表現は、朝鮮語の「～ㄹ 것이다」で理解している。理由は翻訳が簡単で、そのまま翻訳すればいいからだ。中国語の「可能」を使う場合は、主語の後にすぐ来ることになる。つまり「Ｓ＋可能＋Ｖ＋Ｏ」の形となるが、朝鮮語の場合は日本語同様「Ｓ＋Ｏ＋Ｖ＋～ㄹ 것이다」となるから、朝鮮語が順序が一緒で覚えやすい。「間に合う」という表現は、中国語の「赶趟」で理解する。教師は朝鮮語の「제 시간에 가닿다」で説明するが、朝鮮語よりも中国語の方がぴったりくるから中国語で理解している。

教師は普段から中国語の漢字と日本語の漢字を比較させながら教えている。例えば、「手紙」というのは、中国語では「トイレットペーパー」という意味なので、日本語の「手紙」を覚える場合は、意味は朝鮮語の「편지」で覚え、文字はそのまま「手紙」で覚える。つまり、文字は中国語を活用し、意味は朝鮮語を活用している。

②ＳＥ氏の語り

私は父と一緒に暮らしている。家では朝鮮語で話しており、中国語はあまり使わない。学校では、友達とは朝鮮語と中国語を混ぜて話している。教師とは中国語で話す。授業以外でも教師とは中国語で話す。それは普段、中国語で学習しているため慣れているからだ。学校の外でも中国語を使っている。

受身表現は朝鮮語で覚えた。使役表現は、中国語の「让」を使う。可能表現は朝鮮語の「할 수 있다」で理解する。それは、教科書が朝鮮語で翻訳されているからである。教師も朝鮮語で説明するため、朝鮮語で理解する。推量表現は朝鮮語の「～ㄹ 것이다」で理解している。

③ＳＦ氏の語り

私は家では中国語を使っているが、両親は朝鮮語で話している。両親は朝鮮語で話すが、私は中国語で話している。それは中国語で話すことに慣れているからだ。朝鮮語でしゃべ

るのは嫌だ。それは朝鮮語で話すのが苦手だからだ。学校では友達とは中国語、教師とも中国語で話す。学校の外でも中国語で話す。私は漢族の幼稚園に通っていたため、中国語には慣れている。小学校は朝鮮族学校に通い、小学校から「韓国語」を学習しはじめた。

受身表現は中国語の「被」で覚え、使役表現も中国語の「让」で覚える。可能表現も、中国語の「会、能」で理解する。それは、中国語で理解する方が簡単だからだ。教師が朝鮮語で説明しても、それを中国語で理解している。このような切り替えが朝鮮族はみんなできる。推量表現は、朝鮮語の「～ㄹ 것이다」で理解している。「間に合う」という表現は、中国語の「赶趟」で理解している。

資料 16：瀋陽市朝鮮族第一中学・学習者インタビュー調査②対象者の語り

①ＳＧ氏の語り

私は家では両親と一緒に住んでいるが、中国語と朝鮮語を混ぜて話したり、または中国語だけで話したり、朝鮮語だけで話したりする。それは気分次弟である。学校では、女子学生と話すときは朝鮮語を使う。その理由は中国語は朝鮮語に比べてかたい感じがするからだ。男子学生と話すときは中国語で話す。女子学生はよく韓国ドラマを見るので、朝鮮語が得意である。一方、男子学生はゲームだけしているので、中国語で話す機会が多いため、中国語が得意である。そのため、女子学生と男子学生が話すときは、どちらかの言語に合わせるか、または男子学生は中国語、女子学生は朝鮮語と、お互い違う言語で話したりするときもある。ネット上でチャットするときは、中国語入力にするか朝鮮語入力にするかは気分次弟である。発音やアクセントを気にしなくてもいいので気楽にできる。

初級中学１年生のとき、日本語のテストで 90 点以下を取ることがなかった。逆に英語は初級中学１年生のとき、いつも 60 点以下だった。日本語と英語で 50 点ほど差があった。英語が苦手な反面、日本語はゼロから学習しても短期間で良い点数が取れる。日本語はアニメで聞き取り能力、ゲーム（ニンテンドー３ＤＳ）で読解能力を上げることができる。でも今は日本語を選択したことを後悔している。

日本語の受身表現は中国語で理解しているが、使役表現は日本語で理解している。依頼表現は朝鮮語の「～해 주세요」（～してください）で理解している。可能表現は中国語の「能、会」（できる）を使っている。単語は主に中国語で覚え、助詞や敬語は朝鮮語を使っている。

日本語の良いところは日本に行ける機会がある点である。将来は日本の医学を学びたいと考えている。

②ＳＨ氏の語り

家では中国語と朝鮮語を混ぜて話す。または中国語だけで話したり、朝鮮語だけで話したりする。両親は韓国に出稼ぎに行っており、今は祖母と妹（初級中学１年生）と一緒に住んでいる。学校でも中国語、朝鮮語両方で話す。学校外では、朝鮮族の人がやってるお店では朝鮮語で話すが、それ以外は中国語で話す。ネット上でチャットするときは、中国語入力と朝鮮語入力があるが、入力切替が面倒くさいので、あえて中国語と朝鮮語で切り替えて入力しない。どちらか一方のままで入力する。

私は日本が大好きだから日本語を選択した。小学生だったとき、父が日本のアニメが好きで、よく見ていた。日本語は美しいと思う。耳障りも良い。ちなみに妹も自分の影響で日本を好きになった。妹は学校では英語を選択しているが、自分で日本語の参考書を買って学習している。受身、使役、可能表現すべて中国語で理解している。日本語の良いところは日本の大学に行けることである。また、日本人と交流できる点も良いと思う。

③ＳＩ氏の語り

私は家では中国語でしゃべるが、父は「韓国語」でしゃべる。母は韓国に出稼ぎに行っている。学校では中国語でしゃべる。しかし、インターネットでチャットをするときは、朝鮮語を使う。なぜなら、実際に朝鮮語を話すとアクセントが苦手なため恥ずかしいが、チャットなら文字なので関係ないからである。チャットは相手によって朝鮮語を使うか中国語を使うか変わってくる。また、韓国に行ったときも韓国語を使う。

小学生の頃は、英語の成績がよかったが、中学生のとき英語のレベルが下がり、それがショックで日本語にした。日本語の文法は、受身表現は中国語で理解するが、使役表現と可能表現は朝鮮語で理解している。

日本語の良いところは日本の企業で就職できる可能性がある点である。外国語ができることはすばらしいことだと思う。

④ＳＪ氏の語り

家では朝鮮語のみ使う。両親は韓国に出稼ぎに行っているので、祖父母と一緒に住んでいる。祖父は朝鮮語ができ、祖母は中国語ができる。学校では、友達と話すときは中国語である。また、好きな女子学生とは朝鮮語で話す。その理由は、朝鮮語は中国語と比べて柔らかい感じがするからである。教師と話すときは、その状況による。例えば、自分が悪いことをして、教師に謝るときは朝鮮語で話す。朝鮮語は敬語があるから、教師に尊敬の気持ちを伝えやすいからである。学校外では中国語で話す。

昔は英語ができなかったので、英語のテストで60点以上を取れなかった。アニメを見ていたときは、アニメの影響で日本語が好きだった。今はアニメをあまり見なくなったから、日本語に対する興味もなくなってしまった。日本語の文法は、受身、使役、可能表現ともに中国語で理解している。日本語の良いところは、将来日本に留学したり就職できるチャンスがあることだ。

⑤ＳＫ氏の語り

家では中国語、学校では中国語、学校外でも中国語で話している。私は朝鮮族幼稚園、朝鮮族小学校に通っていた。両親が通わせたのだが、漢族の幼稚園の教育は厳しいため、リラックスできる朝鮮族の幼稚園に通わせたのだと思う。朝鮮語を使うのは「朝鮮語」の授業のときだけである。

初級中学１年生のときはアニメが好きだったから、日本語を選択した。英語は自分でできると思っていたけど、実際はなかなかできなかった。日本語は初級中学のときは簡単だったが、高級中学に入って難しくなった。日本語の文法は、受身表現と使役表現は中国語で理解し、可能表現は朝鮮語で理解している。なぜなら、朝鮮語と日本語は文法が似ているし、教師は昔から朝鮮語で日本語の文法を説明しているからである。日本語の良いところは、たくさんの言葉を学習できる点である。

資料 17：瀋陽市朝鮮族第一中学及び寧安市朝鮮族中学の日本語選択者に対するアンケート調査用紙

（中国語で実施。以下は日本語に翻訳したもの）

あなたの性別　□男性　□女性　　生年月（　　年　　月）出身地（　　）	
学年　□初中　□高中（　　）年生　　日本語学習歴（　　）年（　　）ヶ月	

１．あなたの日本語能力について質問します。あなたの日本語レベルは１～５のうち、どれですか？〔　〕の中に記入してください。【５･･･とてもよくできる　４･･･よくできる　３･･･ふつう　２･･･あまりできない　１･･･できない】

話す〔　　〕　　読む〔　　〕　　聞く〔　　〕　　書く〔　　〕

日本語の資格があれば、書いてください。　□：JLPT　N〔　〕　その他＿＿＿＿＿＿

２．あなたの朝鮮語と中国語の能力について質問します。

２－１　あなたは朝鮮語と中国語、どちらができますか？3 つの中、1 つ選んでください。

□：朝鮮語の方ができる　→　朝鮮語能力が 100%なら、中国語能力は（　　）%

□：中国語の方ができる　→　中国語能力が 100%なら、朝鮮語能力は（　　）%

□：朝鮮語も中国語も同じくらいできる。

２－２　あなたの朝鮮語能力について質問します。あなたの朝鮮語レベルは１～５のうち、どれですか？〔　〕の中に記入してください。

【５･･･とてもよくできる　４･･･よくできる　３･･･ふつう　２･･･あまりできない　１･･･できない】　話す〔　　〕　　読む〔　　〕　　聞く〔　　〕　　書く〔　　〕

２－３　あなたの中国語能力について質問します。あなたの中国語レベルは１～５のうち、どれですか？〔　〕の中に記入してください。

【５･･･とてもよくできる　４･･･よくできる　３･･･ふつう　２･･･あまりできない　１･･･できない】　話す〔　　〕　　読む〔　　〕　　聞く〔　　〕　　書く〔　　〕

２－４　あなたは普段、どんなときに朝鮮語を使いますか？[複数回答可]

□：家族と話すとき　　□：友人と話すとき　　□：教師と話すとき

□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき

その他（　　）

２－５　あなたは普段、どんなときに中国語を使いますか？[複数回答可]

□：家族と話すとき　　□：友人と話すとき　　□：教師と話すとき

□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき

その他（　　）

２－６　日本語を学習するとき、朝鮮語と中国語をどのように活用していますか。

できるだけ具体的に書いてください。

例）文法を理解するときは朝鮮語、単語や漢字を覚えるときは中国語を使う。

使役表現は朝鮮語、受身表現は中国語で理解する。

朝鮮語

中国語

２－７　日本語の授業で教師が使う言葉として、一番良いと思うのはどれですか？
下から１つだけ選んでください。また、それを選んだ理由はなんですか？

□：朝鮮語と中国語と日本語　□：朝鮮語と中国語　□：朝鮮語と日本語
□：中国語と日本語　□：朝鮮語だけ　□：中国語だけ　□：日本語だけ

理由

３．家族の中で、日本語教育を受けた人はいますか？それは誰ですか？[複数回答可]
□：父　□：母　□：祖父　□：祖母　□：兄弟、姉妹　□：その他の親戚

資料 18：寧安市朝鮮族中学・学習者インタビュー調査対象者の語り

①ＮＤ氏の語り

私は祖父母と一緒に暮らしてる。家では朝鮮語を使っている。学校では 80%は中国語を使う。ネットでは、80%朝鮮語を使う。理由は親切に聞こえるからである。またアルファベットで入力しなくていいから便利である。学校外では中国語を使っている。日本語は英語に比べて簡単だ。いとこのお姉さんが日本語の教師だから日本語を選んだ。

②ＮＥ氏の語り

私は叔母と一緒に暮らしている。家では中国語を使う。学校でも 80%は中国語を使う。ネットでは、90%は中国語を使う。学校外でも中国語で話す。日本語は特別な言葉という感じがする。英語はみんな小さい頃から習っているため、しゃべれるので　特別な感じがしない。英語を学習するときは中国語で理解している。英語は塾でも学習できるので中学で学習する必要はない。英語塾はたくさんあるが、日本語塾は少ない。つまり、日本語を学習できるところは限られている。

③ＮＦ氏の語り

私は祖父母と一緒に暮らしている。家では朝鮮語で話す。学校では 80%は中国語を使う。ネットでは、80%は中国語、10%は朝鮮語、10%は日本語を使う。学校外では中国語を使う。小学校 5 年生のとき、英語を学習したので、中学では日本語を学習したいと思った。英語は助詞（at, in など）も覚えにくいし、単語が長いので覚えづらい。

④ＮＧ氏の語り

私は両親と一緒に暮らしている。家では朝鮮語で話している。学校では 80%は中国語を使っている。ネットでは、90%は朝鮮語、10%は中国語を使う。学校外では中国語を使う。

⑤日本語についての語り（4 名とも共通）

日本語の文法は朝鮮語で理解している。例えば自動詞・他動詞の区別などは朝鮮語を使っている。また、単語の読み方も「にほんご（니혼고）」のように朝鮮語を活用している。

しかし、漢字がある単語は中国語を活用し、受身は「被」、使役は「让」で理解したりしている。日本語の授業はやはり日本語を使って教えてもらいたい。

⑥他の科目についての語り（4 名とも共通）

外国語科目は「日本語」と「英語」があるが、「日本語」は主に日本語と朝鮮語で教えられ、「英語」は主に中国語で教えられる。「漢語（中国語）」は朝鮮族の先生が中国語で教えている。また、「朝鮮語」の授業は朝鮮語で教えており、「歴史」も朝鮮語で教えている。

ただし、例えば「ホモ・サピエンス」など固有名詞が長い場合は、「智人」というふうに中国語で簡単に表したりすることもある。「物理」は、教師は朝鮮語と中国語を半々の割合で使用している。それは、テストが朝鮮語で出題されるからである。しかし、朝鮮語の教材は少ない。「化学」は 80%は中国語、20%は朝鮮語で教えている。「数学」は中国語 50%、朝鮮語 50%の割合であり、「政治」は中国語 20%、朝鮮語 80%の割合である。その他の科目としては、「体育」「美術」「生物」「地理」などがある。このうち「生物」と「地理」は初級中学 1,2 年生のときだけ習う。基本的に文系科目は朝鮮語、理系科目は中国語で教えられる。

資料 19：ＴＣ氏に対するインタビュー調査質問紙「朝鮮族教師の日本語教育に関する調査」

あなたの性別　□男性　□女性　　生年月（　　年　　月）出身地（　　）
日本語学習歴（　　）年（　　）ヶ月　日本語教授歴（　　）年（　　）ヶ月
出身初級中学〔　　〕（　　）年入学　（　　）年卒業
出身高級中学〔　　〕（　　）年入学　（　　）年卒業
大学〔　　〕専攻〔　　〕（　　）年入学　（　　）年卒業
日本語を教えた学校〔　　〕（　　）年～（　　）年
〔　　〕（　　）年～（　　）年
〔　　〕（　　）年～（　　）年

１．あなたの朝鮮語と中国語の能力について質問します。

１－１　あなたは朝鮮語と中国語、どちらができますか？3 つの中、1 つ選んでください。

□：朝鮮語の方ができる　→　朝鮮語能力が 100%なら、中国語能力は（　　）%

□：中国語の方ができる　→　中国語能力が 100%なら、朝鮮語能力は（　　）%

□：朝鮮語も中国語も同じくらいできる。

１－２　あなたは普段、どんなときに朝鮮語を使いますか？[複数回答可]

□：家族と話すとき　□：友人と話すとき　□：学生と話すとき

□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき

その他（　　）

１－３　あなたは普段、どんなときに中国語を使いますか？[複数回答可]

□：家族と話すとき　□：友人と話すとき　□：学生と話すとき

□：外で買い物をしたり食事をしたりするとき　□：インターネットを利用するとき

その他（　　）

２．日本語授業の際、日本語、朝鮮語、中国語を使う割合はそれぞれ何%でしたか？また三つの言語をどのように使い分けていましたか？具体的に教えてください。

３．あなたが教えていた学校では、１コマの授業は何分でしたか？また、日本語授業は週に何コマありましたか？　　１コマ　＝　（　　）分

□：１コマ　□：２コマ　□：３コマ　□：４コマ　□：５コマ　□：６コマ

□：７コマ以上

４．使用していた教科書は何でしたか？また、それは何語で書かれたものでしたか？

教科書の名前〔　　〕　□：朝鮮語　□：中国語

５．日本語クラスは学校全体で（初中、高中合わせて）いくつありましたか？

また１クラス何人の学生がいましたか？（最後に教えたとき）

日本語クラス数（　　）クラス　　１クラス（　　）人

６．日本語クラスがなくなってしまった理由は何だと思いますか？

７．今、学校ではどのような仕事をしていますか？

８．あなたが卒業した学校（初中、高中）の日本語の教師について質問します。

８－１　学校にはどんな日本語教師がいましたか？また、それぞれ何人いましたか？
［複数回答可］

□：朝鮮族の教師（　　）人　　□：漢族の教師　（　　）人

□：日本人の教師（　　）人　　その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

８－２　朝鮮族の教師は、どのような教師でしたか？また、どのように日本語を教えていましたか？

・性別（　　）年齢（　　）代　担当学年：□初中　□高中（　　）年

・使用言語：□：朝鮮語　□：中国語　□：日本語

・教師の日本語学習歴

□：偽満洲時代に日本語教育を受けた　□：大学の専攻が日本語だった

□：初中・高中で日本語を学習した　□：独学で日本語を学習した

□：日本に留学していた

その他：（　　）

・教師の日本語能力について

例）会話は上手だったが、発音やイントネーションはあまり上手ではなかった。

・どのように日本語を教えていましたか？具体的に教えてください。

例）文法中心の授業。教科書を学生に読ませる。会話練習は少ないなど。

・教師の教え方について

例）文法中心の授業。会話練習は少ない。

資料 20：通化市朝鮮族学校の教師の語り

①ＴＡ氏の語り

私は学校で事務の主任を担当している。日本語の授業は、学校の正規の授業として 2013 年まであった。日本語教育はもともと 1977 年から始まり、学校には初級中学 1 年から高級中学 3 年まで各学年 2 クラスずつ日本語クラスがあった。1 クラスは日本語を普通に学ぶクラスであり、もう 1 クラスは大学入試のために日本語を学習するクラスであった。2001 年には外国語科目として各学年、英語 2 クラス、日本語 1 クラスあり、学生が選択できるようになっていた。当時は朝鮮語ができる学生が多かったために、教師たちは朝鮮語で教えていた。日本語の教師は 4 名おり、いずれも大学で日本語を専攻していた教師たちだった。その教師たちは今、日本語の授業がなくなってしまったため、学校内で別の仕事をしている。現在、日本語の教師は、もし日本に留学したいという学生がいれば、その学生にアドバイスをしたりする役目も果たしている。

実は 2004 年、2005 年は、日本語を学習する学生を学校で募集した。つまり、学校の中で日本語学校をつくる形にした。名前は「通化市日本語学校」であったが、2 年間学生を募集した結果、学生がいなくなったためにやめてしまった。最後の日本語クラスは 10 名もおらず、しかも学生たちは通化市朝鮮族学校の学生ではなく、他の中学から来た学生たちだった。現在、日本語の塾は通化市内にもあるが、通化地域の学校ではおそらく日本語教育は行われていないのではないかと思う。

小学校では「数学」の科目は中国語で教えているが、他の科目はすべて朝鮮語で教えている。しかし、初級中学になると、社会科目以外はすべて中国語で教えており、高級中学になると、すべての科目を中国語で教えている。

②ＴＢ氏の語り

私は通化市朝鮮族学校で朝鮮語科目を担当している。外国語科目は 2000 年まで日本語しかなかったが、2001 年から英語と日本語の 2 科目になった。日本語は、かつては他の学校で学習している学生たちが学習しに来ていた。彼らはみな、農村出身者だった。しかし、2013 年に日本語科目はなくなってしまった。高級中学課程は通化地域で、この学校しかなく、他は初級中学課程までしかない。現在の学生数は、幼稚園、小学校、初級中学、高級中学まで合わせて 700 名ほどである。学生たちは朝鮮族であるが、普段朝鮮語は使わない。

③ＴＣ氏の語り

私は初級中学、高級中学で日本語を学習し、大学でも日本語を専攻した。2004 年から 2013 年までの 10 年間、通化市朝鮮族学校で日本語を教えていた。私は朝鮮語の方ができ、中国語は朝鮮語能力が 100％であるなら、85％ほどできる。また、日常生活では朝鮮語と中国語を一緒に使っている。

私の日本語授業における教授用語の割合は、朝鮮語が 40%、中国語が 30%、日本語が 30%であった。朝鮮語は本文、読解、例文などを説明するときに使っていた。朝鮮語で翻訳しながら説明するのはわかりやすい。また、文法を説明するとき、中国語より朝鮮語を使う方が良い場合が多かった。例えば、尊敬語や美化語にあたる「お/ご 」であるが、「お月さま」の場合、朝鮮語では「달님」という形となり、これも日本語と同様、尊敬語の形になっている。また、「ご両親」は「부모님」となる。中国語は「ご両親」にあたる言葉はない。さらに、尊敬表現の「お/ご～になる 」の場合、例えば、「先生はこの本をお読みになりました」という例文は、朝鮮語では「선생님께서는 이 책을 읽으셨습니다」となる。一方、中国語では適当な言葉はない。

授業での日常用語はできるだけ日本語を使っていた。例えば、①教室用語 :「前を見てください」「ポイントに気をつけて、よく聞いてくださいね」「一緒に読んでみましょうか」「授業を始めます。皆さん、こんにちは」「では、今日の授業はここまでです。みなさん、お疲れさま」など ②学生たちを褒める時や励ます時 :「すごいですね」「上手ですね」「素晴らしいです」「発音が本当にきれいです」「これからも頑張ってくださいね」「気をつけてください」など ③学生との簡単な会話 :「金さん、新しい服きれいですね」など、授業の内容と関係のないおしゃべりをするときなどに日本語を使っていた。

中国語は、文法を説明する時、朝鮮語より中国語を使う方が良い場合がある。例えば、「ようだ」の使い方には

①比喩（처럼, ～와 같다） ②推測（～ㄴ 것 같다） ③例示（～와 같은）
④目的（게끔, 도록, ～ㄹ 수 있게） ⑤内容指示（～와 같이）⑥反復習慣
（～와 같이, 처럼） ⑦願望、希望、請求、要求(～기를 바란다, ～를 희망한다)

以上、7 つの意味があるが、朝鮮語では④と⑦を除いて意味が大体同じなので、中国語で説明する方が良い。それぞれの例文は以下のとおりである。

① 顔はまるでりんごのようだ。얼굴은 마치 사과 같다.
② 風を引いたようだ。감기에 걸린 것 같다.
③ 数学のような科目は大嫌いだ。수학과 같은 과목은 제일 싫다.
④ 風が入るように窓を開けろ。바람이 들어오도록 창문을 열라.
⑤ 小説の終わりには下のように書かれている。소설결말에는 다음과 같이 씌여져있다.
⑥ 毎日のように繰り返して読む。매일과 같이 반복하여 읽다.
⑦ 今年も幸せでありますように。금년도 행복하기를 바란다.

私が学校で日本語を教えていたときは､授業は 1 コマ 45 分､週に 7 コマ以上行っていた。つまり毎日最低 1 コマは日本語授業が行われていた。また、使用していた教科書は『普通高中課程標準実験教科書 日語』の朝鮮語版のものであった。

私が通化市朝鮮族学校において日本語を最後に教えたとき、初級中学 1 年生から高級中学 3 年生まで各学年 1 クラスずつ日本語クラスがあった。しかし 1 クラスの人数は 6 名程度であった。一方、英語クラスは、初級中学には各学年 2 クラスずつ、高級中学には各学年 4 クラスずつあり、日本語クラスよりも圧倒的に多かった。

日本語クラスがなくなってしまった理由としては三つの要因が挙げられると思う。まず一つ目は、大学入学後はほとんどのカリキュラムが英語と関わっている点、二つ目は、ここ数年、多くの大学がゼロ初級者向けの日本語基礎科目を開設したため、大学に入ってから日本語を学びたいという学生が増え、逆に初級中学のときは英語を学びたいという学生が増えたという点、三つ目は、我々の学校は朝鮮族学校であるため、朝鮮族の学生を募集するが、現在は朝鮮族の学生がだんだん少なくなってきている点である。以前は初級中学 1 年生の 3 クラスのうち、一つが日本語クラス、二つが英語クラスであったが、現在は各学年 1 クラスずつしかなく、すべての学生が英語を学習している。

私は現在、学校で財務・会計の仕事をしている。ときどき朝鮮語科目を教えることもある。

資料 21：和龍市第三中学校の日本語教師の語り

①ＨＡ氏の語り

私は初級中学 1 年生の日本語授業を担当している。初中 1 年生の日本語クラスは 2 クラスあり、学生数は 1 クラスが 27 人、もう 1 クラスは 28 人である。私が授業中使っている教授用語は、朝鮮語が 70％と一番割合が高い。朝鮮語は日本語の文法、そして翻訳するときに使う。また会話の授業の際も、使用している。例えば、助詞、自動詞・他動詞、尊敬語、擬音語・擬態語、可能形、願望などはすべて朝鮮語で教えている。教科書も朝鮮語のものを使っている。

朝鮮語の次に割合が高いのが日本語で、全体の 20％ほど使っている。日本語は主に教室用語、例えば「まず～します」「次に～します」など簡単な指示を出すときに使っている。他には日常会話や簡単なあいさつなどは日本語で行っている。

中国語は全体の 10％ほどしか使っていない。中国語は、例えば、「万里の長城」のような地名であったり、「佐藤さん」「鈴木さん」といった人名を教えるときに活用している。他には、例えば受身表現や使役表現は中国語で教え、推量表現も朝鮮語ではなく中国語で説明している。

学生は中国語より朝鮮語の方が得意な学生が多い。私自身も中国語より朝鮮語の方がよくできる。朝鮮語能力が 100％だとしたら、中国語能力は 70％くらいである。授業は基本的に教科書に沿って教えているが、パワーポイントなどを使ったり、日本の歌を聞かせるなど学生の興味が湧くような授業になるよう心がけている。

私は 2004 年から 2010 年まで延辺にある朝鮮族学校に通っていたが、日本語ではなく、英語を学んだ。その理由は外国語科目としては英語しかなかったからだ。しかし、もしそのとき日本語科目があれば、日本語を選択して学びたかった。しかし、私が卒業した朝鮮族学校も、ここ 2,3 年で日本語教育が再開された。

私は大学では日本語を専攻したが、そのときの日本語教師は漢族の教師であったため、中国語で日本語を教えられた。大学に入って、はじめて日本語を学習したが、日本語は簡単だった。また、大学に入り、時間に余裕ができたため、日本の漫画やアニメなどを見ていた。

②ＨＢ氏の語り

私は 1984 年から延辺にある朝鮮族学校で日本語を教えていたが、以前勤めていた学校は私の母校であった。2003 年に日本語授業がなくなってしまったため、また別の学校で日本語を教えることになった。和龍市第三中学校では 2011 年から教えている。

私は初級中学 1 年生の授業を担当している。現在、和龍市第三中学校では、初中 1 年生のときに日本語と英語両方学び、初中 2 年生のときに日本語を取るか英語を取るか学生が選ぶ。初中 2 年生は現在 4 クラスあるが、そのうち 1 組と 3 組の日本語選択者をまとめて

教え、2 組と 4 組の日本語選択者をまとめて教えている。英語クラスは日本語選択者を除いた 4 クラスで教えている。もともと学校には日本語クラスしかなかったが、1996 年か 1997 年ごろ英語授業が開始された。現在、3 分の 1 の学生が日本語を学習し、残りの 3 分の 2 の学生が英語を学習している。学校全体では 150 人ほどの学生が日本語を学習している。

和龍市第三中学校で日本語授業がなくなったのは、2003 年のことであり、その原因は英語人気に押されてしまい、日本語選択者が少なくなってしまったことが一番である。しかし、2003 年以降も「日本語サークル」という形で残された。学校の外国語科目は英語クラスだけになってしまったが、大学入試の際にやはり日本語の方が良い点数が取りやすいのではないかということで、その後、日本語クラスが正式に復活した。やはり朝鮮族にとって日本語は英語よりも学習しやすいので、大学入試でも点数が取りやすい。また、去年の初級中学 2 年生の日本語選択者は 37,8 人いたが、今年は 50 人ほどに増えた。初級中学で日本語科目が再開されたことに伴い、高級中学でも日本語科目が復活した。現在は初中、高中ともに日本語教育が行われている。さらに、初中で英語を選択していたが、高中から日本語を選択する学生もいる。その理由は、やはり日本語の方が簡単で学習しやすいからである。

私が授業で使用する教授用語のうち 8 割を占めるのが朝鮮語である。主に文法の説明の際に使用しているが、特に中国語では説明が難しい助詞などについては朝鮮語で教えている。他には自動詞・他動詞、擬音語・擬態語、願望表現、敬語表現などは朝鮮語で説明している。次に中国語であるが、全体の 10%しか使っていない。主に日本語の漢字を教えるときに使用している。また、受身表現、使役表現、可能表現、推量表現などは中国語を活用している。しかし、例えば、日本語の「通じて」と「通して」の違いなど、細かな違いがある日本語の表現に関しては、朝鮮語でも中国語でも説明するのが難しい。日本語は全体の 10%しか使っていない。主に簡単なあいさつや質問をするときに使っている。

授業は教科書に沿って行い、宿題は単語を覚えさせたり、短い文をつくって来させたりしている。また、去年からパワーポイントを使い始めた。パワーポイントを使い始めたことで、学生たちは以前より関心を持って授業に臨むようになった。

私は朝鮮族学校で日本語を教え始めて、すでに 30 年以上経っているが、朝鮮族学校を卒業した後、教師になったために、日本語を専門的に学習したことがないので、授業中でも本当にこの表現が合っているのか迷うことがある。

資料 22：和龍市第三中学校の日本語授業見学の記録

<table>
<tr><td>2015 年 8 月 20 日　木曜日</td><td>担当
朝鮮族教師（女性）</td><td>クラス 24 名
（男性 10 名、女性 14 名）</td></tr>
<tr><td>学年　初級中学 3 年生</td><td colspan="2" rowspan="2">使用教科書・課　『義務教育教科書 日語 8 学年用』
延辺教育出版社（朝鮮語版）第 11 課</td></tr>
<tr><td>時間　8：35　～　9：25</td></tr>
<tr><td colspan="3">授業形態：グループ形式　4 つのグループ（1 グループ 6 名）</td></tr>
<tr><td colspan="3">Ｔ＝教師、Ｓ＝学生

①　教師が第 11 課の新しい単語を朝鮮語で言い、学生に答えさせる。
例）Ｔ：「적다」「깊다」「얕다」
Ｓ：「少ない」「深い」「浅い」
Ｔ：「浅い」의 반대 말은？　（「浅い」の反対語は？）
Ｓ：「深い」

②　教師が教科書の本文をまず読む。その後、学生に 3 回ずつ本文を読ませる。
（ここでの指示は日本語）

③　まず日本語が上手な学生に本文を読ませる。

④　日本語が上手な学生が一文ずつ読み、その後、他の学生が一文ずつ読む。

⑤　教師が板書：11．湖がプール　～より　～のほうが

⑥　本文について教師が学生に日本語で質問。その後、朝鮮語に訳して質問。
例）中国の学校と日本の学校の違いはなにか？
学校の生徒の数は？

⑦　第 11 課の文法表現である「～より～のほうが」について説明
Ｔ：朝鮮語で意味は？
Ｓ：보다

板書：～より～のほうが／…보다 …편이(쪽이)
私は肉より野菜のほうが好きです。
車より自転車のほうが多いです。</td></tr>
</table>

Ｔ：短い文をつくってください。まず自分のノートに書いてみましょう。
〔その後、できた学生から手を挙げてもらい、一人ずつ発表させる〕
Ｓ：車より自転車のほうが好きです。
Ｔ：朝鮮語で？
Ｓ：자동차보다 자전거를 좋아합니다.

⑧　本文の詳しい説明については、教師が朝鮮語で行う

⑨　最後にグループで本文を一緒に読む。
グループごとに発表させる。

⑩　宿題を出す
１．本文を読んでくること
２．教科書の練習問題をやってくること

授業終了

資料 23：和龍市第三中学校・学習者インタビュー調査対象者の語り

①ＨＣ氏、ＨＤ氏の語り

私たちは中国語より朝鮮語の方が得意であり、朝鮮語が 100％とするなら、中国語は 60～70％くらいできる。

私たちの姉が 12 年前に同じ和龍市第三中学校に通っていたときは、1 学年 8 クラスもあった。しかし、現在は 4 クラスと 12 年前に比べて半分になってしまった。また、卒業後は和龍市に残らず、延吉市や長春市などに出てしまう人が多い。現在、学校には朝鮮族の学生だけではなく漢族の学生もいる。朝鮮族の学生と漢族の学生はクラスも一緒であり、日本語授業を受けている私たちのクラスにも 1 人漢族の学生がいる。また、朝鮮族の学生の言語能力も様々で、中には朝鮮族ではあるが、朝鮮語より中国語ができる学生もいる。その学生は、小学校のとき朝鮮語よりも中国語を使っていたから、中国語の方が得意になったと話していた。

私たちは当初、漢族の幼稚園に通っていたが、漢族の幼稚園は厳しく教育する傾向があり、宿題も多く、教える内容も難しいものだった。そのため大変になり、朝鮮族の幼稚園に変わった。朝鮮族の幼稚園は、漢族の幼稚園とは対照的に、舞踊、ピアノ、絵画など、文化的、芸術的なものも学べた。その結果、私たちは舞踊を学び、公演するほどにまでなった。

日本語は簡単でおもしろいから選んだ。日本語の単語や会話がおもしろかった。また、日本語の発音が柔らかい点も好印象だった。

英語は小学校 3 年生から学習している。しかし、英語に難しさを感じていた。特に英文法が難しく、過去形などを覚えるのも大変であり、また、同じ単語、例えば「lay」などは「嘘をつく」という意味を表す「lie」の過去形を表すと同時に、「横たわる」という意味もあるので、覚えるのが難しかった。また英単語のつづりが長いというのも、覚えるのを困難にさせている。さらに、英語が上手な学生であっても、学校のテストで良い点数はなかなか取れず、成績は上がらなかった。そのような理由もあり、両親の反対を押し切り、日本語を選択した。

日本語を学習するとき、例えば、中国語の場合は日本語の漢字の単語を覚えるときに使っている。一方、朝鮮語は「アイスクリーム」や「チョコレート」など、外来語を覚えるときに活用している。外来語の場合、中国語よりも朝鮮語の方が日本語の発音に近い。また、朝鮮族が使う朝鮮語の中には「弁当」や「ペンチ」などの日本語が残っているため、単語が覚えやすい。助詞も朝鮮語を活用しており、例えば、日本語の助詞「に」は朝鮮語では「에」、「が」は朝鮮語では「가/이」となり、覚えやすい。

日本語教師の日本語は、やはり、はやいと聞き取りづらい。初級中学 1 年生のころは、教師は日本語を話した後、すぐに朝鮮語でも話してくれたが、2 年生になると、日本語の比率が増えた。

②ＨＥ氏の語り

私は学校で英語を選択し、学んでいる。母親が看護師であることもあって、将来の夢が医者になることなので、日本語ではなく、英語を選んだ。日本語は日本のアニメやドラマ、映画などを見て独学で習得した。

英語の授業の教師は朝鮮族ではなく、漢族の教師であり、英語の教科書は中国語で書かれている。英語の教師は朝鮮族ではなく、漢族の教師が多い。漢族の教師の教授用語は英語 90%、中国語 10%の割合である。英語教師は主に英語、もしくは中国語で授業を行うため、私は朝鮮語ではなく中国語でメモをとっている。書いているのは中国語であるが、頭の中では朝鮮語で英語を理解している。しかし、母語ではない英語と中国語で説明されるため、やはり難しさを感じている。

③ＨＣ、ＨＤ、ＨＥ各氏に共通する語り

今、学校で学習している科目は、「化学」「物理」「数学」「朝鮮語文」「漢語」「歴史」「政治」「日本語（英語)」の 8 科目である。このうち、理系科目にあたる「化学」「物理」「数学」については、教科書は朝鮮語であるが、練習帳は中国語のものを使っている。また、「漢語」は中国語で授業が行われる。